

国道9号線バイパス建設予定地内

埋蔵文化財発掘調査報告書

- IV -

(本文編)

昭和58年3月

建設省松江国道工事事務所

島根県教育委員会

国道9号線バイパス建設予定地内

埋蔵文化財発掘調査報告書

— IV —

(本文編)

昭和58年3月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書(IV)

(本文編)

正 誤 表

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
3	11	同図2~31	同図2~32	275	29	SB04	SK04
12	26	4△5m	4~5m	278	7	土塙	土壙
21	26	……集中度の遺物の……	……集中度と遺物の……	302	5	2類	Ⅱ類
27	2図	1/2000	1/200	304	13	個意	故意
44	2表	高環型土器	高環形土器	309	16	……と考えられる。飾り金具	……と考えられる飾り金具
52	26	径2~3cm	径2~3mm	309	20	残り	残る。
53	28図	1/200	約1/125	319	24	都99図	第99図
54	29図	1/200	約1/125	321	19	1	204
63	1	(第34~第37図)……	(第34~35~37図)……	321	19	2	205
64	25	第39図	第38図	321	19	3	207
79	32	7.6cm	7.6m	321	19	5	208
87	34	第78図は	第78図2は	321	20	1	204
92	19	3はほぼ…	1はほぼ…	321	20	2	205
97	19	第92図4~5	第92図3~4	321	20	3	207
107	9	刃こぼれ認められる。	刃こぼれが認められる。	321	20	5	208
108	126図	第126	第126図	321	21	3	207
118	20	第148図15	第148図1:5	321	23	5	208
119	5	第149図	第146図	321	23	4	206
134	17	特微	特徴	324	109図	198	204
136	2	現在長	現存長	324	109図	202	207
137		土器	石器	343	15	SK36	SK32
138		土器	石器	422	1	67図	75図
139		土器	石器	427	21	測面	側面
140	165図	出土土	出土石器	468	3	(第7図)1	第7図1
161	1	擂針	擂鉢	468	3	16.4m	16.4cm
162	23	拡張部	拡張部	471	27	15.6cmを測る。	15.6cmを測る。
199	21	土塙	土壤	481	12	弧状断面	弧状、断面
199	26	SB05	SB04	481	15	甕鉄器	甕、鐵器
200	17	SB03~04	SB02~03	486	11	古墳時後期	古墳時代後期
200	18	SB04	SB02	495	14	床面	底面
201	5	鉄鋸	鉄劍	496	23	測る全面	測る。全面
258	21	古谷式	小谷式	502	13	走褐色	赤褐色
259	9	第41図図版	第41図:図版81	534	8	前島己墓	前島己基
259	25	側縁部	側縁部			(図版編)	
272	1	口縁	口徑			頁	誤
274	3	第39図6	第54図6	1		IVASK37	IVASK37
274	4	口唇部	口縁部	3		SB03-06	SB03-P16
274	14	SD04に接して……不明である。	SD04と切り合っているのか同時期の ものかは不明である。	図版37		未成品()	未成品($\frac{1}{2}$)
275	27	K-7°-N	E-7°-N	図版83		力子	力子
				図版111		墓道	墓道

序

建設省松江国道工事事務所は、一般国道9号改良事業の一環として、松江バイパスの建設を進めていますが、その道路予定地内にある遺跡について、島根県教育委員会と協議をかさね、昭和50年度から記録保存のため、約2億4千万円の費用をかけ、発掘調査を実施しました。

今回は、暫定二車線供用分のみの発掘ですが、完成供用を図るためには、さらに約10億円程度の費用が必要と考えられます。

本書は、55・56年度に発掘調査を行った7遺跡の調査記録をまとめたもので、郷土の埋蔵文化財として、教育ならびに学術のために広く活用されることを期待するとともに道路財源が、このような部門にも活用されていることへの理解が得られることを願いたいと考えます。さいごに、この発掘調査および本書の編集は、島根県教育委員会に委託して実施したものであり、ここに関係各位の御尽力に対し、深甚の謝意を表するものであります。

昭和58年3月

建設省松江国道工事事務所長

森 茂 之



序

この報告書は、島根県教育委員会が建設省中国地方建設局の委託を受けて昭和55年度から57年度にかけて実施した一般国道9号線松江バイパス建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査の記録です。

松江バイパスの路線設定にあたっては、昭和47年から48年にかけて松江と米子を結ぶバイパスの計画路線内の分布調査を実施し、これをもとに埋蔵文化財保護の立場から建設省と協議を重ねてきました。この結果、遺跡の数、重要性などを検討し、遺跡についての発掘調査を実施することにしました。

本書は、春日・夫敷・布田・中竹矢・才ノ峰・勝負・石台の7遺跡についての調査結果を収めたものです。内容には不備な点も多々あると思いますが、広く御活用いただき埋蔵文化財に対する理解と関心が高まれば望外の喜びであります。

なお、本書を刊行するにあたり御協力いただいた建設省松江国道工事事務所をはじめ関係各位に衷心より厚く御礼申し上げます。

昭和58年3月

島根県教育委員会

教育長 水津卓夫



例　　言

1. 本書は、建設省中国地方建設局の委託を受けて、島根県教育委員会が昭和55～57年度に実施した一般国道9号線松江バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。
S I—堅穴住居跡、S D—溝、S B—壌立柱建物跡、S K—土墳、P—ヒット
3. 本書で使用した方位は磁北を示す。
4. 本文中、メートルから尺への換算は天平尺を用い、その換算値は1尺=29.7cmとした。
5. 本書に掲載した「遺跡位置図」は建設省国土地理院発行のものを複製したものである。その他の地形図は建設省松江国道工事事務所作成のものをトレースしたものである。
6. 関係報告書刊行状況

「国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書　I」昭和51年3月

「　　　　　　　同　　　　　　　　　　　II」昭和52年3月

「　　　　　　　同　　　　　　　　　　　III」昭和56年3月

「重要文化財平所遺跡埴輪窯跡出土品復元修理報告書」昭和56年3月

7. 本書は、前掲「III」で掲載したものについても所収した。

8. 報告書の作成は、調査及び遺物整理に携った者が分担して作図・執筆し、集団討議をして編集した。それぞれの文責については各文末に記した。

調査組織

調査主体	島根県教育委員会教育長 水津卓夫		
事務局	文化課課長	遠藤 豊	武田友秀 福田治夫
	同 主査	藤間 亨	
	同課長補佐	森山敏夫	長谷川行雄
	文化振興係長	秋月延夫	岩崎況一郎
	主 事	川上泰治	吉井良夫
調査員	埋蔵文化財第一係長	勝部 昭	
	同 第二係長	石井 悠	
	文化財保護主事	門脇 裕、黒谷達典、片寄義春	
	主 事	宮沢明久、村尾秀信、内田律雄、園山和男、丹羽野裕、吉岡七江	
	島根県教育文化財団職員	平野芳英、柳浦俊一、足立克己、広江耕史、松尾二郎	
	島根県埋蔵文化財調査員	門脇俊彦 横山純夫 勝部理恵子	松江市立津田小学校教諭 市立松江第二中学校教諭 美保関町立七類小学校主事
調査指導	山本清（島根県文化財保護審議会委員・島根大学名誉教授）、町田 章（同 委員・奈良国立文化財研究所）、池田満雄（同 委員・県立松江農林高校教諭）、浪貝 納（文化庁記念物課）、山中敏史（奈良国立文化財研究所）、吉田恵二（国学院大学講師）、寺村光晴（和洋女子大学教授）、小田富士雄（北九州市立歴史博物館主幹）、三辻利一（奈良教育大学教授）、甲元真之（熊本大学助教授）、藤原宏志（宮崎大学助教授）、大西郁夫（島根大学教授）、古野毅（同 助教授）、伊藤晴明（同 教授）、時枝克安（同 助教授）、枚村喜則（同 講師）、元村豪章（東京国立博物館）、下條信行（平安博物館助教授）、間壁忠彦（倉敷考古館館長）、渡辺貞幸（島根大学助教授）、田中義昭（同）井上晃孝（鳥取大学助教授）、三島欣二（県立松江北高校教諭）、笠原安夫（岡山大学名誉教授）、野上丈助（大阪府立泉州考古資料館）、千家和比古（国学院高校教諭）、池渕淳（鳥取大学助手）、大橋康二（九州陶磁文化館） (順不同・敬称略)		
調査協力者	西尾良一、房宗寿雄、片岡詩子、小原明美、鈴政泰子、竹内信枝、吉富恭子、瀬田明子、宮内美貴子、岡田幸子、岩田美江子、松本岩雄、曳野律夫、勝部衛、荒木利幸		

調査に至る経緯

国道9号線バイパスの建設と埋蔵文化財とのかかわりは昭和47年に遡る。すなわち、国道9号線の道路網整備に伴い、昭和47年5月26日付けで建設省松江国道工事事務所から県教育委員会あてバイパス建設の基本設計資料として鳥取県境の安来市吉佐町から松江市乃白町までの30.3kmにおける埋蔵文化財の有無についてその照会があった。そこで昭和47年9月19日から9月29日まで地元教育委員会の協力を得て現地踏査を行い、翌昭和48年には5月～6月にかけて安来市から八東郡東出雲町地域について再度これの分布調査を実施した。

これらの調査結果等を踏まえ、建設省においておよそ3つのルート案が作成された。これによつて安来市吉佐町から松江市乃白町におけるバイパス予定ルート及びその付近には131遺跡の存在することが明らかになった。

ついで昭和48年7月、松江市東地区の予定3ルートにかかる遺跡の取扱いについて協議があり、これに応えて県教委ではつぎのような趣旨の回答を行つた。(1)八東郡東出雲町から八雲村を通る南側丘陵ルートは東出雲町出雲郷の地域に多数の古墳が分布する。また(2)東出雲町から意宇平野の中央を通り、大庭町へ抜けるルートは、史跡出雲国府跡や同出雲国分寺跡付古道など八雲立つ風土記の丘の主要部を横断し、好ましくない。これに対して(3)東出雲町から竹矢町を通るルートは文化財保護の立場から最も被害の少ないルートである。ただし、この場合ルート内に含まれる中竹矢古墳についてはこれが全長約20mの前方後方墳であることから現状保存を計るよう、一部計画の手直しを希望する。という内容のものである。これをもとに中竹矢古墳を外した(3)の竹矢ルートが採用された。この間10月には安来地区計画路線内の2500分の1の平面図新規図化に伴つて現地立会の依頼があり、11月に立会調査を行なった。

明けて昭和49年7月、安来地区の清水一月坂間の提案ルートについて協議があり、現地を踏査した。その結果(1)確認している遺跡については事前に発掘調査を実施すること。(2)発掘により貴重なものが発見された場合は保存に協力すること。(3)既に判明しているもの以外に遺跡が発見された場合は工事の施工にあたり改めて協議すること、という条件を付し、県教委としては一応提案ルートを容認することとなつた。

そして建設省からの依頼に基づき昭和50年度には松江市竹矢町才ノ峰古墳群、同矢田町平所遺跡、安来市早田町大坪古墳群の3遺跡の発掘調査を実施することとなつた。平所遺跡からは、馬・鹿・家・人物などの形象埴輪が出土し、52年6月10日付けで重要文化財に指定されている。

つづく51年度には平所遺跡の関連再調査と、かつて出雲国府跡に比定されていた八東郡東出雲町出雲郷の夫敷遺跡の試掘を行なつた。

こうした調査・協議の結果、国道9号松江バイパス（以前は米松バイパスと呼ばれていたが、一部変更があった）建設予定地内に存在する遺跡を調査することとなつた。特に、昭和57年開催が決定した島根国体主要関連道路となる八東郡東出雲町出雲郷から松江市古志原町古志池に至る延長約

5.4kmの松江東バイパスの調査が急がれた。

このため急拠松江東バイパス予定地内の残る7遺跡について調査を実施することとなり、昭和55年度から県教育委員会が2ヶ年計画で発掘調査を実施することになった。ただし、計画6車線のうち漸的に開通させる2車線部分についての調査である。（松本岩雄・宮沢明久）

周辺の遺跡

(6) 平所遺跡（松江市矢田町平所）

昭和50・51年の調査で、玉作工房跡1、埴輪窯跡1、堅穴住居跡3などが検出された。埴輪窯跡からは馬・鹿・家・人物などの形象埴輪が出土し重要文化財に指定されている。窯は一種の無段登窯で残存長約5.8m、幅1.2~1.55mを測る。焼成部の傾斜がゆるいので半地下式と考えられる。

(11) 大庭鶏塚（同 大庭町茶臼）

一辺42m、総高10mの2段築成の方墳で、二つの造り出しを伴っている。内部構造、出土遺物等は不明だが、墳形、立地等から5世紀代の築造と考えられる。

(12) 山代二子塚（同 山代町二子塚）

全長約90m、後方部幅56m、くびれ部幅33m、前方部先端の幅51m、後方部の高さ9m、前方部の高さ6.5mを測る。県内では最大規模の前方後方墳である。内部構造等は不明だが5世紀後半の築造と考えられる。

(17) 来美古墳（同 矢田町来美）

一辺15m、高さ1.5mの四隅突出型方墳で現在は消滅。主体部は7基の木棺直葬土壙が検出され、鍵尾II式の特徴を有する供獻土器が出土している。

(18) 十王免横穴群（同 山代町十王免）

37穴から成る横穴群だが残存するのは27穴である。昭和41から42年にかけて島根大学考古学研究会が調査を行ない、複室構造のもの、石棺を備えたもの、線刻壁画を有するものなどが明らかにされた。築造年代は7世紀前半を中心に、6世紀後半から8世紀に及ぶものと思われる。

(19) 出雲国分寺跡（同 竹矢町中竹矢字寺領）

昭和30、31年の石田茂作博士らの調査により金堂、講堂、僧房などの伽藍配置の大要が判明した。さらに45年、46年の調査により、南門、中門、金堂、講堂、僧房が一直線に配置され、塔は伽藍中枢部から離れて独立するという、金堂中心形の天平形式の伽藍配置であることが判明した。

(21) 山代郷正倉跡（同 大庭町内屋敷他）

昭和53年から始められた調査で堀立柱建物群が検出され、55年12月国の史跡に指定された。3カ年の調査による検出遺構は、堀立柱建物跡26棟、柵列3条、溝状遺構5、土壙2である。このうち奈良期と推定されるものは堀立柱建物跡7棟、柵列1条である。いずれも方形あるいは隅丸方形の大型の柱堀り形をもち、建物主軸は方位を測定できない2棟を除くと、すべてN-10°-E前後の

方向になる。建物群を区画する遺構はないが一町四方に及ぶものと思われる。規格性に富む倉庫群を中心とする本遺跡は「出雲国風土記」記載の山代郷正倉跡と考えられる。

(23) 岩屋後古墳（同 大草町有）

水田の中にあるが、すでに墳丘はほとんど削り取られ墳形は不明である。現状では東西約11m、南北約18mの不整形の墳丘の中に石棺式石室が露出している。現存するのは奥室のみで、幅3.3m、奥行2mの長方形である。人物埴輪が多数出土している。6世紀後半の築造と思われる。、

(24) 御崎山古墳（同 大草町字御崎）

岩屋後古墳の南方200mの丘陵先端部に築かれた前方後方墳である。長さ約41m、後方部の幅約23m、前方部の幅約17m、高さは後方部約3m、前方部約2mを測る。内部構造は片袖形横穴式石室を設けている。奥行3.6m、幅3m、高さ2.8mで、2基の石棺が置いてある。大刀類、馬具類などが出土しているが、とくに獅齒環頭大刀が注目されている。

(25) 出雲国府跡（同 大草町）

六所神社付近にあり、昭和43～45年の調査により、8世紀を中心とする複雑に重なり合った官衙遺構が検出された。遺物は出雲国分寺、国分尼寺と同型の瓦や、玉類の貢進を示す攻玉関係遺物などが出土している。

(26) 安部谷古墳（同 大草町井手ノ上、安部谷）

5ヶ所に数穴ずつの横穴群があると思われる。1号穴は複室構造で、前室奥行1.3m、幅2m、奥室奥行2m、幅2.8m、高さ1.3mある。前室の天井は四注式妻入家形で、奥室は平入家形に加工されている。1号穴から4号穴にはいずれも有縁石床状のものが設けられている。

(27) 寺床遺跡（八束郡東出雲町揖屋字寺床）

昭和55・56年の調査により方墳、竪穴住居跡等が検出された。

1号墳は東西27.5m、南北22.3mの方形台状の墓域を作り、墳頂部に4、墳裾部に2個の埋葬施設を設けている。第1主体部は礫床構造をもつもので内部からは二神二獸鏡、勾玉、劍、大刀等が出土し、前期古墳の特徴を有している。

2・3・4号墳はいずれも一辺10mあまりの方墳で中期後半頃に相次いで築かれたものと思われる。すでに遺跡は消滅しているが、1号墳第1主体部は町中央公園に移設保存されている。

(28) 出雲国分寺瓦窯跡（松江市竹矢町中竹矢）

出雲国分寺跡と同国分尼寺跡の間にあり、民家の裏の崖面に焼成室の断面が露見している。出雲国序跡、国分寺跡、国分尼寺跡で出土したものと同じ文様の瓦が発見されていることから官瓦窯であったと思われる。新羅の系統をひく瓦である。

(29) 出雲国分尼寺跡（同 竹矢町中竹矢）

国分寺跡の東方4町(約420m)にあり、今は中竹矢の集落となっている。昭和49年～51年の調査により、礎石建物跡、築地状遺構が検出され伽藍の中心部が中竹矢集落内に存在することが判明した。

(30) 手間古墳（同 竹矢町手間）

大橋川へと延びる丘陵先端に築かれた前方後円墳で、全長約70m、後円部径44m、前方部幅32m、

後円部高さ8m、前方部高さ8mを測る。前方部のよく発達した、かなり整った形の古墳である。葺石、副葬品は不明だが埴輪円筒片が墳裾あたりにみられる。

(45) 井ノ奥4号墳（同 矢田町井ノ奥）

丘陵頂に築かれた前方後円墳だが、発見時には前方部の半分と後円部の3分の1が残存するのみであった。測量図をもとに復元すると全長57.5m、後円部の径42m、後円部の高さ7.5m、前方部前面幅26.5m、くびれ部幅19m、前方部長さ15.5mの規模になる。後円部残存部のみで87本の円筒埴輪が検出されているほか、周辻の外側の外堤上からも14本の円筒埴輪が確認された。6世紀前半頃の築造と考えられる。

(46) 石屋古墳（同東津田町、矢田町）

丘陵突端上に築かれた方墳で、東西辺44m、南北辺40.5mを測る。北辺には幅12m、長さ6m、高さ1mのテラス状の突出部、南辺には幅12m、長さ6m、高さ0.5mのブリッジ状の高まりがみられ、これらを加えると、南北の墳丘長は52.5mとなる。墳丘の高さは北側溝最深部から測ると7mあり、4.6～6mぐらいの盛土が考えられる。古墳時代中期の築造と思われる。

(48) 四王寺跡（同山代町）

「出雲国風土記」所載の意宇郡山代郷の新造院の1つに比定されている寺院跡で、のちに出雲国造となった飯石郡の少領出雲臣弟山が造立したと考えられている。これまでに発見されている遺構・遺物は、礎石のほか軒丸瓦4種、軒平瓦4種、鬼瓦、埠などである。 （宮沢 明久）

目 次

I	春日遺跡（八束郡東出雲町字出雲郷所在）	（1）
II	夫敷遺跡（八束郡東出雲町字出雲郷所在）	（11）
III	布田遺跡（松江市竹矢町字熊ノ内他所在）	（21）
IV	中竹矢遺跡（松江市竹矢町字中竹矢所在）	（199）
V	才ノ峰遺跡（松江市竹矢町字才ノ峰所在）	（346）
VI	勝負遺跡（松江市東津田町字上谷所在）	（459）
VII	石台遺跡（松江市東津田町字石台所在）	（505）
VIII	出土遺物の自然科学的観察	（537）

I 春日遺跡

—八束郡東出雲町—

1 調査の経過	1
2 遺跡の概要	2
3 検出遺構と遺物	2
4 小結	9

挿 図 目 次

第1図 調査区配置図	1
第2図 S D01実測図	2
第3図 S D01出土遺物実測図	3
第4図 S D01出土土器実測図	4
第5図 S D 02 実測図	5
第6図 S D02出土土器実測図	6
第7図 出土土器実測図	8

1 調査の経過

昭和55年度

5月7日 I区に $4m \times 4m$ のグリットを3個設定し、耕作土の除去を開始する。わずかながら遺物の出土がみられる。

5月12日 $4m \times 4m$ のグリットをさらに2個設定し、耕作土の除去を開始する。湧水多く、作業は進まない。表土下約 $1.9m$ の砂礫層から縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器が少数出土しているが、摩滅が著しく意宇川上流から流されてきたものと思われる。

5月14日 調査の結果遺構面は確認できず、重機を使用して遺物の採集を行う。

5月19日 土層の実測をし、I区の調査終了。土層は概ね上から、耕作土、客土、青灰色粘質土、青灰色砂層の順で堆積している。

8月18日 II区の遺構、遺物の有無を確認するため、試掘を行う。II区はI区より約 $1m$ 高く、現状では微高地と思われた。

8月19日 試掘開始。グリットは $4m \times 4m$ を約 $20m \sim 30m$ 間隔で5個設定する。土師器、須恵器片が若干出土した。

8月22日 基本的な層序は上から、耕作土、客土、青灰色粘質土、砂層、青灰色粘質土または黒灰色粘質土、砂層の順である。須田川、意宇川の氾濫のあとであろうか。

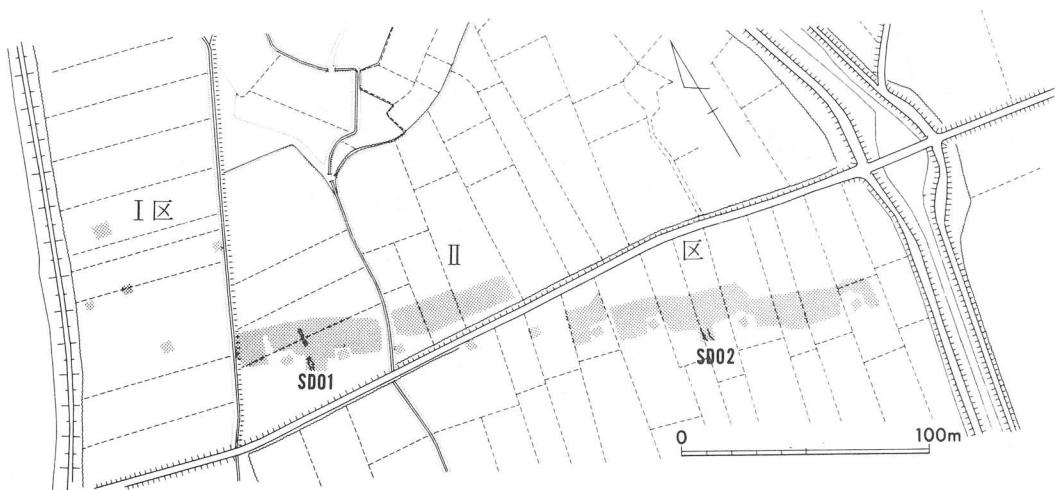
8月28日 試掘終了

2月18日 重機を使用し、全面耕作土、青灰色粘質土を除去する。砂層まで掘り下げる。

3月13日 壁面の清掃を行い、土層を観察する。

3月16日 II区西端で溝状遺構（SD01）を検出。溝の西側に杭列が検出され、溝内からは弥生土器が出土した。

3月25日 II区ほぼ中央で溝状遺構（SD02）を検出。重機掘削の部分は掘り過ぎのため検出できず、土層の観察で確認できた。



第1図 春日遺跡調査区配置図

春日遺跡

昭和56年度

4月13日 S D02の南側を拡張し、プランの確認に努める。

4月15日 S D02のプランを確認する。

5月13日 S D01の南側を重機で拡張し、S D01の続きを検出する。また、この近くに、土層観察用のグリットを $4m \times 4m$ の範囲で約 $2m$ 掘る。土層は上から、耕作土、客土、暗青灰色粘質土、茶灰色粘砂土、青灰色砂層(粗砂)、暗灰色砂層(細砂)の順で堆積している。

5月15日 S D01を実測し、II区の調査終了。

2 遺跡の概要

春日遺跡は、意宇平野の東南端に位置し、意宇川と須田川に挟まれた、湿田中に位置している。この地は北方に向けては平地が広がっているが、南方には山並がせまっている。調査は昭和55年、56年の2年度にわたって行われた。調査区は調査対象地区の西端に位置する橋脚部分をI区、他をII区として設定し、I区は昭和55年4月～5月、II区は昭和56年3月～5月にかけて調査を行った。

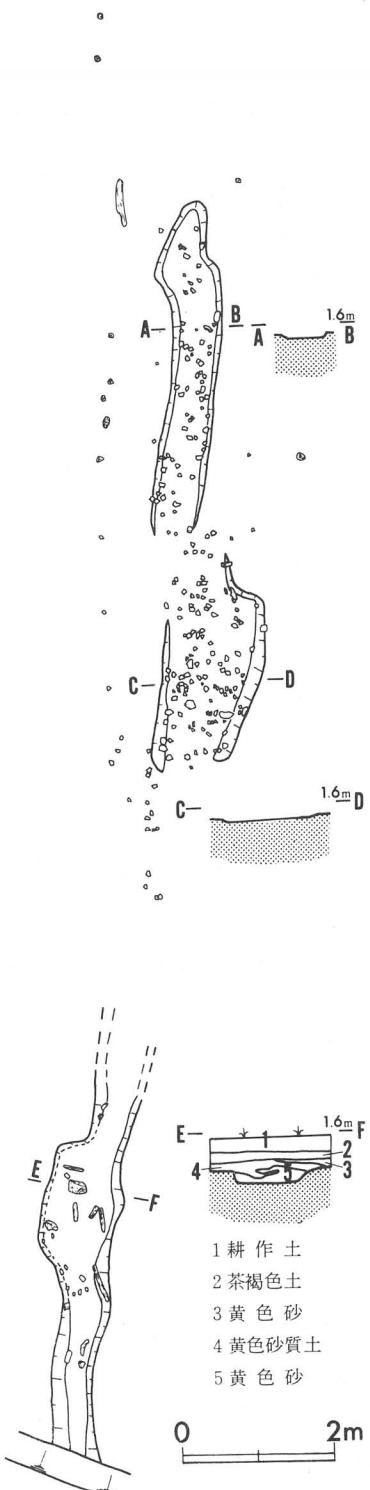
I区は $4m \times 4m$ のグリットを5個掘ったが、遺構は検出できず、若干の遺物が出土したにすぎない。遺物はほとんどが最下層の砂礫層から出土しており、意宇川の氾濫などによって運ばれたものと思われる。

II区からは、西端および中央に溝状遺構が検出された。一部しか遺存していなかったが、各溝中からは弥生土器を中心にして縄文土器、土師器、須恵器などが出土している。

3 検出遺構と遺物

SD01 II区の西端に位置し、表土を約 $40cm$ 除去した段階で検出された。平面形は直線状のプランを呈し、断面は浅い梯形を呈している。その規模は長さ約 $16.6m$ 、幅 $0.54\sim 1.3m$ 、深さ約 $0.05m$ である。溝の西側に沿って杭列が検出され東側沿いにも杭が2本検出されたことから、本来は両壁に沿って杭列があったと思われる。

溝内からは縄文土器、弥生土器、土師器、石器、木片が出土している。第3図3は径 $3.3cm$ 、厚さ $0.6cm$ の土器片を転用



第2図 春日遺跡 S D01実測図

した有孔円板である。中央には径 0.6cm の孔を両面から穿っている。胎土には小砂粒が含まれ、焼成は良好で、黄茶褐色を呈している。

同図1は玉髓質材の石器である。長さ 5.8cm 、幅 $3.1\sim4.3\text{cm}$ 、厚さ 0.9cm を測り、平面形は分銅形を呈す。横長の剥片を利用して作られ、一面には自然面がわずかに残っている。両側縁はつぶすように加工され、刃部は簡単な剝離によって作られている。

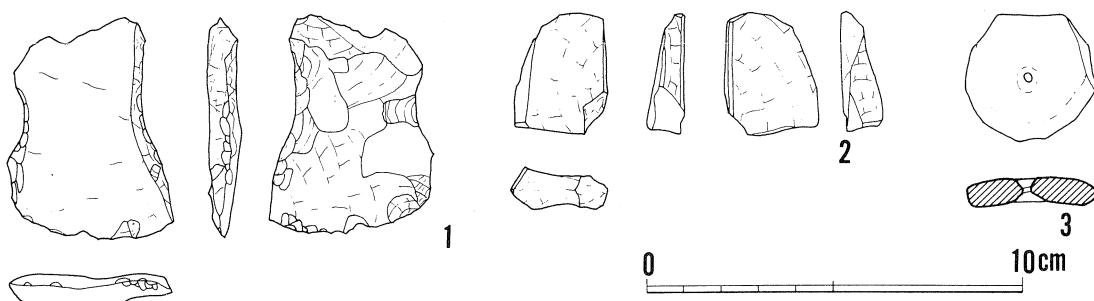
同図2は碧玉質材の玉未成品である。平面形は不整方形を呈し、長さ 3.2cm 、幅 2.5cm 、厚さ 1cm を測る。2側辺に擦切による溝が認められ、この溝を打点にして整形されている。

第4図1は口径 17cm の縄文土器の甕である。胴部は内湾気味に伸びて口縁部に至り、口縁部直下には断面三角形の刻目凸帯文が貼付されている。胎土には大粒の砂粒が多く含まれ、焼成は不良で茶褐色を呈している。この土器は形態などから晩期後半のものと思われる。^{註1}

同図2～31は弥生土器である。2～5は壺で、口径は2が 17.9cm 、3が 14.6cm を測る。頸部は緩やかに外反して口縁部は大きく開き、口縁端部は2が下垂、3が上下に拡大している。2、3の口縁端部外面には鋸歯文、内面には2に鋸歯文と刺突文、3に波状文が施されている。2、4の頸部には刻目凸帯文が貼付されているが、2の刻目文は指頭、3の刻目文はヘラ状工具によるものである。また、5の頸部には5条の凹線文が施されている。いずれも風化のため調整は不明であるが、5の外面にはわずかにハケ目が残っている。いずれも胎土には砂粒が含まれ、4以外は焼成は良好である。色調は3が黄灰色を呈す他は黄褐色である。

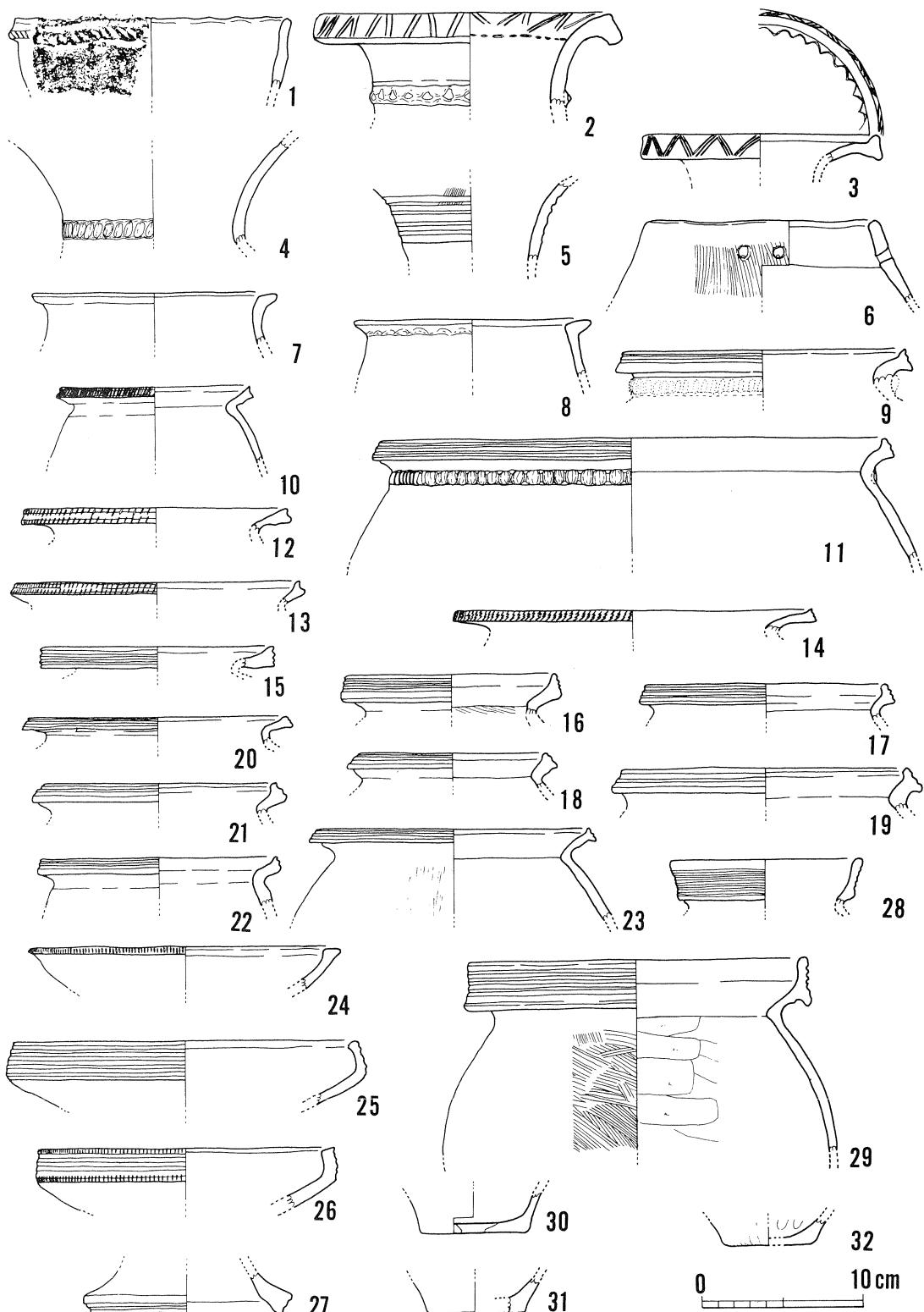
6は口径 14.2cm の無頸壺である。口縁部から肩部にかけて「ハ」の字形をし、口唇部は内傾する面をなす。口縁部直下には2個の小孔が穿たれている。内面の調整は不明だが、外面は口縁部にヨコナデ調整、以下にハケ目調整が施されている。胎土には砂粒が少し含まれ、焼成は良好で黄灰色を呈している。

同図7～23、29は甕である。7は口径 15.2cm を測り、頸部は外反し、口縁部は直角に屈曲して、テーブル状をなしている。口径 14.8cm を測る。10、12～14は頸部が「く」の字形に屈曲し、口縁端部はわずかに肥厚し面をなす。10は口径 12cm の小型、12～14は口径 $16.6\sim17.9\text{cm}$ の中型である。10、12、13の口縁端部には太い凹線文が一条廻り、その後にヘラ状工具による刺突文が施されている。14の口縁端部には二枚貝の貝殻腹縁による刺突文が施されている。9、11、15～23は口縁端部の面がさらに拡大し、凹線文が2条施されるもの（9、18～23）と3条施されるもの（11、15～17）と



第3図 春日遺跡 S D01出土遺物実測図

春日遺跡



第4図 春日遺跡 S D01出土土器実測図

がある。頸部には文様を施さないものが多いが、9、11にはヘラ状工具による刻目凸帯文が貼付されている。口径31.6cmの大型のもの(11)、同16.2~17.8cmの中型のもの(9、19、20、23)、同11.6~14.8cmの小型のもの(15~18、21~22)がある。29は口径21.2cmを測り、口縁部は上下に大きく拡大した複合口縁である。口縁端部はほぼ直立し、外面には4条の擬凹線状の沈線文が入っている。口縁部の調整は内外面ともヨコナデ調整が施されるものが多く、23、29の胴部外面にはハケ目調整が施されている。また胴部内面は16にハケ目調整、18、29にヘラ削り調整が施されている。いずれも胎土には砂粒が含まれ、焼成は9、11以外は良好で、黄灰色(15、19)または茶褐色を呈している。

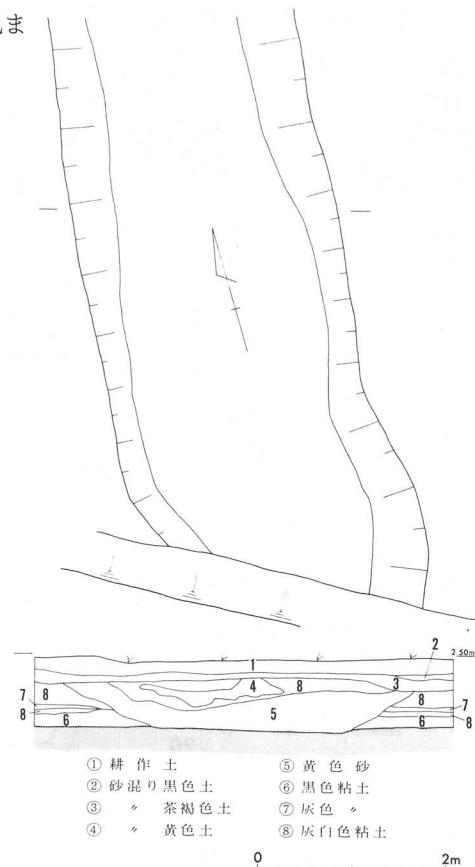
同図24~27は高環で、24~26が環部、27が脚部である。24は口径19.5cmを測り、体部が内湾し、口縁端部が肥厚して平坦面をなす。口唇部にはヘラ状工具による刻目文が施され、平坦面には2個の円形浮文が貼付されている。25は口径21.4cm、26は口径18.4cmを測り、ともに口縁部は逆「く」の字形に屈曲している。口唇部はわずかに肥厚して平坦面をなす。口縁部外面には25に5条、26に4条の凹線文が施され、26は口縁部上端と屈曲部にヘラ状工具による刻目文が施されている。27は脚端径12cmを測り、「ハ」の字形に大きく広がり端部は肥厚し面をなす。端部には2条の凹線文が施されている。調整は27の内面上半にヘラ削り調整が施されている以外は不明である。いずれも胎土には砂粒が含まれ、焼成は25以外は良好で黄褐色または茶褐色を呈している。

同図30~32は壺または甕の底部で、底径6~8cmを測る。すべて安定した平底で、30の底中央には円形の小孔が穿たれている。調整は32の胴部外面にヘラ磨き調整、内面に指によるナデ調整が施されているが、30、31の調整は不明である。いずれも胎土には小砂粒が含まれ、焼成は概ね良好で茶褐色を呈している。

以上の弥生土器は、形態、文様などから8は中期前葉、2~7、10、12~14、24は中期中葉、9、11、^{註2}15~27は中期後葉、29は後期後半のものと思われる。

28は古式土師器の甕である。口径11.8cmで口縁部は複合口縁である。端部は外反し、外面にはクシ状工具によるとと思われる8条の平行沈線文が施されている。胎土には小砂粒が含まれ、焼成はやや不良で灰色を呈している。形態、文様などから古墳時代前期のものと思われる。^{註3}

SD02 II区の中程に位置する。重機掘削後の壁面観察によって確認されたため、南側の一部のみが



第5図 春日遺跡SD02実測図

春日遺跡

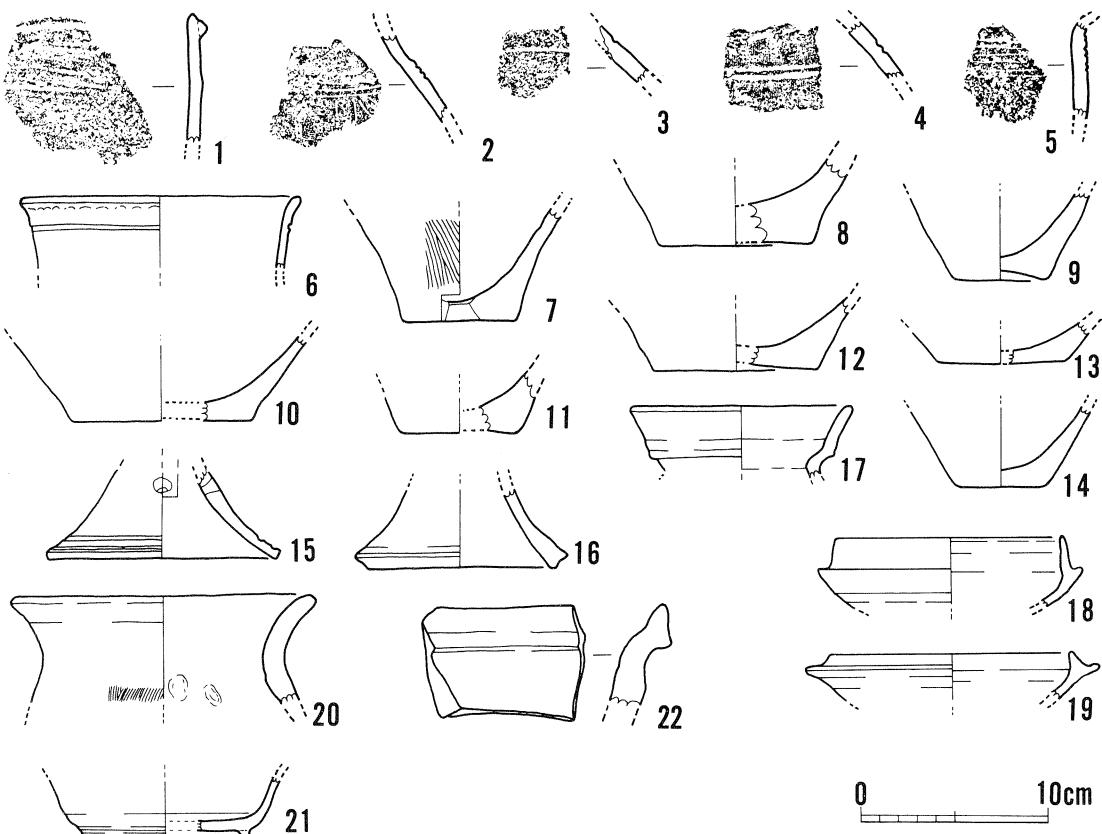
検出された。平面形はほぼ直線状のプランを呈し、断面は「U」字形を呈している。その規模は、確認し得た範囲では長さ約6.5m、幅約2.8m、深さ約0.15~0.3mで、溝底はほぼ水平である。土層観察によれば、本溝は表土下約0.3mの灰白色粘土上面から掘り込まれている。

溝内からは、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶器が出土している。第6図1は小片であるが縄文土器の甕である。胴部から口縁部にかけてほぼ垂直にたちあがり、口縁部直下には断面三角形の刻目凸帯文が貼付されている。内外面とも貝条痕がみられ、胎土はもろく、大粒の砂粒が含まれている。焼成は良好で灰色を呈している。この土器は文様などから晩期後半のものと思われる。

同図2~16は弥生土器である。2~4は壺の肩部小片である。2は段を有しており、その直下にはヘラ状工具による3条の平行沈線文が施され、さらに平行沈線文に直交および斜交するように沈線文が施されている。また3は1条、4は2条のヘラ状工具による沈線文が施されている。4の内面にはナデ調整、3の外面にはヘラ磨き調整が施されている。いずれも胎土には大粒の砂粒が含まれ、焼成は2が良好だが、3、4は不良で、灰色、黄褐色を呈す。

同図5、6は甕である。6は口径14.6cmを測り、口縁部が短く外反している。頸部下には5が6条、6が1条のヘラ状工具による平行沈線文が施されている。ともに胎土には大粒の砂粒が含まれ、焼成は不良で茶褐色または黄褐色を呈している。

同図8~14は壺または甕の底部である。底径4.3~6.1cmで胴部が急にたちあがるもの(7~9、



第6図 春日遺跡 S D02出土土器実測図

11) と、底径6.8~9.4cmで胴部が開き気味にたちあがるもの（10、12、13）とがある。調整不明のものがほとんどであるが、7の外面には粗いハケ目調整が施されている。焼成は9、10、14以外は良好で、色調は10が灰色を呈す他は茶褐色または赤褐色を呈している。胎土には7~13には大粒の砂粒が多く含まれるが、14にはさほど大粒の砂粒は含まれていない。なお、7の底部は円形に穿孔されている。

同図15、16は高壺の脚部である。15は脚端径11.9cm、16は同径10cmを測る。端部はとともに「ハ」の字形に広がるが、16の端部は肥厚し四線文が1条施されている。15は上部に円形の透孔が穿たれ裾部には凹線文が2条施されている。ともに胎土には砂粒が多く含まれ、焼成は良好である。色調は15が黄茶色、16が茶褐色を呈している。以上の弥生土器は、形態、文様、胎土などから2~13が前期、14~16が中期のものと思われる。

同図17、20は土師器甕である。口径は17が11.6cm、20が15.7cmを測る。17は頸部が「く」の字形に屈曲し、口縁部は複合口縁である。20は頸部、口縁部は緩く外反し、口唇部は丸く納めている。調整は口縁部、頸部にはとともにヨコナデ調整が施されているが20の胴部外面にはハケ目調整、胴部内面には指による押圧痕がみられる。両者とも胎土には小砂粒が含まれ、焼成は良好である。色調は17が茶褐色、20が黄茶色を呈している。これらの土器は、形態から17が古墳時代前期、20が古墳時代後期から奈良時代にかけてのものと思われる。^{註4}

同図18、19、21は須恵器壺身である。18、19はたちあがりをもち、21は高台が付けられている。18はたちあがりが長く直立気味であるが、19はたちあがりが短く内傾し受部が長く伸びている。21は高台が低く外傾し、口縁部は外反している。調整は18の体部中程に回転ヘラ削り調整、21の内面底部に不整方向のナデ調整がみられる他は回転ナデ調整が施されている。いずれも胎土には砂粒が含まれ、焼成は良好で青灰色を呈す。たちあがりの長さなどから18が古墳時代中頃、^{註5}19が同後期、^{註6}21は奈良時代中頃のものと思われる。

同図22は陶器鉢である。口縁部が屈曲し、端部は上方に拡大し広い面をなしている。

その他の遺物 S D01、02内から出土したものの他に、弥生土器、土師器、須恵器、陶質土器、土師質土器、埴輪、土錐、玉未成品、砥石が出土している。

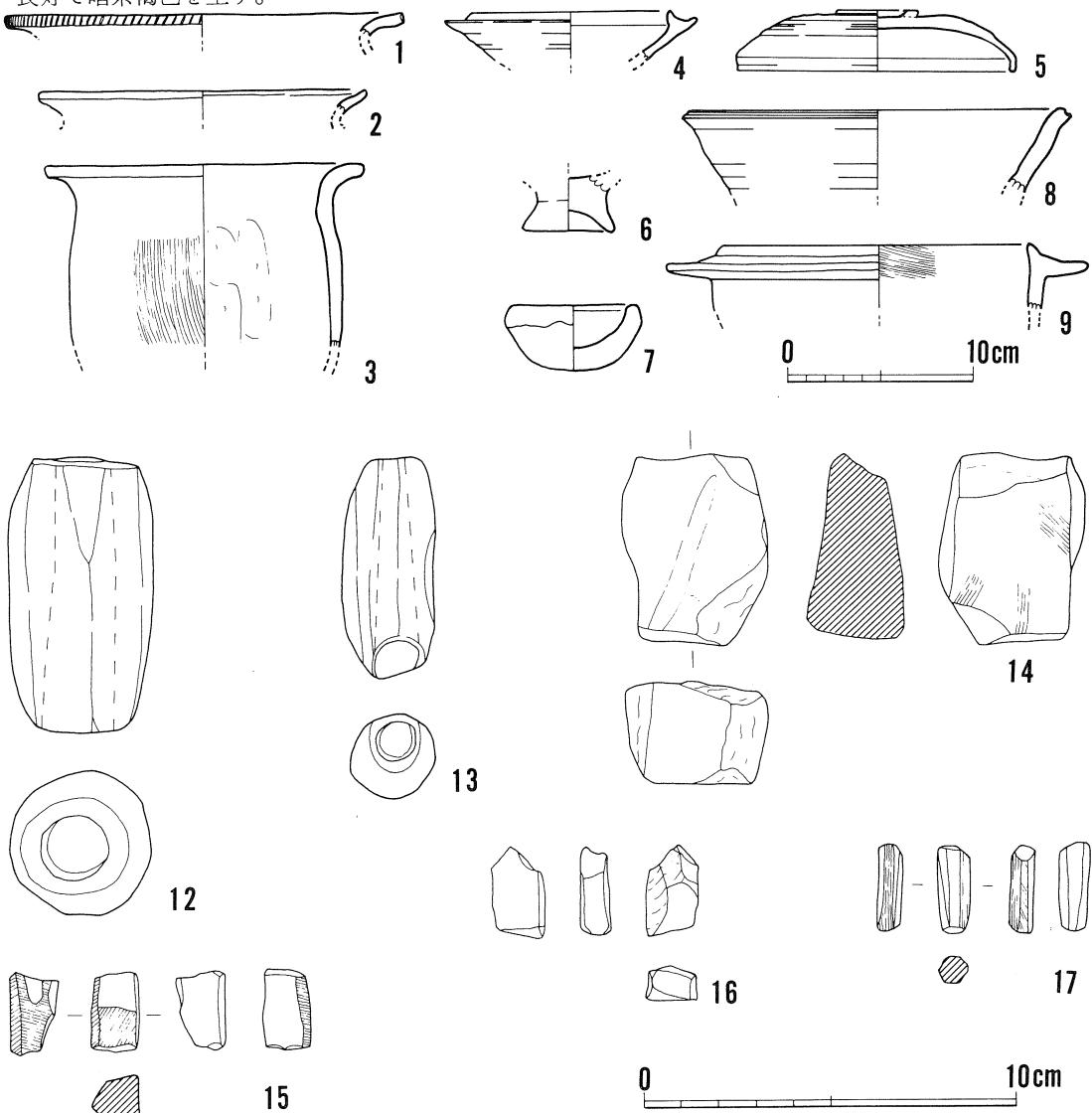
第7図1、2、6は弥生土器である。1、2は甕で、ともに口縁部は逆「ハ」の字形に外反し、端部は平坦面をなす。1の端部にはヘラ状工具による刻目文が入っている。口径は1が21.2cm、2が17.2cmを測る。6は脚付きの底部である。底径4.8cmを測り、「ハ」の字形に広がっている。いずれも風化が進んでおり、調整は不明である。また胎土には砂粒が多く含まれ、焼成は1、2が不良、6が良好である。色調はいずれも灰白色を呈している。これらの土器は形態、文様などから中期中葉のものと思われる。

同図3は土師器甕である。口径16.5cmを測り、胴部はあまり張らず口縁部は緩く短く外反している。調整は口縁部内外面にヨコナデ調整、胴部外面に縦方向のハケ目調整、胴部内面に縦方向のヘラ削り調整が施されている。胎土には小砂粒がわずかに含まれ、焼成は良好で茶褐色を呈している。この土器は形態などから古墳時代後期から奈良時代にかけてのものと思われる。

春日遺跡

同図4、5は須恵器である。4は口径16.5cmを測る壺で、たちあがりは短く内傾し受部は上外方に長く伸びる。5は口径14.7cm、器高3.2cmを測る蓋である。天井部には輪状つまみが付けられ、器高がやや高いため天井部は丸味が感じられる。口縁端部は屈曲し、ほぼ垂直に下垂している。調整は、4は全面回転ナデ調整が施されている。5は天井部外面に回転ヘラ削り調整の後に回転ナデ調整、天井部内面には不整方向のナデ調整が施されている。ともに胎土には砂粒はほとんど含まれず、焼成は良好で青灰色を呈している。これらの土器は4が古墳時代後期、5が奈良時代初頭と思われる。

同図7は口径6.8cm、器高3.5cmの埴燒である。底部は丸く体部は内湾して伸び、器壁は全体に厚い。口縁部にはガラス質の黒色の残滓が付着している。胎土にはほとんど砂粒が含まれず、焼成は良好で暗茶褐色を呈す。



第7図 春日遺跡出土土器実測図

同図8は須恵質の甕で口径20cmを測る。逆「ハ」の字形に直線的に伸び、口唇部は凹面をなす。胎土には大粒の砂粒が含まれ、焼成は良好で灰色を呈す。

同図9は土師質の羽釜である。口径16.4cmを測り、口縁部は短く内傾している。口縁部内面には斜方向の粗いハケ目調整、外面にはヨコナデ調整が施されている。胎土には極小の砂粒が含まれ、焼成は不良で灰白色を呈している。

同図12、13は土錘である。ともに円筒形を呈し、12は径1.9cm、13は径1.1cmの孔が貫通している。12は長さ7.4cm、径3.9cm、重さ79.8g、13は長さ5.9cm、径2.4cm、重さ25.8gを測る。

同図14は砂岩を利用した砥石である。3面に使用痕が認められる。長さ5.1cm、3.5cm、厚さ2.6cmを測る。

同図15～17は緑色凝灰岩質材の管玉未成品でいずれも研磨工程のものである。15と16は四角柱状を呈している。ともに1～2辺に擦切技法による溝が認められ、この溝を打点にして整形されている。側面部はいずれも研磨痕が認められる。15は長さ2.1cm、幅1.3cm、厚さ1.2cm、16は長さ3.2cm、幅1.4cm、厚さ0.8cmを測る。17は断面7角形を呈し、円柱に近い形態をしている。長さ2.4cm、径0.7cmを測る。側面、端部とも研磨痕が認められ、完成品に近いものと思われる。

4 小 結

調査の結果、SD01、02の2条の溝状遺構が検出された。これらの遺構からは、主に弥生時代中期の土器が出土している。しかし、他にも少数ながら晩期縄文土器、前期・後期弥生土器、古墳時代前期・後期の土師器、須恵器、中世陶器なども出土している。また、SD02のように弥生土器の出土層より下層から須恵器が出土しているなど、層位的にかなり不安定である。以上の2点を考えるとこれらの遺構は弥生時代中期のものと断定することはできない。両遺構の出土遺物のほとんどが摩滅していることから本溝に伴うと考えるより、上流から何らかの理由で流されてきたと考えるほうが適当と思われる。

SD01、02の性格としては、弥生時代の集落が低湿地に多いことから、集落に関係する遺構と考えることもできる。^{註7}しかしながら、立地や土層からみると集落を営むのに適した土地とは言えないようである。即ち、遺構の残存状態が非常に悪く、各土層間に砂が混入しており、当地はたびたび意宇川と須田川の氾濫を受けたことがわかる。^{註8}以上のことから、SD01、02は集落に関係する遺構というより、生産その他に関係する遺構と考えたほうが適当と思われる。

各遺構とも須田川のように南から北へ水が流れていたと思われることから、集落は南部の山裾にあったと思われる。水田では住居跡が検出できなかったことを考えると、春日遺跡で生活した人々はこの山裾に住居を構えていたと思われ、調査した地区は主に生産の場として利用されていたのではないかろうか。そして、今回出土した土器は山裾にある集落から、何らかの理由で流されてきたものであろう。従来春日遺跡は弥生時代中期の遺跡として知られていた。しかし、今回の調査でわずかではあるが晩期縄文土器、前期弥生土器が出土しており、本遺跡は弥生時代前期から縄文時代晩期まで溯ることがわかった。意宇平野東端で現在までに知られている弥生時代前期の遺跡は寺床遺

春日遺跡

^{註10} 跡だけで、本遺跡は意宇平野東端にも弥生時代前期の遺跡が点在していたことを示す新例と言えよう。

また、注目すべき遺物として管玉未成品がある。碧玉質材のもの1、緑色凝灰岩質材のもの3と出土数はわずかであるが、いずれも擦切技法によるものである。擦切技法による玉生産は、布田遺跡^{註11}で多くみられるが、本遺跡でも同様な未成品があることから、玉生産は比較的広い範囲で行われたものと思われる。

以上、今回の調査で得られた知見はわずかであるが、本遺跡は弥生時代の地域社会を復原する上で新しい資料を提供してくれたと言えよう。

註 1. 宮道正年「島根県の縄文土器の研究—土器編年を中心に」『松江考古3号』 昭和55年

註 2. 松本岩雄ほか「八雲立つ風土記の丘研究紀要 I 弥生式土器集成」昭和52年 以下弥生土器の年代はこれに倣う。

註 3. 前島己基、松本岩雄「島根県神原神社古墳出土の土器」『考古学雑誌』第62巻第3号 昭和51年

註 4. 山本清「山陰の土師器」『山陰古墳文化の研究』所収 昭和46年

註 5. 山陰の須恵器編年では、第6図18が第I期、同図19が第IV期に当る。山本清「山陰の須恵器」『山陰古墳文化の研究』所収 昭和46年 以下、古墳時代須恵器の年代はこれに倣う。

註 6. 出雲地方の歴史年代須恵器の編年では、第4式に当る。柳浦俊一「出雲における歴史時代須恵器の編年試論」『松江考古3号』昭和55年 以下、歴史時代の須恵器の編年はこれに倣う。

註 7. 佐原真、金閔恕編「古代史発掘4」 昭和50年

註 8. 東出雲町教育委員会「春日遺跡埋蔵文化財発掘調査概報」 昭和56年

註 9. 花谷浩氏の教示による。

註10. 島根県東出雲町教育委員会「寺床遺跡発掘調査の概要—D・E地区—」 昭和57年

註11. 島根県教育委員会「布田遺跡」『国道9号線バイパス予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書III・IV』昭和56・58年

(柳浦 俊一)

Ⅱ 夫 敷 遺 跡

— 八東郡東出雲町 —

1 調査の経過	11
2 調査の概要	11
3 調査の方法	11
4 検出遺構と遺物	12
5 小 結	20

挿 図 目 次

第1図 夫敷遺跡土層断面図	11
第2図 夫敷遺跡調査区配置図	12
第3図 夫敷遺跡 水田址遺構配置図	13
第4図 夫敷遺跡第4層水田址実測図(1)	14
第5図 夫敷遺跡第4層水田址実測図(2)	15
第6図 夫敷遺跡第6層水田址実測図	17
第7図 夫敷遺跡出土遺物実測図(1)	19
第8図 夫敷遺跡出土遺物実測図(2)	20

1 調査の経過

8月5日から12日まで試掘を行ない、本調査は10月2日から3月2日まで実施した。

10月2日 第I区発掘開始。

10月3日 第II区発掘開始。

10月8日 第II区で東西に走る畦畔らしきものを検出。

10月9日 プラント・オパール分析のためサンプリングが行なわれた。

11月15日 畦畔らしきものは、高さ約5cm、幅50cmで細長く続いて水田の区画を示すようになった。

11月27日 II区においてこれまでに9枚の水田が確認された。

12月16日 水田址実測。

1月17日 水田址の上に張った厚さ5cm位の氷の取り除き。

1月23日 IV層水田面を掘り下げる。

1月29日 VI層水田址を検出する。

2月17日 プラントオパールサンプリング（藤原）。

3月10日 機材の一部撤収。

3月12日 調査終了。

2 遺跡の概要

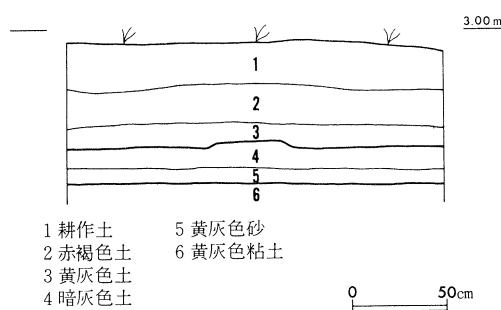
夫敷遺跡は意宇平野の中央よりやや東によった水田中に位置し、現在、平野の南側を走る意宇川と、北は後述する布田遺跡に隣接している。布田遺跡との間は約100mほどの距離があり、そこには意宇川旧河道が推定されている。夫敷遺跡は、この旧河道をあたかも意識するがごとく、現状でも微高地となっており、以前より弥生式土器をはじめとする各時代の遺物の出土が知られていた。

遺跡は9号線バイパスルート内でも約450mの長さに及ぶ広範囲のもので、その中には出雲国府跡の推定地の一つにされている区域も含まれている。律令制時代の行政区分では、意宇郡大草郷、もしくは、出雲郷に属する地域であり、この時代の遺構の検出も期待された。

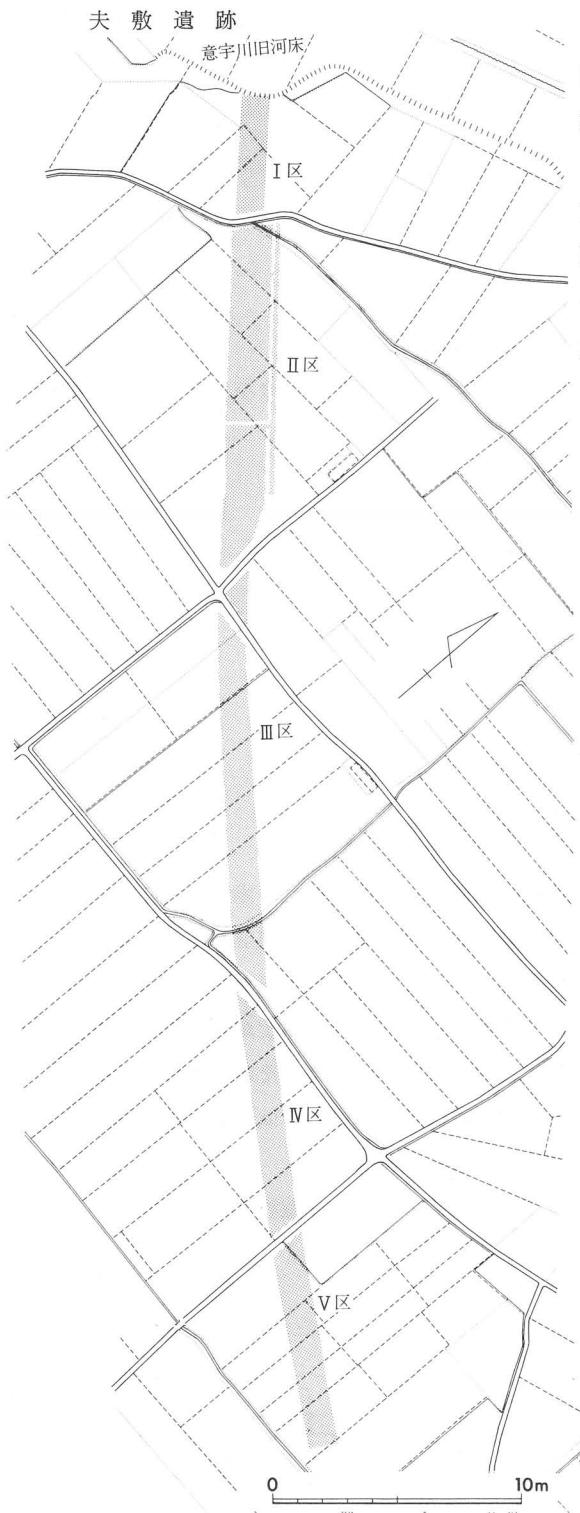
検出されたのは、遺跡の北側では弥生時代後期の水田址、南側では中世の遺物であった。

3 調査の方法

調査は、まず試掘用グリッドから土壌採取し、それを宮崎大学藤原宏志助教授のもとへ送り、水田跡の存在を確認する為、プラント・オパールの分析調査からはじめることにした。その結果第6層にプラント・オパールのピークが認められ、水田址の存在が指摘された。この結果に基づきバイパスルート内の東側に長さ90m、幅1.5mのトレンチを入れ、壁



第1図 夫敷遺跡土層断面図



第2図 夫敷遺跡調査区配置図

構築する土は、水田耕土と同質である。また、水口等の施設は検出し得なかった。第IV層中からは調査区北側において、弥生式土器の小破片がまとまって出土している。

面で土層を観察し畦畔とその広がりを確認する方法をとった。しかしながら、この方法でははっきりとした畦畔の断面は検出できなかったので、慎重な平面発掘を行なう一方、各土層のサンプルを岡山大学名誉教授笠原安夫氏へ送り、種子分析を依頼した。稲のプラント・オパールのみならず、水田が営まれている周囲に限って生える植物種子を確認し、水田跡の存在を確実なものにするためである。分析の結果、典型的な稻田に生えるコナギをはじめとする植生が明らかにされた。調査区の設定は、ルートの北側よりI～V区に区分した。

参照：笠原安夫「島根県夫敷遺跡水田地層の種子分析について」（本書巻末所収）

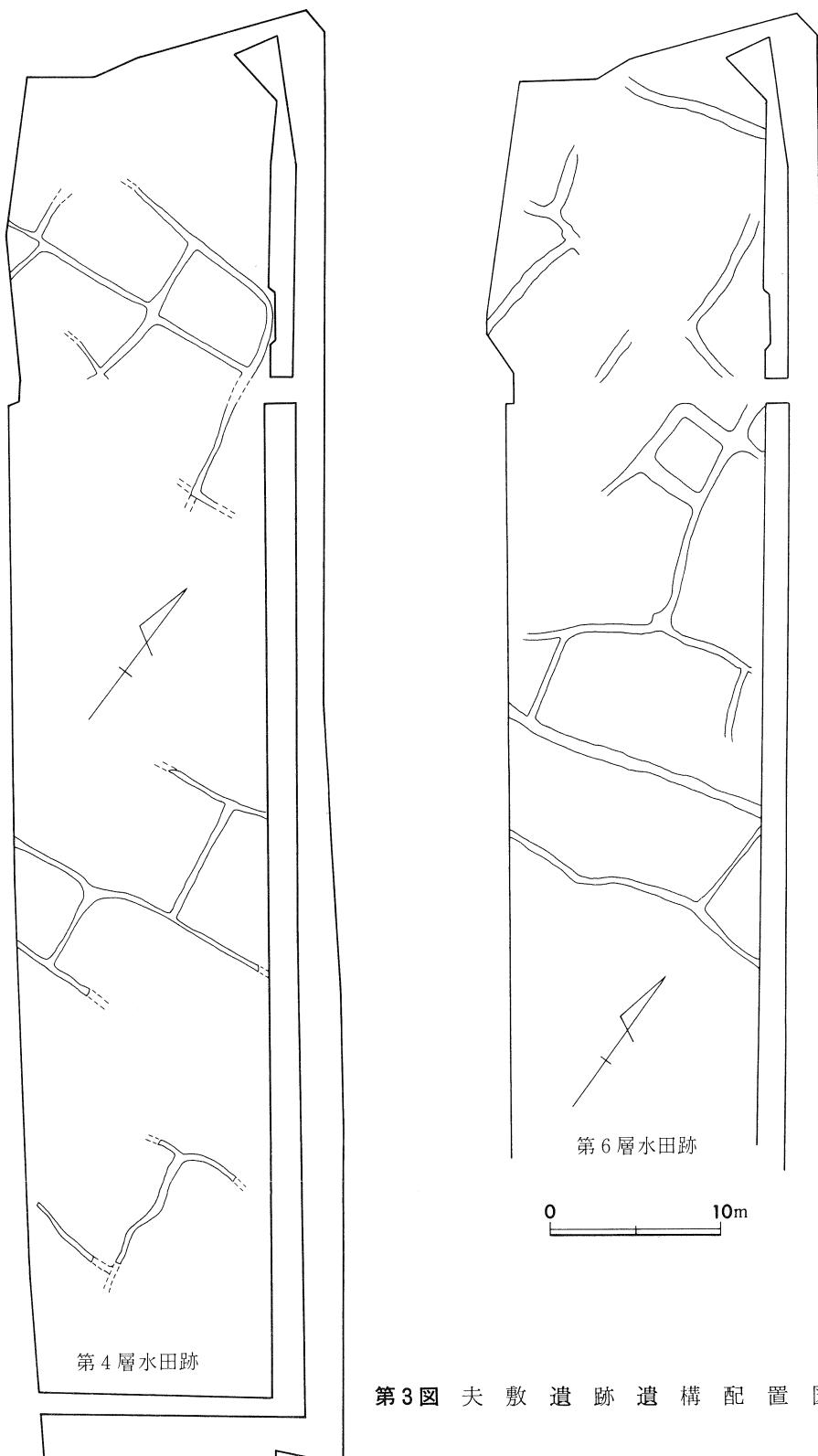
4 検出遺構と遺物

水田址付近の土層は、次の様である。第1層灰色土(耕作土)、第2層赤褐色土、第3層黄灰色土、第4層暗灰色土、第5層黄灰色砂、第6層黄灰色粘土、第7層灰色粘土、第8層黒色粘土。（第1図）

第4層の水田跡

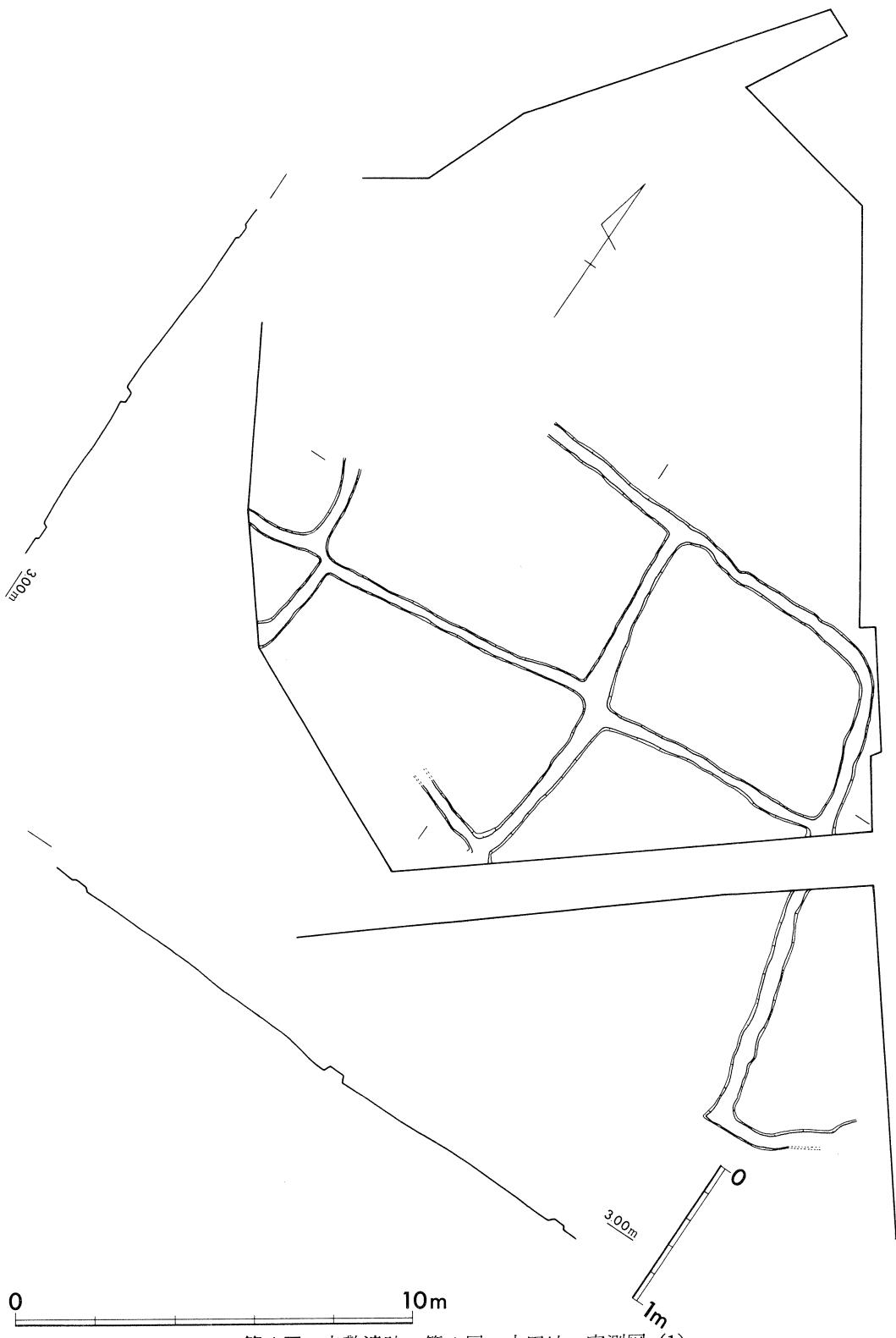
表土下55cmのほぼ水平な面で、明確な水田区画1枚と比較的推定可能な区画3枚を検出し、畦畔が部分的に把握できた。畦畔の方向は、ほぼ東西南北に合致している。水田区画の大きさを北端の区画でみたところ東西では約7.4mを最長にほぼ6～7m、南北では約5.2mを最長に4△5m位での区画がみられ、面積も約22m²～39m²程度のものとなる。北西端の水田区画では、西側の方が東側より約10cm高く、南北での高低差はほとんど認められない。他の区画においては、東西南北とも高低差は認められない。畦畔の幅は40cm程度で、水田面との高低差は僅か3～4cmと低い。畦畔を

夫敷遺跡



第3図 夫敷遺跡遺構配置図

夫 敷 遺 跡



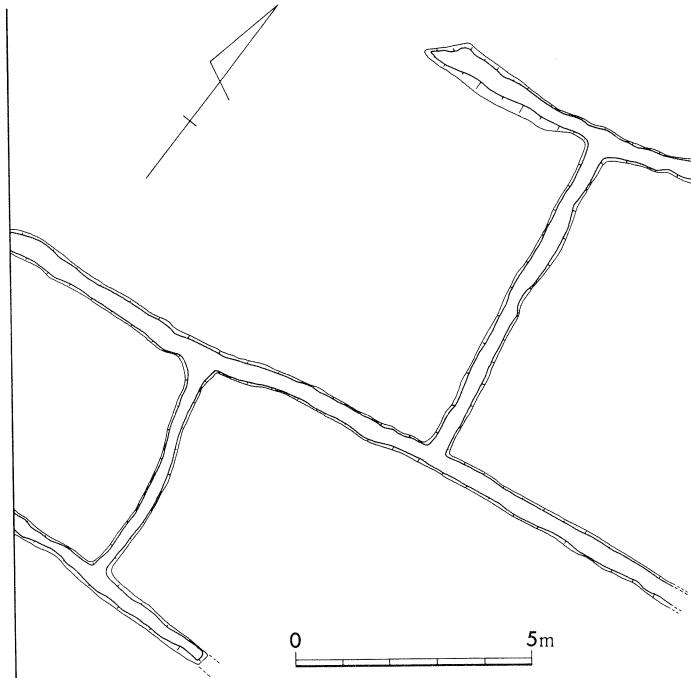
第6層の水田址

第6層の水田址は、第4層（水田面）との間に第5層（粘土混じりの砂層）、すなわち間層が入っており、それを丁寧に取り除いて検出した。畦畔の方向は、第4層の畦畔と若干のずれが生じている。明確な区画1枚、推定可能な区画2枚を含む計16枚を検出した。明確な区画のものは約 $3 \times 3 m$ ($9 m^2$) と小さく、東西南北での高低差はない。畦畔と水田面の差も $2 \sim 3 cm$ と低い。調査区南側の推定可能な2枚の東西長約 $11m$ 、南北長約 $7 \sim 10m$ 、平面長方形の区画である。それぞれの大きさは、 $72m^2$ と $94m^2$ が推測できるものである。この2枚の場合、前者は西側の方が $10 \sim 15cm$ 程高く、後者は $10cm$ 程南が低くなっている。畦畔の幅は $40 \sim 60cm$ あり、第4層と比べやや広いものがみられる。中でも南側の2区画を南北に区切る畦畔は、幅 $1m$ 、高さ $10cm$ ある。断面は、半円形を呈しており、他と比べ大きさ、高さもしっかりととしている。調査区北側の畦畔も、幅は $40 \sim 60cm$ であり、断面は半円形である。出土遺物は、数点の弥生式土器の小片がある。

出土遺物

出土遺物には、弥生式土器、石器、土師器、須恵器（第7図）、陶磁器（第8図）がある。第7図の1、2、5、6は試掘段階で出土しており、3、4はII区第3層より、7～10はII区第2層より出土している。11～27は、II区第4層（水田構築土）中より出土しており、第IV層の水田の時期に近いと思われる。

第7図2は、土師器の甕の完形で「く」の字形の口縁をし体部から底部にかけて丸味がある。口径 $17cm$ 、高さ $25.1cm$ を測る。口縁部内外面にヨコナデを施し、頸部内面から胴部上半にかけて指頭圧痕の上をナデしている。胴部内面下半部はヘラケズリ、胴部外面下半部は縦方向のハケ目を施す。腹部に焼成後穿孔している。5～10は須恵器である。5は壺蓋で復元口径 $12.6cm$ 、立ち上りは少し外傾し長く、端部は二段になっていることから古墳時代中期（註1）と考えられる。2は壺、身で復元口径 $13.2cm$ 、内傾する低い立ち上りをもち、内外面ともヨコナデを施しており、古墳時代後期（註2）と考えられる。7は壺の蓋で復元口径 $12.8cm$ 、縁端部内面に低いかえりをもつ。8は、輪状つまみがつく蓋の破片である。9は、高台のつく皿である。10は甕の破片で、復元口径 $13cm$ 、体部内面に同心円状の叩



第5図 夫敷遺跡第4層水田址実測図(2)

夫敷遺跡

目がある。7～9は、歴史時代の須恵器である。1、3、11～18、22、27は、弥生式土器の甕で口縁を多少内傾させ上下に拡大し、外面に2～3条の凹線を施し、外面にハケ目、内面頸部以下にヘラケズリを施す。15は、口縁部内面に横方向のハケ目、17は内面頸部以下にハケ目を施している。23は、甕の口縁部で、口縁内外面はナデを施し、胴部外面はハケ目、内面頸部以下ヘラケズリを施している。26は、壺の口縁部で、内面ヨコ方向のハケ目、外面不整方向のハケ目を施している。これらの口縁復元径は、14.6cm～24.6cmである。4、24、25は、弥生式土器の甕か壺の底部である。4は、外面にタテ方向のヘラミガキを施している。24は、外面に縦方向のハケ目を施している。19は、高環で、筒部外面に5条の沈線を入れ、環部内面はナデを施している。20は、器形は不明であるが、上面は平坦にナデ、外面にはハケ目がわずかに残っている。上部の径3.8cm、器肉は1.0cmを測る。中空になっているが、蓋のようなものと考えられる。これらの甕は、口縁を上下に拡大させ、外面に2～3条の凹線を入れ、内面頸部以下にヘラケズリを施している。このことから、弥生時代後期前半の特徴を示すものと思われる。^(註4) 21は、石器で、幅6.0cm、厚さ1.7cmあり、片方を刃部にしており、背の方は平坦になっており、石斧様の打ちつける機能をもつと思われる。

夫敷遺跡出土の陶磁器は耕作土、及びその下層からの出土で遺構に伴うものはなかった。(第8図)

1～9、18は中国製磁器である。このうち、3は切高台の白磁で見込に重ね焼の痕を残す。1は口径21.2cmの白磁碗、6は壺であろう。5は外面に目線刻文様のある青白磁、器形は皿と考えられる。2、4、6、7、8、9は青磁の碗類で、8は見込に花文のスタンプが認められる。深い緑色で良好な胎土。4と9は稜のある蓮弁文碗である。7は口縁にややくずれた雷文、体部に幅の広い線刻蓮弁文を入れている。同様なものは才ノ岬遺跡からも出土している。18は青磁盤であろう。口径は26cmに復元される。これら中国製磁器の時期はおよそ13～15世紀のものと考えられる。

日本産の陶磁器は10、11、12が唐津の皿で、慶長から元和にかけてのものであろう。

16は備前系の擂鉢で5本を一单位とした条が入る。但し、あまり使用痕は認められない。13、14は、美濃・瀬戸系陶器で、13は器形は不明であるが、外面には薄緑色の釉が全面にかかれている。14は小形の皿で中央の無釉部分には使用痕がある。

15は口径は復元不可能であるが、擂鉢の一種と考えられる。胎土には砂粒は含まれず、乳白色を呈す。産地不明。

18は滑石製の石鍋の縁にあたる部分で、その復元径は約26cmである。島根県下では六日市町九郎原II遺跡に次いで二例目の資料である。^(註5)

註1 山本清「山陰の須恵器」(『山陰古墳文化の研究』) 同氏の編年によれば第I期に相当すると思われる。

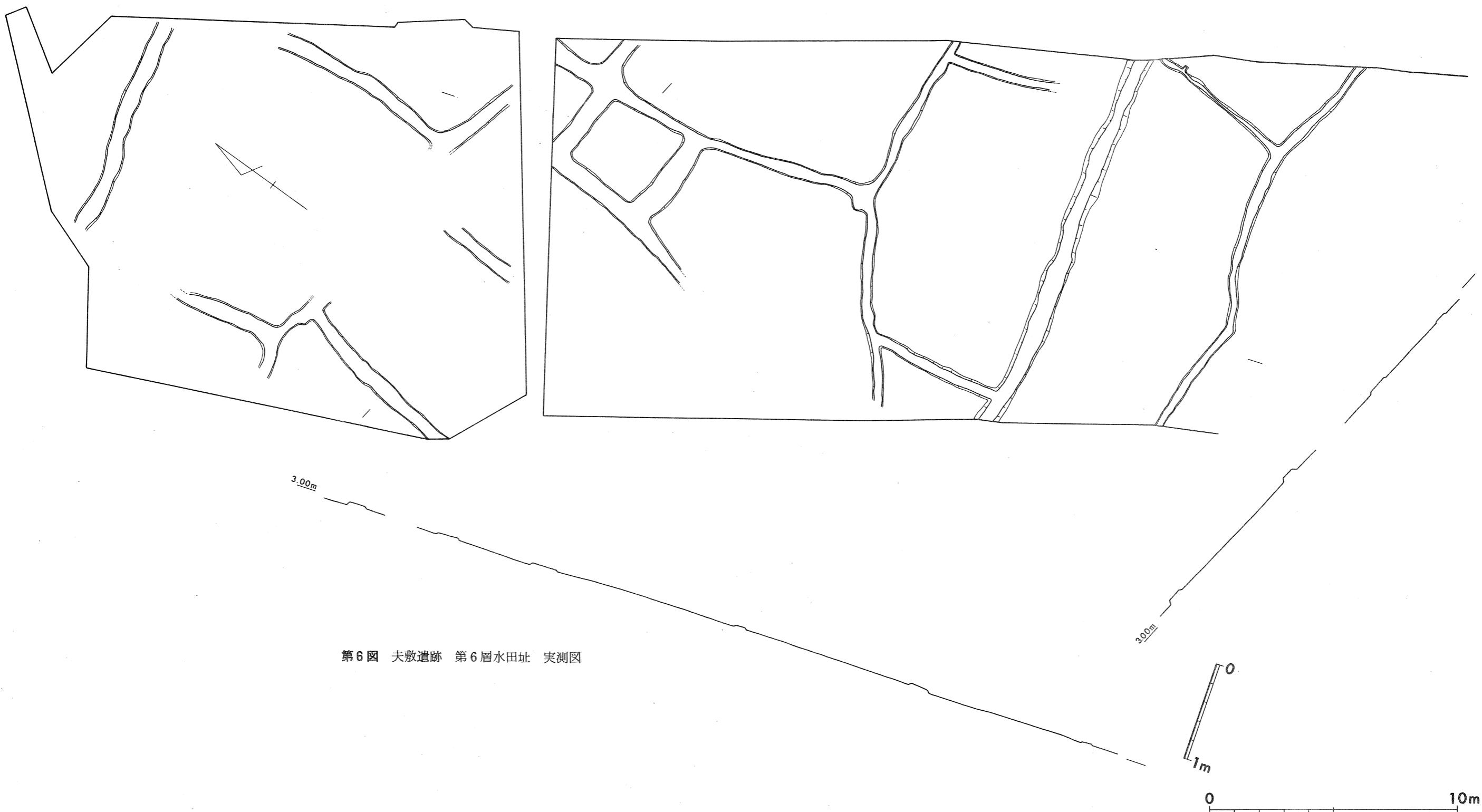
2 註1に同じ、第III期に相当すると思われる。

3 註1に同じ、坪井清足、町田章「奈良時代の遺物」『出雲国府跡発掘調査概報』松江市教育委員会、山本清氏の編年で第IV期、7は国府の編年で、第I型式に相当すると思われる。

4 東森市良他「弥生式土器集成」『八雲立つ風土記の丘研究紀要I』昭和52年

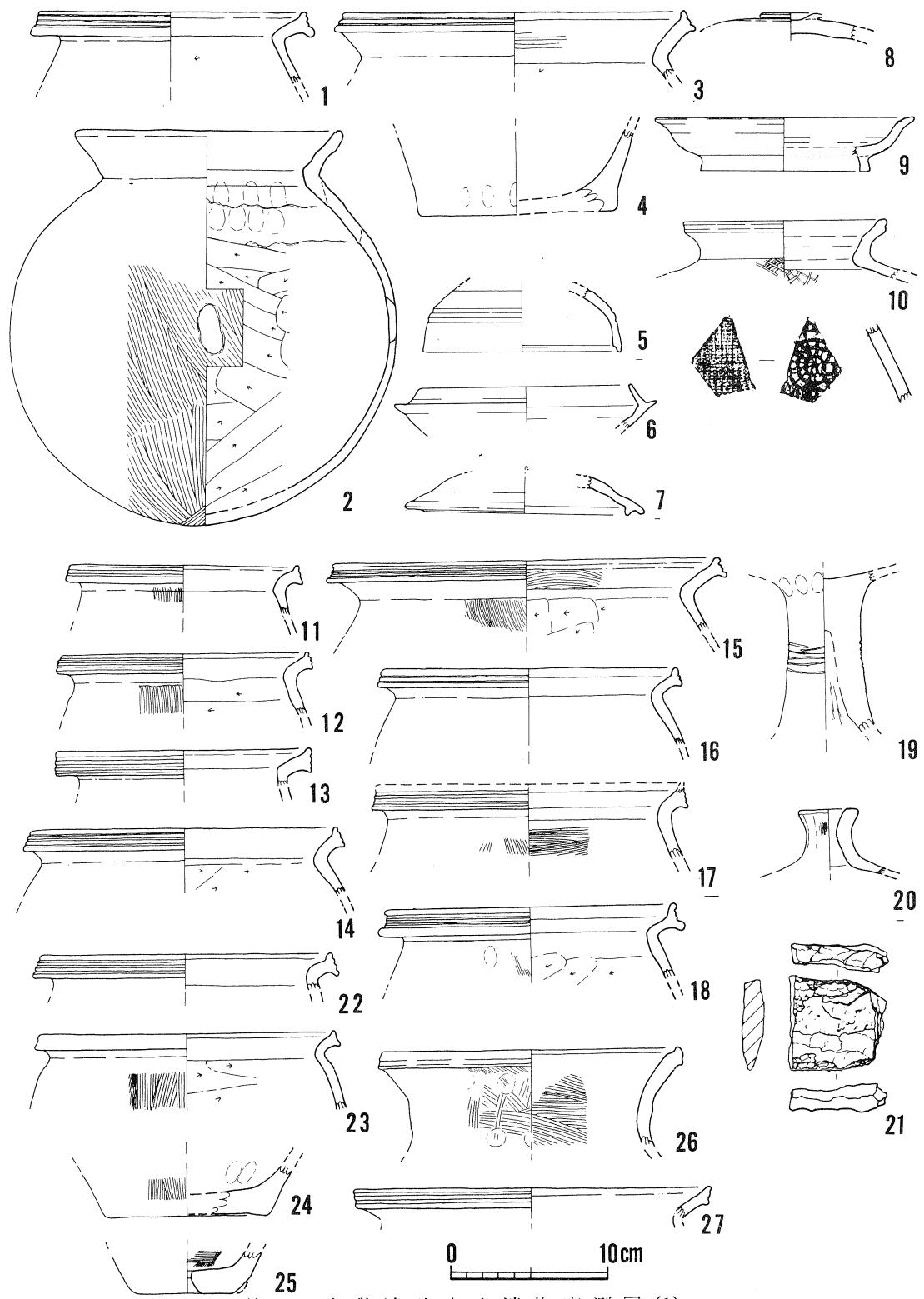
5 島根県教育委員会『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』昭和55年

夫敷遺跡

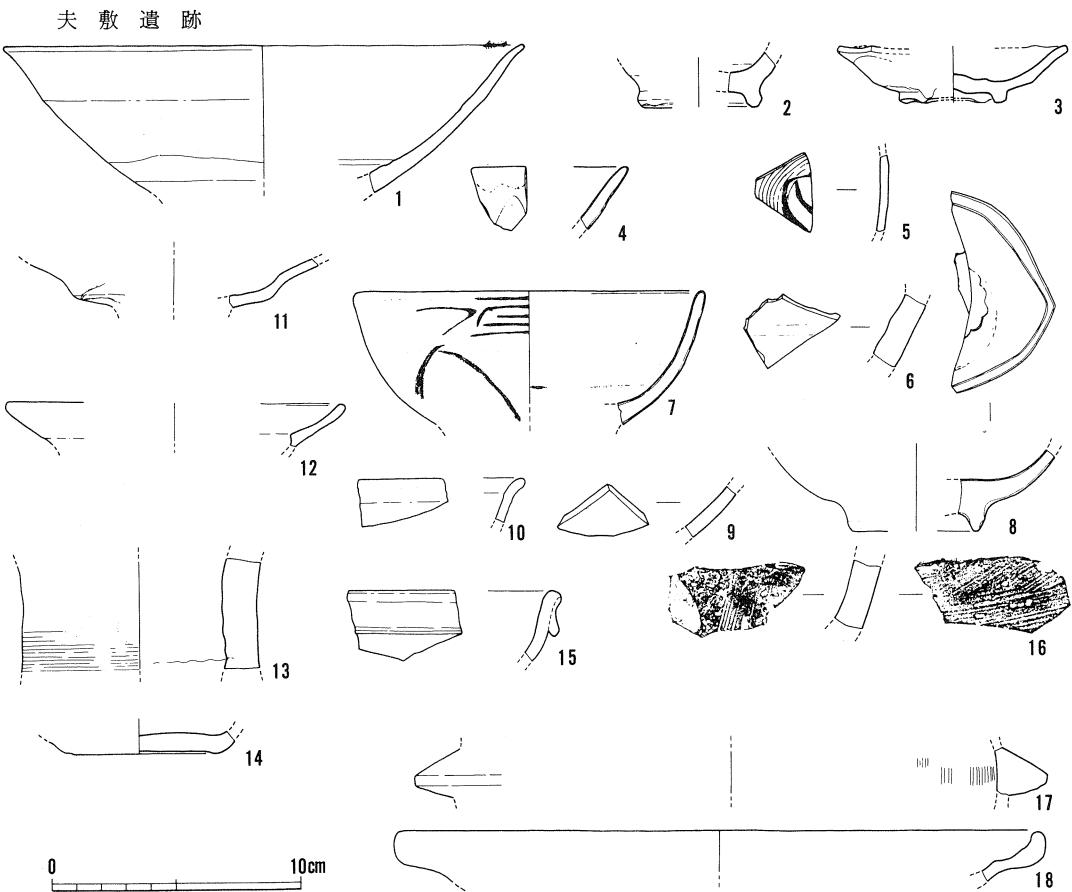


第6図 夫敷遺跡 第6層水田址 実測図

夫敷遺跡



第7図 夫敷遺跡出土遺物実測図(1)



第8図 夫敷遺跡出土遺物実測図(2)

5 小 結

今回の調査は、畦畔を部分的に検出したのみで、水田の一部を調査したにすぎない。検出した範囲は、幅15m、長さ70mにわたっており、南方へ行くにしたがって第5層の粘土混りの砂層は消滅している。水田の遺構は旧河道南側の微高地に沿って検出されており、さらに東西へ広がると思われる。水田址の時期は、第4層中より弥生時代後期前半の土器が出土しており、これに近いと思われる。残念ながら第6層中からは、土器の小片しか出土しておらず時期を断定するまでには到らなかつた。しかし、両者の間には薄い粘土混入砂層があり、畦畔も若干ずれるのみで、時期的な隔たりは少ないと思われる。今回の調査では畦畔のみを検出しておらず、給排水施設等の解明には到っていない。畦畔の残存状況も悪く、検出は困難ではあったが、今後水田に必要であった施設をいかに検出していくか考慮すべき点を残した。また木製農耕具、石庖丁といった遺物は出土なかったが、畦畔の検出やプラント・オパール、水田雑草等の同定により水田耕作が行なわれたことは確実であり、この遺跡が、今後農耕文化を考えるうえにかかせない一資料になると思われる。

(広江 耕史)

(参考文献) 工楽善通「西日本の水田遺構」考古学研究29巻2号 昭和57年10月

稻田孝司ほか「古代水田遺構の発掘調査」ほか、月刊文化財 昭和53年10月

藤原宏志「夫敷遺跡におけるプラント・オパール分析」本書(III)島根県教育委員会 昭和56年3月

III 布田遺跡

—松江市竹矢町—

1 調査の経過	21
2 遺跡の概要	23
3 遺構と遺物	30
4 小結	162

挿 図 目 次

第 1 図	調査区設定図	25
第 2 図	II・III区弥生～古墳時代遺構配置図	27
第 3 図	III区掘立柱建物柱穴群	29
第 4 図	III区 S D06出土遺物（1）	30
第 5 図	III区 S D06出土遺物（2）	30
第 6 図	III区 S D06実測図	30
第 7 図	III区 S D08～10実測図	31
第 8 図	III区 S D08出土遺物（1）	32
第 9 図	III区 S D08出土遺物（2）	32
第 10 図	III区 S D08出土遺物（3）	32
第 11 図	III区 S D09出土遺物（1）	32
第 12 図	III区 S D09出土遺物（2）	33
第 13 図	III区 S D09出土遺物（3）	33
第 14 図	III区 S D10出土遺物（1）	37
第 15 図	III区 S D10出土遺物（2）	38
第 16 図	III区 S D10出土遺物（3）	39
第 17 図	III区 S D10出土遺物（4）	40
第 18 図	III区 S D10出土遺物（5）	41
第 19 図	III区 S D10出土遺物（6）	42
第 20 図	III区 S D10出土遺物（7）	42
第 21 図	III区 S D10出土遺物（8）	44
第 22 図	III区 S D10出土遺物（9）	45
第 23 図	III区 S D10出土遺物（10）	46
第 24 図	III区 S D10出土遺物（11）	47
第 25 図	III区 S D10出土遺物（12）	49
第 26 図	III区 S D10出土遺物（13）	50
第 27 図	III区 S D12土層断面図	52
第 28 図	III区 S D12上層遺物出土状態	53
第 29 図	III区 S D0.7・12実測図	54
第 30 図	III区 S D12上層出土遺物（1）	56
第 31 図	III区 S D12上層出土遺物（2）	57
第 32 図	III区 S D12下層出土遺物（1）	58
第 33 図	III区 S D12下層出土遺物（2）	59

第 34 図	III区 S D12下層出土遺物（3）	60
第 35 図	III区 S D12下層出土遺物（4）	61
第 36 図	高環形土器成形模式図	61
第 37 図	III区 S D12下層出土遺物（5）	62
第 38 図	III区 S I 01～03実測図	65
第 39 図	III区 S I 04およびS K02・06・07実測図	66
第 40 図	III区 S I 04出土遺物	66
第 41 図	III区 S K01実測図	67
第 42 図	III区 S K01出土遺物	67
第 43 図	III区 S K02出土遺物（1）	67
第 44 図	III区 S K02出土遺物（2）	68
第 45 図	III区 S K06出土遺物	68
第 46 図	III区 S K09および溝状遺構実測図	68
第 47 図	III区 S K09出土遺物	69
第 48 図	III区 S K11実測図	70
第 49 図	III区 S K12実測図	70
第 50 図	III区 S K12出土遺物	70
第 51 図	III区 S K13・14実測図	70
第 52 図	III区 S K13出土遺物（1）	71
第 53 図	III区 S K13出土遺物（2）	71
第 54 図	III区 拡張部 S K01実測図	71
第 55 図	III区 拡張部 S K01出土遺物（1）	72
第 56 図	III区 拡張部 S K01出土遺物（2）	73
第 57 図	III区 拡張部 S K01出土遺物（3）	74
第 58 図	III区 拡張部 S K02実測図	74
第 59 図	III区 拡張部 S K02出土遺物	74
第 60 図	III区 赤褐色土チップ群出土遺物	75
第 61 図	III区 赤褐色土チップ群実測図	75
第 62 図	III区 灰色砂層出土遺物	76
第 63 図	IVA区 S D01実測図	79
第 64 図	IV区 遺構配置図	77
第 65 図	IVA区 S D01出土遺物（1）	80
第 66 図	IVA区 S D01出土遺物（2）	81
第 67 図	IVA区 S D01出土遺物（3）	81
第 68 図	IVA区 S D01出土遺物（4）	81

第 69 図	IVA区 S D01出土遺物（5）	82
第 70 図	IVA区 S D01出土遺物（6）	83
第 71 図	IVA区 S D01出土遺物（7）	84
第 72 図	IVA区 S D01出土遺物（8）	85
第 73 図	IVA区 S D02出土遺物	85
第 74 図	IVA区 S D02実測図	85
第 75 図	IVA区 S D03実測図	86
第 76 図	IVA区 S D03出土遺物（1）	88
第 77 図	IVA区 S D03出土遺物（2）	89
第 78 図	IVA区 S D03出土遺物（3）	90
第 79 図	IVA区 S D04実測図	90
第 80 図	IVA区 S D04出土遺物（1）	91
第 81 図	IVA区 S D04出土遺物（2）	91
第 82 図	IVA区 S D06出土遺物	91
第 83 図	IVA区 S D07実測図	92
第 84 図	IVA区 S I 01出土遺物（1）	92
第 85 図	IVA区 S I 01・S K37実測図	93
第 86 図	IVA区 S I 01出土遺物（2）	93
第 87 図	IVA区 S K01実測図	94
第 88 図	IVA区 S K01出土遺物	94
第 89 図	IVA区 S K02実測図	94
第 90 図	IVA区 S K02出土遺物	95
第 91 図	IVA区 S K03実測図	95
第 92 図	IVA区 S K03～05出土遺物	96
第 93 図	IVA区 S K04・05実測図	96
第 94 図	IVA区 S K05出土遺物	97
第 95 図	IVA区 S K06・07・18実測図	97
第 96 図	IVA区 S K18出土遺物	97
第 97 図	IVA区 S K09・11実測図	98
第 98 図	IVA区 S K09出土遺物	98
第 99 図	IVA区 S K15実測図	98
第 100 図	IVA区 S K15出土遺物	98
第 101 図	IVA区 S K16実測図	99
第 102 図	IVA区 S K16出土遺物	99
第 103 図	IVA区 S K20実測図	99

第 104 図	IVA区 S K20出土遺物	100
第 105 図	IVA区 S K21実測図	100
第 106 図	IVA区 S K22~25実測図	100
第 107 図	IVA区 S K22~25出土遺物（1）	102
第 108 図	IVA区 S K22~25出土遺物（2）	103
第 109 図	IVA区 S K29実測図	103
第 110 図	IVA区 S K34実測図	103
第 111 図	IVA区 S K29出土遺物	103
第 112 図	IVA区 S K35実測図	104
第 113 図	IVA区 S K29・34・35出土遺物 (1 : SK29, 2・3 : SK34, 4 : SK35)	104
第 114 図	IVA区 S K37出土遺物（1）	104
第 115 図	IVA区 S K37出土遺物（2）	105
第 116 図	IVA区 S K44~47実測図	105
第 117 図	IVA区 S K44~46出土遺物 (1~3 : SK44, 4 : SK45, 5 : SK46)	106
第 118 図	IVA区 S K46出土遺物	106
第 119 図	IVA区 S K45出土遺物	106
第 120 図	IVA区 P 4出土遺物（1）	106
第 121 図	IVA区 P 4出土遺物（2）	107
第 122 図	IVA区 P 4実測図	107
第 123 図	IVA区明褐色砂質出土遺物（1）	107
第 124 図	IVA区明褐色砂質出土遺物（2）	107
第 125 図	IVA区明褐色砂質出土遺物（3）	108
第 126 図	第9グリッド出土遺物（1）	108
第 127 図	第9グリッド出土遺物（2）	108
第 128 図	第9グリッド出土遺物（3）	109
第 129 図	IVB区 S D01実測図	111
第 130 図	IVB区 S D01出土遺物（1）	111
第 131 図	IVB区 S D01出土遺物（2）	112
第 132 図	IVB区 S D02・04実測図	112
第 133 図	IVB区 S D02出土遺物	112
第 134 図	IVB区 S D02・04出土遺物（1~6 : SD02, 7~9 : SD04）	113
第 135 図	IVB区 S I 01出土遺物（1）	113
第 136 図	IVB区 S I 01実測図	113

第 137 図	IV B 区 S I 01 出土遺物（2）	114
第 138 図	IV B 区 S K01・05 実測図	114
第 139 図	IV B 区 S K01・05 出土遺物	115
第 140 図	IV B 区 S K02 実測図	115
第 141 図	IV B 区 S K03・04 実測図	115
第 142 図	IV B 区 S K02～04 出土遺物	116
第 143 図	IV B 区 S K06 実測図	116
第 144 図	IV B 区 S K04 出土遺物	116
第 145 図	IV B 区 S K07・14 実測図	117
第 146 図	IV B 区 S K08・09 実測図	117
第 147 図	IV B 区 S K10 実測図	118
第 148 図	IV B 区 S K07・08・10・14 出土遺物	118
第 149 図	IV B 区 S K11・12 実測図	118
第 150 図	IV B 区 S K11・12 出土遺物	119
第 151 図	IV B 区 S K11 出土遺物	119
第 152 図	IV B 区 S K13 実測図	119
第 153 図	IV B 区 杭列実測図	121
第 154 図	IV B 区 遺物包含層上層出土土器（1）	123
第 155 図	IV B 区 遺物包含層上層出土土器（2）	124
第 156 図	IV B 区 遺物包含層下層出土土器（1）	128
第 157 図	IV B 区 遺物包含層下層出土土器（2）	129
第 158 図	IV B 区 遺物包含層下層出土土器（3）	130
第 159 図	IV B 区 遺物包含層下層出土土器（4）	131
第 160 図	IV B 区 遺物包含層下層出土土器（5）	132
第 161 図	IV B 区 遺物包含層下層出土土器（6）	133
第 162 図	IV B 区 遺物包含層上層出土石器（1）	137
第 163 図	IV B 区 遺物包含層上層出土石器（2）	138
第 164 図	IV B 区 遺物包含層下層出土石器（1）	139
第 165 図	IV B 区 遺物包含層下層出土石器（2）	140
第 166 図	IV B 区 遺物包含層上層出土管玉未成品（1）	141
第 167 図	IV B 区 遺物包含層上層出土管玉未成品（2）	142
第 168 図	IV B 区 遺物包含層下層出土石製品	143
第 169 図	IV B 区 遺物包含層下層出土土製品	146
第 170 図	IV B 区 遺物包含層下層出土木製品（1）	147
第 171 図	IV B 区 遺物包含層下層出土木製品（2）	148

第 172 図	IV B 区遺物包含層下層出土木製品（3）	149
第 173 図	IV B 区遺物包含層下層出土木製品（4）	150
第 174 図	IV B 区遺物包含層下層出土木製品（5）	151
第 175 図	IV B 区遺物包含層下層出土木製品（6）	152
第 176 図	IV B 区遺物包含層下層出土木製品（7）	153
第 177 図	採集の石器（1）	156
第 178 図	採集の石器（2）	157
第 179 図	採集の須恵器	158
第 180 図	採集の陶磁器	159
第 181 図	採集の土製品	160
第 182 図	採集遺物	161

1 調査の経過

調査区の設定

布田遺跡は松江市竹矢町字布田を中心として広範囲にわたる遺跡である。松江バイパスは遺跡の北東部を走るようになり、字名で忠孝、大澤、熊ノ内、向原、白井手の5地区にわたっている。そのうち今回の暫定工事予定地内で調査を実施したのは、白井手を除く4地区である。付近は以前に耕地整理を受けて、農道・水路がほぼ東西南北に走っており、調査区もこれに従うこととした。すなわち、南北に走る道路および水路によってI～III区を分け、III区～V区は東西線の道路によって区分した。各区の中でさらに水田の畦畔によってA・B・Cと細別した。（第1図）

また、遺構の実測や遺物の取上げの便宜を計るため、バイパス予定地内にグリッドを設定した。調査範囲が南北に細長くわたるところから、基準点をIII区南端西側の幅杭に置き、バイパスに沿って10mの間隔のグリッドを設定した。そして基準線をCとし、北側にN、南側にSの記号を付して、10m毎にN1、N2…、S1、S2…と呼称した。東西方向については、調査が暫定工事部分に限られるところから、調査区境までをグリッドの範囲とした。

なお、調査区の地番は次のとおりである。

小字名 地番

忠孝 847・850

大澤 972・984・985・988～991・997・998

熊ノ内 1260～1263・1269

向原 1706・1707・1711

調査の経過

遺構の集中度の遺物の散布状態を確かめるため、昭和55年7月末から8月初めにかけて調査区全般にわたって7カ所のトレンチをあけ、その結果III～IV区に遺構、遺物が集中することが判明した。これに従って9月11日から17日にかけて重機による耕作土除去を行い、同年10月3日からIII区の発掘調査を開始し、昭和56年3月30日に終了した。なお、発掘中に建設省から、バイパスの反対側（東側）側溝の施設工事を行うとの連絡があり、掘削時に立会を行った。

昭和55年

7月23日 試掘第5～第7グリッドを設定。

7月25日 第8～第11グリッドを設定。ただちに発掘を開始する。

9月11日 中竹矢側からルート地内全面にわたって耕作土除去を開始する。

布田遺跡

- 10月3日 才の峰遺跡からベルコン移動。III区から発掘調査開始。
- 10月8日 II区の耕作土除去を開始する。
- 10月16日 II C区で平行して走る溝を3本検出。
- 10月29日 III区で掘立柱建物跡を検出。
- 11月1日 III区で東西に走る溝を検出。
- 11月11日 II C区試掘第7グリッド付近表土下面を精査するが、遺構全くなし。
- 11月14日 掘立柱建物跡をS B01・02とし、実測を行う。S D06・07を検出。
- 11月20日 III区 S D11・12を検出。その他に土壙、土器群、柱穴群が多数現われる。
- 12月1日 II A・II B区の精査と遺構の検出を開始する。
- 12月11日 I区南端部精査。遺構検出できず。
- 12月16日 III区 S D08~10の発掘開始。土器などの遺物が多数出土する。
- 12月19日 II B区平板測量用の杭打ちを行う。
- 12月22日 II B区平板測量。III区土壙・土器群の写真撮影。IV B区調査開始。
- 12月27日 御用納め。

昭和56年

- 1月7日 現場再開。調査区内の氷剝ぎと水抜き。
- 1月8日 II A区平板測量。IV B区土壙、溝状遺構検出。調査区周縁に排水兼土層観察用トレーニングチを入れる。
- 1月23日 III区 S D11発掘開始。
- 1月28日 IV A区耕作土を重機で掘削する。（ただし、道路からアームの届く範囲）
- 2月5日 III区 S D11完掘。写真撮影。IV A区にベルコンを移動し、発掘開始。
- 2月10日 III区 S D10の実測と遺物取上げ開始。S D12を掘り始める。
- 2月19日 IV B区でさらに遺構の精査。南半にトレーニングチを設定して掘り下げる。
- 3月4日 III区 S D12完掘、写真撮影ののち、実測と遺物の取り上げを行う。
- 3月6日 IV B区トレーニングチ内で多数の木片・土器類が出土しはじめる。
- 3月11日 IV A区耕作土下面を精査。多数の土壙、溝、柱穴群を検出。
- 3月16日 III区東南部を一部拡張する。
- 3月23日 III区拡張部 S K01から古墳時代中期の高環類多数とともに勾玉出土。III区 S D09・10の実測と遺物の取り上げ終了。IV B区南半の落ち込み部分で円形の杭列検出。
- 3月25日 IV A区 S D01・S K22~25から管玉未成品が集中して出土。
- 3月26日 III区東および南壁の土層図作成。III区終了する。
- 3月27日 IV A区 S K44から弥生前期末の壺・甕が完形でセットで出土。
- 3月30日 IV A区東壁の土層図作成。すべての遺物を取り上げ、遺跡全景写真を撮り、調査終了。

2 遺跡の概要

はじめに

布田遺跡は松江市竹矢町字布田を中心としてその周辺に所在し、意宇平野の中央部に近い水田中に立地している。以前から水田耕作中に土器や石器が採集されていたようであるが、初めて弥生遺跡として紹介されたのは、昭和43年10月近藤正氏によってである。^{註1}紹介された資料は、石鎌、磨製石斧、弥生前期末の土器片であった。その後、昭和49年3月に県教委によって国道9号線バイパス計画路線内で試掘調査が行われており、この時にも須恵器、土師器片とともに若干の弥生土器と石斧が発見されている。弥生土器は前期末と中期後半のものである。

地理的環境

布田遺跡のある意宇平野は、全長27kmの意宇川の沖積作用によって形成された平野である。意宇平野の表層の地質をみると、沖積世初期の中海層の上に、意宇川の扇状地礫層が広がったのが、B.P 5880±290年 (Gak 3364) までである。その後、意宇川の自然堤防堆積物で下部砂礫層が形成される。その年代は、これに含まれる泥炭層の絶対年代が、B.P 2860±80年 (Gak 3363) を示すところから、縄文晚期頃まで続いたと考えられる。この上部には下部粘土層が広がる。平野の奥部では扇状地を覆い、中央部では三角洲を形成する。三角洲の西半は、青灰色のグライ化ないし黒青灰色粘土からなり、東半は粘性の強い黒色重粘土からなっている。この下部粘土層を切るようにして、意宇川の3本の旧河道が並んでいる。最も古い旧河道は平野の北部を流れ、次に中央部に移り、最も新しい旧河道は現在の意宇川に沿うように流れていたことがわかっている。この旧河道にさらに中部砂礫層、上部砂礫層が堆積し、その上を上部粘土層が覆って、しかも中海沿岸^{註2}ではこの上部粘土層が三角洲を形成することによって現在の意宇平野が成り立っているのである。

このような平野の形成過程の中で、出雲国庁や、布田遺跡など、意宇平野に点在する遺跡の多くは、上記下部粘土層上に立地している。特に布田遺跡は、平野の北部と中央部を流れる旧河道に挟まれた、古い三角洲上に立地しているのである。したがって、布田遺跡は現在でもこの旧河道に挟まれた微高地に立地しており、遺跡の範囲も、旧河道の流れに沿って東西に長く広がる遺跡である。

今回の調査範囲は布田遺跡の東部を斜めに切るようになり、調査区の南半 (IV区～V区)、字名で向原地区にあたる部分は特に、意宇平野の下部粘土層から旧河道にうつる漸移部分に相当するといえる。布田遺跡は今回の調査で検出した遺構などから、弥生時代以降の集落跡と考えられ、水利もよいところから、周辺の低湿地で水田などを営んでいたと思われる。気候的には北と南を山で囲まれ、春から秋にかけては穏やかであるが、平野中央に位置するため、大雨時には何度も洪水にさらされ、また冬にはまともに北西の風を受ける厳しい条件下に置かれた遺跡といえる。

土層と遺構

布田遺跡の立地する水田は、現在標高3mあまりの微高地である。昭和30年の竹矢地区の区画整備事業で現在のような水田区画が整えられた。現在の耕作土は20cmから25cm程度でその下の土層はほぼ次のようになる。II・III区では、上から赤褐色土（第II層）、黄褐色粘土（第III層）、黒色粘土（第IV層）、暗灰色粘土（第V層）、青灰色砂層（第VI層）、白色粘土（第VII層）の順で堆積が認められる。第III～V層は同質の粘土層で、約50cmの厚みがあり、第III・V層上面にそれぞれ砂がかんんでいる。第V層は堆積が薄く5cm程度である。第VI層も50cm程度の厚さで堆積している。これがIII区南端からIV区になると、第II層の赤褐色土が消滅し、第III層以下の粘土層が除々に砂質土に変化していく過程がみとめられる。また新たに第V層と第VI層、第VI層と第VII層の間にそれぞれ青灰色粘土層、灰色砂層が広がるようになる。総じて砂層の堆積が著しく厚くなり、灰色砂層には、小礫を含むようになる。これは先に述べたように調査区が意宇川の旧河道にさしかかるためと考えられる。

遺構は、II・III区では赤褐色土、IV区ではIII層が砂質化した明褐色砂質土の上面ですべて検出される。しかし、検出された遺構のほとんどが掘り込みが浅く、区画整備以前に何らかの原因で遺構面がほぼ水平に削り取られた可能性が強い。なお、遺構が認められたのはIII～IV区にわたってであり、II B区以北では、包含層だけであった。またV区についても期間の関係で遺物の採集に留まった。

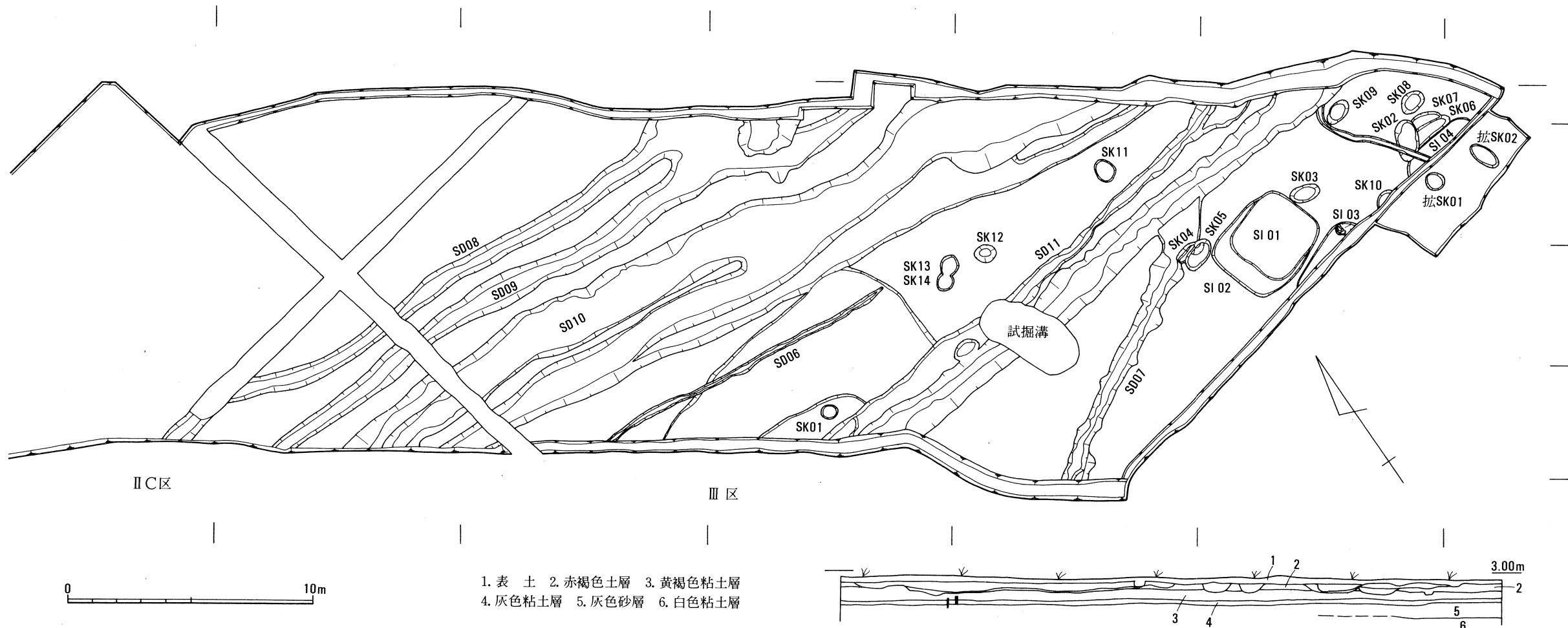
検出された遺構は、弥生時代前期から中期にかけてのものと、古墳時代中期、さらにそれ以降の時代のものがほとんどである。弥生・古墳時代の遺構には土壙と溝状遺構があり、竪穴住居跡状のものも認められる。古墳時代以後は、掘立柱建物跡しか検出されなかった。詳細を次章に述べるが、遺構は調査区の関係から、特に区毎に遺構番号を付けており、本報告もこれに従って調査区毎に記述する。なお、遺構番号は現地調査で使用したものをそのまま用い、のちに欠番となった番号もあることを最初に断つておく。

布田遺跡



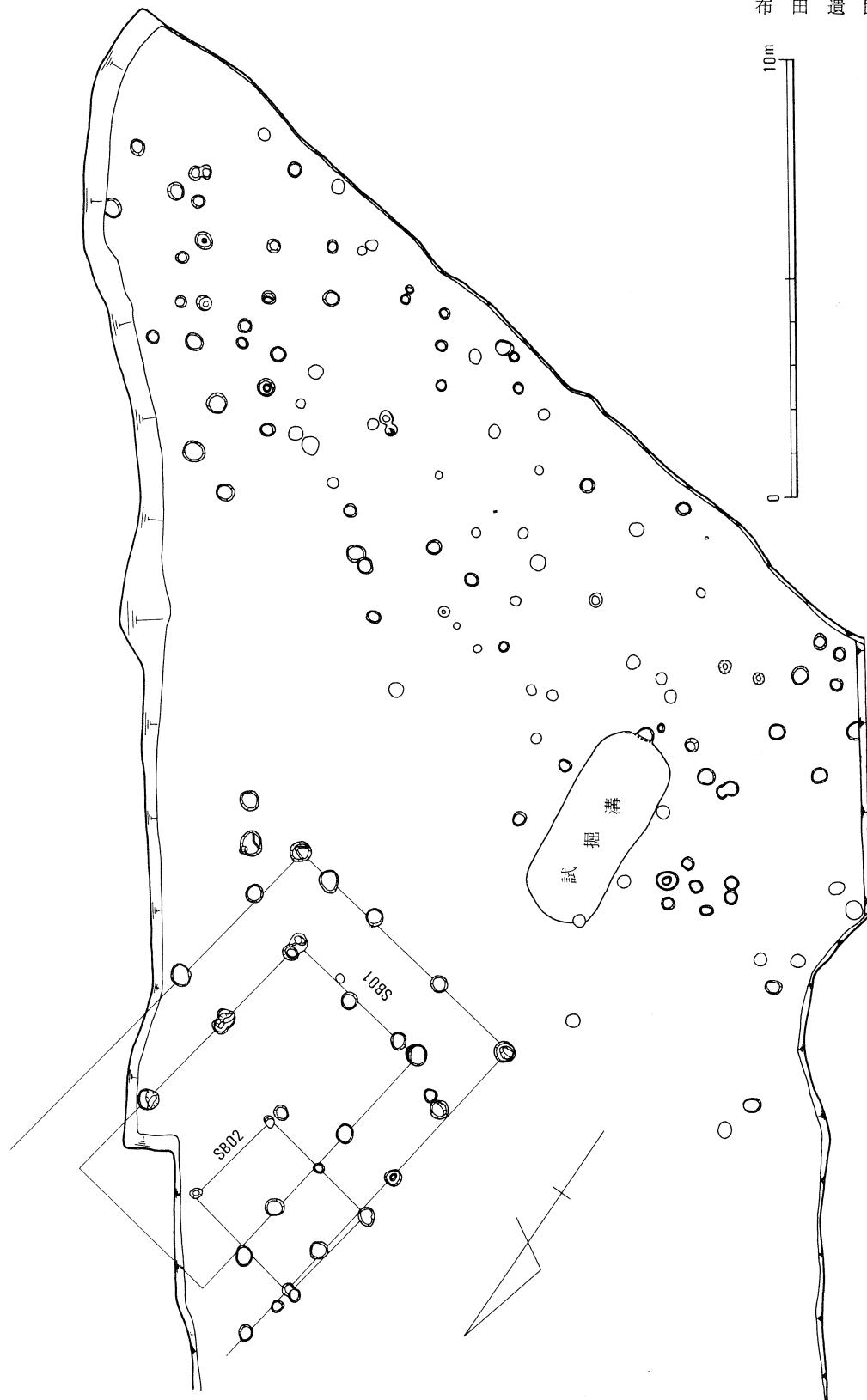
第1図 布田遺跡調査区設定図

布田遺跡



第2図 布田遺跡II、III区弥生・古墳時代遺構配置図 1/2000

布田遺跡



第3図 布田遺跡III区掘立柱建物柱穴群 1/160

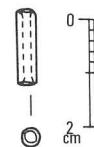
3 遺構と遺物

II・III区の遺構と遺物

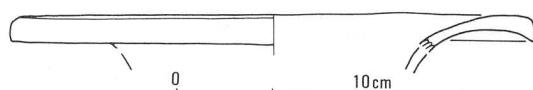
(1) 歴史時代の遺構(第3図)

III区南半で、弥生時代の溝や古墳時代の遺構の埋土の上から掘り込まれた柱穴群があり掘立柱建物跡と考えられる。S D10付近とS D12との南側のふたつのグループに分かれている。S D10付近の掘立柱建物跡は、9号線バイパス予定地内発掘調査報告書のIIIすでに報告したように、S B01とS B02の二棟が検出された。S B01は、長軸方位がほぼ真北向き、北端が調査区外に伸びているため、建物の規模は明らかでないが、2間×3間程度であろうか。梁間2間で4面に廂が付くと思われる。身舎の柱間寸法は桁行240cm(8尺)、梁間約178cm(約6尺)である。掘形は円形で深さが約30cmしかなく、P4、P8、P10にはそれぞれ板を敷いている。廂の柱間寸法は桁行、梁間とも約240cm(8尺)である。身舎と廂との間は約148cm(5尺)で、桁の柱穴の位置は身舎の柱穴に対応しており、南端の柱間寸法が他より短くなっている。一方梁間は3間で、身舎に対応せず、等間隔に並んでいる。S B02はS B01に重なるような状態で検出された。長軸の方位が東西に向いた1間×2間の建物である。柱間寸法は桁行160cm(約5.3尺)、梁間244cm(約8尺)で、かなり小さい。掘形円形で直径22~38cm程度で深さもさほどない。P1内に敷石が認められる。石は自然石で上面が平坦になっている。S B01とS B02は、軸線が東西または南北に向いており、両者の構造はさほどはなれていない時期と思われる。出土遺物はない。

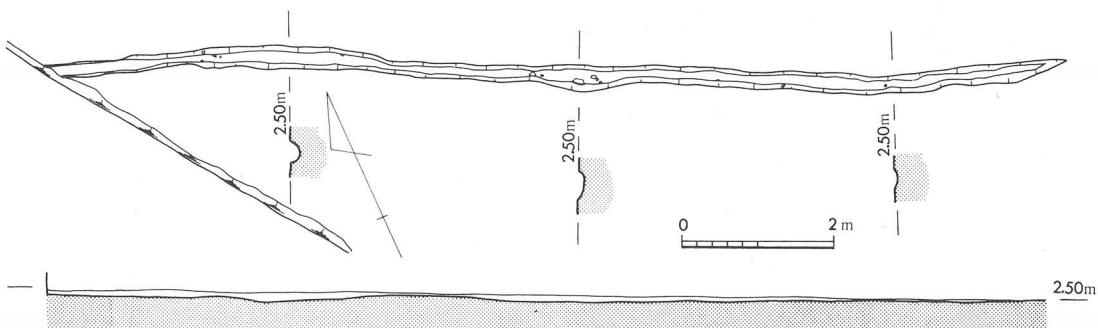
S D12の南側で検出された柱穴群は、最終的に100個あまりになったが、掘り込みが浅く上部がかなり削られた可能性が強い。S D12上層(古墳時代)の上部から掘り込まれて



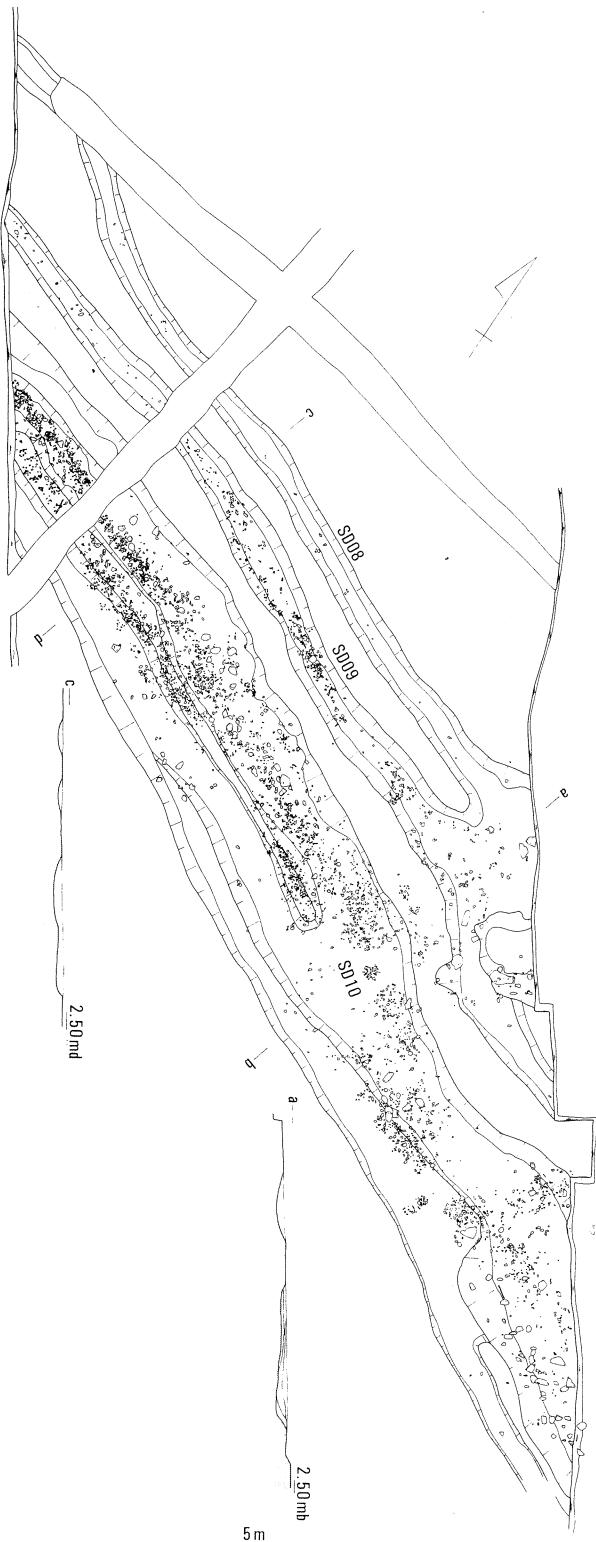
第4図
布田遺跡III区
S D06出土遺物(1) 1/10



第5図 布田遺跡III区 S D06出土遺物(2) 1/4



第6図 布田遺跡III区 S D06実測図 1/40



第7図 布田遺跡III区 S D08~10実測図 1/200

いるところから、それよりも新しい時代のものである。建物の規模が2間×3間、あるいは1間×4間程度のものが何棟か建つことが推定されるが、その中には、弥生～古墳時代に属する柱穴が存在する可能性も強く現段階では断定できない。

S B01、S B02は弥生時代中期を大きく下る時期のもので、その他の柱穴群も多くがこれとほぼ同時期のものと考えられる。

(2) 弥生・古墳時代の遺構と遺物

II C区南端からIII区にかけて弥生時代から古墳時代の遺構を多数検出した。遺構・遺物は水田耕作土を除去した段階ですぐに現われた。弥生時代の遺構には溝状遺構5、土壙15、竪穴住居跡状遺構4があり、古墳時代のものには、溝状遺構1と土壙1がある。溝状遺構はいずれも調査区内を東西に走り、その他の遺構はほとんどがIII区東南部に集中する。これらの

布田遺跡

遺構の他に、試掘第8グリッド西側で、黒曜石やメノウのチップが集中する所がある。

(a) 溝状遺構

SD 06 (第6図)

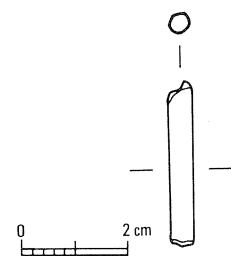
S D10とS D12の間に東西に細長く伸びた溝である。幅24~28cm、深さ9~14cmで断面ほぼ半円形を呈する。III区中央部以東では検出が不可能であった。土器と管玉が出土している。

土器 (第5図、図版18—1) 壺形土器の口縁部片である。頸部から大きく朝顔状に開く口縁で、復元口径27.2cmである。調整不明。

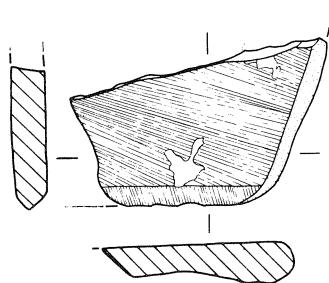
管玉 (第4図、図版18—7) S D06の東端で出土。全長1.4cm、直徑0.4cm、重さ0.4gの完形品である。碧玉製で緑灰色を呈し、全面縦方向に丁寧な研磨が施されている。端部の磨耗が著しい。

SD08 (第7図、図版13—1)

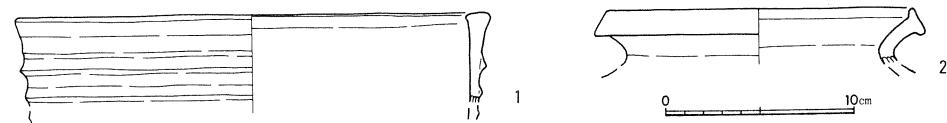
3本並んで走る溝の一番北の溝で、II C区ではやや湾曲が激しい。



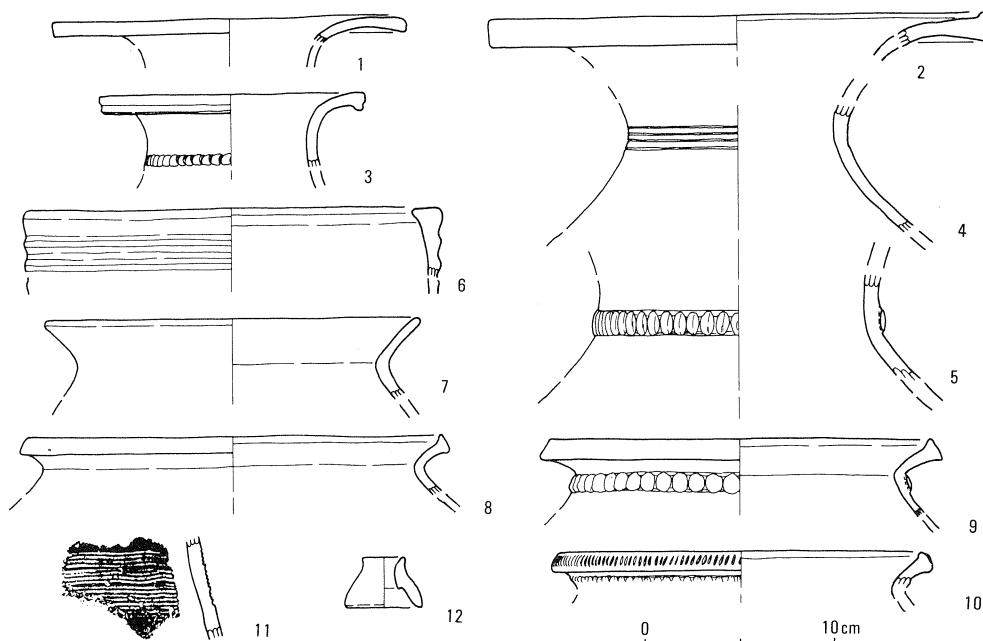
第8図 布田遺跡III区S
D08出土遺物(1) 1/10



第9図 布田遺跡III区S
D08出土遺物(2) 1/3

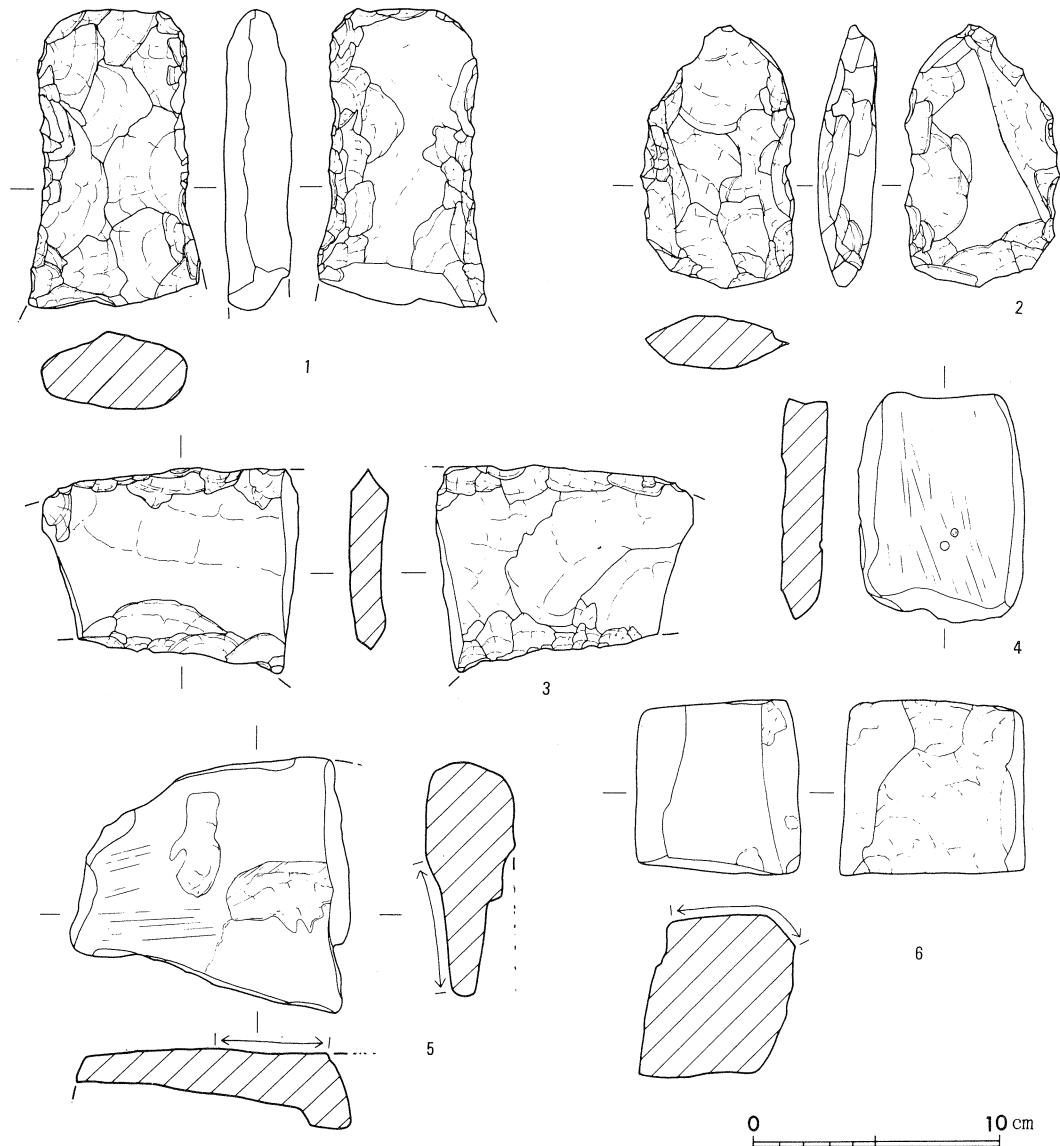


第10図 布田遺跡III区S D 08 出土遺物(3) 1/4

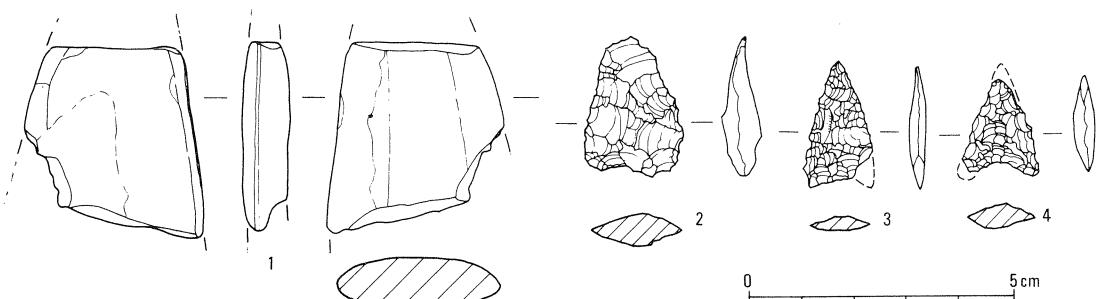


第11図 布田遺跡III区S D 09 出土遺物(1) 1/4

布田遺跡



第12図 布田遺跡 III区 S D 09 出土遺物(2) 1/3



第13図 布田遺跡 III区 S D 09 出土遺物(3) 7/10

布田遺跡

第1表 布田遺跡III区 S D09石器計測表

挿図番号	遺物名	全長 (現存長)cm	最大幅 cm	重量 (現重量)g	石質	備考	写真番号
12-1	打製石斧	(11.6)	6.9	(287.3)	流紋岩	刃部欠損	18-26
2	"	10.3	6.2	166.2	"	未成品	25
3	石鎌	(8.1)	10.2		"	端部欠損	27
4	砥石	9.0	6.8		凝灰岩質流紋岩	片面使用	
5	"	(11.2)	10.1		"	"	
6	"	6.9	6.5		砂岩	"	
13-1	石劍	(3.5)	3.4		流紋岩質凝灰岩	破片	18-29
2	石鏸	2.6	1.87	2.4	黒曜石	平基式(わずかに凹)	6
3	"	(2.32)	1.28	(0.8)	"	0.2(脚長)	5
4	"	(1.8)	1.4	(0.7)	"	0.3(〃)	4

幅60~80cm、深さ約10cmで東端がS D09と合流しており、この部分だけやや深くなっている。

土器（第10図、図版18-23）図示できるものは2点であった。1は口縁直口する甕形土器である。復元口径22.6cmで、口縁下に断面三角形の貼付突帶を有する。口縁端部は内面やや肥厚する。中期中葉。2は上層出土の甕形土器で、くの字形の口縁をなし、端部は上下に肥厚する。中期中葉～後葉と思われる。

管玉未成品（第8図、図版18-8）穿孔前の円柱状の未成品である。緑色凝灰岩製で風化が著しく明緑灰色を呈する。全長3.18cm、直径0.5cmで断面ほぼ円形であるが、一部に平坦面が残っている。両端部わずかに欠損している。磨耗著しい。

石器（第9図、図版18-28）砥石が1点出土している。流紋岩質凝灰岩の扁平な自然石を利用する。砥ぎ面は一面で平滑であるが、周縁の一部が刃部のように砥ぎ出された感があり、あるいは石庖丁のような使い方をしたかもしれない。

S D09（第7図、図版13-1）

S D08とS D10の間の溝である。幅80~120cmで、深さ10~15cm、東に向って徐々に深くなる。二層の堆積が認められ、上層には灰褐色砂質土、下層には灰色粘土が堆積する。遺物は両層から出土し、S D08よりも多い。

土器（第11図、図版18-9~24）壺形・甕形土器のほか、異形土器が1点出土する。

壺形土器（1~5）1・2は朝顔状に大きく開く口縁で、2は端部を肥厚させる。3は、ゆるやかにたちあがる頸部から、口縁を外側に巻き込むように外反させ、端部はやや肥厚する。頸部に低い刻目突帶を持つ。4・5は頸から肩部にかけての破片で、4は櫛描平行沈線文、5は押圧のある貼付突帶がめぐる。

甕形土器（6~11）1は直口する口縁を持ち、端部を肥厚させる。口縁下に断面三角形の貼付突帶がある。7は、くの字状に開く口縁で、8は端部上端をつまみあげている。9・10は口縁端にかなり厚みがあり、頸部には指頭圧痕を有する貼付突帶がある。口縁端には刻目などもはいる。肩部には櫛描平行沈線文¹⁰や刺突文がはいると思われる。

異形土器（12）器高2.6cmで筒状に内部空洞になっている。低脚の破片のように見えるが判然

としない。用途不明。

石器（第12・13図、図版18—25～27・29） 打製石斧、石鎌、砥石、石鏃、石劍のほか、チップなどが出土する。

打製石斧（第12図1・2） 欠損品と未成品が出土する。1は両側刃がやや内湾ぎみで、やや細かな二次調整を加える。2は小形品で細部調整がまだ充分に行なわれておらず、成形も充分でない。

石鎌（同3） 板状に剥離した流紋岩に二次調整を加え、刃部と背部をつくる。基部と先端欠損。研磨は施されていない。

砥石（同4～6） いずれも流紋岩の自然石を利用する。6は調整を加えて成形している。5は中央が凹んでおり、むしろ石皿状のものかもしれない。

石鏃（第13図2～4） いずれも黒曜石製である。凹基式でわたりが浅く弧状にはいる。2は厚みがあり、調整も粗い。先端部に主要剥離面が残る。

石劍（同1） 現存長3.5cmの小片で明確でないが石劍と思われる。流紋岩質凝灰岩製で、一面は平坦、他面はやや丸みを帯びてかすかながら稜線が走る。両側縁は丸くなっている。

SD10（第7図、図版13—1・2）

II C区南端からIII区中央を東西に走る。南にわずかに弧状になるようである。溝の幅は350～440cmで、最も狭いところで320cmである。東端は大きく広がっており、幅500cm程度になると思われる。溝西半では中央部分に、7～15cm程度の低い高まりがあり、東半では溝の南側が、二段に落ち込んでいる。溝は西が浅く、約20cm、東に向って徐々に深くなり、東端では約50cmになる。この東端部では掘り込みの南側から、石列が伸びている。石列は2列あり、西側のものは鍵状に西方に屈折している。どちらも30cm以上の石を1列に配し、重ねたり、2列にすることはない。周囲にその他にも石が散在するが、まとまりがないので、あるいは組み込んだものが崩れ落ちたものかもしれない。溝に対し斜めに配列されているが、一応堰のようなものと考えられる。SD10には2層の堆積が認められ、上層は灰褐色粘質土、下層は灰色粘質土であるが、下層下部には暗赤色粘土が混在するところがある。また、上層の一部には粗い砂がかむところがある。SD10全体から礫などとともに多数の遺物が出土した。特に密集するのは中央から西半にかけてである。

須恵器（第14図）

SD10上層から少量出土している。図示できたのは2点である。1は壊身片で復元口縁径11.8cmである。立ち上がりがやや内傾し、やや長い。山陰須恵器編年でIII期頃と思われる。2は皿片で底部しか残っていない。底面は回転糸切りで未調整である。奈良時代以降のものである。

弥生土器（第15～19図、図版18—30～53、19—1～45・50・51）

弥生土器には壺形土器、甕形土器、高壺形土器、蓋形土器、ミニチュア土器がある。すべて破片で、その量はコンテナで約15箱にも達する。このうち図示できるのは300点あまりで、ここに報告

布田遺跡

するものはその一部である。

壺形土器（第15・16図、第17図1～3）

全形を窺えるものはないが、口縁部の形態や文様から次のように分けることができる。

第1類（第15図1・5～9） なだらかに内傾する頸部からゆるく外反する口縁部を持つものと短く大きく外反する口縁をもつものがある。前者は口縁端が丸く、後者の端部は平坦になり、角が立つ。口縁下に浅く薄く沈線が回る土器がある。また、頸部に籠描きの平行沈線文をもつものもある。出土数は少ない。

第2類（同2～4） 口縁の外反の度合が大きくなるものである。頸部から口縁端までの厚みがほとんど変わらない。頸部には櫛描きの平行沈線文がはいるものもある。

第3類（同10～16、18～25、第16図1～8、14～18） 口縁部が朝顔状に開き、端部を上下あるいは下方に拡張して文様を施す場合が多い。総じて大形品が多いようである。文様の特徴から次のように細分できる。

a類（第16図8・15・16） 口縁端あるいは内面に全く文様を持たない一群である。出土数は少ない。

b類（第15図10～16、18～25、第16図1・6・14） 口縁端あるいは内面に多種多様な文様を施す。出土土器中最も多い一群である。文様は基本的に籠状あるいは櫛状工具を用いて、口縁端部の幅を最大限に生かしながら、斜行短沈線文、羽状文、斜格子目文、鋸歯文などを施している。斜行短沈線文の中には刷毛のようなものを刺突して沈線にみせるものもある。さらにこれらに円形浮文を付加するものもある。また口縁内面に、貼付突帯や指頭圧痕を有する貼付突帯、斜格子目文、羽状文、斜行短沈線文、櫛状工具による刺突列点文、波状文などを加えるものもある。円筒状の頸部には貼付突帯を施す場合が多いと思われる。

c類（第16図2～5・7・18） 口縁端の文様の基本として口縁に平行して沈線あるいは凹線を施す一群である。沈線や凹線に、さらに籠状工具で刻目状の斜行短沈線文を2段ないし3段施したり、口縁に直行する形で粘土帯を貼り付けたりする。円形浮文を付加するものもある。口縁内面は、沈線あるいは凹線を口縁に沿って回らすのみでその他の文様は施されない。

第4類（第15図17、第16図20～22、第17図1・2） 頸部と胴部の屈曲がやや強く、頸部はやや直線的に外反する。口縁部付近でさらに屈曲し、口縁が水平に近く大きく開く土器群である。口縁端部は上下にわずかに肥厚するものと、下方に拡張するものがある。文様は少なく、口縁端には鋸歯文などを入れ、胴部と頸部の境には指頭圧痕のある貼付突帯を施すのみとなる。基本的には口縁内面への施文は行わないようである。

第5類（第16図9～13） やや外反しながら直線的に立ち上がる口縁で、端部はやや肥厚して平坦面をなす。出土量は少ないが、次の2類に細分できる。

a類（11～13） 口縁から頸部にかけて数条あるいはそれ以上の貼付突帯を施す。端部はやや丸みがあり、無文である。

b類（9・10） a類よりも口縁の開き加減が大きい。口縁から頸部にかけて、やはり貼付突

帶を施す。口縁端に数条の凹線文を施すのが特徴である。

第6類（第15図26） 1点しか出土していない。いわゆる無頸壺に近い。直線的に内傾しながら立ち上がる胴部に鋭角に口縁が付く。頸部には指頭圧痕の貼付突帯を持ち、櫛描きの短沈線文、斜格子目文、波状文、円形浮文等で器表を飾る。

以上のように壺形土器にはかなりのヴァラエティがあるのがわかる。その他にやはり1点しか出土していないが、口縁が異常に発達した土器（第16図19）などもある。

壺形土器（第17図4～21、第18図1～25）

破片ばかりであるが口縁部の形態や文様から次のように分類することができる。

第1類（第17図5・12・13） 脇部さほど張らず、口縁わずかに外反する。口縁下に1本から4～5本の櫛描沈線文を施す。口唇部には刻目を有するものがある。

第2類（第17図6） ほぼ垂直に立ち上がる胴部に直角に口縁が付く。上面平坦面をなし、端部は丸くなる。端部に刻目。口縁下に櫛描きによる平行沈線文がはいる。出土数は少ない。

第3類（第17図4・7～11、14～16、18） 短く大きく外反する口縁を持つ。無文のものと有文のものがある。

a類（14～16・18） 無文である。口縁がゆるやかに外反するものもある。

b類（4・7～11） 口縁下に櫛描きによる平行沈線文がはいり、その下に刺突文を加えるものもある。口縁端に刻目を持つものが多い。

第4類（第17図19～21、第18図1～5・7・9・16・18） 口縁がくの字状になる土器群である。器壁は胴部、口縁部ともに薄い。細部の形態の違いでさらに3類に分けることができる。

a類（第17図20、第18図1） 口縁の屈曲部分が丸みを持っており、口縁端も丸く造り出されたものである。

b類（第17図19・21、第18図2～5・7・9） 口縁内面の屈曲部分にやや稜がたち、端部上端がわずかにつまみ出された土器である。胴部の張りがやや強くなる傾向がある。

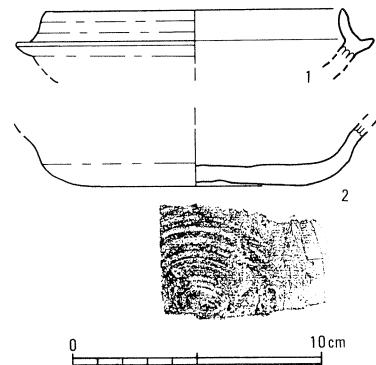
c類（第18図16・18） 形態的にはb類と全く変わることはないが、口縁下に押圧文のある貼付突帯が付く。出土点数少ない。

第5類（第18図6・8・10～15・17・19～24） 口縁くの字状であるが、やや肉厚で口縁端部が上下に肥厚する。3類に分けることができる。

a類（6・8・10～15・17） 口縁内面の屈曲部に稜の立つものと、全体に丸く成形されるものがある。端部肥厚して幅広になるが文様ははいらない。

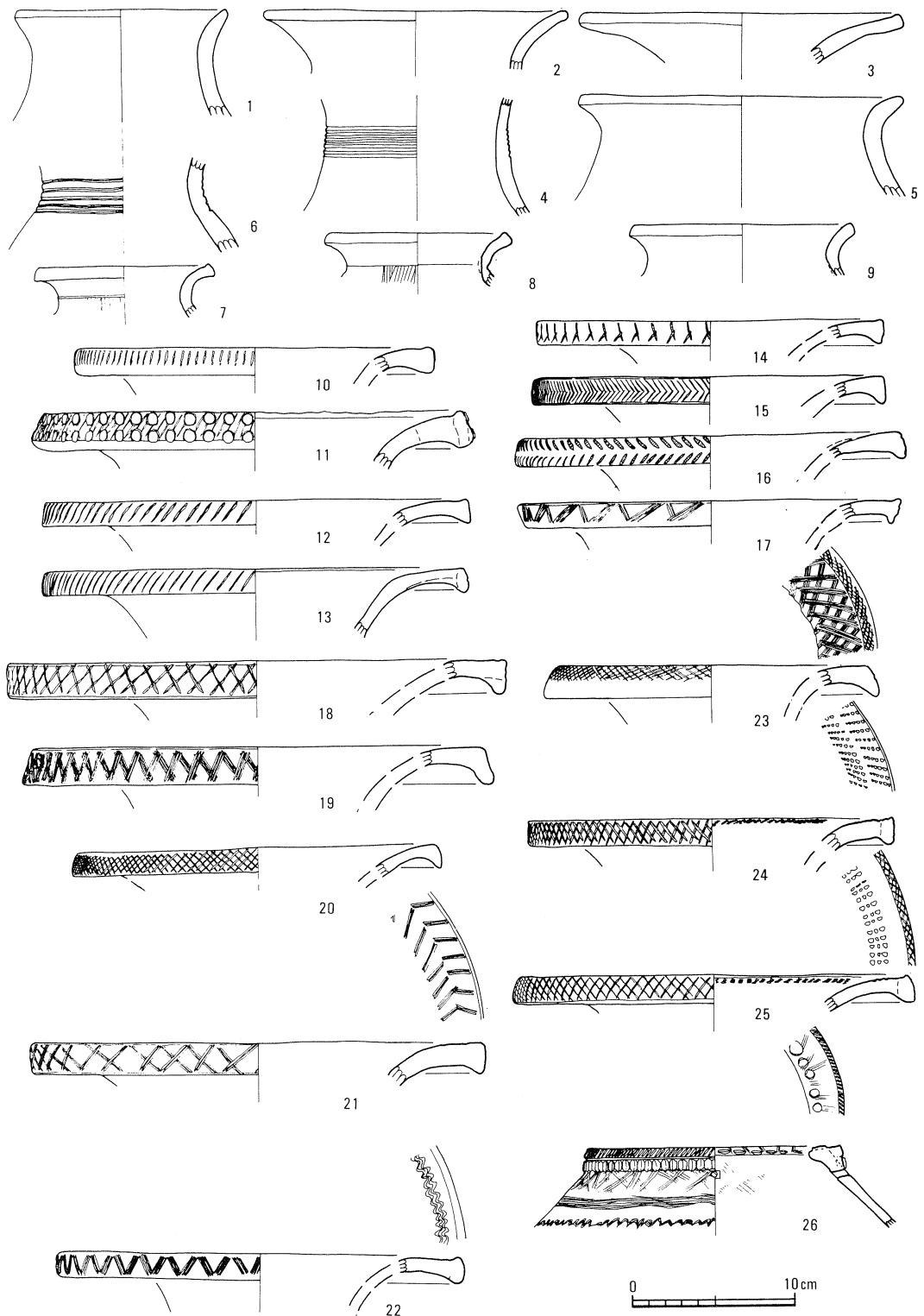
b類（19・21・22） 口縁内面の稜が明確で、口縁端部に斜行短沈線文がはいる。円形浮文の付加されるものもある。頸部には粘土紐を貼り付け、押圧文を加える。

c類（20・23・24） b類の斜行短沈線文にかわって



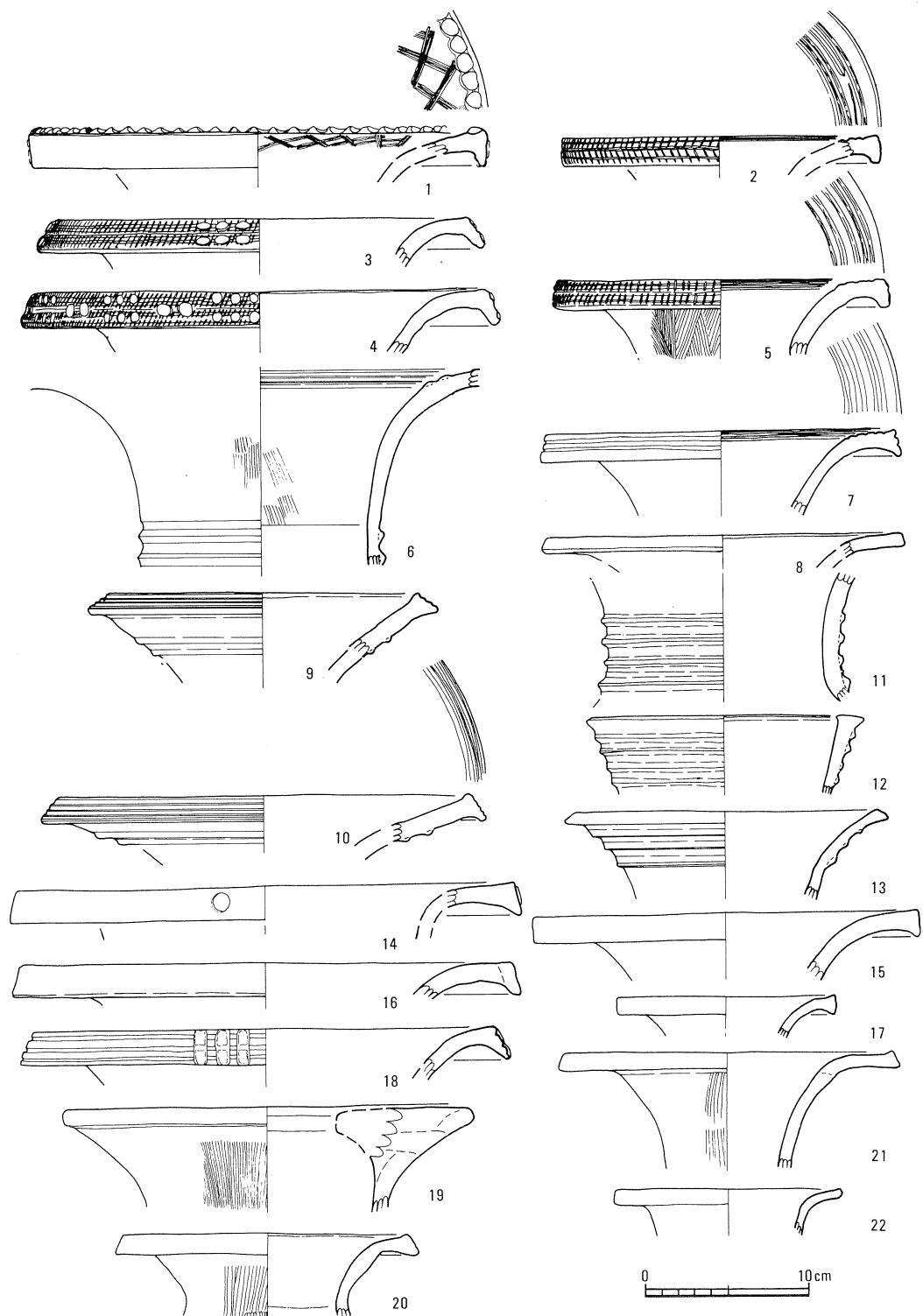
第14図 布田遺跡III区S D10出土遺物

布田遺跡



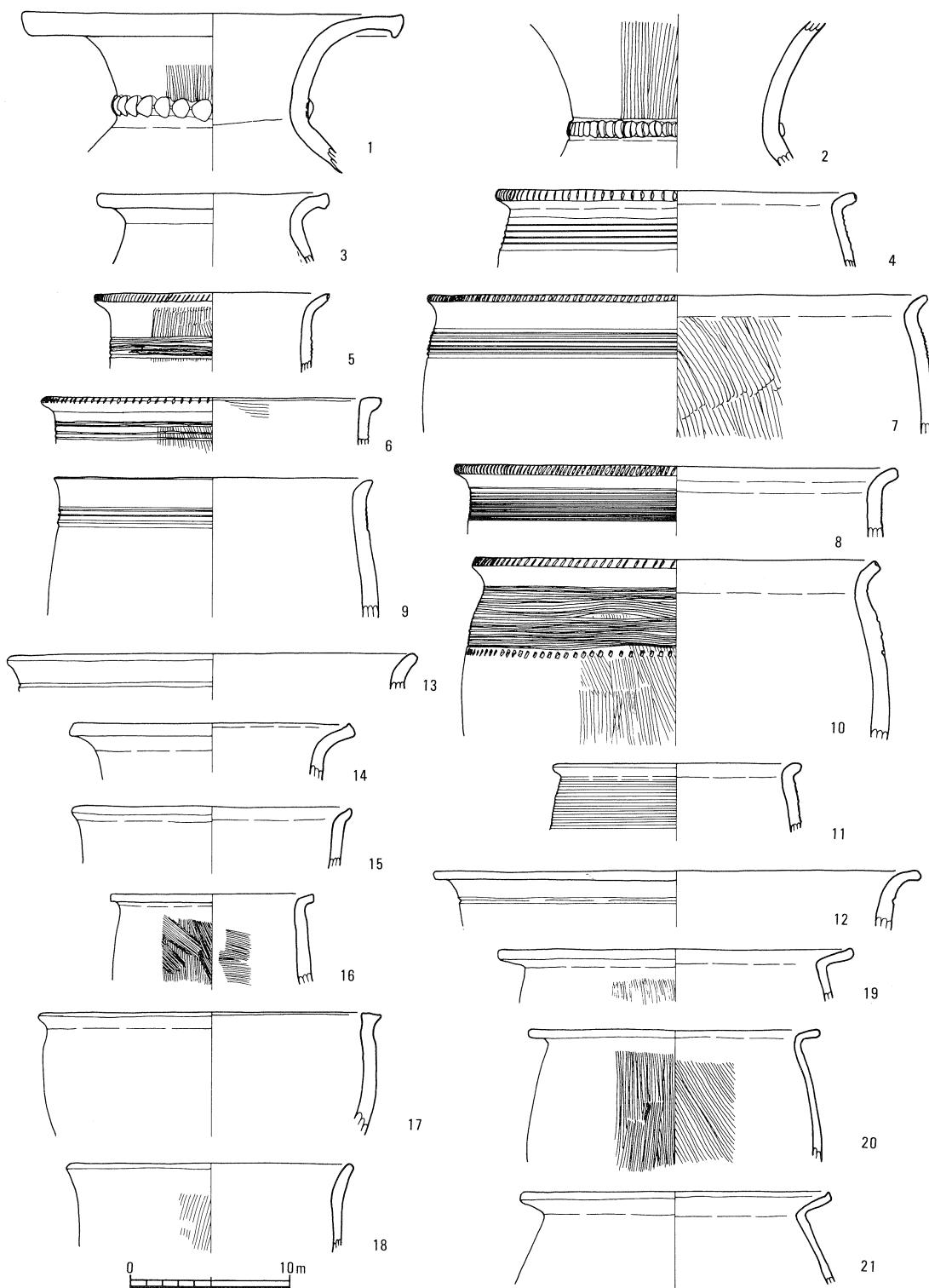
第15図 布田遺跡 III区 S D 10 出土遺物 (2) 1/4

布田遺跡



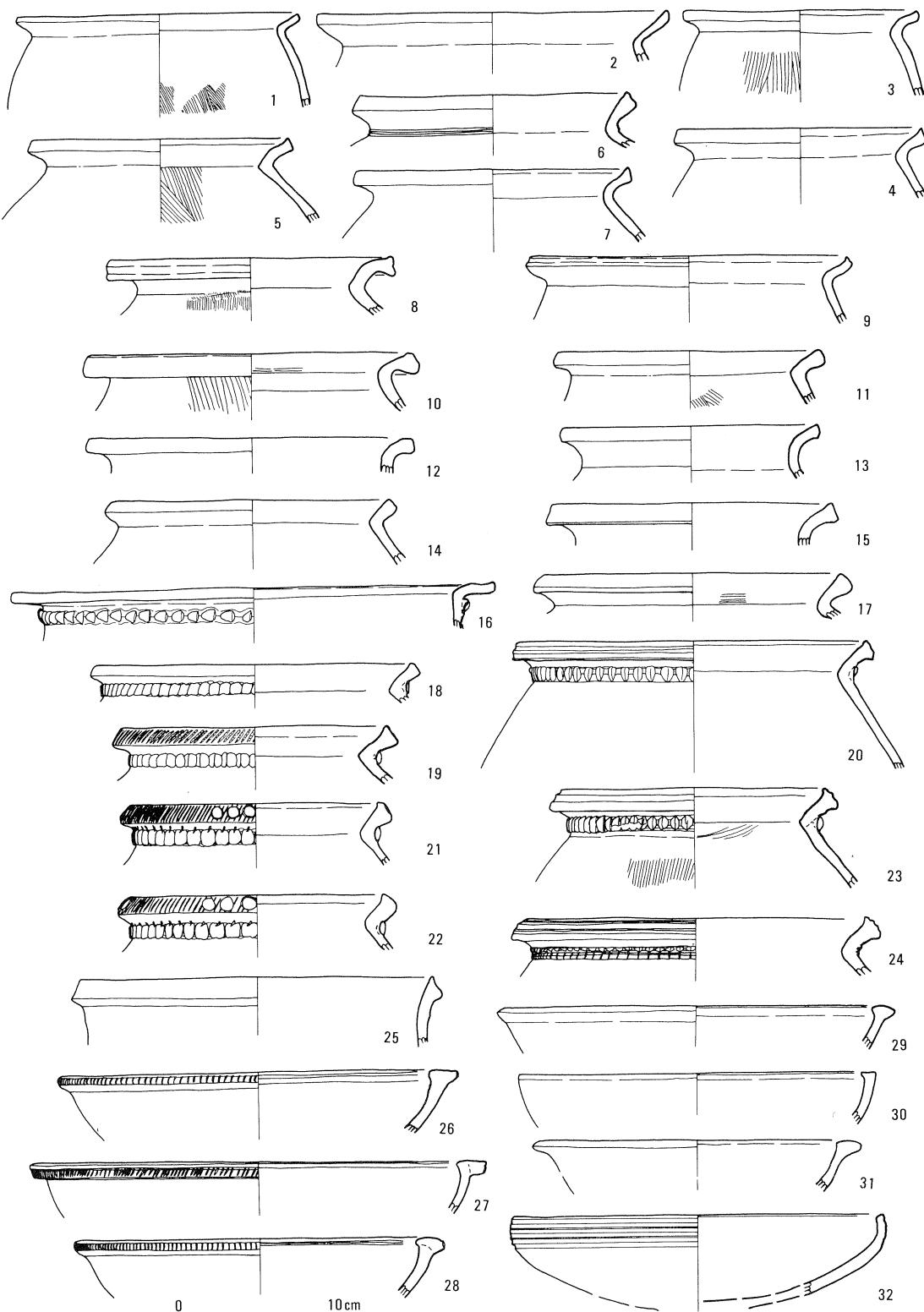
第16図 布田遺跡III区 S D 10出土遺物(3) 1/4

布田遺跡



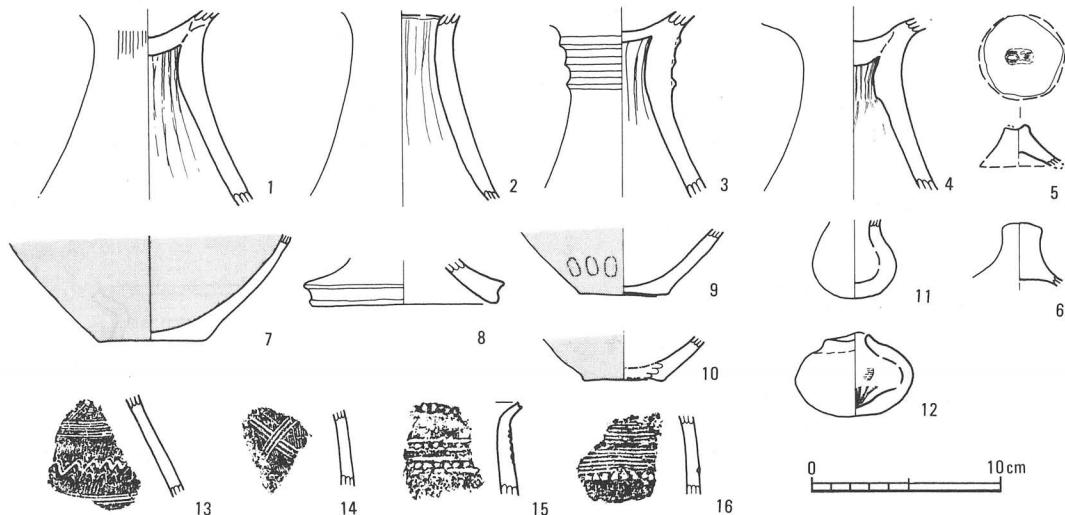
第17図 布田遺跡 III 区 S D 10 出土 遺物 (4) · 1/4

布田遺跡

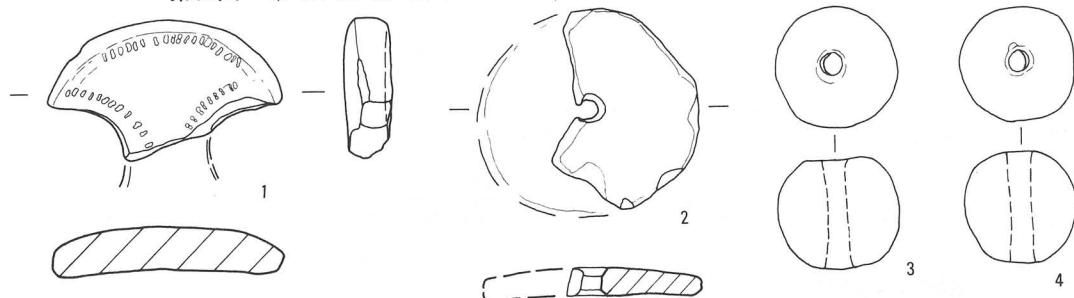


第18図 布田遺跡 III区 S D 10 出土遺物 (5) 1/4

布田遺跡



第19図 布田遺跡III区S D 10出土遺物(6) $\frac{1}{4}$



第20図 布田遺跡III区S D 10出土遺物(7)土製品 $\frac{1}{2}$ 0 10cm

四線文が回る土器である。

高坏形土器 (第18図26~32、第19図1~4)

図示できたものは坏部口縁と脚柱部の破片だけである。大きく2類に分けられる。

第1類 (第18図26~31、第19図1~4) 坏部口縁が逆L字状に短く屈折する。上部に平坦面があり、端部は丸いものと角ばるもの二通りある。口縁内面上端にわずかながら突出が認められる。口唇部に刻目を施すものがある。脚柱部は無文か断面三角形の突帯を貼り付けるのみである。

第2類 (第18図32) やや内傾する口縁の外面に5~6条の凹線文を回す土器である。脚部は出土していない。

蓋形土器 (第19図5・6)

どちらも破片である。裾広がりする笠形を呈すると思われる。上端につまみ状の突起がつく。

ミニチュア土器 (同11・12)

小さな手捏の土器である。どちらも壺形を呈し、11は口縁を欠損する。

その他に甕形土器の底部片に漆を塗布したものがある。(同7・9・10) いずれも現在は、わずかに漆片が残存するのみであるが、もともと内外面に塗られていたと考えられる。塗り方は上等で、何回も塗布して黒色を呈している。漆の成分分析がまだのため、何から採取した樹液かは不明である。

る。

S D10の土器は以上のように器形、文様などにヴァラエティがあり、かなりの時間的な幅があることは明らかである。次に壺形土器、甕形土器、高坏形土器の時間的な変化と三者の併行関係について触れておきたい。

壺第1類の形態は前期の土器に特徴的なもので、S D10出土のものでは最も古式のものである。第2類は口縁部に発達がみられ、第1類よりも後出のものである。第2類と第3類の朝顔形の口縁との間には今ひとつ隔たりがあるが、第2類よりも新しい段階の土器であることは明らかである。このうち、a・b類に対してc類は、口縁端に沈線文・凹線文がはいるという全く新しい要素が認められ、a・b類よりも一段階あとのものである。また、第4類は、凹線文や沈線文こそ持たないが、口縁に3a・b類からの発展形態が認められ、これよりも新しい段階のものといえる。したがって3c類と第4類が同時期に存在したと理解したい。第5類は第3・4類とは異なった形態の壺である。この出現段階は明らかでないが、a類は貼付突帯を持ち、凹線文を持たないところから3a・b類に、b類は口唇部に凹線文がはいるところから3c類に併行すると考えられる。第6類は無頸壺の類で、類例が少なく壺形土器だけでは明確な伴出土器を限定できない。3a・b類から3c類の段階である。

甕形土器にも同様の検討を加えると、第1類は口縁外面に壺第1類と同様の文様を持ち、最も古い形態といえる。第2類は口縁の形態が特徴的であるが、第1類と同時期として理解される。第3類は無文と有文のものがあるが、口縁のくびれ具合が第1類よりも進行し、平行沈線が櫛描きになることから第1・2類よりも後出するといえる。第4類は平行沈線が消滅しており、口縁の形態に第3類からの発展が窺え、第4類の中でもa類→b類→c類の変化が追える。第5類については、a類は、第4b類の口縁端をさらに肥厚させた形態であり、b・c類はb類よりもc類の方が新しい要素を持ってはいるが、第4c類と同様に、頸部に押圧文のある貼付突帯を持つことからa類よりも新しくなるといえる。従って5a類は4b類の発展形態ではあるが、5b・cと4cを文様形態の一致から同一時期として捉えると、5a類と4b類もほぼ同時期ということになり、5a類は4b類の段階に同類から派生した亜系の土器として理解し、二系統の土器が共存して変化していくと理解した方がよさそうである。

以上の点から、甕形土器と壺形土器との関係は、口縁端の凹線文や頸部の押圧文付貼付突帯の特徴から、甕第4c・5b・c類に壺第3c・4類などが、それ以前の土器として甕第4a・b・5a類に壺第3a・D類などが伴うことが理解される。また、壺第6類はこれに従うと前者に高坏形土器についてはやはり凹線文の有無から、第2類が前者に第1類が後者に担当すると考えられる。これらをまとめると第2表のようになる。

蓋形土器やミニチュア土器は形態に特徴が少ないところから、どの段階に含まれるか現在のところ不明である。

布田遺跡

土製品（第20図、図版19—46～49）

分銅形土製品、紡錘車、土玉が出土している。

分銅形土製品(1) 半分を欠損する。長さ3.7cm、幅6.15cm。分銅の一方表側の周縁に2列の小孔がめぐる。二個の孔の間は浅くつながっている。全体に表側にふくらんでいる。

紡錘車(2) 半分を欠損する。直径5.4cm、現重量14.2g。甕形土器片を転用する。周縁は磨滅して丸くなっている。穿孔は両面から行う。

土玉(3・4) ほぼ球形で長さ2.9cm、最大径3cmと3.2cmである。重さ27gと27.8gである。
穿孔は焼成前に二方向から行う。手捏ねである。

(足立克己)

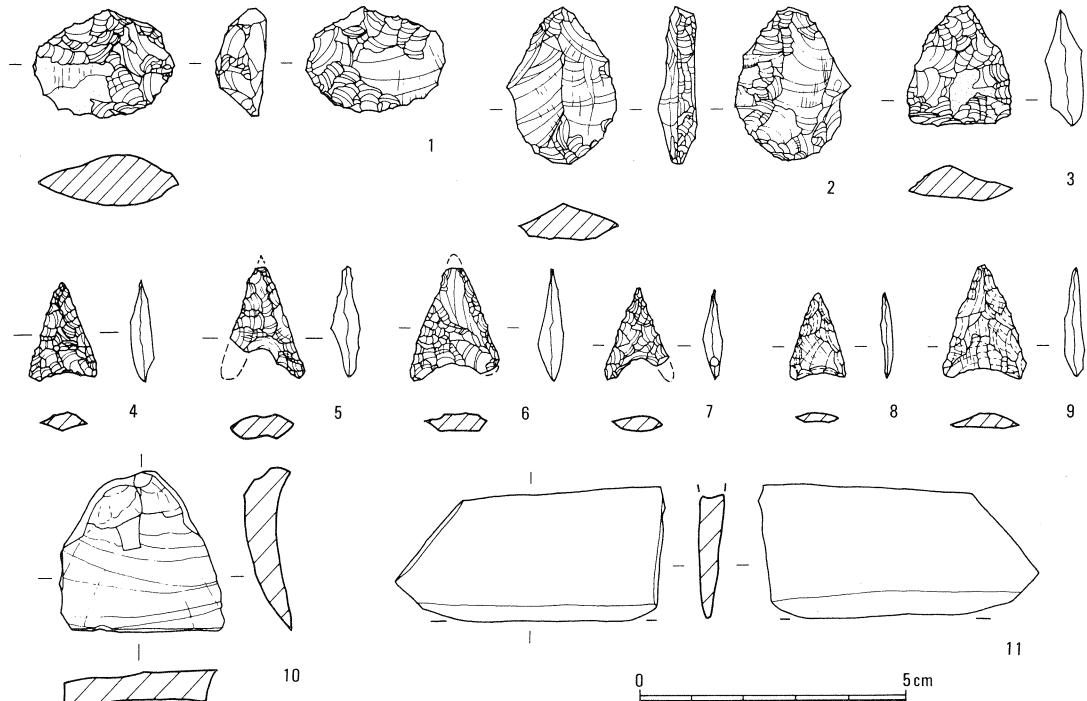
石器（第21～24図、図版20—1～26、24—1～6）

S D 10全般にわたって出土する。器種も、石鏃、打製石斧、磨製石斧、石庖丁、砥石等と多種多様である。特に数多く出土するのは、砥石、石皿様石器の類である。

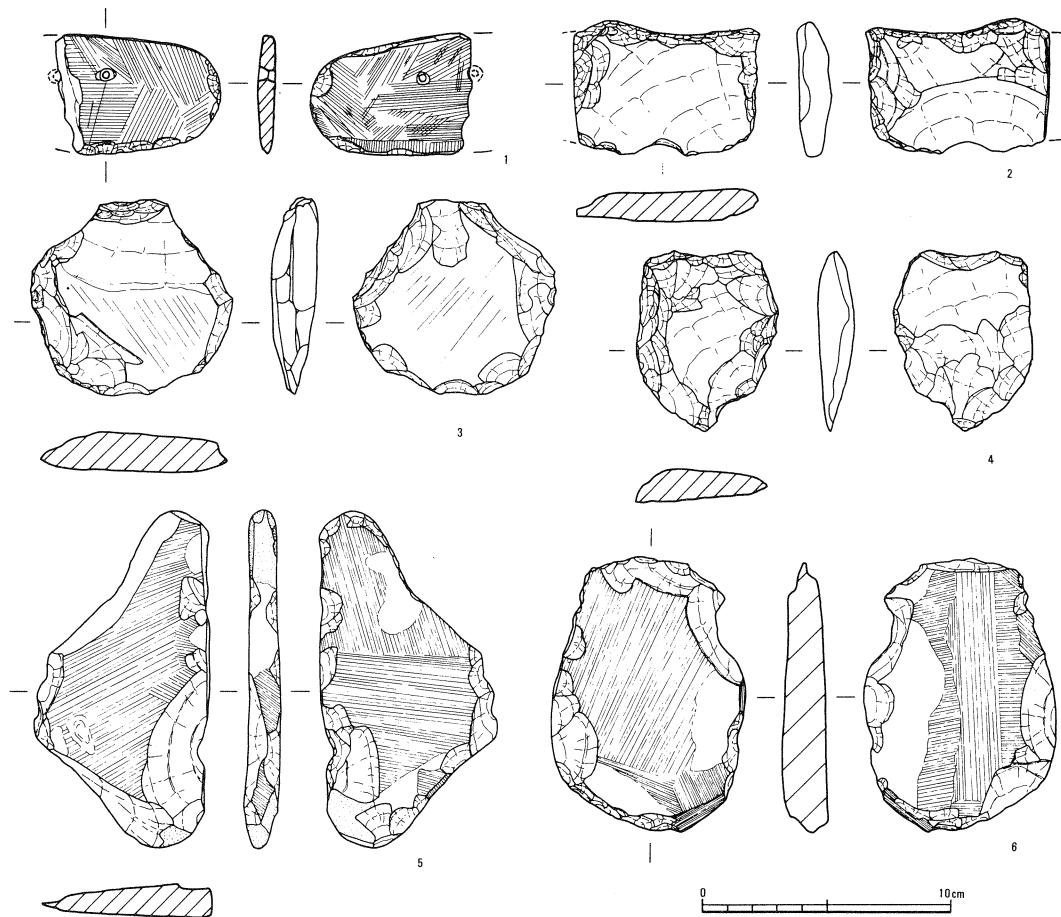
小形スクレイパー（第21図1） 黒曜石製の横長の剥片を利用していいる。一部に自然面を残すが両面ともに上下方向から二次剝離を施す。刃部には細かな刃こぼれが認められる。やや肉厚である

第2表 S D 10出土土器の形態変化

段階	壺形土器	甕形土器	高環型土器
第1段階	1	1・2	
第2段階	2	3	
第3段階		4 a	
第4段階	3 a 3 b 5 a	4 a 4 b → 5 a	1
第5段階	4 3 c 5 b 6	4 c 5 b 5 c	2



第21図 布田遺跡 III区 S D 10 出土遺物 (8) 7/10



第22図 布田遺跡 III区 S D 10 出土遺物(9) 1/3

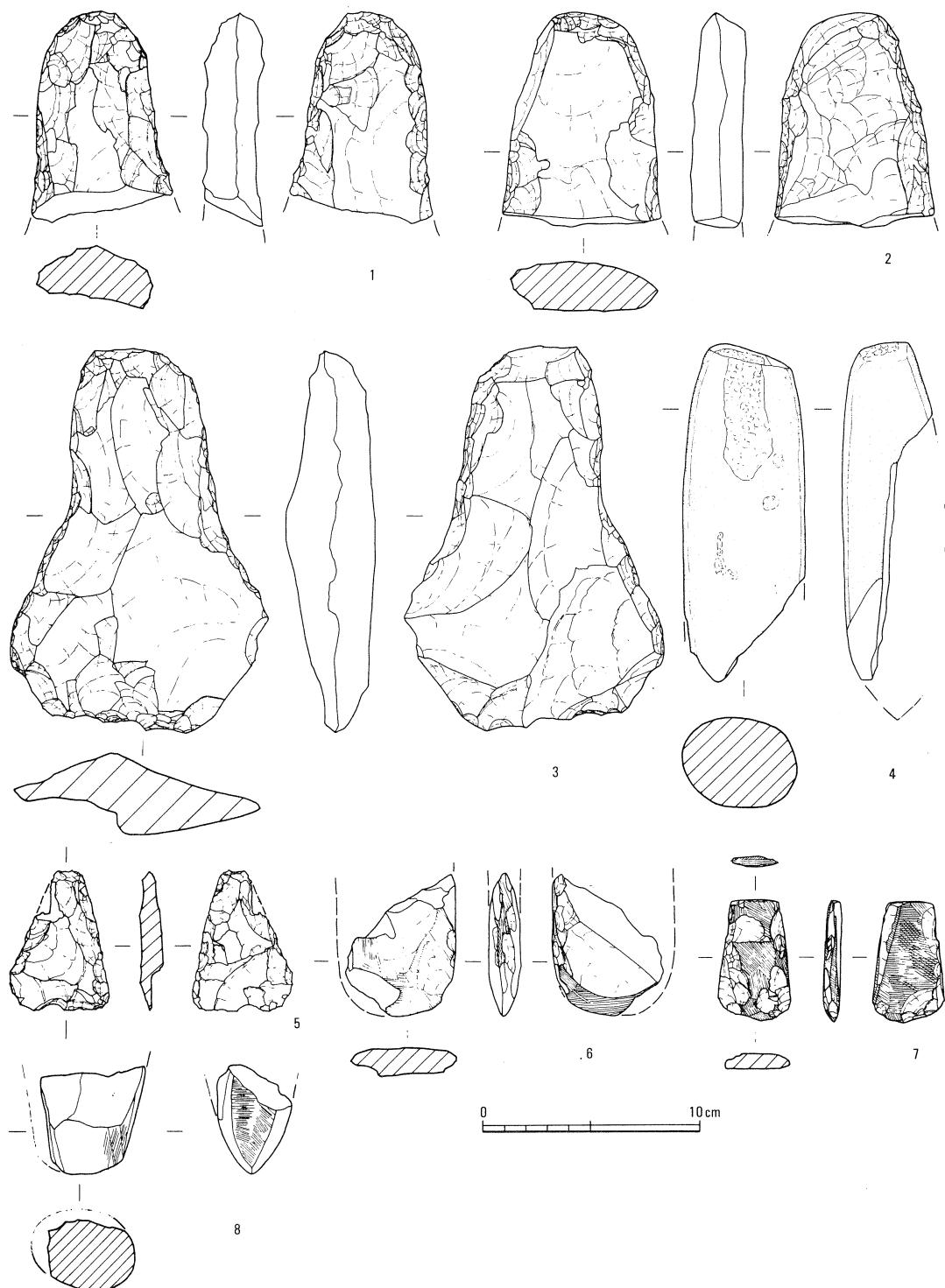
が、スクレイパーと考えられる。

楔形石器（同図2） 黒曜石製の縦長の剥片を利用し、両面ともに上からの大きな剝離を加え、頂部には打撃痕が残る。刃部付近にはやや細かい剝離を施し、刃こぼれも認められる。両側縁は一部に調整を加えるのみである。

石鎌（同図3～9） 8、9が硬質砂岩製の他は、黒曜石製の打製石鎌である。硬質砂岩製石鎌は黒曜石製石鎌に比べると、比較的もろく、身が薄い。基部の形態には平基式(3)と凹基式があり、後者はわたぐりの深いもの（5、7）と浅いもの（4、6、8、9）に分けることができる。刃部は3を除いて直線的で、形態が二等辺三角形に近い。3は形状が三角形を呈し、中央の一部に自然面を残しながら両面ともに三方からの二次調整を施す。4、6、8、9は両面に第1次剝離面を残し、6にやや細かな二次調整を施すほかは、全体に調整が粗い。3は長さ2.23cm、重さ2.7gあり大形品である。その他は長さ1.61cm～2.17cm、重さ0.3g～1.25gである。

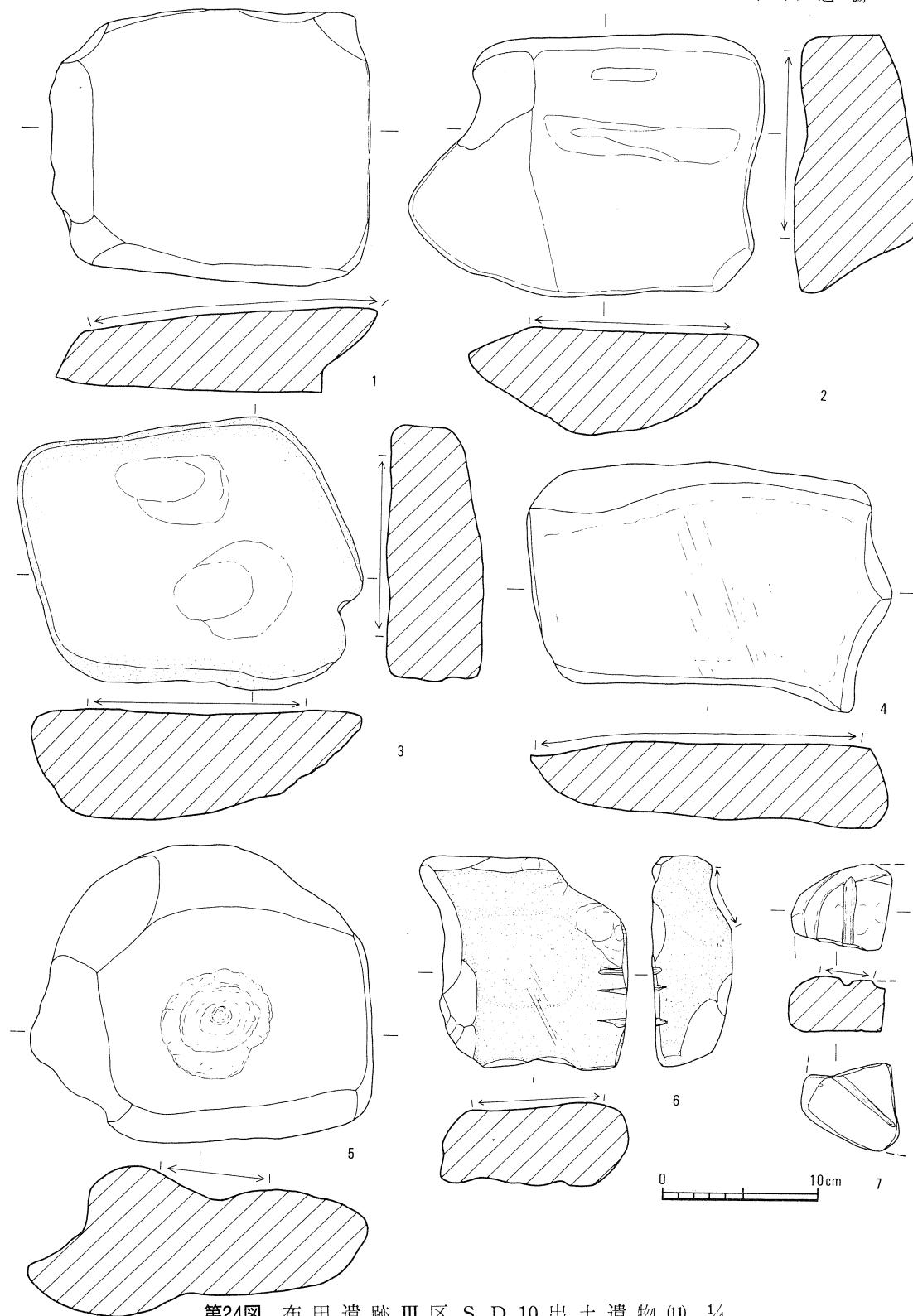
石鋸（第21図10、11） 10は玉髓製の縦長の剥片を用い、末端部を刃部として使用している。二次調整を施さない。刃部は磨滅が著しく、わずかながら刃こぼれも認められる。11は欠損品で、結晶片岩製。扁平な石材の側辺を両面から研ぎ出すことにより刃をつける。刃部は磨滅して、丸くな

布田遺跡



第23図 布田遺跡 III区 S D 10 出土遺物 (10) 1/3

布田遺跡



第24図 布田遺跡 III区 S D 10 出土遺物 (II) 1/4

布田遺跡

っている。どちらも刃部が直線的で、角度も鋭角であり、加えて磨滅が著しく進行していることなど考え合わせると、管玉未成品の擦切用の石鋸として使われたものと考えられる。

石庖丁（第22図1） 流紋岩質凝灰岩の板材を使用している。2分の1を欠損するが、長楕円形を呈する。湾曲のやや大きい方に二次調整を加え、刃部をつくり出したのち、両面に全面研磨を施す。直径約0.5cmの円形の孔が二個残る。穿孔は両面から行なう。風化によって全面磨耗が著しいが、特に刃部は使用による磨滅のためにかなり丸くなっている。刃部両面にしっかりした研磨を施していない点に特徴がある。

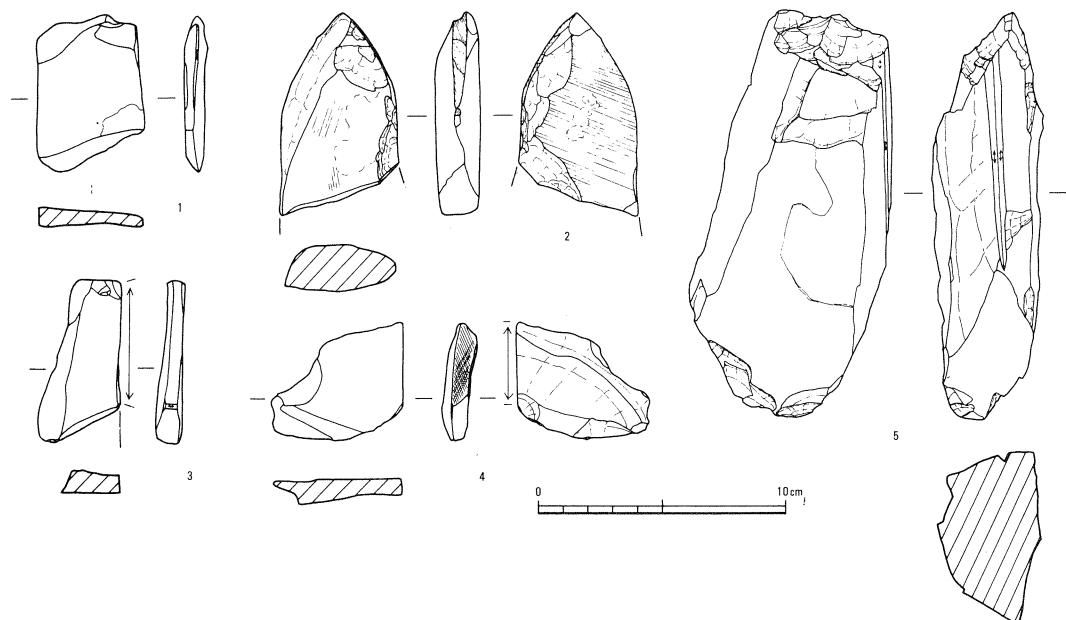
第3表 布田遺跡III区 S D10石器計測表

挿図番号	遺物名	全長 (現存長) cm	最大幅 cm	重量 (現重量) g	石質	備考	写真番号
21-1	スクレイパー	2.11	2.62		黒曜石	刃こぼれあり	20-7
2	楔形石器	3.91	2.14		〃	〃	8
3	石鎌	2.23	1.96	2.7	〃	平基式	9
4	〃	(1.9)	1.3	(0.5)	〃	0.1(脚長)	6
5	〃	(2.17)	1.37	(0.8)	〃	0.6(〃)	3
6	〃	(2.1)	1.6	(1.25)	〃	0.35(〃)	5
7	〃	(1.77)	1.2	(0.35)	〃	0.45(〃)	4
8	〃	1.61	1.08	0.3	硬質砂岩	0.1・0.15(〃)	2
9	〃	2.12	1.51	0.8	〃	0.2・0.2(〃)	1
10	石鋸	2.9	3.1		玉髓	刃部磨滅	10
11	〃	2.5	5.1		結晶片岩	破片	11
22-1	石庖丁	(4.8)	6.5		頁岩	½欠損	20-17
2	スクレイパー	(5.4)	7.4		流紋岩	刃部に抉りあり	16
3	〃	7.8	7.6	112.9	硬質砂岩		21
4	〃	(7.3)	5.6	(66.0)	安山岩		13
5	不明	8.4	6.9		流紋岩	両面研磨	18
6	〃	11.0	7.7		〃	〃	19
23-1	打製石斧	(9.8)	6.6	(195.2)	流紋岩質凝灰岩	刃部欠損	24
2	〃	(9.9)	7.4	(248.0)	流紋岩	〃	26
3	〃	17.5	11.9	631.1	玄武岩	完形品	25
4	磨製石斧	(15.5)	5.3	(345.6)	流紋岩	大型蛤刃	22
5	小型打製石斧	5.4	4.6	28.3	流紋岩質凝灰岩	一部欠損	15
6	局部磨製石斧	(5.5)	4.9	(43.0)	黑色頁岩	破片	12
7	〃	5.58	3.38	22.8	硬質砂岩	完形品	14
8	磨製石斧	(4.7)	4.0	(98.6)	流紋岩質凝灰岩	大型蛤刃	23
24-1	砥石	17.5	20.7		玄武岩	片面使用	24-1
2	石皿	16.3	23.6		〃	〃	2
3	〃	17.6	22.3		流紋岩	〃	
4	砥石	14.0	23.5		玄武岩	〃	3
5	凹石	19.0	22.0		流紋岩	〃	4
6	石皿	(13.5)	13.5		凝灰質砂岩	〃	5
7	砥石	(5.5)	6.3		〃	両面使用	6

第4表 布田遺跡III区S D10出土管玉未成品計測表

挿図番号	遺物名	全長 (現存長)cm	最大幅 cm	重量 (現存長)g	色調	石質	備考	写真番号
25—1	管玉未成品	(6.3)	4.0		明緑灰色	緑色凝灰岩	施溝1箇所	20-32
2	〃	(7.6)	4.8		〃	〃	片面研磨	27
3	〃	6.5	3.3		灰白色	〃	施溝2箇所	29
4	〃	4.7	5.3		明緑灰色	〃	側面擦痕あり	30
5	〃	16.3	8.2		〃	〃	施溝1箇所	24-7
26—1	〃	(7.8)	3.3		〃	〃	〃	20-28
2	〃	(6.2)	4.2		〃	〃	全面擦痕あり	31
3	〃	(3.9)	4.2		〃	〃	施溝1箇所	33
4	〃	(2.5)	2.9		〃	〃	形割用施溝あり	35
5	〃	(2.2)	2.2		〃	〃	施溝2箇所	34
6	〃	(1.85)	0.52	(0.6)	〃	〃	未穿孔	36
7	〃	(1.55)	0.5	(0.5)	〃	〃	〃	37

スクレイパー（第22図2～4） 2は流紋岩、3は流紋岩質凝灰岩、4は安山岩製で比較的扁平な石材を利用する。2は横長、3・4は縦長の剥片を使用する。いずれも大きな第一次剝離面を残しながら、側縁部に粗い二次調整を施している。大形品である。2は背の部分を比較的細かく潰している。刃部側はゆるやかな弧状を呈し、半円形の抉りを入れて刃部を作り出す。両側縁に二次調整を施して再利用したものである。3は円形に近い形状を呈し、完形品である。両側縁上部に浅い抉りを入れ、基部を作り出す。更に基部にも調整を加える。スクレイパー的な要素が強いが、基部に柄をつけて使用したことも考えられる。4は、三方から粗い二次剝離を施し、一部を欠失し

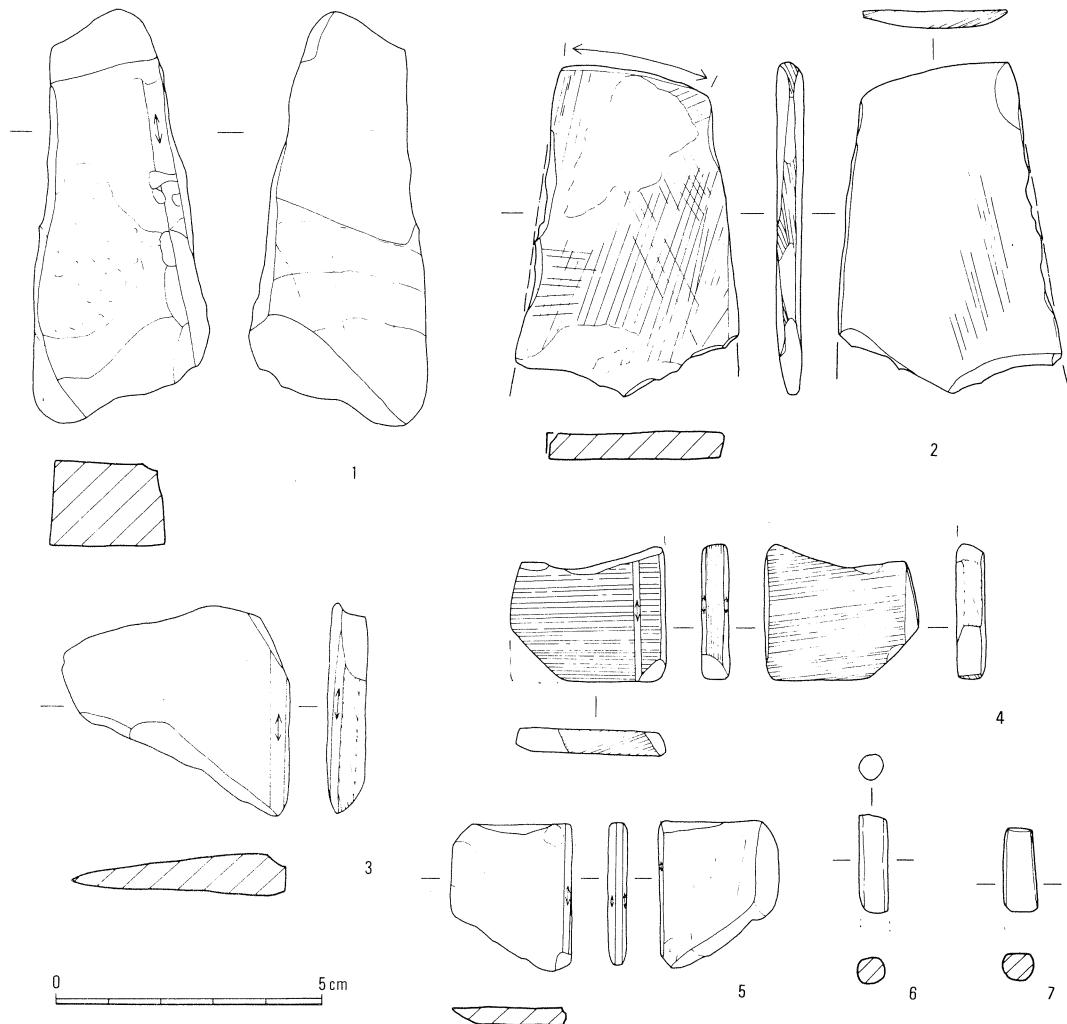


第25図 布田遺跡III区S D 10出土遺物(12) 1/3

布田遺跡

ている。3、4とも刃部は比較的薄くつくられている。

打製石斧（第23図1～3） 1、2は刃部を欠損しているが、形状は3の類と思われる。どちらも厚味があり、側縁部はやや直線的である。刃部は幅広につくられる。いずれも、全面を粗く剝離したのち、側縁部に二次調整を加える。3は、体部中程から刃部が大きく広がり、頭部と刃部の幅が2倍近くなる。1、2も同様の刃部の広がりを持つと思われるが、頭部は3に比べると丸くつくられている。なお、1の頭部はわずかだが磨滅しており、着柄痕かとも考えられる。3の刃部にはわずかだが刃こぼれも認められる。また、3の側縁部中程には比較的細かい二次剝離も施されている。1・2は、現存長9.8cm・9.9cm、幅6.6cm・7.4cm、重さ195.2g・248gを計る。3は長さ17.5cm、重さ345.6gの完形品。石材は1が流紋岩質凝灰岩、2が流紋岩、3が玄武岩製で、いずれも大形品である。



第26図 布田遺跡III区S D 10出土遺物 (13 1/10)

小形打製石斧（第23図5） 流紋岩質凝灰岩製で縦長の剥片を使用している。長さ5.4cm、厚さ28.3gを計る。一部を欠失するがほぼ完形品。頂部から刃部にかけてゆるやかな広がりをもち、二等辺三角形を呈する。第一次剥離面を残し、他に側縁部に調整剥離を加える。刃部付近は階段状に剥離しているためかなり薄いつくりになっている。

磨製石斧（第23図4、8） 4は体部が断面楕円形で、流紋岩製大型蛤刃石斧の欠損品。頂部の平坦面と体部の一部にわずかに敲打痕を残し、研磨している。復元長17.4cmを計る大形品である。8は流紋岩質凝灰岩製の刃部片、断面楕円形で、細かい研磨痕とともに側縁近くに二筋の稜線が残る。いずれも両面から丁寧に研ぎ出し、鋭角の刃をつける。

局部磨製石斧（第23図6、7） ともに調整剥離面を残しながら研磨して仕上げる。両側辺ともに直線的で刃部は弧を描く。側面は平坦で、斜行状の研磨痕が入り、断面はかまぼこ形を呈する。7の頂部は平坦につくられており、横方向に研磨痕がはしる。刃部付近は両面ともに丁寧に研磨しているが、7の裏面の刃部付近には、使用の際の剥脱痕が残る。6は現存長6.6cm、重量43gを測る。黒色頁岩製である。7は硬質砂岩製で長さ5.58cm、重さ22.8gを測り、完形品である。

砥石（第24図1、2、4、7） 1、2、4は玄武岩製の平砥石で、自然石の平坦面を砥石として使用している。1、2は使用頻度が低かったためか磨耗はさほどでなく、上面のみ使用している。4は中央面に斜行する擦痕が認められる。いずれも長さ14.0cm～17.5cmの大形品である。7は、凝灰岩質砂岩製で、有溝砥石である。上面には現存長4.2cm、深さ0.4cm、下面には現存長5.0cm、深さ0.1cmのU字状の溝がはしるが、その対象物は不明である。この溝を中心に両面を砥面として使用している。1、2、4は、石皿的役割をもつ。

石皿（第24図3、6） 3は流紋岩、6は凝灰岩質砂岩の自然石を使用している。3は上面の中央面がわずかにくぼみ、磨耗している。6は砥石としても使用されている。砥面中央付近には、使用による擦痕も見られ、わずかだがくぼんでいる。縁辺には、長さ約2cm、深さ0.4cm～0.6cmの3条の溝が認められる。溝の断面はV字状で、磨滅はしているが鋭角になっており、鉄製工具等の金属器を研いだものと考えられる。また、側面も使用のための磨滅が著しい。

凹石（第24図5） 流紋岩の自然石を使用し、長さは19cmを測る。中央面に不整円形の敲打によるアバタ状の凹みが残るが、風化のためかなり磨滅している。

用途不明品（第22図5、6） 両者ともに肩平な流紋岩の石材を使用し、周縁部に粗い調整剥離を加える。いずれの両面とも研磨痕が残る。

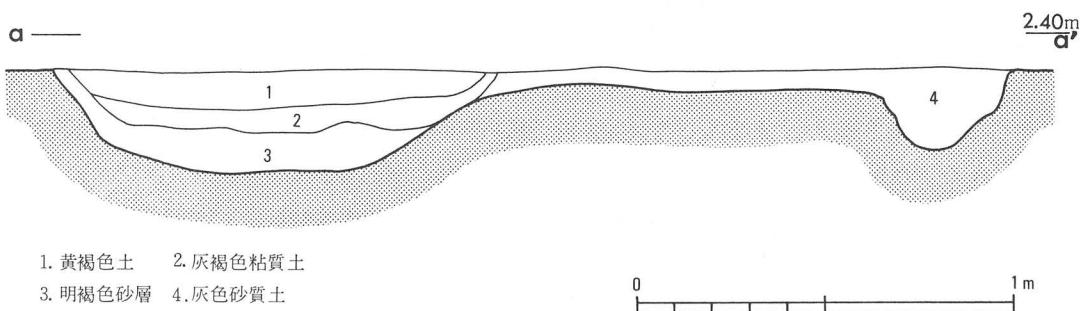
このSD10では完形品一点を含む計3点の大形打製石斧が出土している。これと類似する打製石斧は、この他にも松江市周辺において石台遺跡、竹ノ花遺跡、磯近遺跡等からも出土している。これらの資料を総合すると以下のような共通点が認められる。それはすなわち、①材質的には緻密で比較的加工しやすいものを使用する。②中央に平坦面を持ち、刃部、側縁に粗い調整剥離を加える。③刃部が基部よりもかなり幅広になり、刃部全体が薄身につくられている。という3点である。これらの特徴は縄文～弥生時代にみられる、肉厚で短冊形の打製石斧の特徴とは明らかに異なったも

布田遺跡

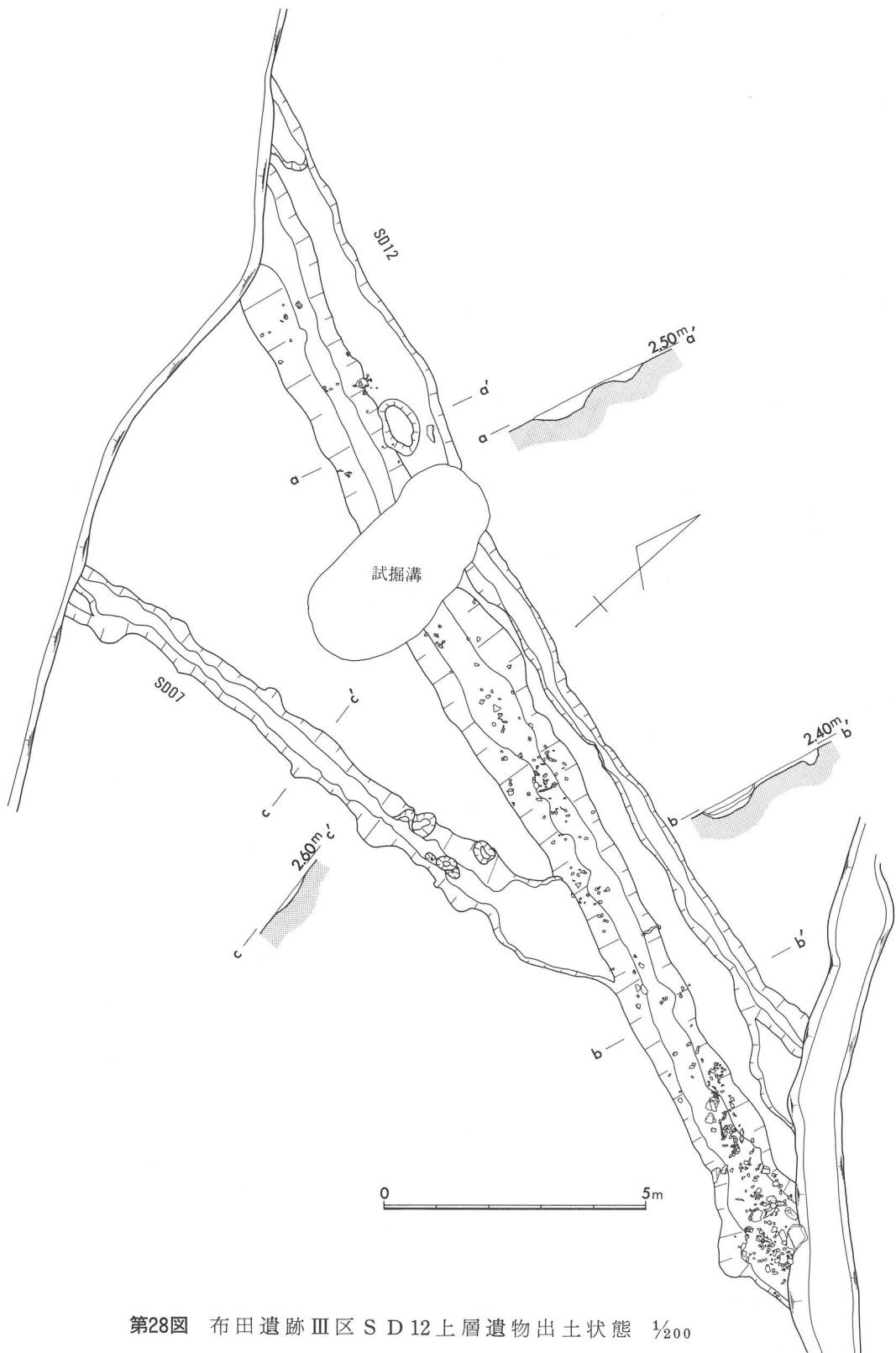
のである。しかも、県内では主に縄文晩期以降、特に弥生時代の遺跡から多く発見されており、大陸系の大型蛤刃石斧や扁平片刃石斧が徐々に普及する中にあって、特異な存在となっている。このことから先の磨製石斧が木の伐採や加工に使用されることと相まって、それとは異なる用途が考えられる。そして、その機能としては、先の諸特徴に加えて県内での出土遺跡が、総じて低湿地遺跡であることや、さらに打製石斧の基部に磨滅痕が認められる場合があることなどから、京都府桑飼下遺跡^{註3}の打製石斧のように、土掘り具としての使用が考えられる。そして、このような打製石斧が布田遺跡のような弥生遺跡から出土することは、縄文時代の打製石斧がその伝統を残しながら、弥生文化の導入とともにあって徐々に機能分化していったことを示すと思われる。（片岡詩子）

石製品（第25・26図、図版20—27～37、24—7）

管玉未成品が多数出土する。施溝のある大きな石核から円柱形の小さななものまで各段階の未成品があり、おおよそ管玉製作の過程が復元できそうである。①まず原石を数回打割して、大形の石核をつくる。石核は調整を加えてなるべく直方体に近い形に整形する。（第25図5）②次にその平坦面に長軸方向に施溝して薄く分割する。（同図2、第26図1）この段階でも平坦面を整えるため調整剝離または研磨を施す。打割面を研磨することが多い。③次にこの分割品にさらに施溝・打割を行って板状のものをつくり出す。その際短軸方向にも施溝・打割が加えられて、長さ6～8cm、幅4～5cm、厚さが0.5～1cm程度の板状品につくられるようである。（第25図1・2）しかし、打割がうまくいかず、厚さが不均等になるものも多い。（第26図3）④板状品の両面および側面に研磨を施して表面を水平にする。厚さ0.5～0.6cmのものが多い。（同図2・5）⑤次に研磨した板状品の側辺に沿ってやはり0.5～0.6cmの間隔をあけて施溝し、（同図4）打割して方柱状の未成品をつくり出す。⑥この方柱状未成品の角を徐々に研磨して行き、多角柱さらに円形に仕上げる。SD10以外の資料も参考にすると、この段階の未成品の長さは1.5cm～3cmである。（同図6・7）長さが3cm程度のものは、多角柱あるいは円柱にした段階で半分に折り取り、長さ1.5cm程度のものにする。遺物を見る限りでは、必ずしも全部が折半という工程を経るわけではない。⑦長さ1.5cm前後にされた柱状未成品は、多角柱、あるいは円柱の状態で穿孔が行われる。⑧そして最後に研磨仕上げを行って径2～3cmの完成品が出来あがる。



第27図 布田遺跡 III区 SD 12 土層断面図 $\frac{1}{20}$



第28図 布田遺跡III区 S D 12上層遺物出土状態 1/200

布田遺跡



第29図 布田遺跡 III 区 S D 07・12 実測図 1/200

S D10出土の未成品を観察した結果、以上の①～⑧の工程が考えられる。その際特に注目される点は、第一に分割段階からすでに未成品に研磨を施し、以後各段階ごとに施溝、打割、研磨を繰り返すことである。そして第二に、方柱状にした段階で調整剝離という作業を全く省略し、ただちに円柱形に仕上げるという点があげられる。以上の二点は布田遺跡の管玉製作の手法を特徴づけるものであり、このことは玉の材料として軟質の緑色凝灰岩を採用したことに起因すると思われる。この緑色凝灰岩は広く日本海沿岸に分布するもので、その入手も容易であったことが考えられる。

(足立克己)

SD12 (第27～29図、図版12—2・3)

S D10の南側を、それにはほぼ平行するように東西に長くのびる溝である。幅約220～300cmで、横断面で見ると、北側で落ち込んだ後、中央部でやや盛りあがり、南側でもう一度深く幅広に落ち込む。弥生時代の溝の上面を切るように、古墳時代の溝が重なっていて、層位的に二層に大別できる。上層は黄褐色土と灰褐色粘質土からなり、古墳時代の遺物が数多く出土する(第28図)。下層は灰色砂質土と明褐色砂層からなり弥生時代の遺物が多量に出ている(第29図)。S D12の南側には、幅約120cm、深さ10cm程度の溝S D07が走る。S D07は、S D12とその中央部付近で合流すること、S D12下層出土のものと遺物がほぼ同時期であることにより、S D12下層と同一時期の溝として考えられる。故に、ここではS D07をS D12下層の支流として、S D12に含めて取り扱う。

上層土器 (第30・31図)

須恵器と土師器が出土している。土師器には壺形、甕形、甌形、坏形、高坏形土器がある。このうち高坏形土器は全体(コンテナ約4箱)の約½を占めている。

須恵器 (第31図20・21)

同一個体と思われる甕の口縁と底部である。口縁部は外反して上方にのびる。口縁端部は角ばり、上下にやや肥厚する。口縁下に突線が1条めぐり、その下に波状文が2列施されている。また、口縁部片の割れ口に漆が付着しており、これは接着剤として漆を利用し、破損した部分を接合していたことを示すものと考えられる。この甕は、口縁の形態等より山陰須恵器編年のIII期よりも古い時期のものと考えられる。註4

土師器 (第30図、第31図1～19、図版20～38～57、21～1～29)

壺形土器 (第30図1) 口縁は単純に外に開き、端部が直立する。

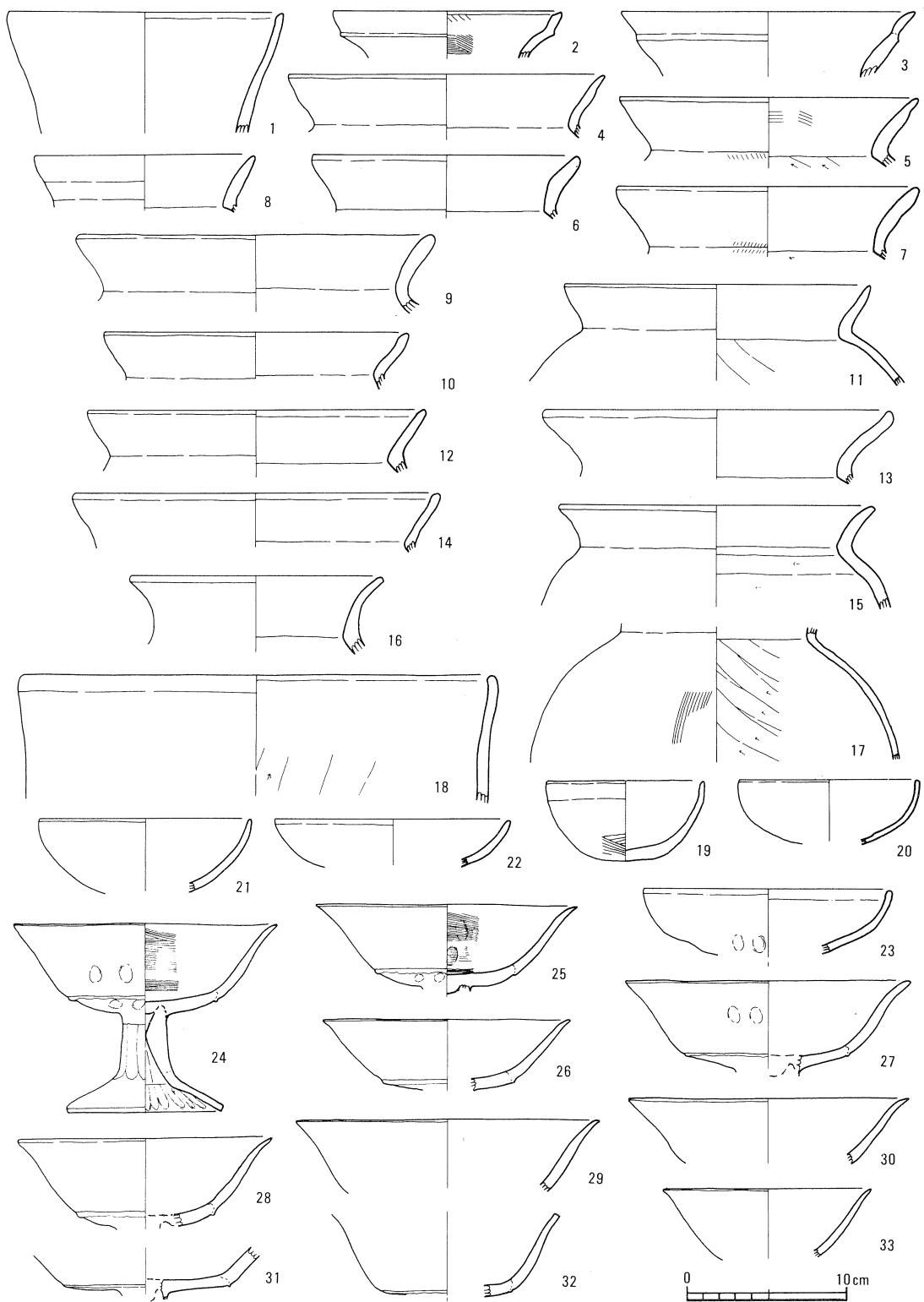
甕形土器 (同2～17) 口縁部の形態より次のように分類できる。

第1類 (2・3) 積線が鋭く、退化した複合口縁を有するものである。2は口縁端部に内傾する面をもつ。

第2類 (4～8、10～12、14) 複合口縁のなごりをとどめ、口縁部外面中程でかすかな段を持つ。

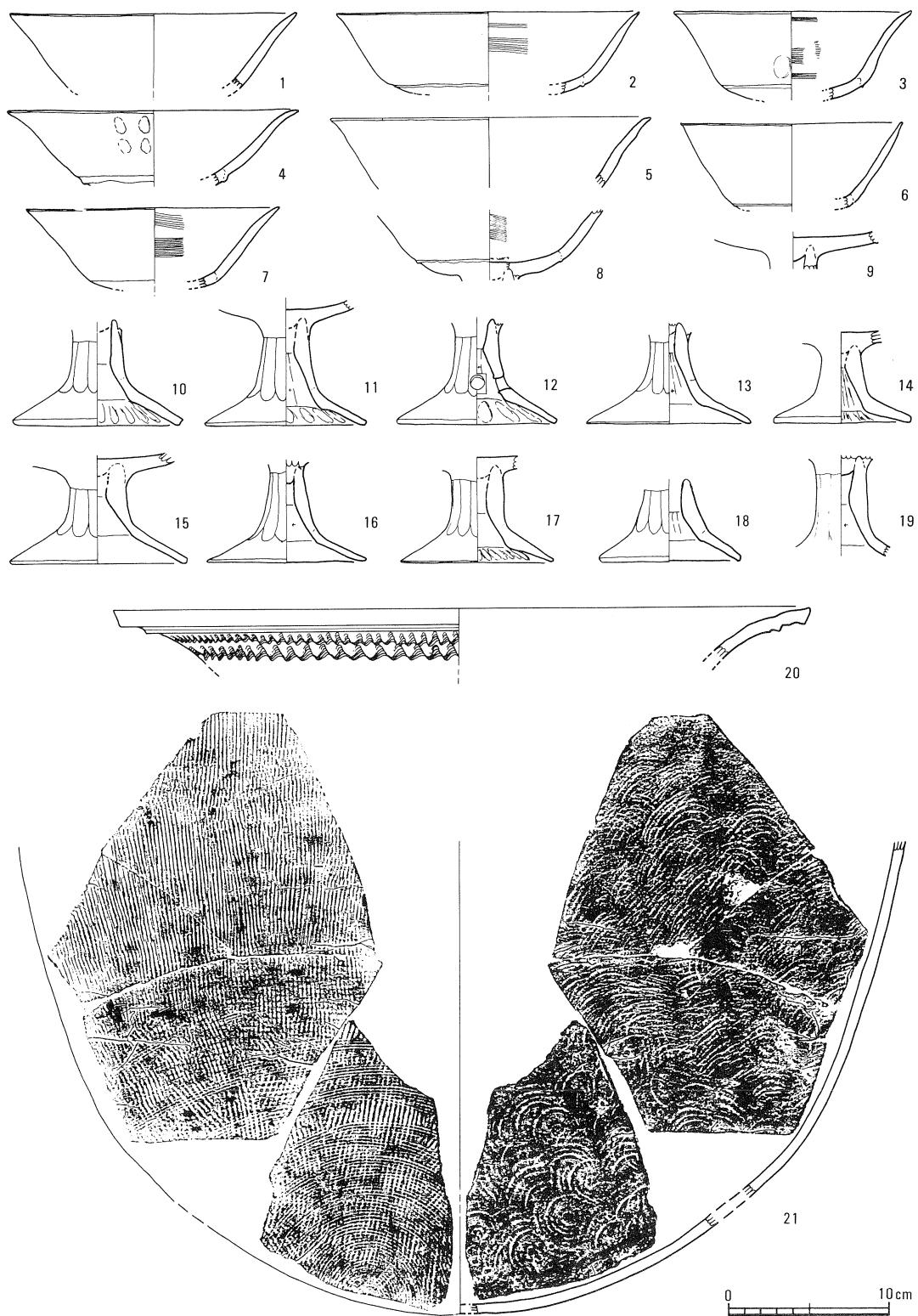
第3類 (9・13・15・16) 口縁は単純でくの字状に外反する。口縁端部は幾分反り気味である。

布田 遺 跡



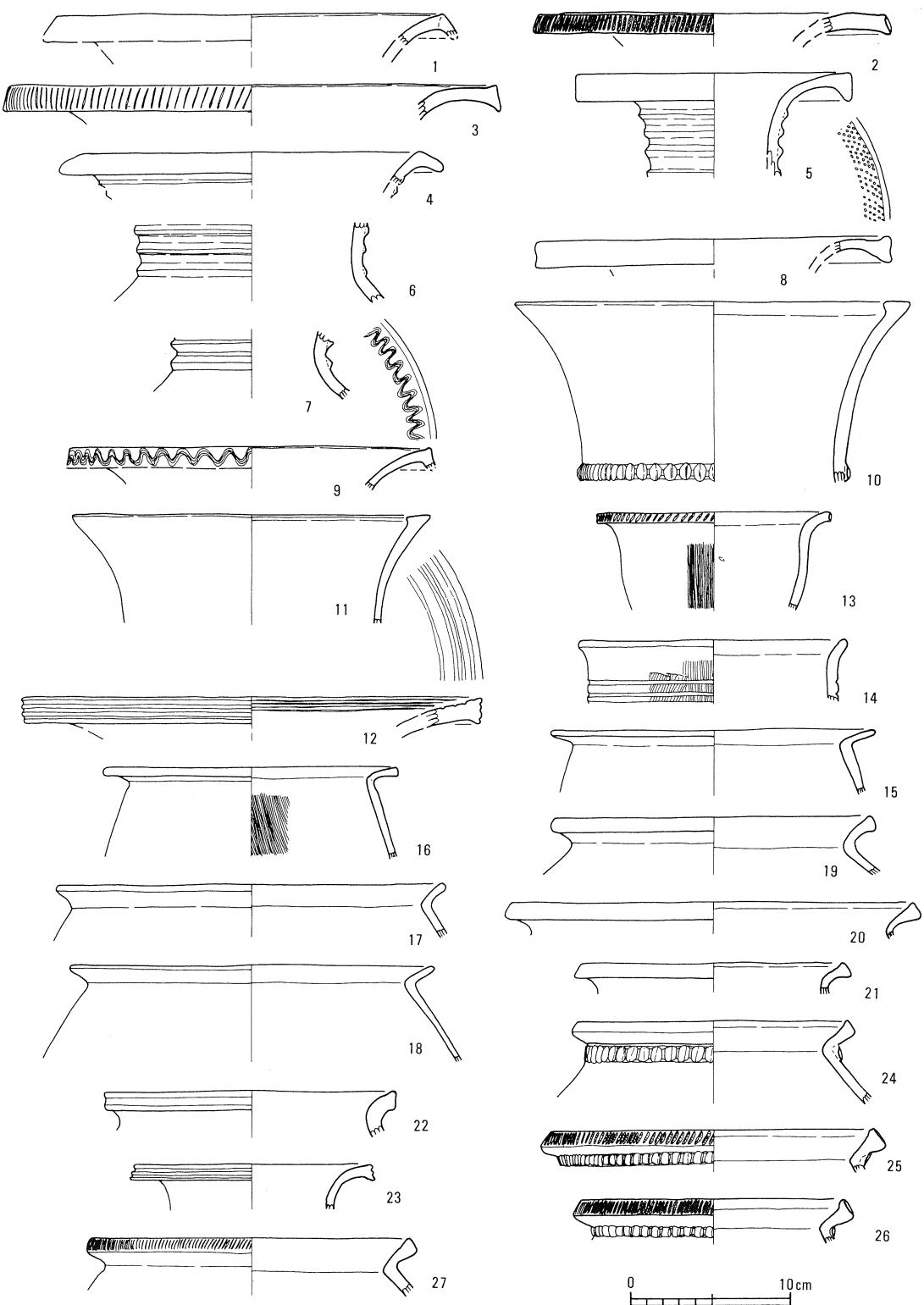
第30図 布田遺跡III区 S D 12 上層出土遺物 (1) $\frac{1}{4}$

布田遺跡

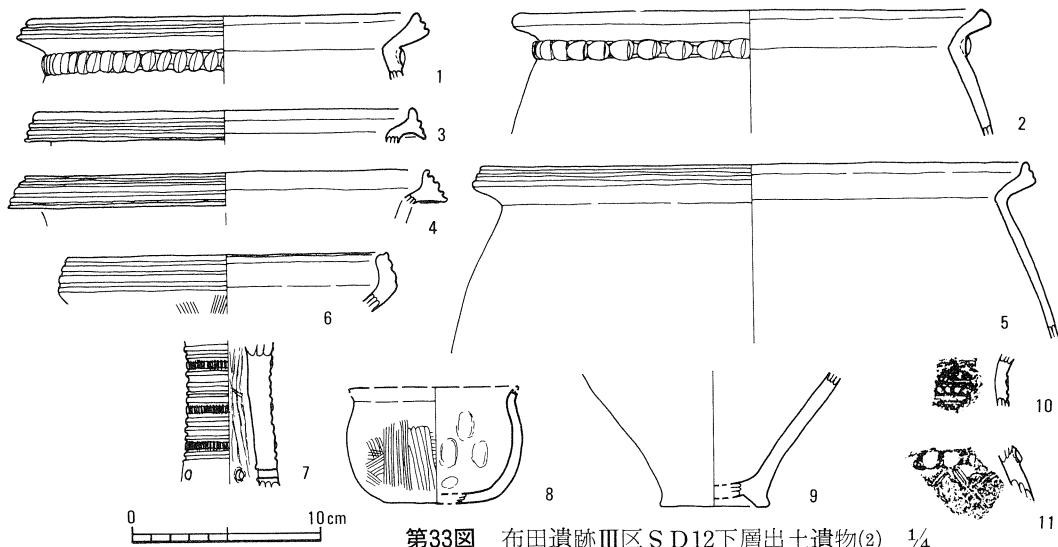


第31図 布田遺跡III区 S D 12上層出土遺物(2) 1/4

布田遺跡



第32図 布田遺跡III区 S D 12下層出土遺物(1) 1/4



第33図 布田遺跡III区SD12下層出土遺物(2) 1/4

以上のような口縁部に、球形の胴部(17)が続くと考えられる。調整は、胴部内面が箆削り、あと部分は横ナデで、胴部外面に刷毛目が残るものもある。

甌形土器 (同18) ほぼ直口で、口縁端部でわずかに内傾する。口縁部の破片しか出土していないが甌と考えられる。

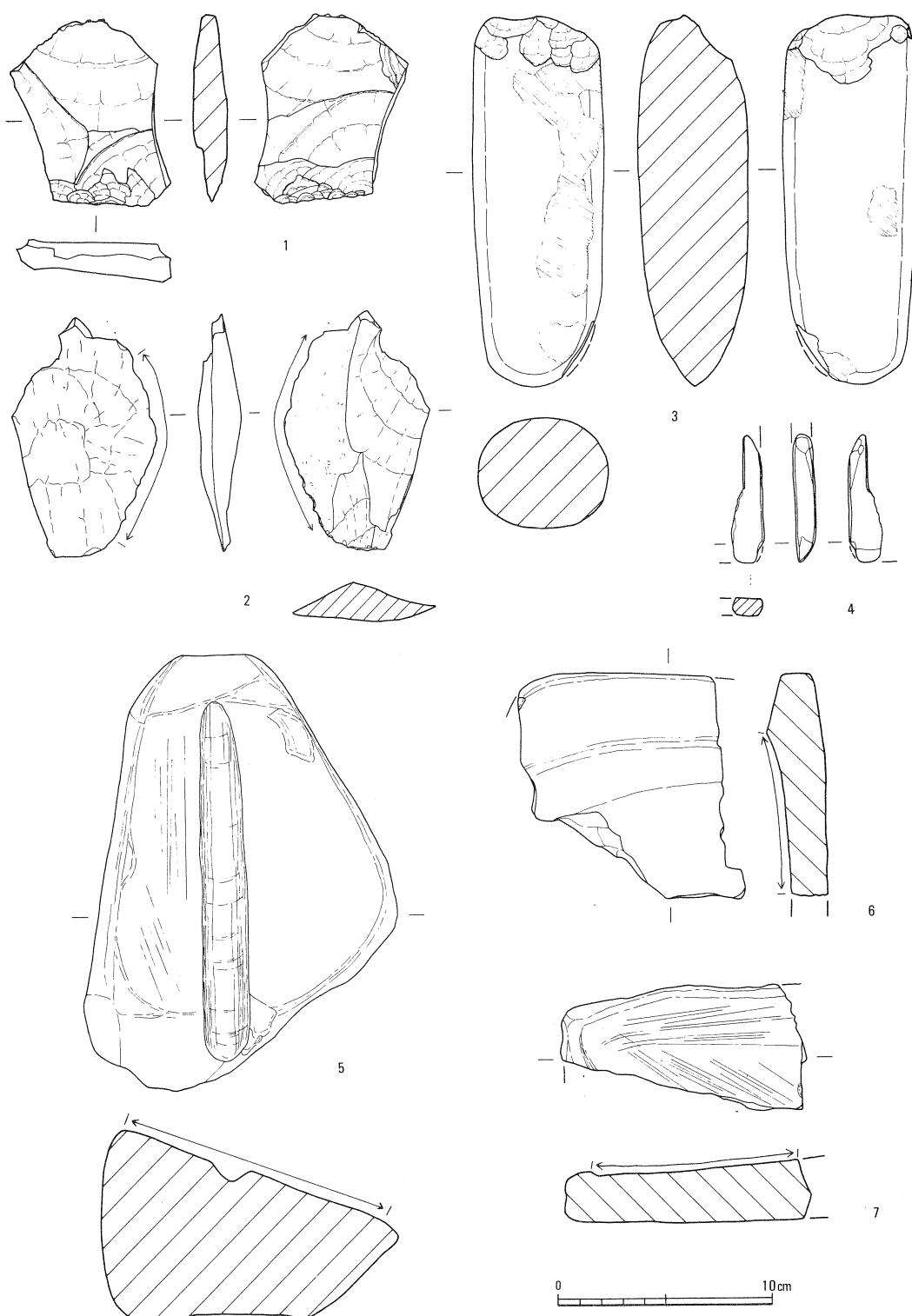
坏形土器 (同19~23) やや内傾する口縁部を持つ椀形のもの (19~21・23) と皿形のもの (22) とがある。19を除き底部を欠損しているが、いずれも丸底と思われる。あるいは高坏となる場合もあるかもしれない。

高坏形土器 (第30図24~33、第31図1~21) 多数出土するが、その成形、調整は、ほぼ同じ特徴を示す。口径13.8~19.0cm、底径8.6~11.0cm、器高11~12cm比較的小形で、完形品は第30図24のみである。水平方向にのびる坏底部に、外反して大きく開く口縁部が続き、坏底部と口縁部の接合部分には段が形成される。脚柱部は円筒形で、その内面の中程で明確な稜をつくる。脚裾部は屈曲しハの字状に大きく開き、裾端部は平坦面を持つ。また、焼成前に穿れた小孔を1ヶ持つものもある (第31図12)。調整は脚柱部外面が箆磨きで、その内面が横方向の箆削り、あと部分はナデである。脚柱部外面に刷毛目、脚裾部内面に絞り痕が残るものもある。

以上のような甌形土器、高坏形土器の特徴とこれらが古い時期の須恵器を伴出する点を考え合わせると、SD12出土の土師器は、出雲地方の土師器編年で大東式土器に併行する古墳時代中期のものである。ただし、高坏形土器の器形が单一であるところから、その時間的幅は狭いものと思われる。

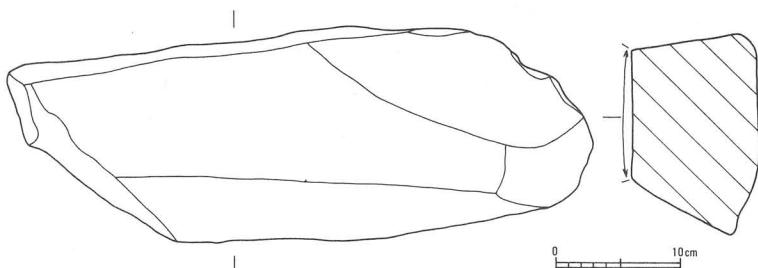
SD12上層では、後述のIII区拡張部SK01とともに、土師器の高坏形土器を数多く出土している。^{註5}これらの破片の断面や接合痕を観察し、このタイプの高坏形土器の成形手法について触れてみたい。^{註6}まず、脚部の柱状部の空洞部分に半球状の粘土塊を埋め込み、そこから粘土を巻き上げて坏底部を形成する。あるいは、逆に粘土を巻き上げた後に、脚部に半球状の粘土塊を埋め込んで坏底部を形成する (第36図1、図版21~28)。次に、脚部と坏底部の接合部分を補強するため、底部外面に粘^{註7}

布田遺跡



第34図 布田遺跡III区 S D 12下層出土遺物(3) 1/3

土を付加する。さらに、坏底部に、斜め上方にのびる口縁部を付加する。坏底部と口縁部の接合面には、その付加の際に、はみ出した粘土が、段を形づくっている。



第35図 布田遺跡III区S D12下層出土遺物(4) 1/6

この高坏形土器は、弥生時代に多く見られる「円板充填法」のように連続的に一気に作りあげる手法と違い、脚部、坏底部、口縁部と時間的に余裕を持たせて作られている。このことより、まず脚部を多量に作り、次は坏底部を付加するといった分業体制で大量生産化されていたと推定できる。

下層土器（第32・33図、図版21—30～65）

弥生土器が出土しており、壺形、甕形、高坏形、鉢形土器がある。

壺形土器（第32図1～12、23） 時期的に2つのグループに大別できる。第1群（1～9）は口縁が朝顔状に開き、端部を上下又は下方に拡張する。端部に波状文、斜行短沈線文を持つものもある。第2群（11～12・23）は口縁端部に櫛描平行沈線文や凹線文をめぐらせたり、頸部に押圧のある貼付突帯を持つグループである。

甕形土器（第32図13～22、24～26、第33図1～5、10・11） 3つに大別できる。第1群（第32図13・14、第33図10）は、胴部がさほど張らず、口縁部に刻目を施したり、口縁下に篦描平行沈線文をめぐらせる。第2群（第32図15～22、27）には、口縁がくの字状に強く屈曲し、器壁が薄いものと、やや肉厚で口縁端部が上下に肥厚するものとがある。第3群（第32図24～26、第33図1～5、11）は第2群の肉厚のものと形態的には同じだが、端部に凹線文をめぐらせたり、頸部に押圧のある貼付突帯を施す。

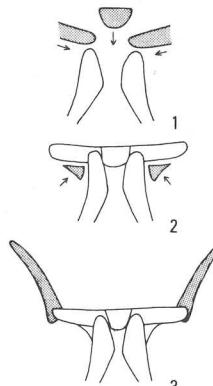
高坏形土器（第33図6・8） 6はやや内傾する口縁外面に凹線文をめぐらせる。8は脚柱部で、篦描平行沈線文と刺突文がめぐり、小孔が穿れている。

鉢形土器（同8） 底部は平底で胴部がやや丸味を持つ。口縁部は短く外反するが端部を欠損する。

その他に甕形土器の底部（同9）がある。これは、高台状のはっきりとしたあげ底をなす。

S D12下層出土土器をS D10出土土器と対比させると、甕第1群はS D10の第1段階に、壺第1群および甕第2群は、第4段階に、壺第2群と甕第3群と高坏は第5段階に相当するといえる。

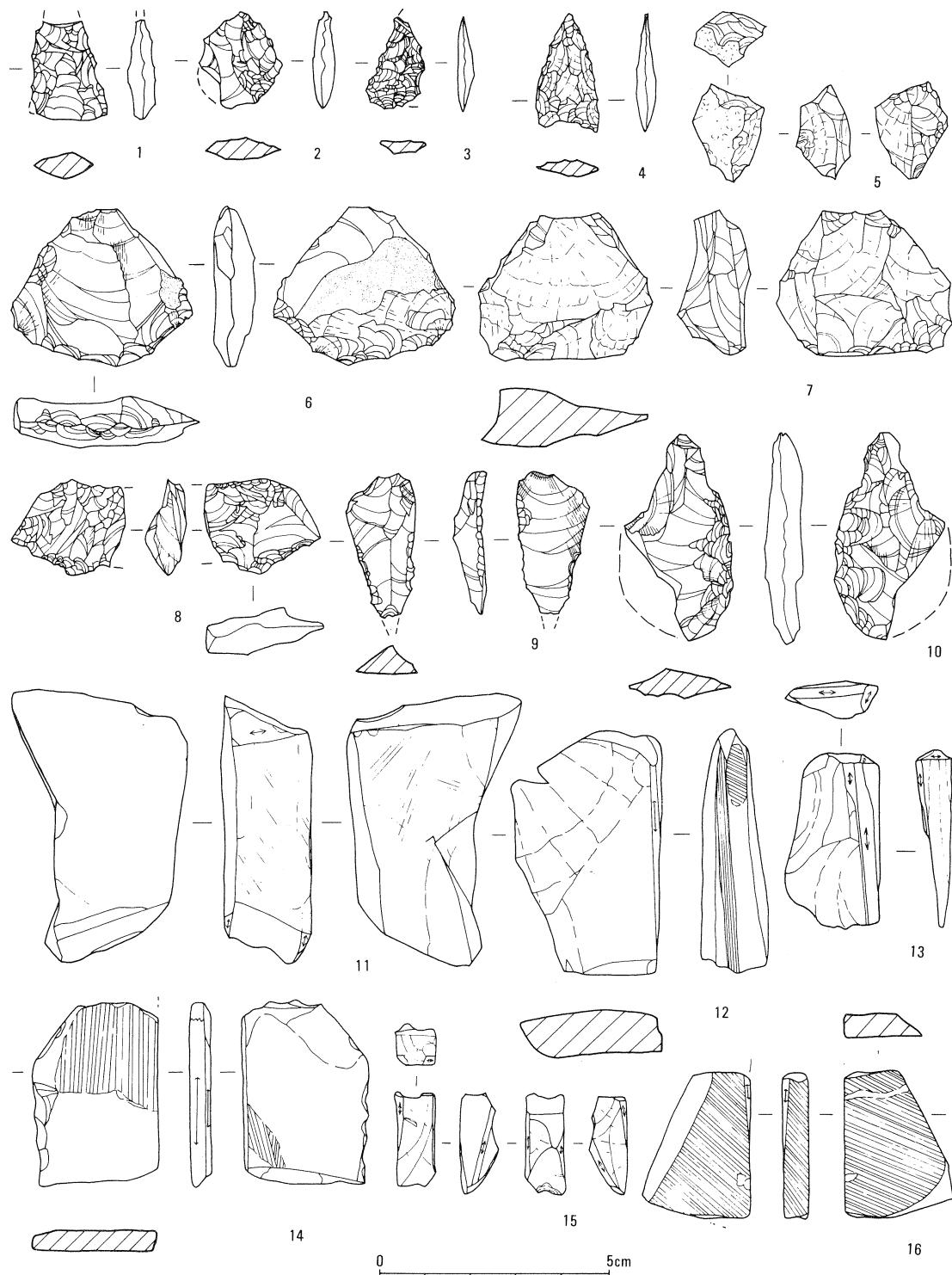
（吉岡七江）



第36図 高坏形土器

成形模式図

布田遺跡



第37図 布田遺跡III区 S D 12下層出土遺物(5) 7/10

第5表 布田遺跡III区 S D12石器石製品計測表

插図番号	遺物名	全長 (現存長) cm	最大幅 cm	重量 (現重量) g	色調	石質	備考	写真番号
34—1	スクレイパー	8.5	7.4	(135.0)	暗灰色	流紋岩		22—11
2	"	(6.7)	11.0	(94.5)	淡茶色	安山岩	自然面残す	12
3	磨製石斧	17.2	6.1	639.8	淡緑色	砂岩	大型蛤刃	14
4	扁平片刃石斧	(5.9)	1.5	(10.4)	明緑灰色	不透明	破片	13
5	砥石	20.1	13.9		灰白色	流紋岩質凝灰岩	両面使用	15
6	石皿	(9.1)	10.6		緑灰色	玄武岩	片面使用	
7	砥石	(11.5)	5.7		淡茶灰色	流紋岩	両面使用	
35	"	44.5	15.8		灰色	玄武岩	片面使用	
37—1	石鎌	(2.1)	1.6	(1.7)		黒曜石	平基式	22—2
2	"	2.05	1.8	(1.3)		ク	未成品	4
3	"	(2.0)	1.2	(1.51)		ク	"	3
4	"	2.6	1.4	1.2	灰色	硬質砂岩	0.25、0.15(脚長)	1
5	石核	2.1	1.6		暗黄色	めのう	自然面残す	
6	スクレイパー	3.5	4.0		ク	玉髓	"	22—9
7	石核	3.1	3.7		茶褐色	めのう	打面調整残す	10
8	楔形石器	(2.1)	2.5			黒曜石		
9	刀器	(3.1)	1.5			ク		22—7
10	"	(4.4)	2.3			ク	未成品	8
11	管玉未成品	5.9	3.8		明緑灰色	緑色凝灰岩	施溝3箇所	24—14
12	"	5.3	3.3		ク	ク	" 1 "	
13	"	3.8	2.1		ク	ク	" 3 "	24—10
14	"	4.0	2.8		ク	ク	" 2 "	12
15	"	2.1	0.85	2.0	ク	ク	" 4 "	15
16	"	(3.2)	2.3		ク	ク	全面研磨	11

石器（第34図～第37図、図版22—1～15）

石鎌、砥石、石皿類を中心に刃器、石核、大型蛤刃石斧等が出土している。

石鎌（第38図1～4） 1～3までは黒曜石製、4は硬質砂岩製の打製石鎌。1は先端部が欠けている。基部は平基式で、第1次剥離面を残しながら側縁部に粗い調整を施す。2、3は未成品で、長さは2cm程である。いずれも粗い剥離調整が施され、不整形である。整形時に折損したものと思われる。4は浅いわたりをもつ完形品。側縁部が直線的で、二等辺三角形を呈する。全面に丁寧な剥離調整が行なわれている。

石核（同図5・7） めのう製の石核で、5は長さ2.1cm、7は3.1cmを測る。両者とも剥離方向は一定でない。5には自然面を残す。

小形スクレイパー（同図6） やや身の厚い玉髓製で、一部に自然面を残す。両面刃部付近と裏面の頭部に粗い調整剥離を加える。

楔形石器（第38図8） 小形の黒曜石製の剥片を使用。両面ともに第一次剥離面を残しながら縁部に上下方向から細かい調整剥離を加え、裁断している。

刃器（同図9・10） 9は、材質は黒曜石製で長さ3.1cmを計り縦長の剥片を使用している。両側縁部に細かな剥離がみられる。10は、黒曜石製で、厚味のある縦長の剥片を使用している。中央面

布田遺跡

に第一次剥離面を大きく残し、側縁部に比較的細かな二次調整を加える。裏面には、やや粗い剥離加工を施している。

スクレイパー (第34図1・2) 1は、流紋岩製で縦長の剥片を使用している。全面に粗い剥離加工を施す。刃部付近は階段状に剥離している。2は、全長6.7cmを測る安山岩製の縦長の剥片で、一部に自然面を残す。側縁部には細かな使用痕が残る。

磨製石斧 (同図3) 体部が断面楕円形の砂岩製大型蛤刃石斧である。刃部が一部欠けているが、ほぼ完形品。基部に打裂調整を加えている。全長17.2cm、重さ639.8gを測る。風化のため磨耗が著しい。

扁平片刃石斧 (同図4) 材質は風化が著しいため不明。厚さ0.8cmで、断面はほぼ長方形を呈す。全面研磨して、片面に刃をつくり出している。

砥石 (同図5・7、第35図) 5は流紋岩質凝灰岩の自然石を使用している。砥面中央部に長さ6.6cm、深さ0.8cm、幅1.7cmのU字状の溝が走り、内部は磨滅している。また、溝部周辺や裏面も使用のための磨滅が著しく、特に表面には擦痕も残る。7は、流紋岩製の破片。両面の使用が認められるが、表面はやや凹み、縦横に擦痕が残る。第35図は長さ44.5cmを測り、玄武岩製の自然石を使用する。片面のみ使用されている。

石皿 (第34図6) 現存長9.1cmを測る。玄武岩製。上面の浅いくぼみを石皿として使用している。

管玉未成品 (第38図11~16、図版24-10~25)

いずれも緑色凝灰岩製である。11・12は分割段階の未成品で、特に11は施溝が数個所に認められる。13・14・16は板状のもので、14・16には研磨が施されている。15はやや硬質の石材でやや縁が深い。方柱状を呈し、四個所に施溝痕が残る。研磨はない。

(片岡詩子)

(b) 住居跡状遺構

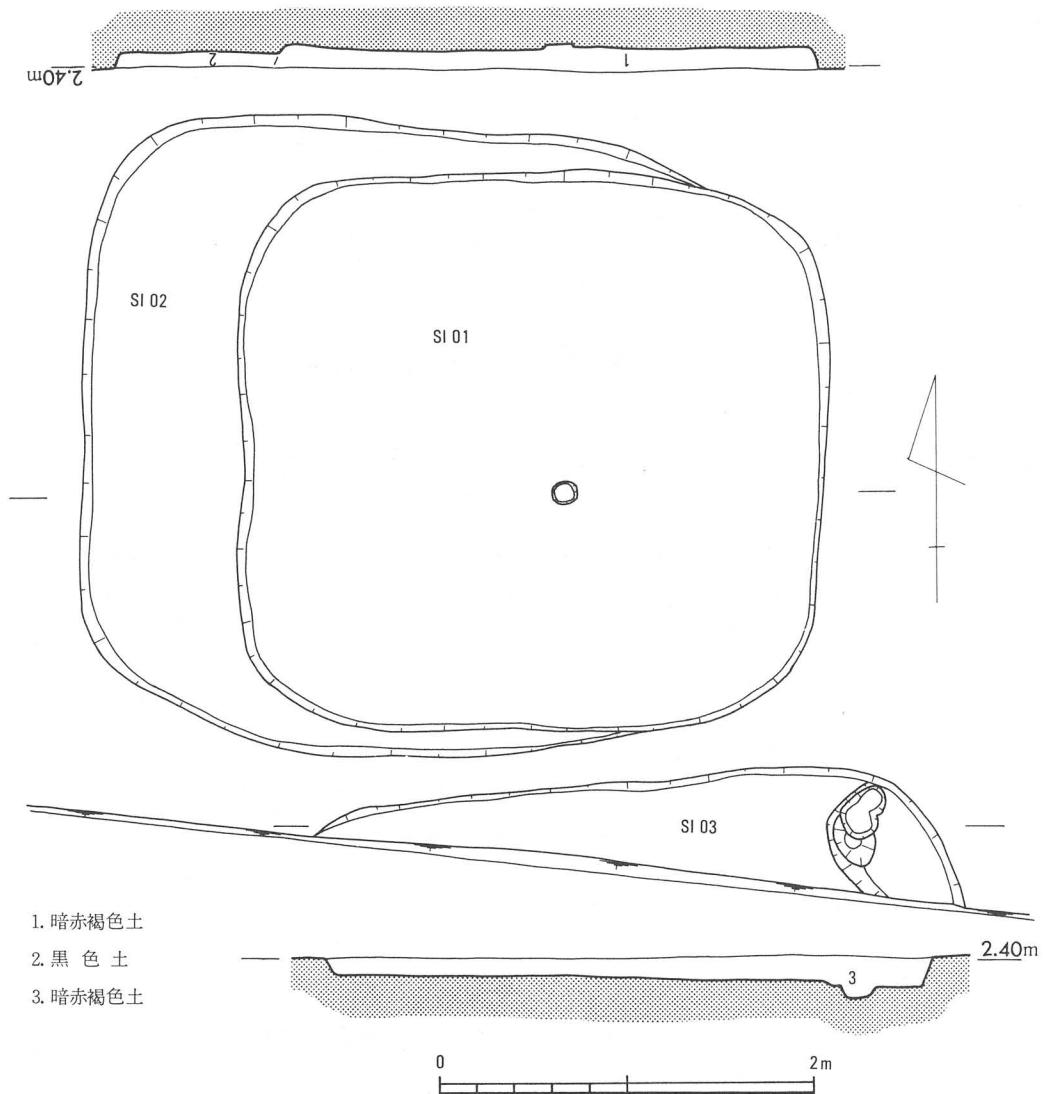
III区南端で4つの落ち込みを確認する。S I 04のほかは特に遺物もなく、特に住居跡と断定するには弱いが、取りあえず住居跡遺構としておく。

S I 01・02(第39図、図版14-1)

S I 01は一辺296cmの小形のものである。隅丸方形を呈する。ほぼ中央に柱穴がひとつ検出された。S I 02は01の西側に少しずれて検出された。一辺340cmでやはり隅丸方形である。遺構内にピットはなく、遺構外の四隅に柱穴があるが、それがこの遺構に伴うかどうかはわからない。

S I 03 (同図)

S I 01・02の南側に並んで検出された。一辺がわずかにかかっているのみである。一辺340~350cm程度になると思われる。北東隅に柱穴と思われるピットがある。



第38図 布田遺跡III区 S I 01~03実測図 1/40

III区東南隅で検出された。一部しか現れていないが、一辺360cm程度の隅丸方形状になると思われる。柱穴は発見できていない。遺構内には灰褐色の砂質土が堆積し、遺物は床面よりもやや浮いた状態で検出された。

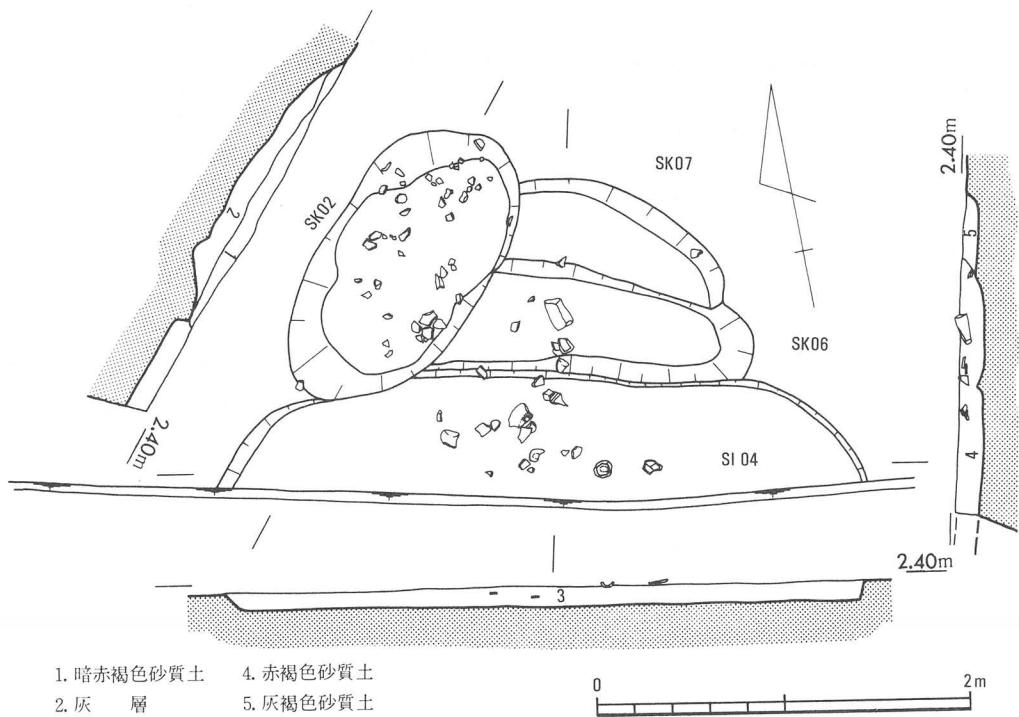
土器（第40図、図版22—16～21）

出土遺物は土器だけである。壺形土器と甕形土器がある。

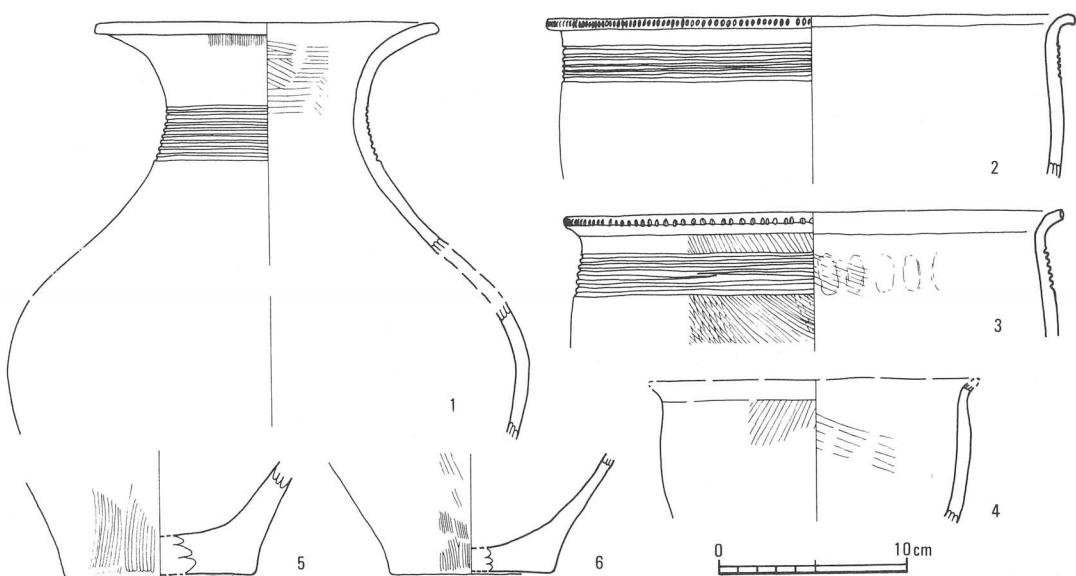
壺形土器（1） 漏斗状に大きく開く口縁である。頸部に籠描きの平行沈線文が回る。胴部やや張る。

甕形土器（2～4） やや内傾ぎみの胴部上端に短く外反する口縁がつく。口唇に刻目、口縁下に平行沈線文を施すものと無文のものがある。

布田遺跡



第39図 布田遺跡III区 S I 04およびS K02・06・07実測図 1/40



第40図 布田遺跡III区 S I 04出土遺物 1/4

(c) 土 壤

III区から計14個の土壙が検出された。ほとんどが調査区の南端に片寄っている。平面橢円形を呈し、掘込みも浅い。半数以上の土壙から遺物が出土している。検出順に番号を付けた。

SK01 (第41図、

図版14—2)

SD06とSD12の間で検出された、長径66cm、短径55cmの楕円形を呈し、深さ約19cmである。土壌内は3層に分離でき、上から灰褐色土、灰褐色粘質土、砂礫層と堆積する。砂礫層は、1~5cmの円礫と粗い砂で構成される。これは土壌を掘り込んだのち、円礫を敷きつめたものと考えられる。砂礫層上面から遺物が出土している。

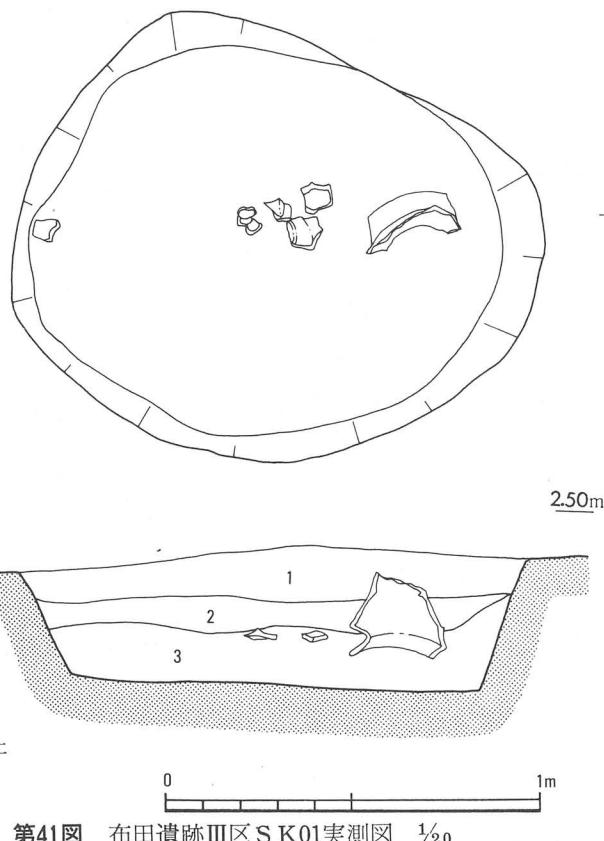
土器 (第42図、図版22—22) 土師器と弥生土器がある。1は土師器の口縁で、頸部からゆるやかに外反し、一度屈曲して垂直に立ち上がって複合口縁状を呈する。古墳時代中期である。2は弥生土器の底部片である。なお、遺物整理段階で弥生後期頃と思われる甕形土器片1が紛失している。

SK02 (第39図、図版14—3)

長径166cm、短径88cmの楕円形に掘り込まれており、深さは約18

cmである。上層に暗赤褐色砂質土、下層に炭火物を含んだ灰層が堆積する。焼土はない。焼却物を捨てたものか。灰層から弥生土器と管玉未成品が出土している。

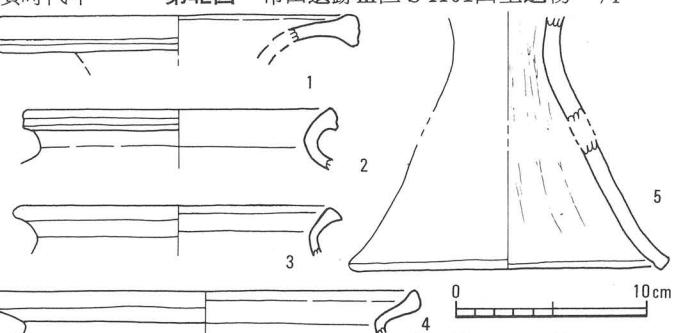
土器 (第43図、図版22—23~27) 壺、甕、高環形土器がある。1は壺の口縁で端部下端に沈線状のものが回っている。2の甕形土器にも同じ特徴がある。3・4は口縁端上部をつまみ上げるもの



第41図 布田遺跡III区SK01実測図 1/20



第42図 布田遺跡III区SK01出土遺物 1/4

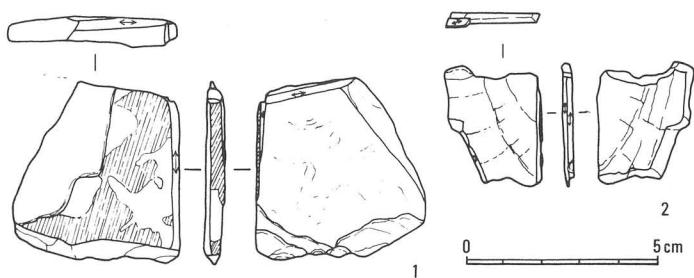


第43図 布田遺跡III区SK02出土遺物(1) 1/4

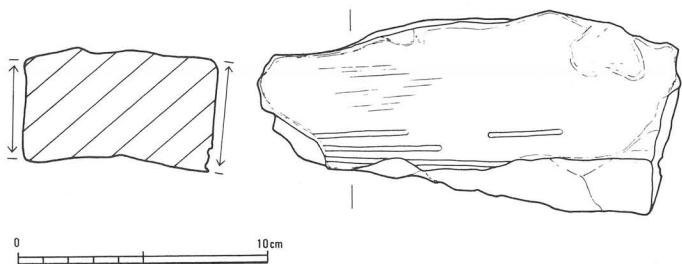
布田遺跡

のである。高壙は脚柱部のみである。SD10の第4段階に相当する。

管玉未成品（第44図、図版24—16・17）2点出土する。どちらも緑色凝灰岩製の板状未成品で、風化著しく明るい緑灰色を呈する。1は厚さ0.7cmで長さ4.8cmである。一方の面が研磨されており、二辺に擦切の施溝がある。両面に行なわれている部分の側面には研磨が施されている。さらに施溝して柱状の形割品を取るためのものである。2は研磨は施されていないが、二辺に施溝がある。長さ2.7cm、幅2.6cmであるが、厚みが0.3cmしかなく、これから成品を造るには薄すぎるといえる。



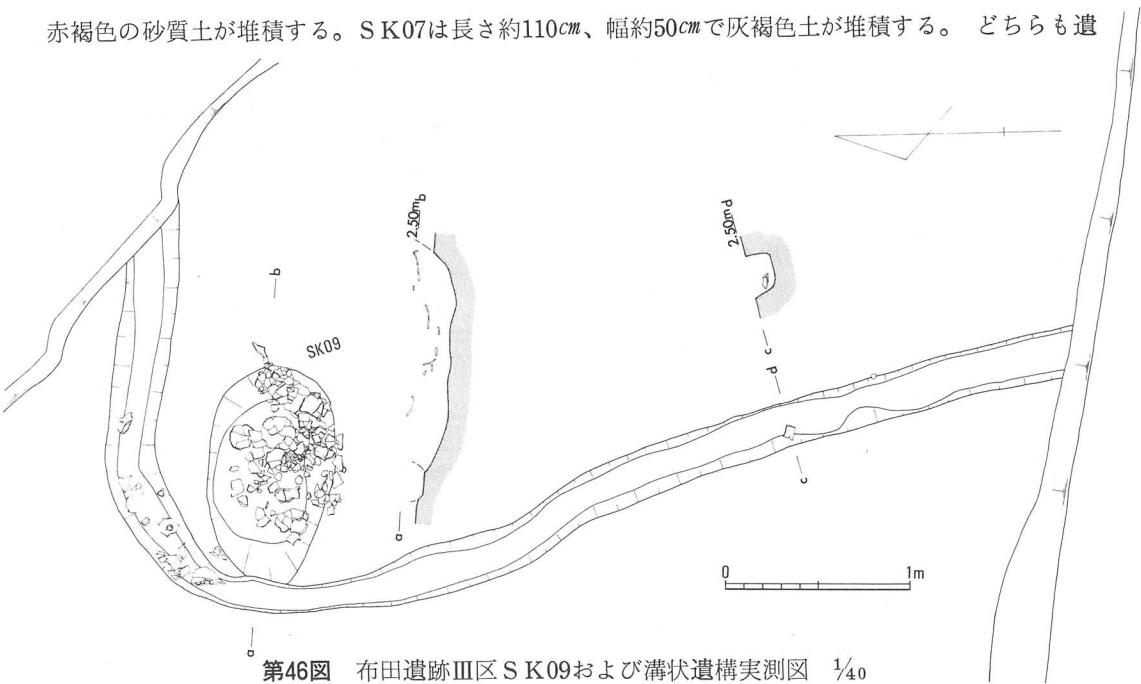
第44図 布田遺跡III区SK02出土遺物(2) 1/2



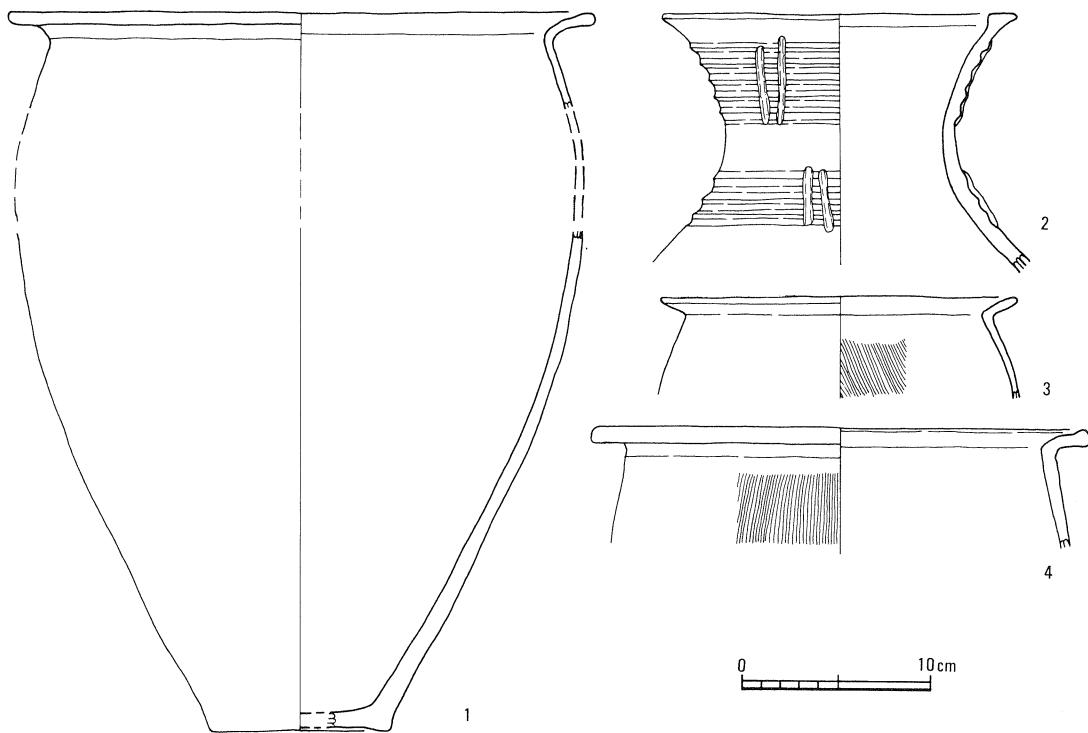
第45図 布田遺跡III区SK06出土遺物 1/3

SK06・07（第39図）

SK02とSI04に切られた状態で検出された。SK06は残存部で長さ174cm、幅約60cmである。赤褐色の砂質土が堆積する。SK07は長さ約110cm、幅約50cmで灰褐色土が堆積する。どちらも遺



第46図 布田遺跡III区SK09および溝状遺構実測図 1/40



第47図 布田遺跡 III 区 SK09 出土遺物 1/4

物をわずかに含んでいるが時期のわかるものはない。SK06から砥石が1点出土している。

砥石（第45図） 全長16.9cm、現存幅8.1cmで厚さが7.7cmである。表裏二面が砥ぎ面である。一方に幅2～3mmの溝が数条はいる。断面半円形になっている。凝灰質砂岩製。

SK09（第46図、図版15—1）

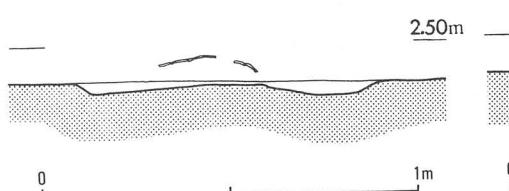
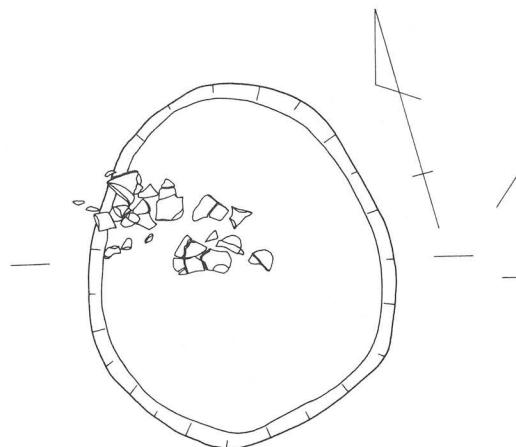
SD12東端南側で検出。耕作土を除去した段階で土器が集中して出土していたが遺構は確認できなかった。土器を取り上げたのち、土壙であることがわかった。土壙現存部分の長さは約115cmで、幅が約65cmである。この土壙を囲むように、幅25cm、深さ15cm程度の溝が検出されたが、両者の関係を明らかにすることは出来なかった。SK09から土器が出土する。

土器（第47図、図版22—28～31） 壺形土器と甕形土器が出土している。2は漏斗状に直線的に開いた壺の口縁で、端部を肥厚させ、上面に平坦部をつくる。外面には貼付突帯が回り、それに直行するように粘土紐を貼り付けている。1は甕形土器で口縁くの字状を呈する。胴部はさほど張らず、底部はやや上げ底となる。SD10第4段階の土器に相当する。

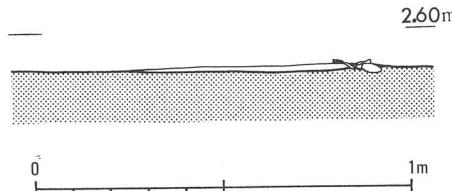
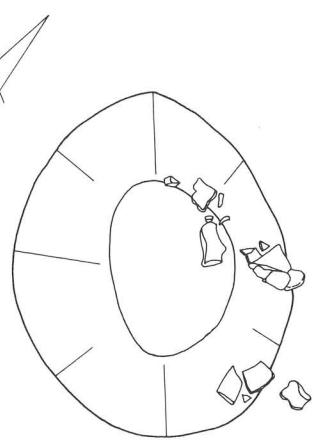
SK11（第48図、図版15—2）

長径95cm、短径80cmの楕円形を呈する。上部が削り取られており、ほとんど残存していない。甕の胴部片が出土するが時期不明である。

布田遺跡

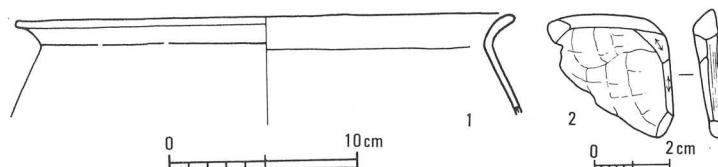


第48図 布田遺跡III区SK11実測図 $\frac{1}{20}$



第49図 布田遺跡III区SK12実測図 $\frac{1}{20}$

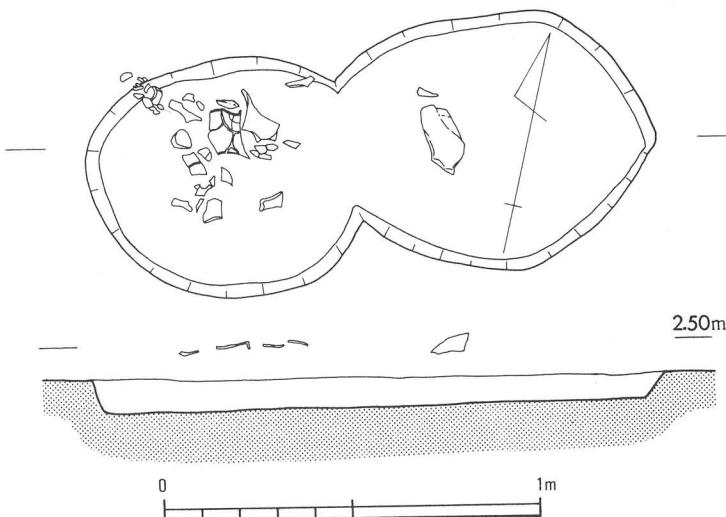
SK12
(第49
図、図
版15—
3)
長径90
cm、短径
75cm以上
の橢円形
の土壙と
思われる。
ほとんど
残ってい
ない。土
器と管玉
未成品が出土している。



第50図 布田遺跡III区SK12出土遺物 $\frac{1}{4}, \frac{1}{2}$

土器 (第50図1、図版
22—32) 薦形土器で
ある。頸部が丸みをもつ、
くの字形の口縁の土器で
ある。口縁端は丸く收め
られ、器厚も胴部と変化
ない。

管玉未成品 (同2、図
版24—9) 一辺に施溝
のある板状未成品である。
長さ3.3cm、幅3.2cmで厚
さが0.6cm程度である。
施溝は一方の面からだけ
で、打割面は研磨して整
えられている。



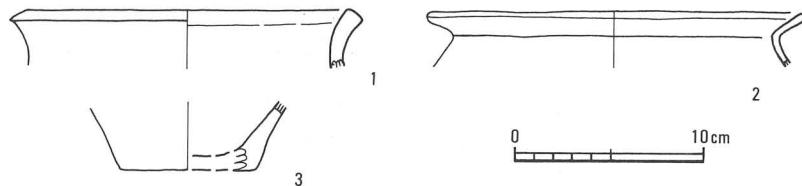
第51図 布田遺跡III区SK13・14実測図 $\frac{1}{20}$

SK13・14 (第51図、
図版16—1)

ふたつの土壙が並んでいる。全体の長さは 150cm で短径は 60cm 程度である。深さ 10cm 弱で切り合ひ関係も掘むことができなかつた。SK13からは土器片などがまとまって出土し、SK14には玄武岩の風化礫が含まれるだけであった。

土器（第52図、

第52図 布田遺跡III区 SK13出土遺物(1) 1/4



図版22—33・34）甕形土器と底部片である。
1 は短く外反した肉厚な口縁で端部を四角く造り出す。2 は口縁端をつまみ上げている。

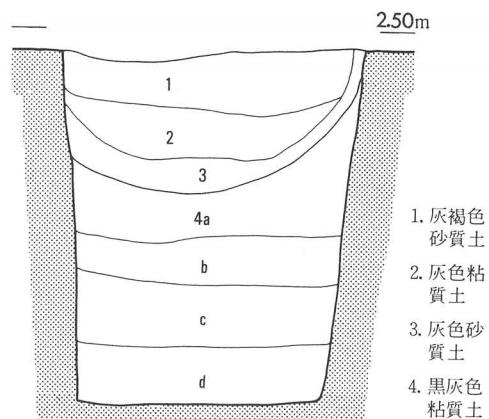
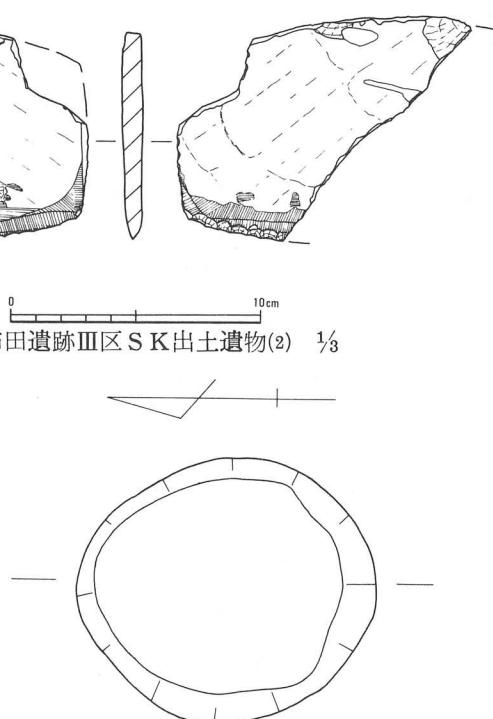
石器（第53図、図版24—8） 大形石庖丁片が出土する。現存長 12.8cm、幅 9.0cm、厚さ 0.8cm で安山岩の板状の石材を利用する。背部は弧状をなし、わずかながら二次加工を施す。刃部側は研磨を施し、片面にさらに押圧剝離を密に加えて刃部を鋸歯状に造り出している。刃部もやや丸みを持つと思われる。背部側端が四角く欠けているが、これは意図的に打ち欠いた可能性もある。（足立克己）

その他、東南隅を拡張したところ土壙 2 を検出した。SI04のすぐ南にあり、その整地内と思われる所に位置する。しかし、いずれも SI04よりも新しい時期のものである。

拡張部 SK01（第54図、図版16—2、17—1）

長径 80cm、短径 70cm のほぼ円形をなし、垂直に深く（約 90cm）掘り込まれている。搅乱

第53図 布田遺跡III区 SK出土遺物(2) 1/3



第54図 布田遺跡III区拡張部 SK01実測図 1/20

布田遺跡

を受けている上層と受けていない下層に分離できる。上層は更に3層に細分でき、その第3層目にあたる灰色砂質土から土器と勾玉等が出土する(55第図1~19、第57図1)。下層は黒灰色粘質土よりなり、更に4層に細分できる。多量の土器と木製品、土製品(第55図20~27、第56図、第57図2)が出土する。なお、出土遺物は上層下層とも大差がないので一括して説明する。

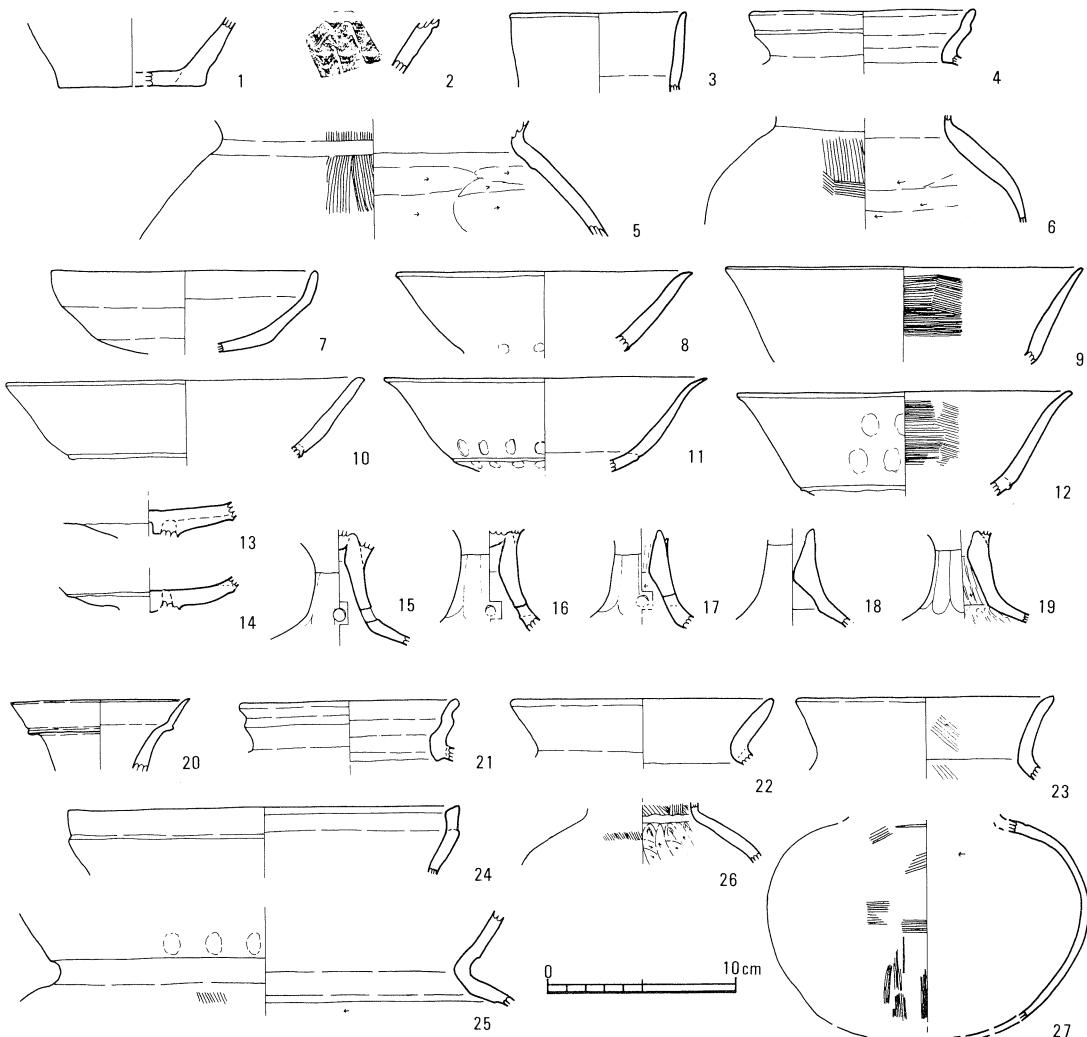
弥生土器(第55図1)

上層より底部が出土した。搅乱を受けた際に混入したと思われる。

須恵器(第55図2~20、図版23~32)

2は甕の口縁部の小破片である。20は甕で復元口径9.4cm。口縁部内面にわずかな凹部がある。口縁部と頸部との境界に鋭い突線がめぐり、無文である。山陰の須恵器編年で、I・II期のものである。

土師器(第55図3~19、21~27、第56図1~26、図版23~1~31)

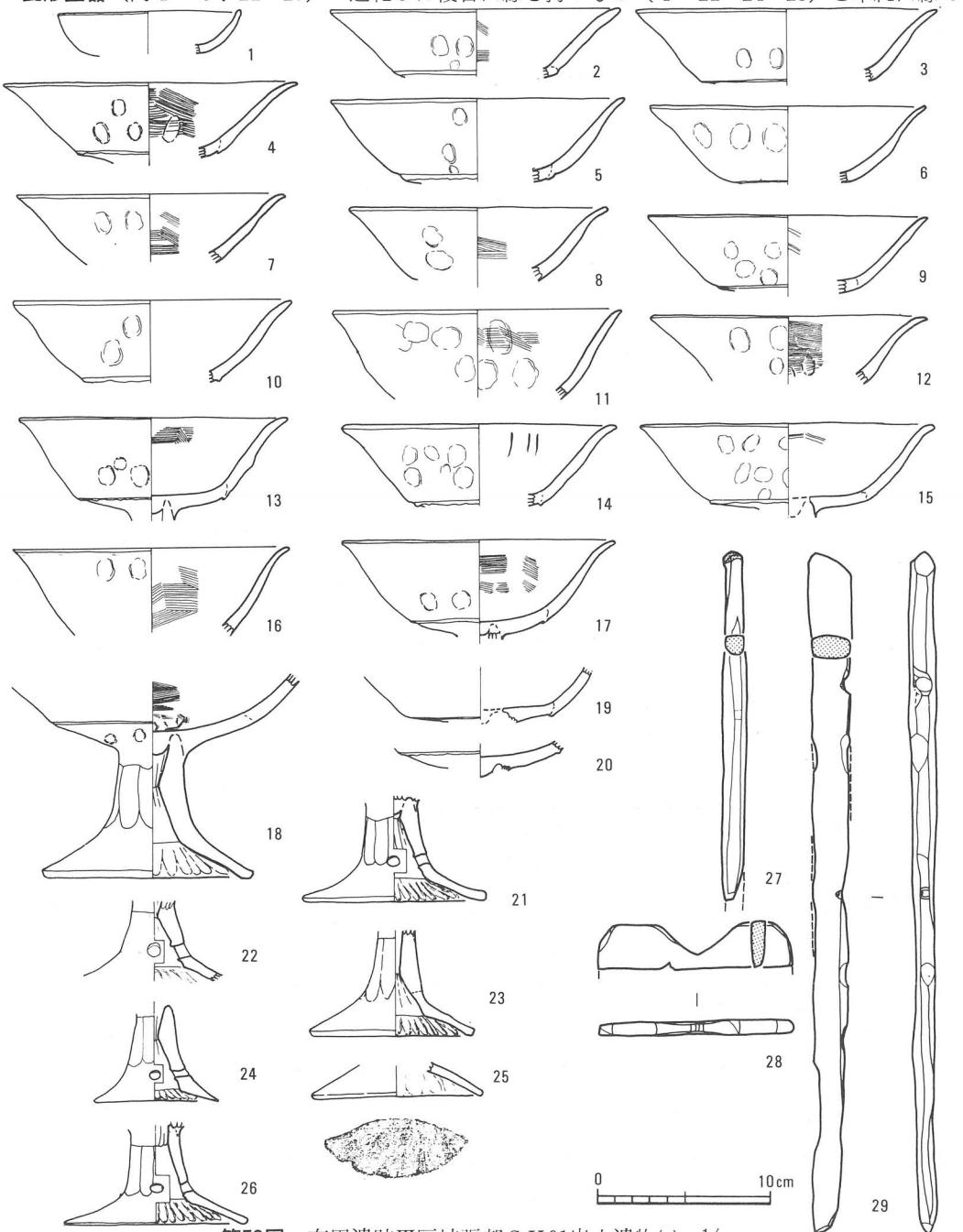


第55図 布田遺跡III区塙張部S K01出土遺物(1) 1/4

器種として壺形、甕形、壺形、高壺形土器がある。いずれも、III区 S D12上層出土土器と同じタイプであるので、各々の説明は簡略化する。また高壺形土器は、多量に出土した土器の全体の約 $\frac{2}{3}$ 以上をも占めている。

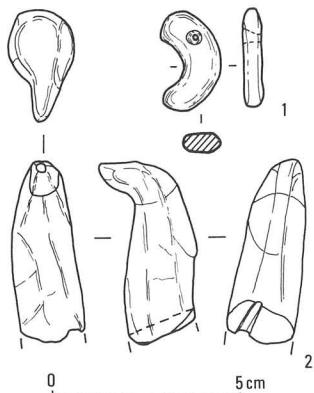
壺形土器 (第55図3) 口縁部は単純で直線的に立ちあがる。

甕形土器 (同4~6、21~27) 退化した複合口縁を持つもの (4・21・24・25) と単純口縁で



第56図 布田遺跡III区塙張部S K01出土遺物(2) 1/4

布田遺跡



第57図 布田遺跡III区塙張部
SK01出土遺物(3) 1/2

くの字状に立ちあがるもの(22・23)とがある。27は、これらの口縁部に対応する胴部であり、球形で外面に朱が塗布されている。

壺形土器(第55図7、第56図1) 復元口径14.0cm、10.4cm。第55図7は楕形で口縁部がほぼ直立する。第56図1は皿形で内外面に朱が塗布されている。

高壺形土器(第55図8~19、第56図2~26) 搅乱を受けていない下層からは、別個体と思える口縁部の破片が43個数えられた。第55図13を除きIII区SD12上層出土のものと器形、成形、調整とも全く同じであり、その説明を省く。13は他の高壺形土器と成形方法を別にし、あらかじめ作っておいた壺部を脚部に

はめ込んで作られている。

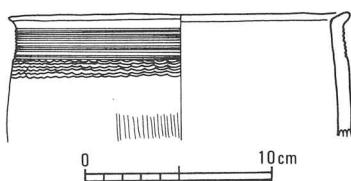
壺底部外面中央には小孔がある(図版23—28)。第56図25は脚裾部の破片で、内面に成形の際できた布目の痕が残る(図版23—29)。

木製品(第56図27~29、図版24—19~21) 7点出土し、うち3点を図示した。27は現存長20cm、幅1.3cmの棒状製品で、一端にくり込みがめぐる。28は現存長2.6cm、幅11.2cm、厚さ0.9cmの板状の製品である。両

端が加工され、中央部はU字状に削られている。用途は不明である。29は、火鑽臼で下端を欠損する。現存長39.5cm、幅2.5cm、厚さ1.5cm。炭化した孔痕が2個所認められる。

勾玉(第57図1、図版23—34)

上層より出土した。めのう製で完形である。半透明で黄褐色を呈し、長さ2.6cm、幅1.5cm、重量3gである。中央の平坦面には研磨痕が残り、紐孔を片側より穿つ。



第59図 布田遺跡III区塙張部
SK02出土遺物 1/4

異形土製品(第57図2、図版23—35)

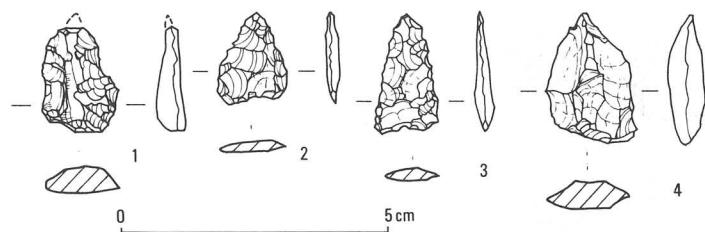
下層より出土した。下部を欠損していて現存長5.9cmである。手捏ねで頭部をつまみ出していて、下方に孔が穿れている。鳥の頭部のような形状をなすが用途不明である。

布田遺跡

その他上層より糞石らしきものが出土した（図版23—33）。

拡張部SK01は、ほぼ円形で垂直に深く掘り込まれているところから井戸状のものと思われる。その時期

は出土遺物よりIII区SD12上層と同一時期であると考えられる。土壌内から朱塗りの土器、勾玉、多数の高環形土器が出土している点は特異と言えよう。



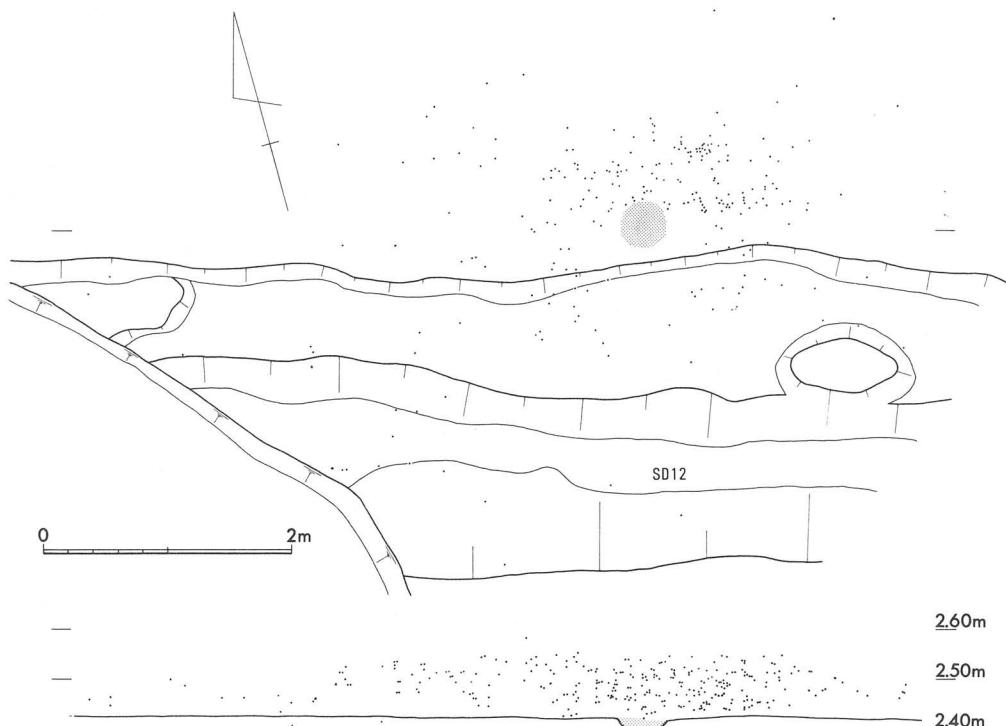
第60図 布田遺跡III区赤褐色土チップ群出土遺物 1/10

拡張部SK02（第58図、図版17—2）

SK01の東側に位置し、長径136cm、短径68cmの楕円形である。深さ20cmで赤褐色土、灰褐色粘質土が堆積し、上層からは弥生土器が出土する。図示できたのは1点で、垂直に立ちあがる胴部に、ほぼ直角に口縁部が続く。口縁下に櫛描平行沈線文が10条めぐり、更にその下には波状文がめぐる（第59図、図版23—36）。

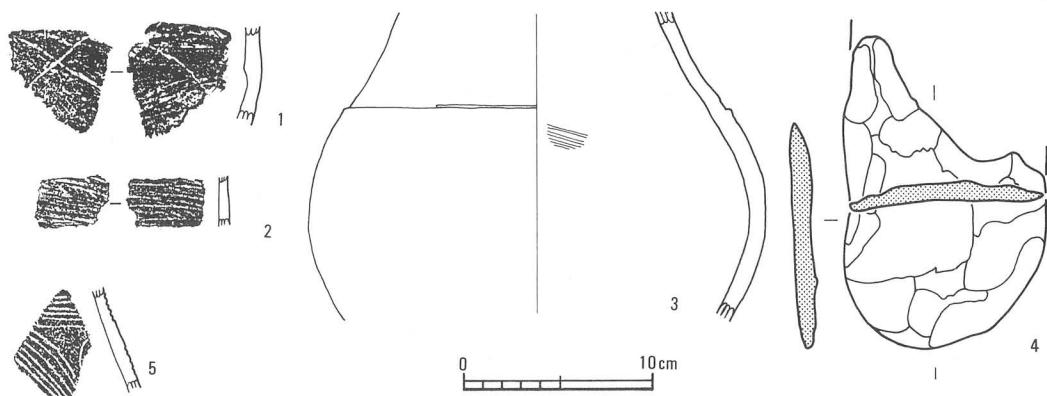
（吉岡七江）

(d) その他の遺物



第61図 布田遺跡III区赤褐色土チップ群実測図 1/60

布田遺跡



第62図 布田遺跡III区灰色砂層出土遺物 1/4

以上の遺構のほかに、特に遺溝には伴わぬが遺物の出土が2個所で認められた。

赤褐色土チップ群（第61図）

S D12西端部の北側で赤褐色土上面から多数のチップフレイクが検出された。耕作土を除去した段階からすでに多数のチップが出土していたが、チップの最も集中するあたりに径40cm程度の円形に広がる焼土と炭化物を検出しただけで、ついに遺溝は発見できなかった。チップ類はS D12北辺にそって幅1.5m、長さ4mの範囲にわたって散在しており、出土レベルも15cm程度の幅がある。一部はS D12の埋土からも発見された。チップ類は総数300点あまりで、石材は、黒曜石、赤めのう、青めのう、硬質砂岩等である。特にめのう類が半数以上を占める。遺溝は検出できなかったが、石器あるいは玉作の工房跡の可能性が強い。時期不明。

石鎌（第60図、図版22—35～38）チップ群の中から石鎌が4点出土した。1は黒曜石製、その他は硬質砂岩製である。全長1.67～2.4cm、最大幅1.2～1.62cmで、2・3は厚さ0.2と0.3cm、重さが0.5と0.6gである。1と4は肉厚で二次調整も不完全なところから未成品と考えられる。

灰色砂層

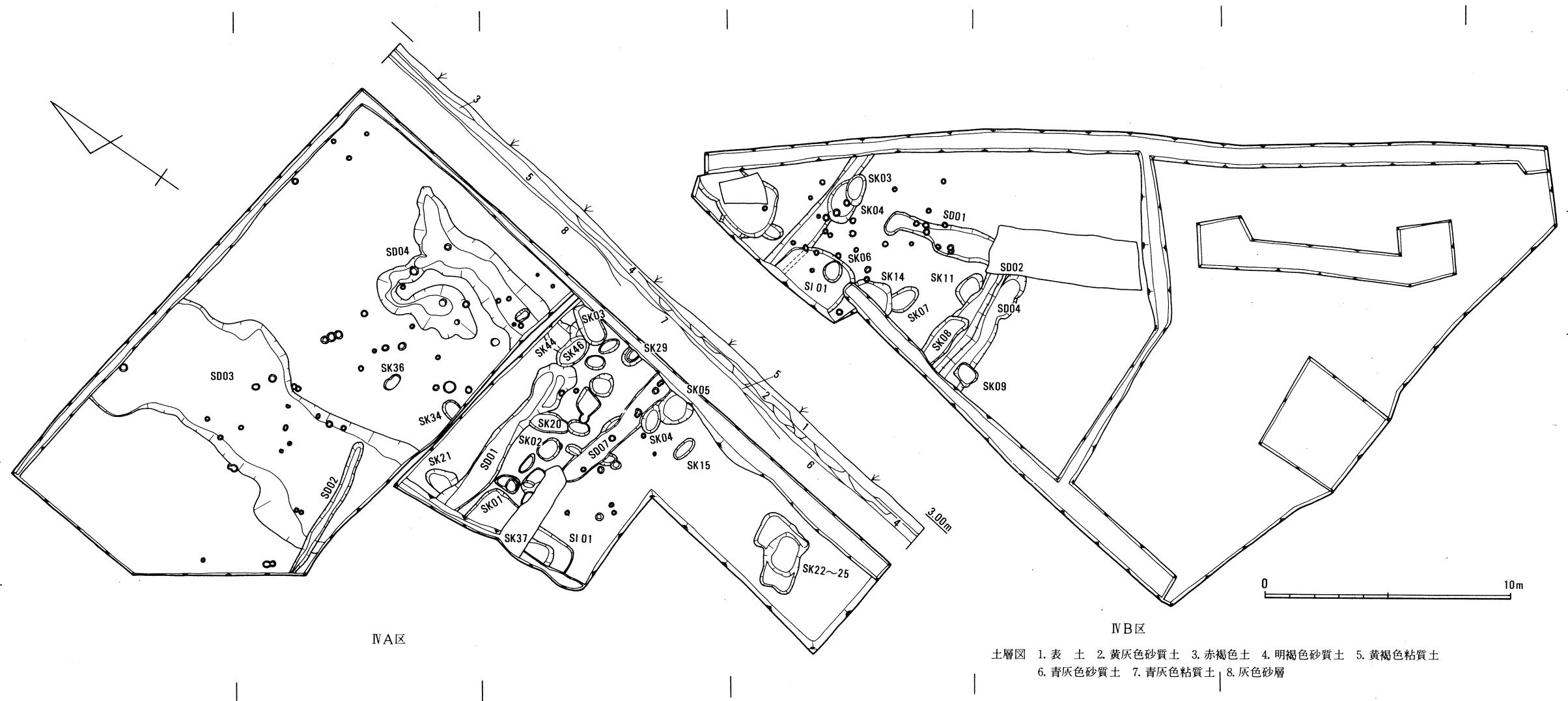
III区の東南隅を土層観察のため掘り下げたところ、白色粘土（第VII層）の上に広がる灰色砂層上部から遺物が少量出土した。

縄文土器（第62図1・2、図版23—39・40）2点出土する。どちらも内外面に横ないし斜めに二枚貝条痕を施す。焼成良好な方で灰色～黒色を呈している。晩期頃と思われる。

弥生土器（同図3・5、図版23—41・42）壺形土器が2点出土している。3は球形に近い胴部片で肩部外面に段をもつ。一部に笠で明確に造り出すところがある。内外面とも笠磨き。5も肩部片で笠描きの平行沈線と木の葉文がはいる。S D10第1段階の土器よりも古いものである。

木製品（同図4、図版24—18）鋤状のものである。現存長16.3cmで幅10.9cm、厚さが約1cmある。表面に削り痕が残るが方向は不規則である。側辺から先端にかけては磨耗が著しく丸くなっている。

布田遺跡



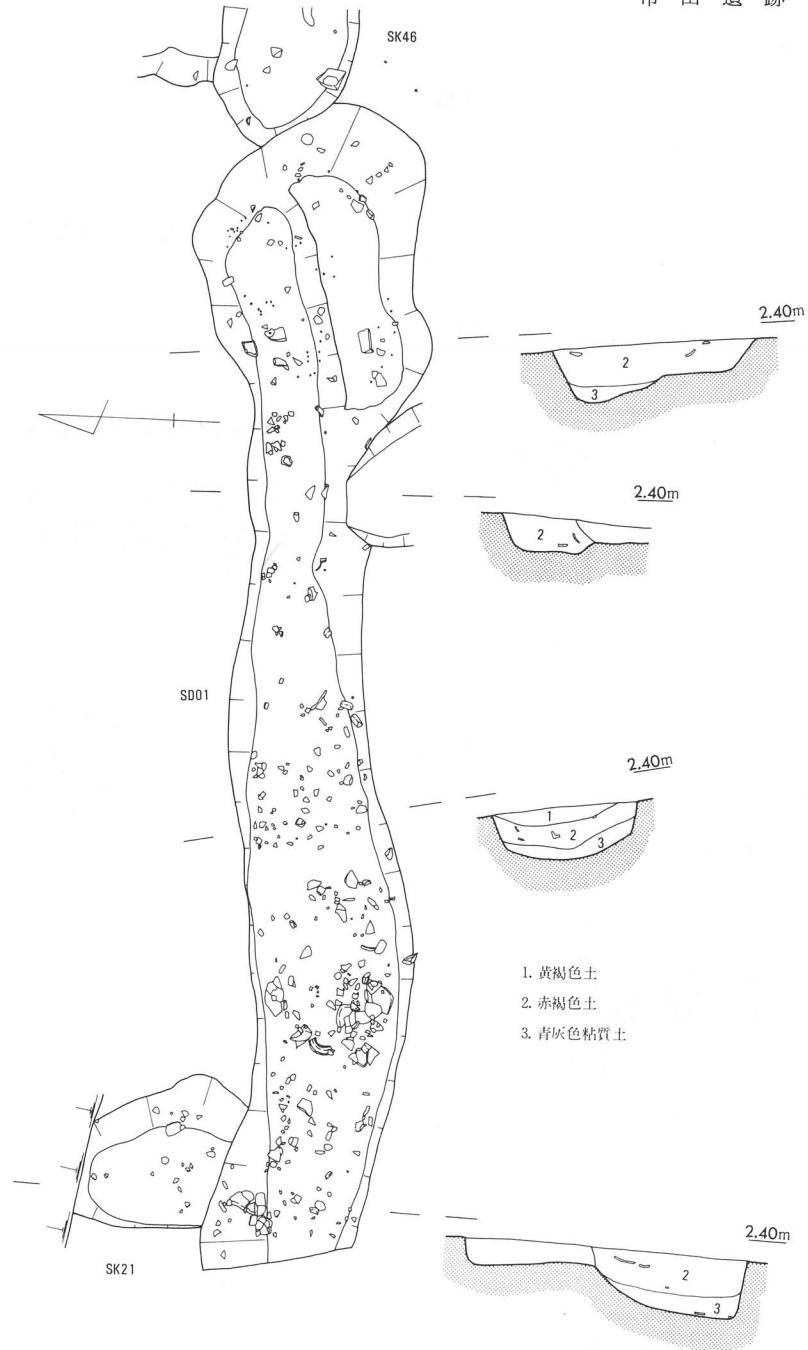
第64図 布田遺跡 IV区遺構配置図

IVA区の遺構 と遺物

IVA区は北半で赤褐色土、南半では明褐色砂質土に遺構が掘り込まれている。北半はS D03・04と柱穴群が中心で、土壙群は南半に集中している。IVA区からは、掘立柱柱穴群、溝状遺構7、土壙33、住居跡状遺構1を検出した。(第64図)

(1) 溝状遺構

総数7本の溝状遺構を検出したが、そのうちS D05・06の2本は調査段階では遺構とわからず、土層観察中に発見した。S D03・04は南北方向に、その他はほぼ東西に向いている。

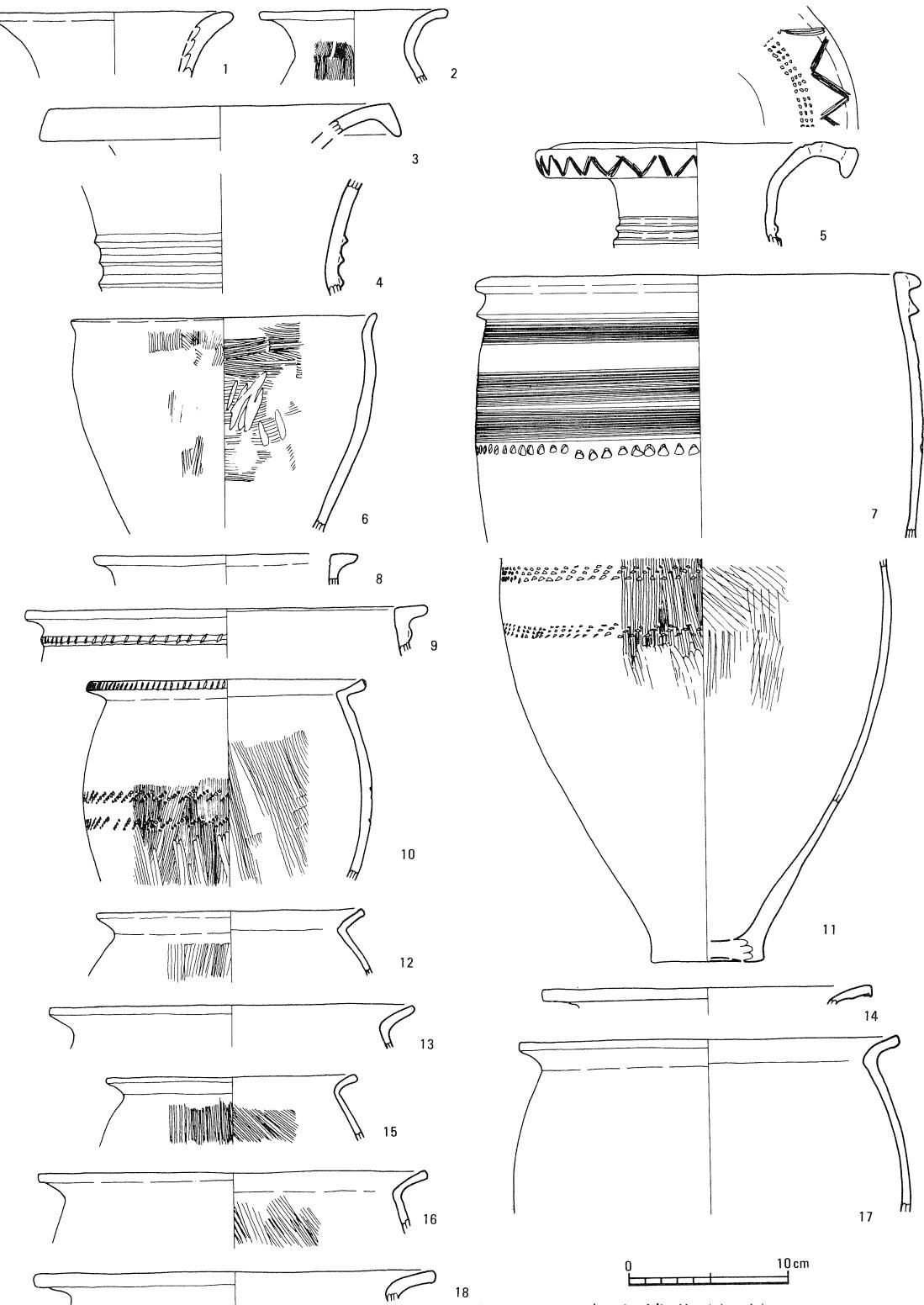


S D01 (第63図、
図版25-1)

第63図 布田遺跡IVA区 S D01実測図 1/50

調査区中央部に東西に向いて位置する。全長約7.6cmで幅0.8~1.0mである。東端はやや広くなつて1.4m程度あり、南側が2段になっている。発掘当初この部分は、土壙が数個重なつたように見えたが、土層観察の結果、土色が少しずつ変化しているだけと判明した。西端でSK21を切っているが、東側のSK20とSK46との切り合い関係は、充分に擱めなかつた。深さ25~30cmで、堆積

布田遺跡



第65図 布田遺跡 IV A 区 S D 01 出土遺物 (1) 1/4

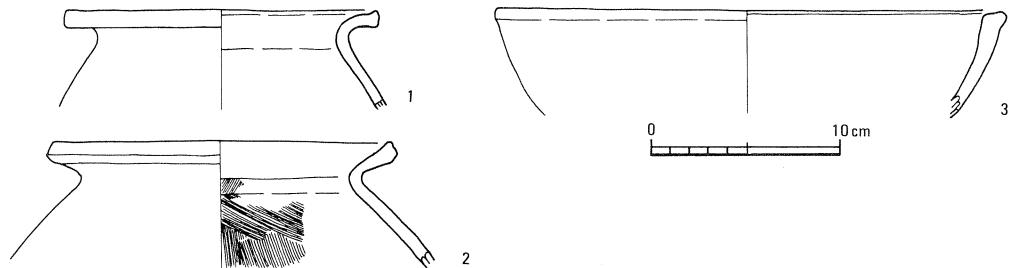
土は3層あり、上から黄褐色土、赤褐色土と青灰色粘質土である。第3層は水分を多く含み、炭火物が多く混入する。東側で第2層が厚く堆積し、第3層はほぼ均等に広がっている。遺物は各層から出土するが、第2・3層に多い。出土遺物には、弥生土器をはじめ、石器、石製品、土製品、石屑類などがあり、遺物は豊富である。

土器（第65・66図、図版32—1～14）

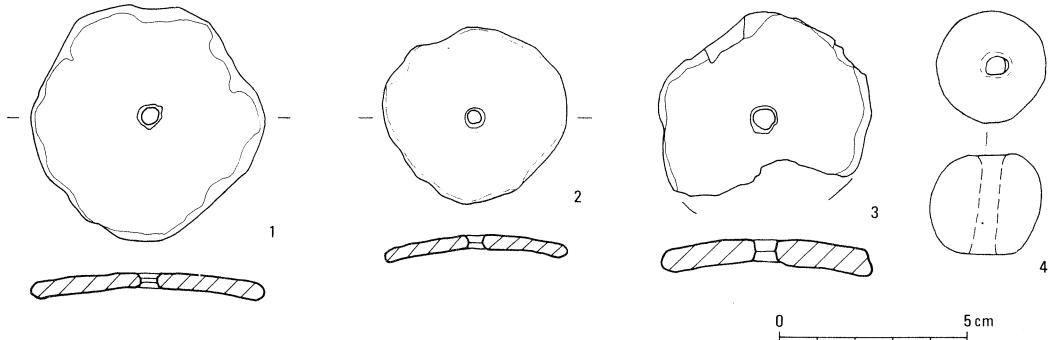
壺、甕類の他、高環が1点出土するが、大半が甕形土器である。

壺形土器（第65図1～5）　すべて破片である。2は小形品で器壁薄く、口縁の外反が大きい。3～5は朝顔状に開く口縁で、5は口唇を櫛描きの鋸歯文で飾り、口縁上面には鋸歯文に加えて刺突文が施されている。頸部は貼付突帯で飾る。

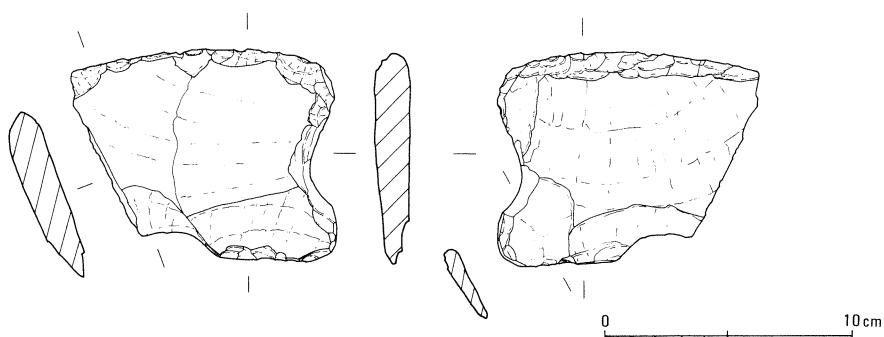
甕形土器（第65図6～18、第66図1・2）　2は口縁上端外面に粘土紐を貼り付け、小さな逆L字形の口縁を造り出す。口縁下には断面三角形の貼付突帯を付し、その下に櫛描きの平行沈線文と



第66図 布田遺跡IV A区 S D01出土遺物(2) 1/4



第67図 布田遺跡IV A区 S D01出土遺物(3) 1/2



第68図 布田遺跡IV A区 S D01出土遺物(4) 1/3

布田遺跡

三角形の刺突文を施している。焼成が悪く黄桃色を呈し、かなりもろいものである。S D10の第3段階の甕形土器に相当するものである。8・9も同様に上部に平坦面を持つ口縁である。10~18はいわゆる、くの字形口縁を呈するもので、頸部内面が丸いものと稜のあるもの、口縁端部が丸く収まるものと上端をつまみ上げるものなど各種がある。胴部には、最も張ったあたりに櫛による刺突文を数段回らせるものがある(10・11)。口唇部に刻目を施すもの(10)もあるが稀である。第66図1・2は口縁端を肥厚させるものである。文様はない。

高坏形土器(第66図3) 口縁端をわずかに肥厚させ、上面に平坦面をつくる。直口で坏部がやや深くなるようである。文様はない。

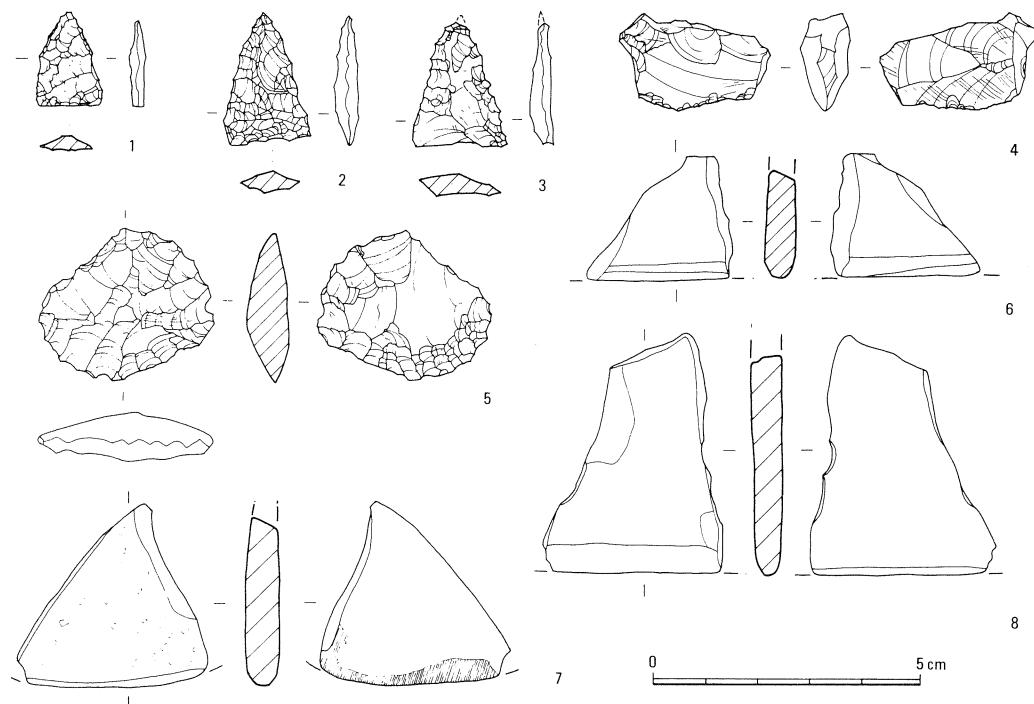
S D01出土の土器はIII区 S D10の第2~3段階に相当するが、第2段階のものはごく少量で中心は第3段階のものである。

土製品(第67図、図版38-12~15)

紡錘車3点、土玉1点が出土する。紡錘車はいずれも甕形土器の胴部片を転用したもので、1~3の計測値はそれぞれ、直径6.3cm、4.9cm、5.7cm、重量20.2g、10.7g、20.0gである。穿孔はいずれも両面からで、周縁は磨耗して丸みを帯びる。4は土玉で長さ2.7cm、最大径3.0cmである。焼成前に一方向から穿孔している。きれいな球形をなさず、平坦面が多い。

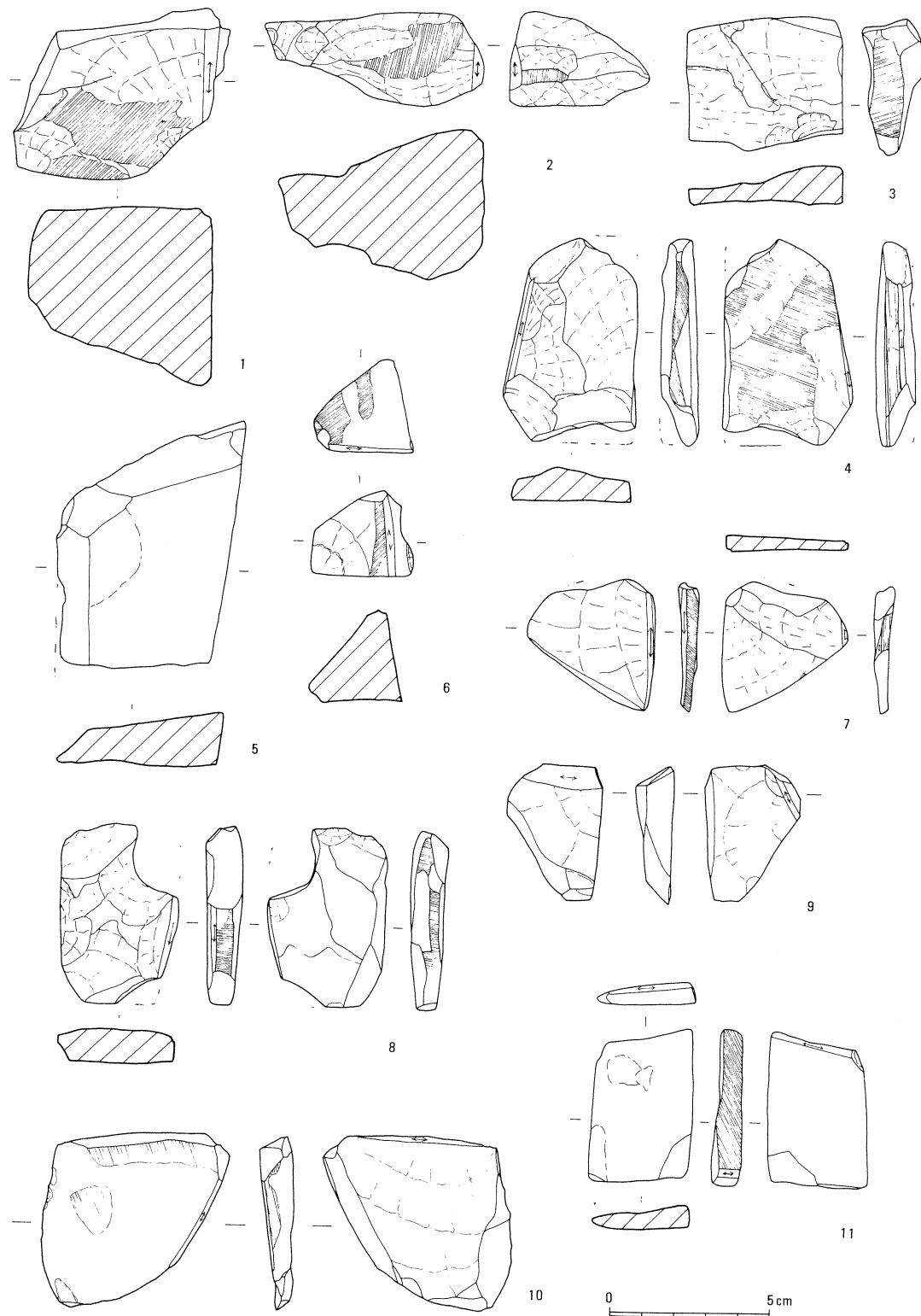
石器(第68、69図、図版30-15~20)

石鏸、刃器、石鎌、石鋸が出土する。石鎌は扁平な流紋岩を使用して背部と基部に二次調整を加える。端部に抉りを入れて基部を茎状につくり出す(第68図)。石鏸はいずれも黒曜石製の平基式



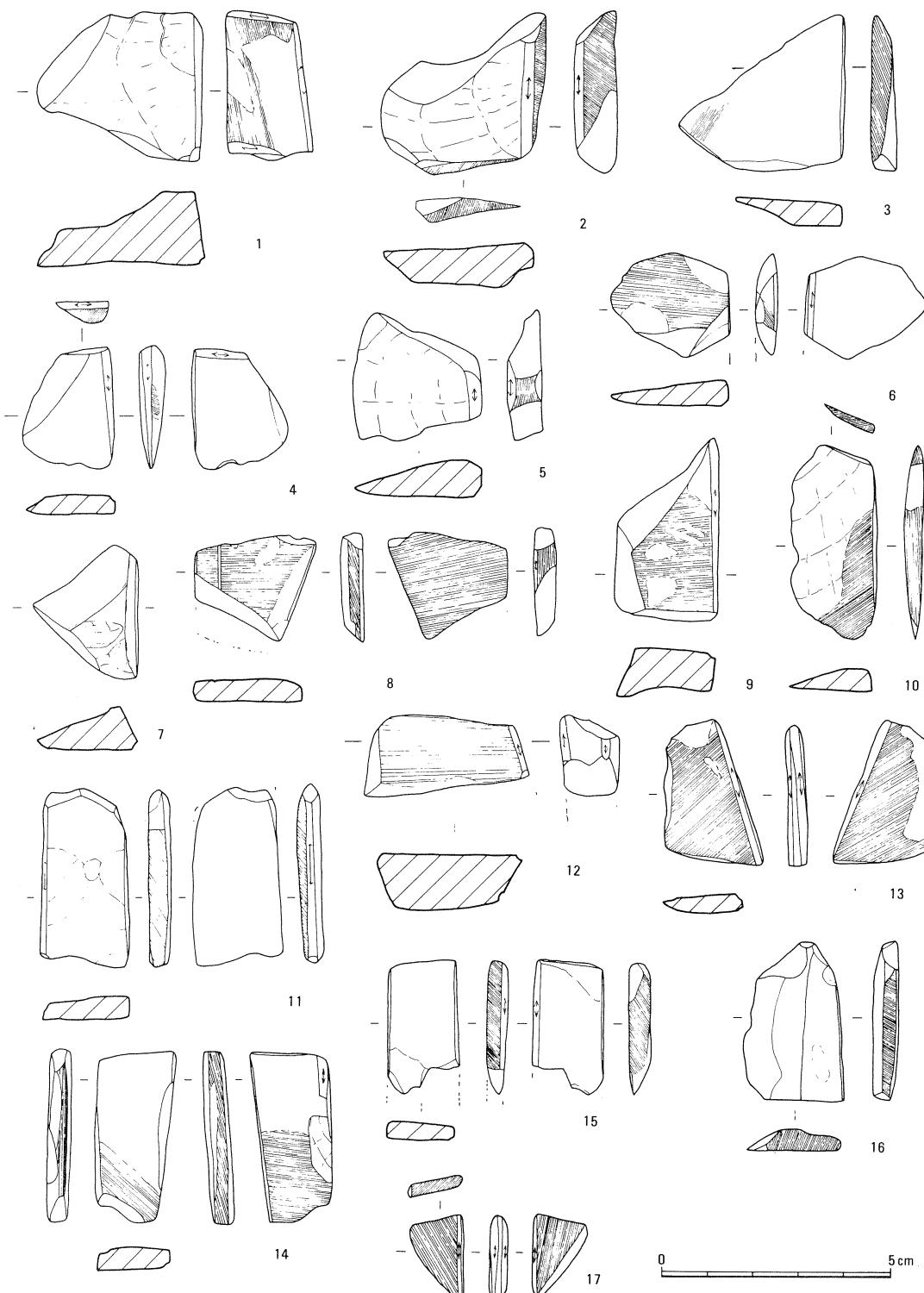
第69図 布田遺跡IV A区 S D01出土遺物(5) 1/10

布田遺跡



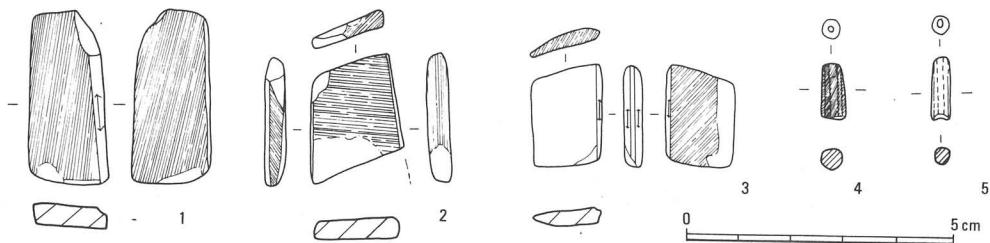
第70図 布田遺跡IVA区S D01出土遺物(6) 1/2

布田遺跡



第71図 布田遺跡IV A区 S D 01 出土遺物(7) 7/10

布田遺跡



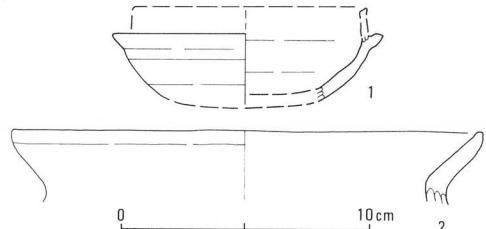
第72図 布田遺跡IV A区 S D 01 出土遺物(8) $\frac{1}{10}$

である（第69図1～3）。4・5も黒曜石製で刃器である。4はほとんど未調整で、5は両面とも刃部から側縁にかけてやや粗いが丁寧な二次加工を行う。6・7は石鋸片である。どちらも流紋岩質凝灰岩製で、かなり使用されたらしく、刃部の磨耗が著しい。

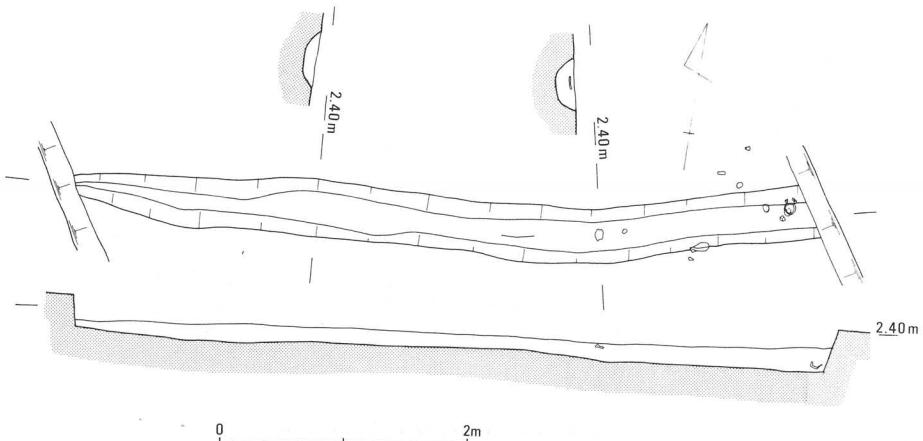
管玉未成品（第70～72図、図版30—3～14、37—1～12）

緑色凝灰岩製で、ほとんどに施溝痕が残る。第70図1・2は石核またはそれに近い未成品である。6は打裂の失敗によって出来たものと思われる。3～5、8～10は分割段階の未成品と考えられる。まだ厚みがあり、一部に研磨を施すのみである。第71図12も同様のものと思われるが、一面全体にすでに研磨が認められる。同図2～10、13・16・17は形が不定形ではあるが、必ず施溝とそこに直線的な一辺を持ち、両面および側面に研磨を施す板状の未成品である。やや厚さにばらつきもあるが、これらから柱状の未成品をつくることもまだ可能である。8には片面に細い施溝のあとがあり、何らかの原因で施溝方向とは異なった方向に折れたものと思われる。第70図11・第71図11・14・15

・第72図1～3は長方形に残る板状未成品である。ほとんどが全面に研磨を施して表面調整を行っている。第72図2にはすでに施溝痕も残っていない。SD 01では方柱状未成品は出土していないが、第72図4のように多角柱にした段階で穿孔を開始した



第73図 布田遺跡IV A区 S D 02出土遺物 $\frac{1}{3}$



第74図 布田遺跡 IV A 区 S D 02 実測図 $\frac{1}{60}$

布田遺跡



第75図 布田遺跡 IV A 区 S D 03 実測図 $\frac{1}{80}$

たものがある。九角柱の一方に径約1mm、深さ約2mmの孔が認められ、研磨痕が斜めに走っている。このことから方柱状未成品を研磨する場合、縦ではなく、斜めまたは横にスライドさせることが理解される。第72図5は穿孔済みの管玉である。穿孔が中軸に沿っておらず、一端にかなり薄い部分ができている。風化が著しく完成品かどうかは判断できない。

SD02 (第74図)

IVA区北半にSD03の堆積土上面で検出された。全長約6.0mで幅0.4m、深さ約15cmである。断面ほぼ半円形をなし、灰色砂質土が堆積している。東端は底面がゆるやかに立ちあがって消滅している。遺物は少なく、須恵器と土師器が各1点出土するのみである。

土器 (第73図、図版32—15・16) 1は須恵器の坏身片である。立ち上がり部と底部を欠いた小片であるが、受部や体部の傾き具合から、山陰の須恵器編年(山本清編年)^{註4}のIII期よりも古い段階のものであると思われる。2は土師器の甕形土器である。くの字状の口縁で、やや内湾ぎみに開いた端部をやや細く垂直に立てる。ヨコナデ調整である。

SD03 (第75図、図版26—1)

IVA区北半に赤褐色土と青灰色粘土を切って南北に長い凹みが検出された。全長約11mで両端はどうちらも調査区外に伸びている。ただし北側では、III区で検出できていないところから、その間で、消滅すると考えられる。幅は狭いところで約4m、広いところで約6mである。灰褐色の砂質土が全面に堆積し、下部では粘性が強くなる。遺物はSD03内に広く散在しているが、北半に完形に近い土器などが集中している。溝の両肩がかなり不規則に変化し、底面のレベルが南に向って低くなることなどから、あるいは意宇川の旧河道に関係する自然の水路(落ち込み)の可能性がある。出土遺物は弥生土器がほとんどで、その他に黒曜石のフレイク類や自然石が少量出土している。

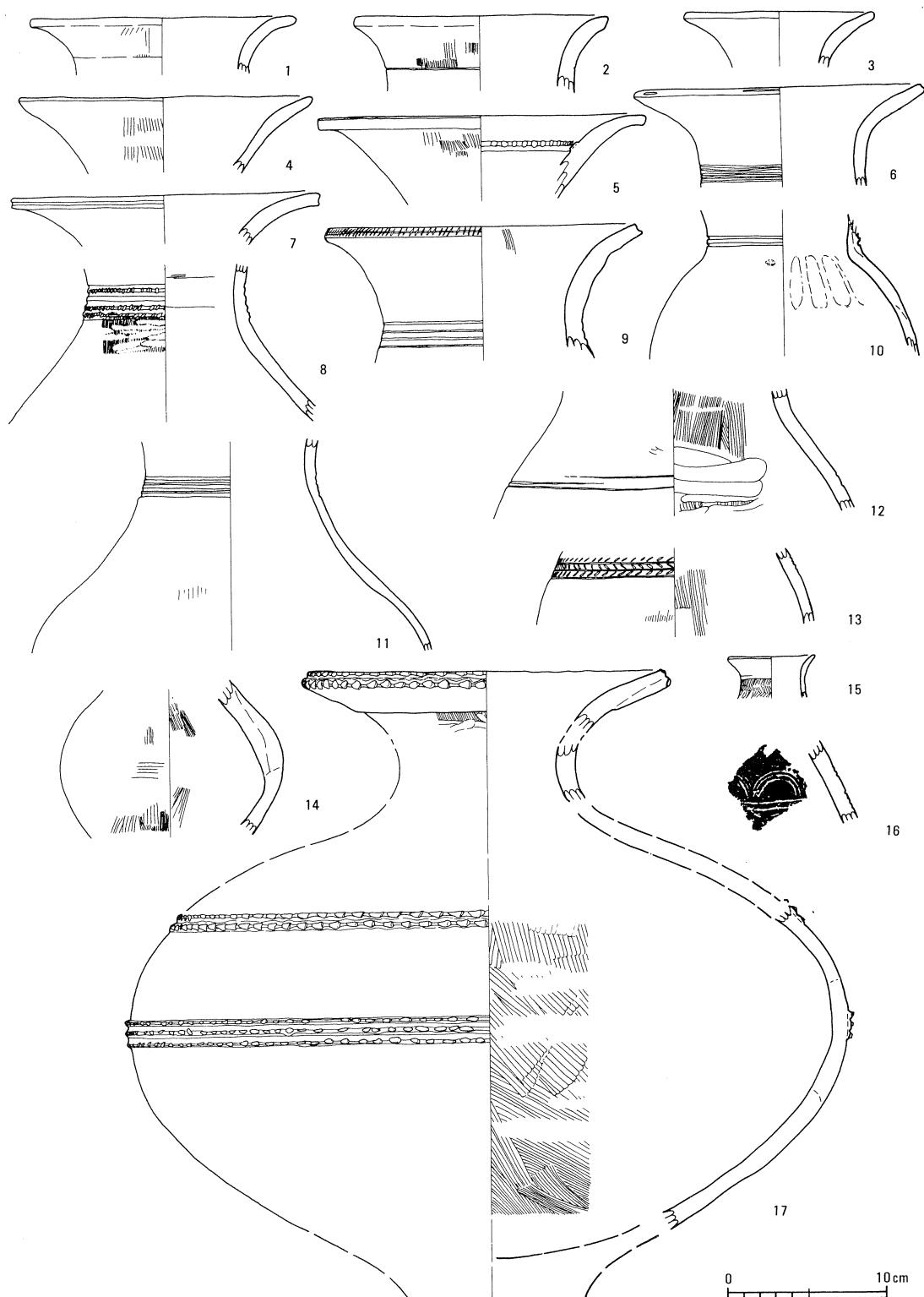
土器 (第76~78図、図版32—17・20~39、33、34—1~12)

すべて破片で出土するが完形に近いものもある。壺形・甕形土器がほとんどで、ミニチュア土器が1点発見された。

壺形土器 (第76図) 脊部はやや球状に張り、頸部に向ってゆるやかに内傾する。肩部には段がなく口縁はなだらかな曲線を描きながら外反する。肩部または頸部に篦描きの平行沈線文が施されるものが多く、中には沈線間に刻目状の刺突を施すものもある。13は肩部に有軸羽状文を施したものである。口縁端には一条の沈線を回らせ、さらに刻目を有するものがあり、内面に刻目突帯を貼り付ける場合もある。17は大形の壺で脊部に刺突文を有する突帯が付き、口縁端にも刺突を加える。総じて外面に篦磨きを施し、内面は刷毛目あるいはナデ調整が残るものが多い。

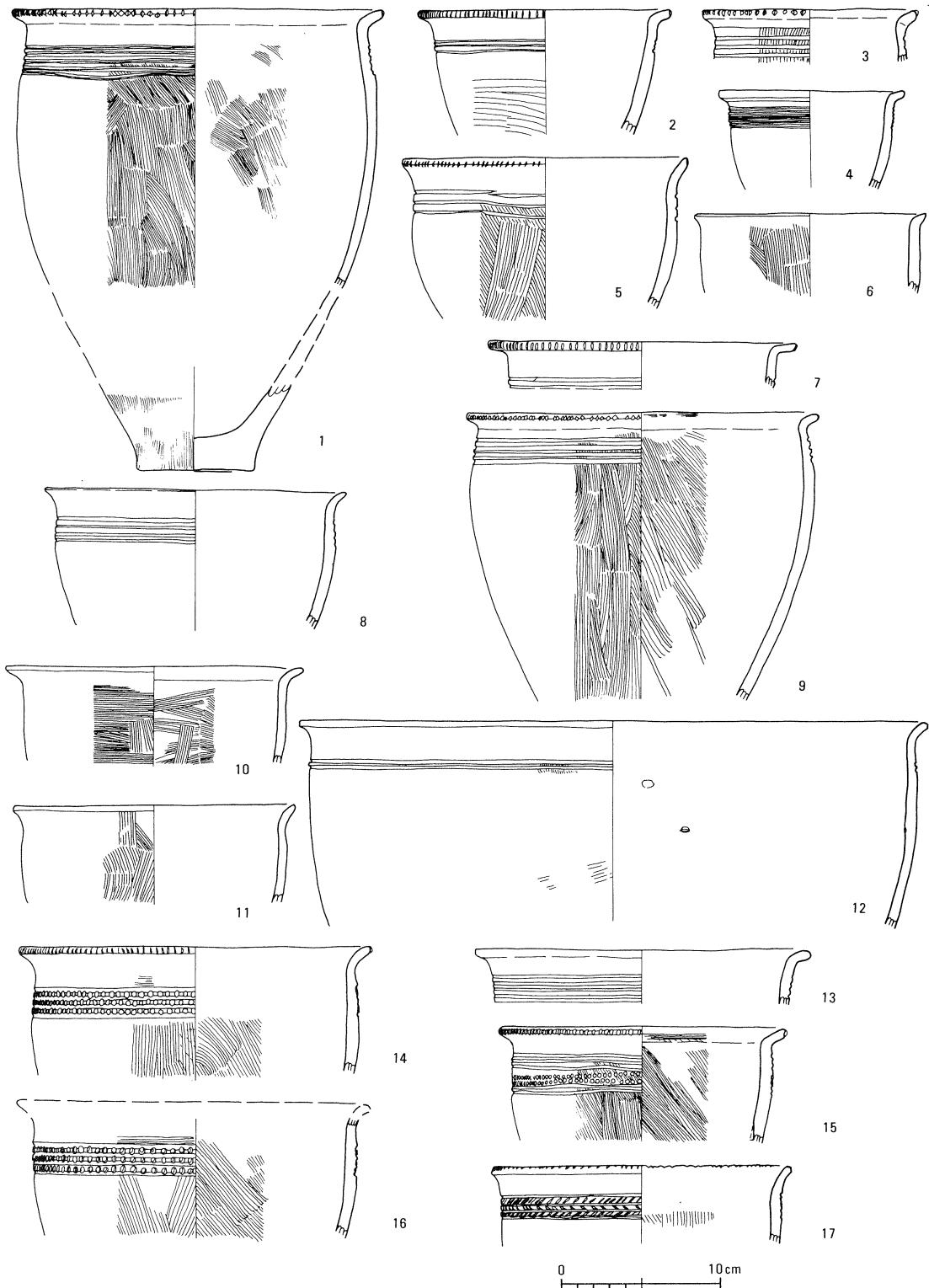
甕形土器 (第77・78図) 脊部ほとんど張らず、口縁は短く外反する。口縁端に刻目を施すものが多く、口縁下には篦描きの平行沈線文を1~5条回らせる。第77図14~15は沈線間に竹管状のもので小円形の刺突を施すものである。羽状文を施す場合(17)もある。第78図は口縁外面に粘土紐を貼付けて、やや垂れ下がった口縁部を造り出している。外面刷毛目、内面刷毛目またはナデ調整

布田遺跡



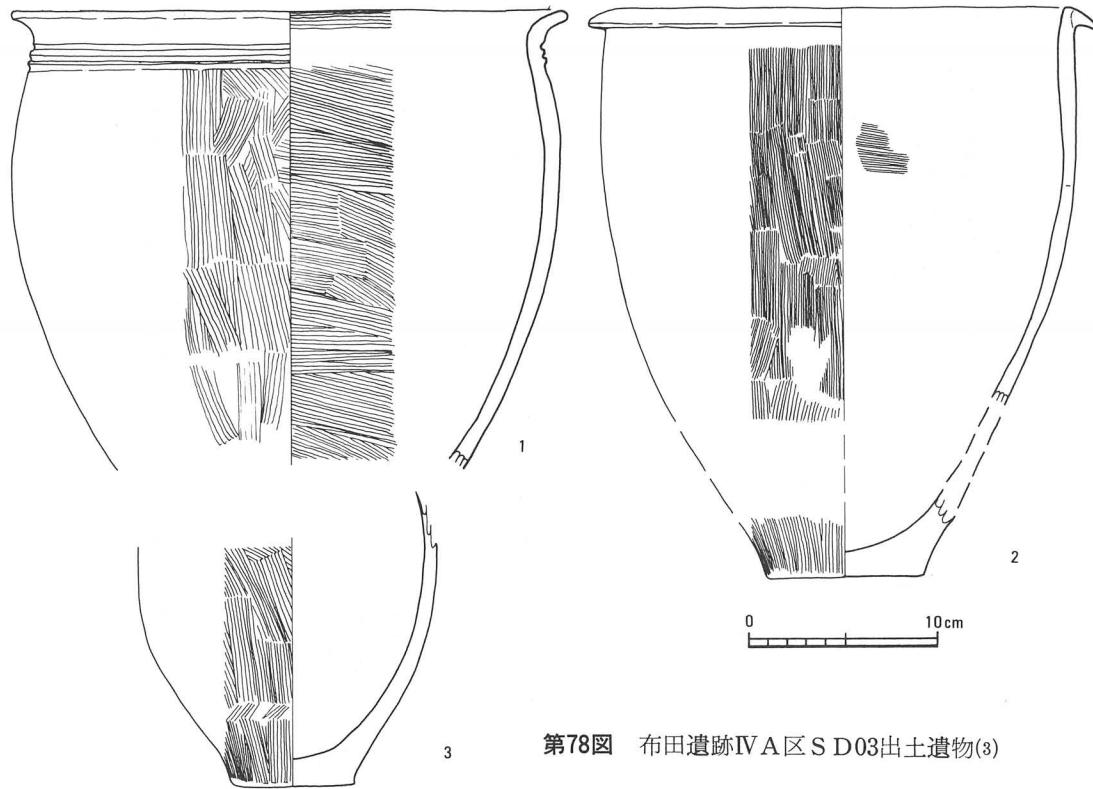
第76図 布田遺跡IV A区 S D 03 出土遺物(1) 1/4

布田遺跡



第77図 布田遺跡IV A区 S D03出土遺物(2) 1/4

布田遺跡



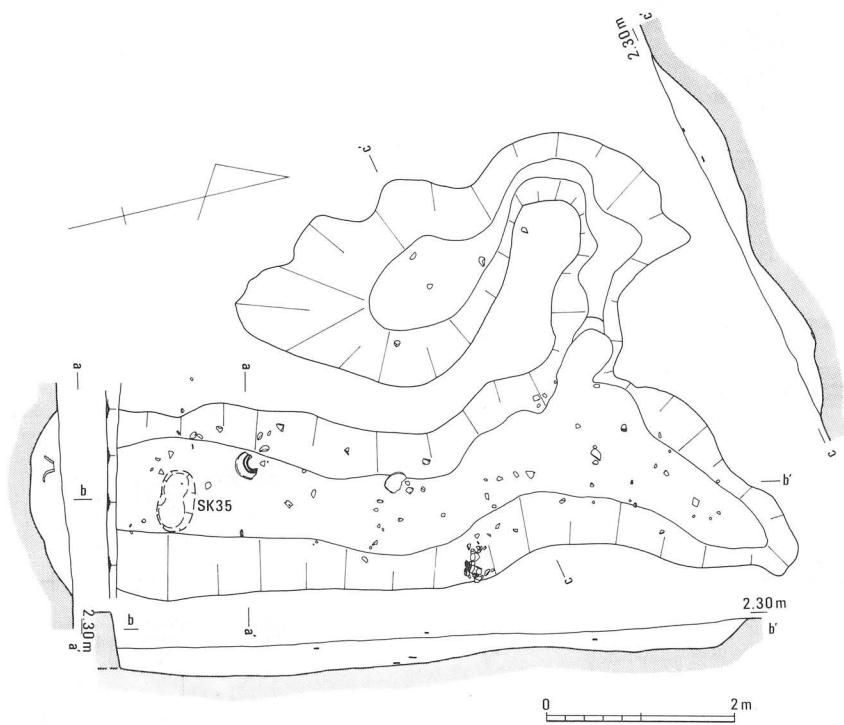
第78図 布田遺跡IV A区 S D03出土遺物(3)

である。

S D03出土の土器はすべてⅢ区 S D10の第1段階に相当し、純粹に単純な時期のものである。

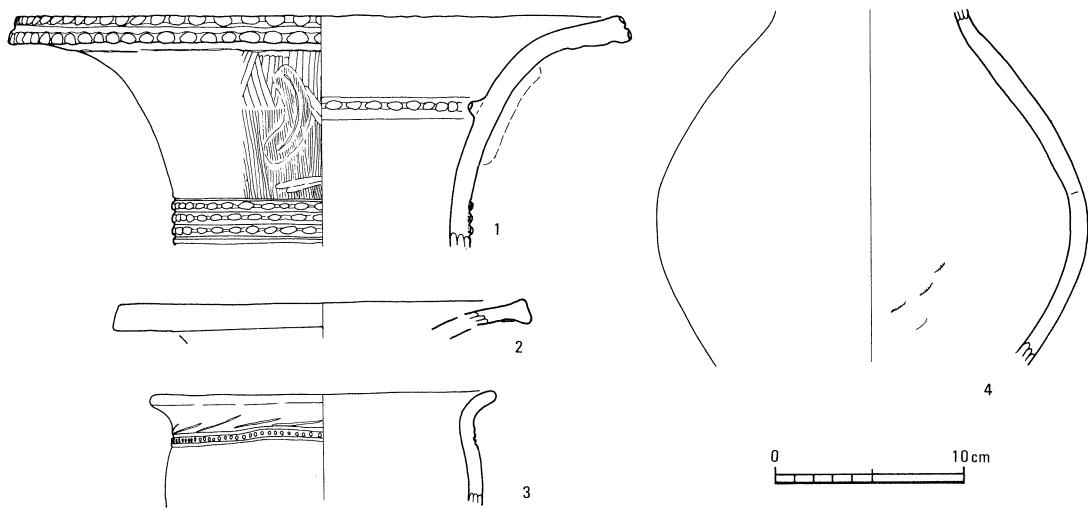
SD04 (第79図)

南北に向ってS D03と並行する形で検出した。西側に巻き込むようにならぶが支流が伸びる。

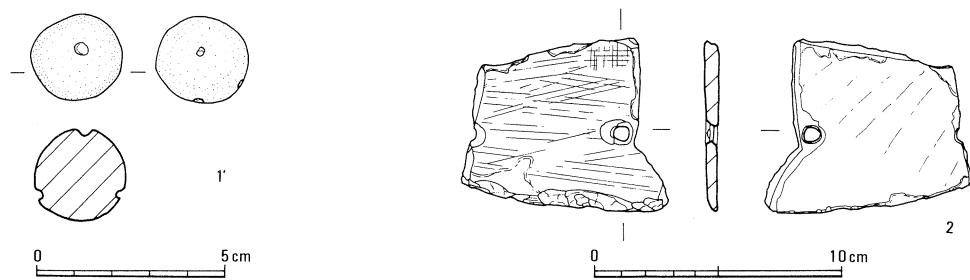


第79図 布田遺跡IV A区 S D04実測図 1/80

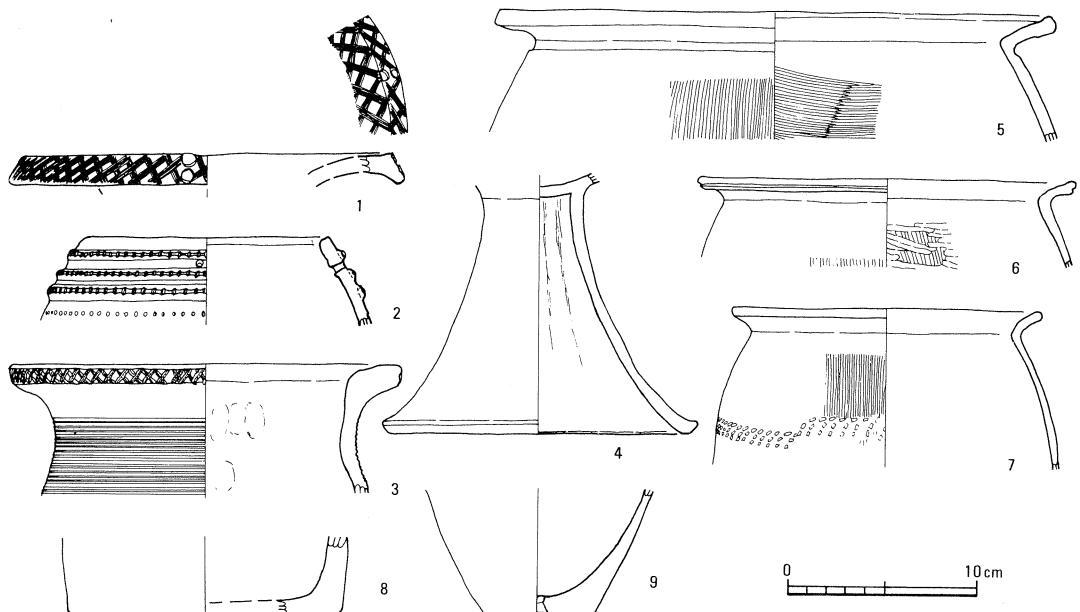
布田遺跡



第80図 布田遺跡IV A区 S D04出土遺物(1) $\frac{1}{4}$



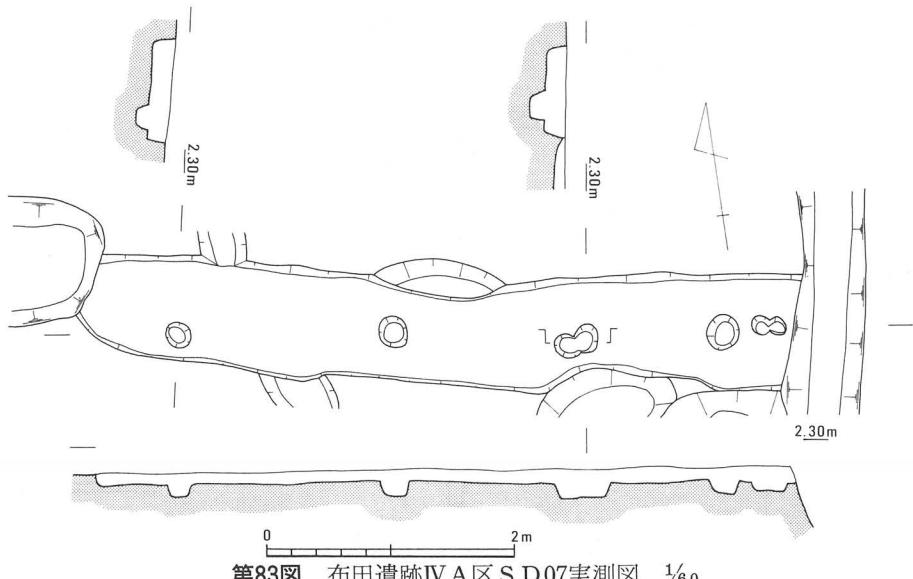
第81図 布田遺跡IV A区 S D04出土遺物(2) $\frac{1}{2}$



第82図 布田遺跡IV A区 S D06出土遺物 $\frac{1}{4}$

布田遺跡

びる。南側に深くなつて南半にさらに伸びると思われたが、検出には至らなかつた。SD03と同様に旧河道に關係する水路（よどみ）の可能性が強い。遺物が少量出土する。



第83図 布田遺跡IV A区 S D 07実測図 1/60

土器（第80図、図版34—13～15） 1は壺の口縁で口縁内面、口唇部および頸部に刺突文付突帯を貼り付ける。頸部外面に笠でノの字の記号が観察されるが、これはおそらく貼付突帯を施すための下書きである。3の甕形土器には、口縁下に沈線文や円形刺突文が施されている。

石器（第81図、図版38—6） 石庖丁と石玉が出土する。2は黒色頁岩製で穿孔部分から欠損する。刃部は二次加工を施したのち研磨している。3はほぼ球形で玉と考えられる。3個所に小穴があるが、いずれも貫通しない。

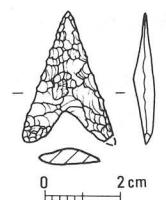
SD05・06

発掘当初、土器が集中して出土したが遺構は検出できなかった。土層観察の結果、後に述べるIV B区 S D02・04に続く溝と判明した。土器は S D06から出土している。

土器（第82図、図版34—17～25） 1は壺の口縁で、端部と上面を斜格子目文、円形浮文で飾る。2は無頸壺でおそらく低脚が付くと思われる。3は櫛描きの平行沈線文を多用する壺で、1よりも一段階古い土器である。8は底径が大きく、胴部が垂直に立ち上がることからジョッキ形土器の可能性がある。その他に甕や高坏、底部穿孔土器が出土する。3はIII区 S D10の第2段階、他は第3段階の土器に相当する。

SD07（第83図）

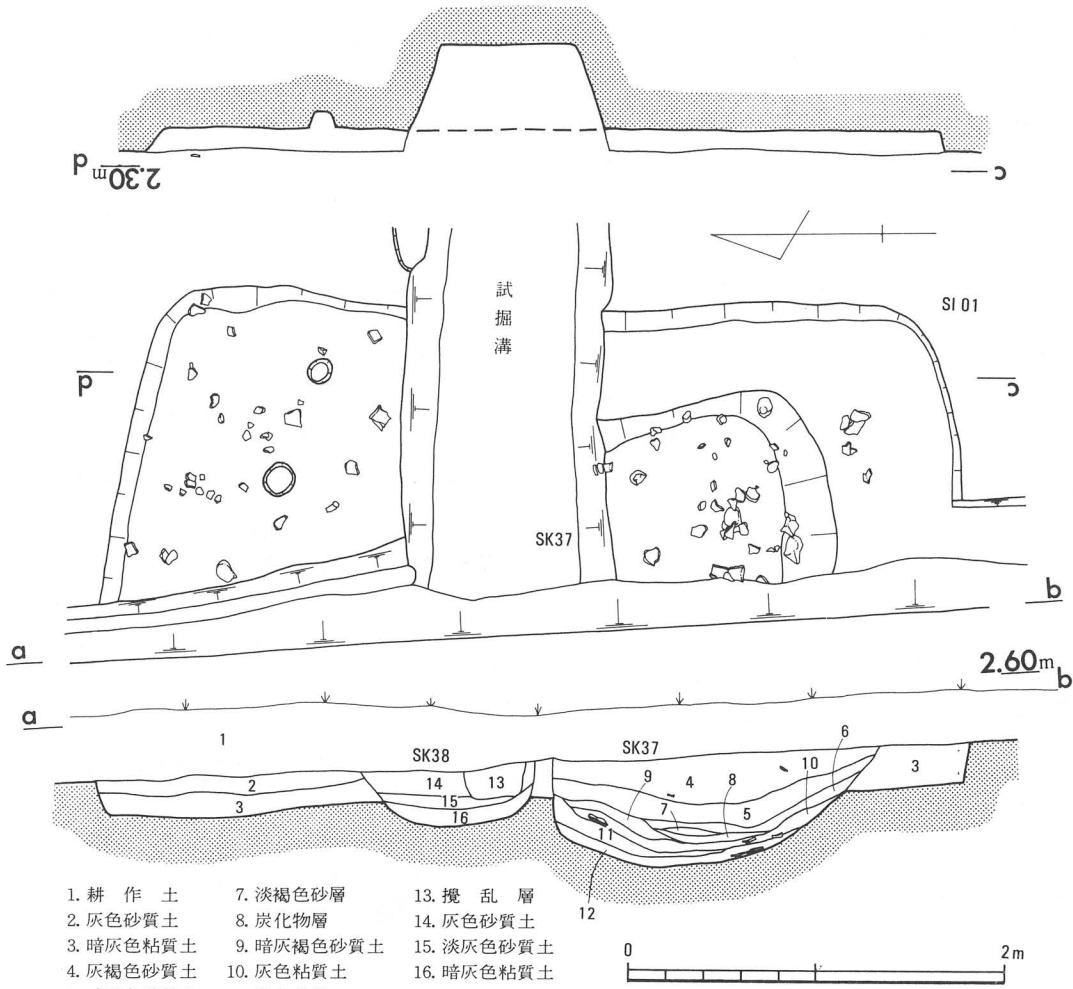
IVA区からIVB区にかけて検出された。IVA区では全長5.6mで幅0.8mである。西は幅が狭くなつてさらに続くと思われる。溝の中央に柱穴列を確認した。柱間の長さは、160～170cm（約5.5尺）である。柵状遺構と考えられる。遺物は全くなく、時期不明である。



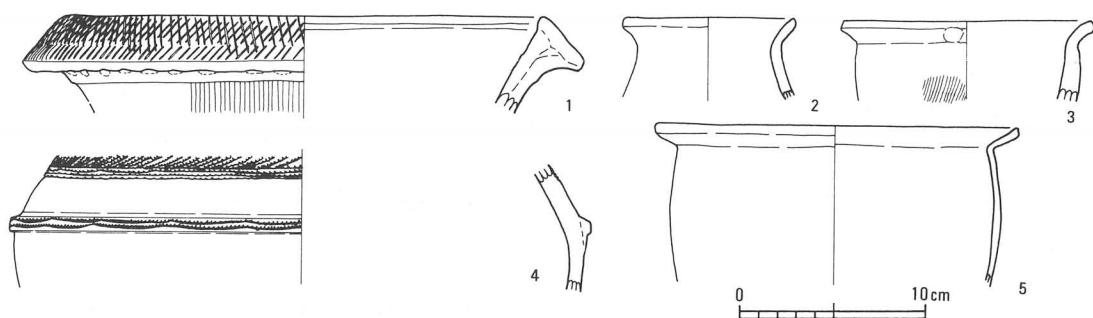
第84図 布田遺跡IV A区 S I 01出土遺物(1)

(2) 住居跡状遺構

S I 01 (第85図、図版26—2)



第85図 布田遺跡IVA区 S I 01・SK37実測図 1/40



第86図 布田遺跡IVA区 S I 01出土遺物(2) 1/4

布田遺跡

約半分が調査区外に出ており、調査部分の中央を試掘溝によって切られている。遺構内にはまた、ふたつの土壙が掘り込まれている。一辺約4mの方形を呈し、北東隅に柱穴がある。遺物が少量出土している。

土器（第86図、図版35—1～5） 壺と甕が出土する。1は肥厚させた口縁の端部に斜格子目文がはいる。2は球形に近い胴部片で、肩部と突帯の上に、タマキ貝の腹縁を押圧して擬似斜行短沈線文、平行沈線文を施す。

石器（第84図、図版36—11） 石鏸が1点出土する。黒曜石製でわたぐりが深い。刃部がきれいな二等辺三角形になり、調整剝離が細かく精功な造りである。

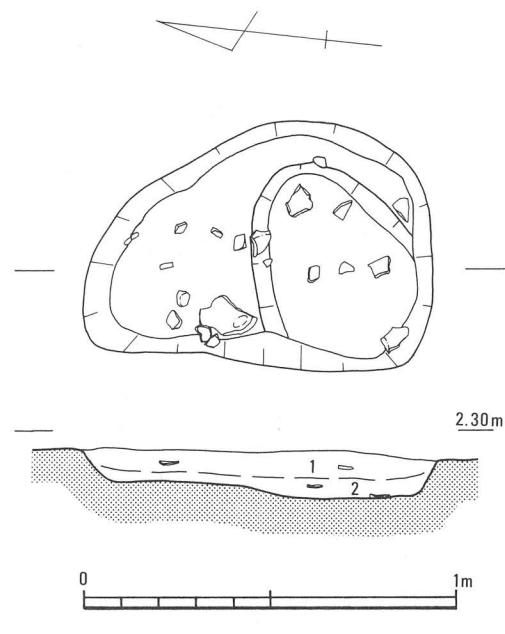
(3) 土 壤

IVA区で33個の土壙を検出した。また調査区東壁、西壁の土層観察の際に新たに5個の土壙を発見した。すべて小形の土壙である。

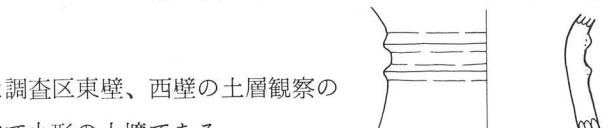
SK01（第87図、図版26—3）
SI01の東側で検出する。長さ90cm、幅65cmである。二段に掘り込まれており、下部に炭化物を多く含んでいる。遺物が少量出土する。第88図は壺形土器の頸部で、外面に断面三角形の貼付突帯を施したものである。

SK02（第89図、図版27—1）
長さ100cm、幅70cmの長楕円形を呈する。深さが30cmあって、暗褐色砂質土と赤褐色土が堆積する。遺物はほぼ底面から出土した。

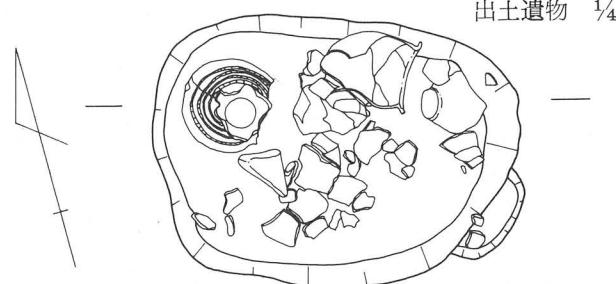
土器（第90図、図版35—6・7）



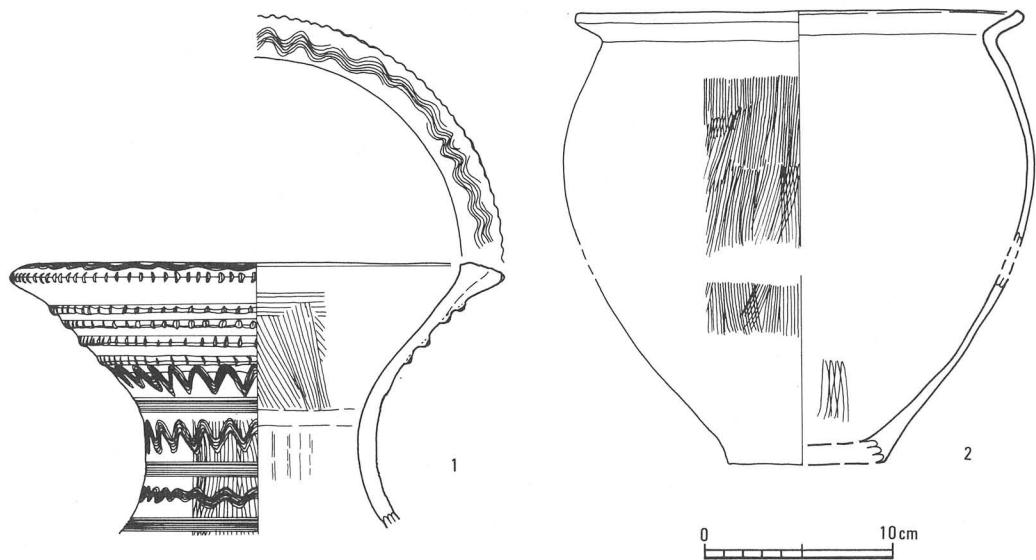
第87図 布田遺跡IVA区SK01実測図 1/20



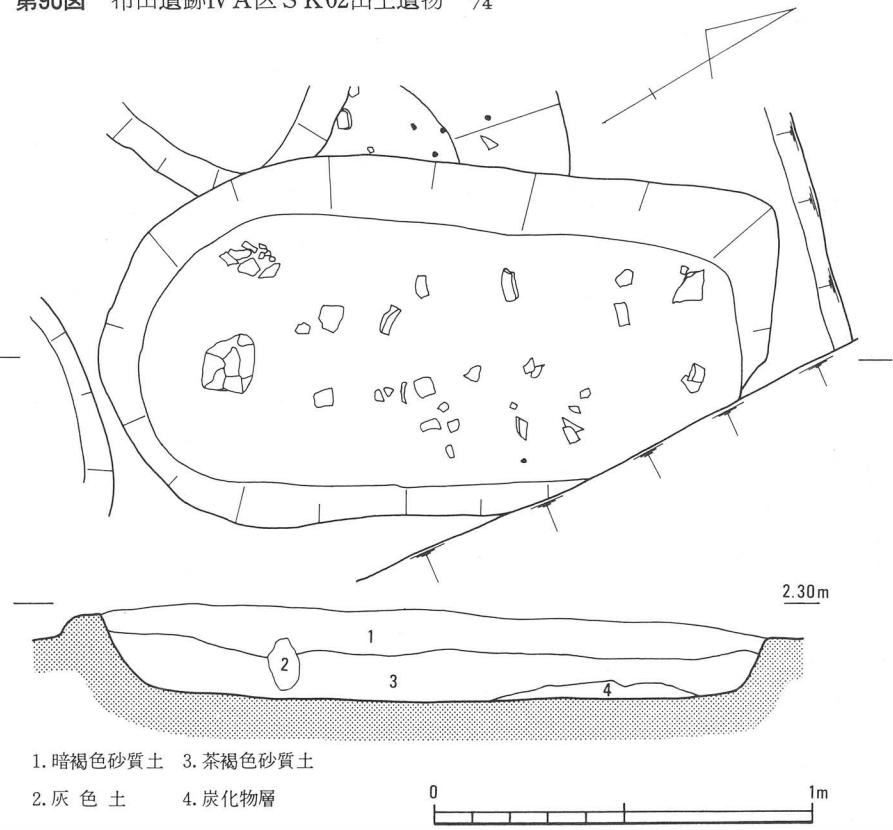
第88図 布田遺跡
IVA区SK01
出土遺物 1/4



第89図 布田遺跡 IV A区SK02実測図 1/20

第90図 布田遺跡IV A区SK02出土遺物 $\frac{1}{4}$

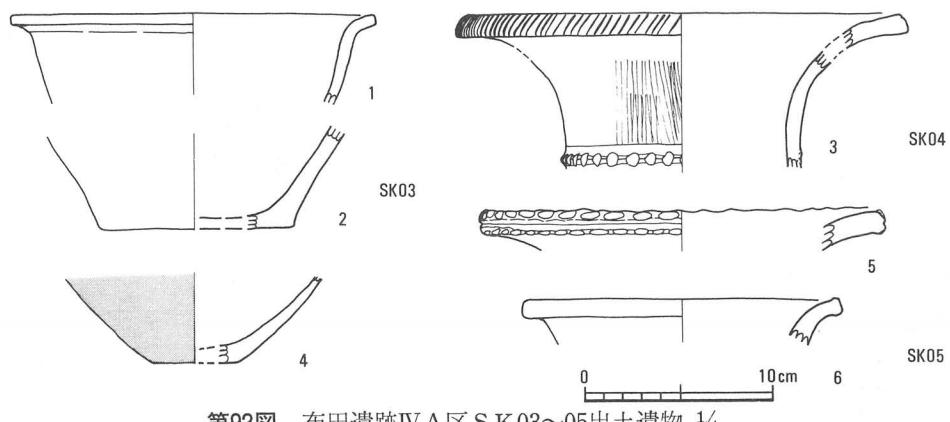
壺形土器の口縁と甕形土器2個体分が出土する。甕のひとつは底部のみであった。1は漏斗状に開いた壺口縁で、口縁端および外面を櫛描平行沈線文、波状文、刻目突帯で飾り、端部外面にも刻目を施す。2はく

第91図 布田遺跡IV A区SK03実測図 $\frac{1}{20}$

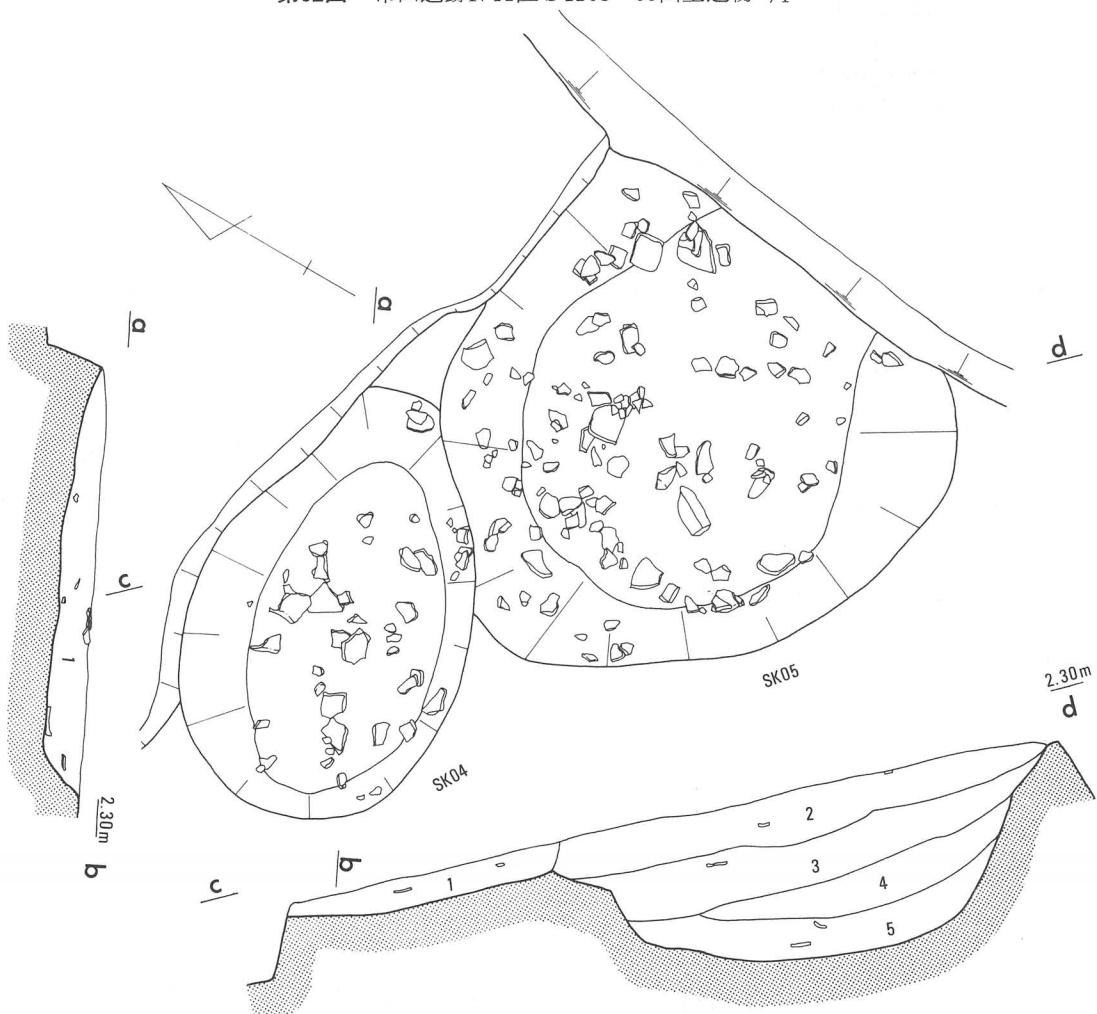
の字形口縁の甕形土器で胴部が球形に近く張っている。口縁端部をややつまみ上げる。文様はない。

SK03 (第91図、図版27-2)

布田遺跡



第92図 布田遺跡IV A区 SK03~05出土遺物 $\frac{1}{4}$

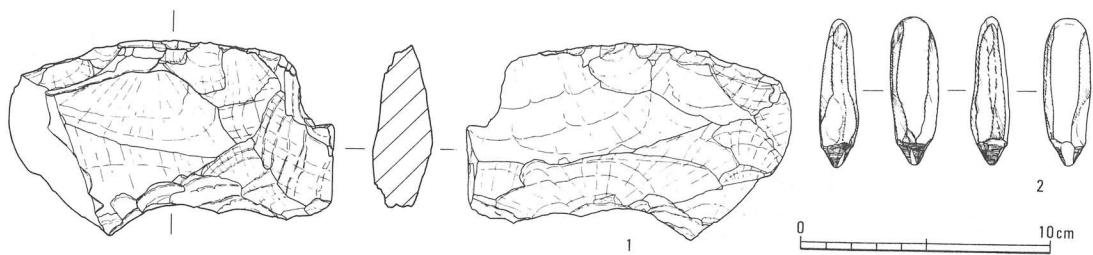


1. 暗赤色砂質土 3. 淡褐色砂質土 5. 灰色粘質土

2. 暗褐色砂質土 4. 黄褐色砂質土

第93図 布田遺跡IV A区 SK04・05実測図 $\frac{1}{20}$

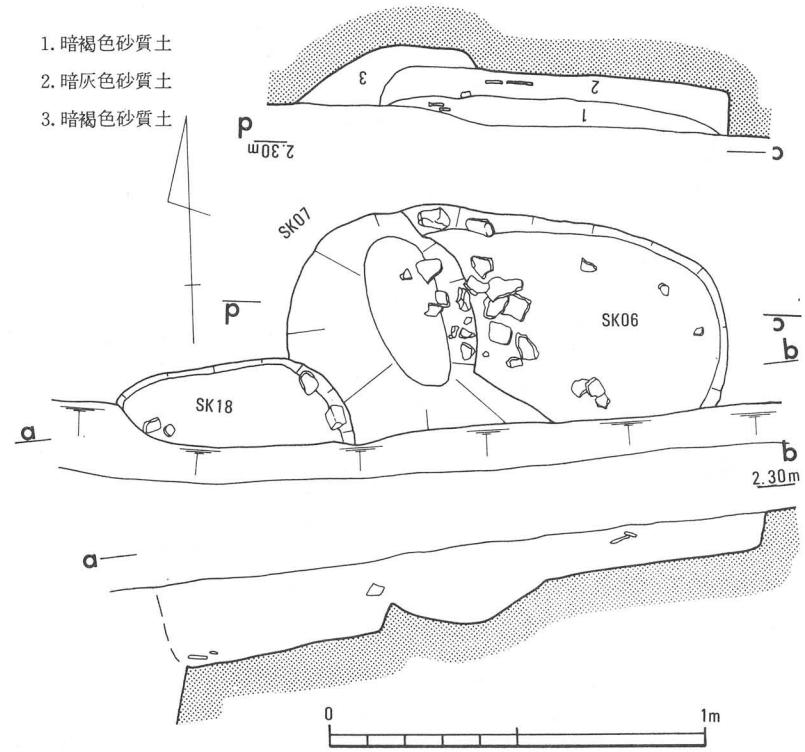
布田遺跡



第94図 布田遺跡IV A区SK05出土遺物 $\frac{1}{3}$

長さ 180cm、幅
95cmで両端が丸く
なっている。深さ
約25cmで堆積土に
は灰色粘質土がブ
ロック状にはいる。
底面には炭化物が
たまる。土器片と
自然石が少量出土
する。土器は甕の
口縁と底部である。
(第92図、1・2)

1. 暗褐色砂質土
2. 暗灰色砂質土
3. 暗褐色砂質土



第95図 布田遺跡IV A区SK06・07・18実測図 $\frac{1}{20}$

SK04(第93図、
図版27-3)

S D07の南にあ
り、溝に切られて

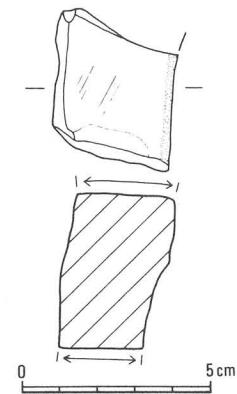
いる。長径110cm、短径75cmの楕円形を呈する。壺形土器と甕形土器が出
土する。(第92図4・5) 4は、内外面に漆が塗られている。

SK05(第93図、図版28-1)

S D07とSK04に一部を切られている。直径約140cmの円形を呈し、断
面半円形に掘り込まれている。4層の堆積が認められ、遺物は各層から出
土する。第4層は粘性強く炭化物も認められる。

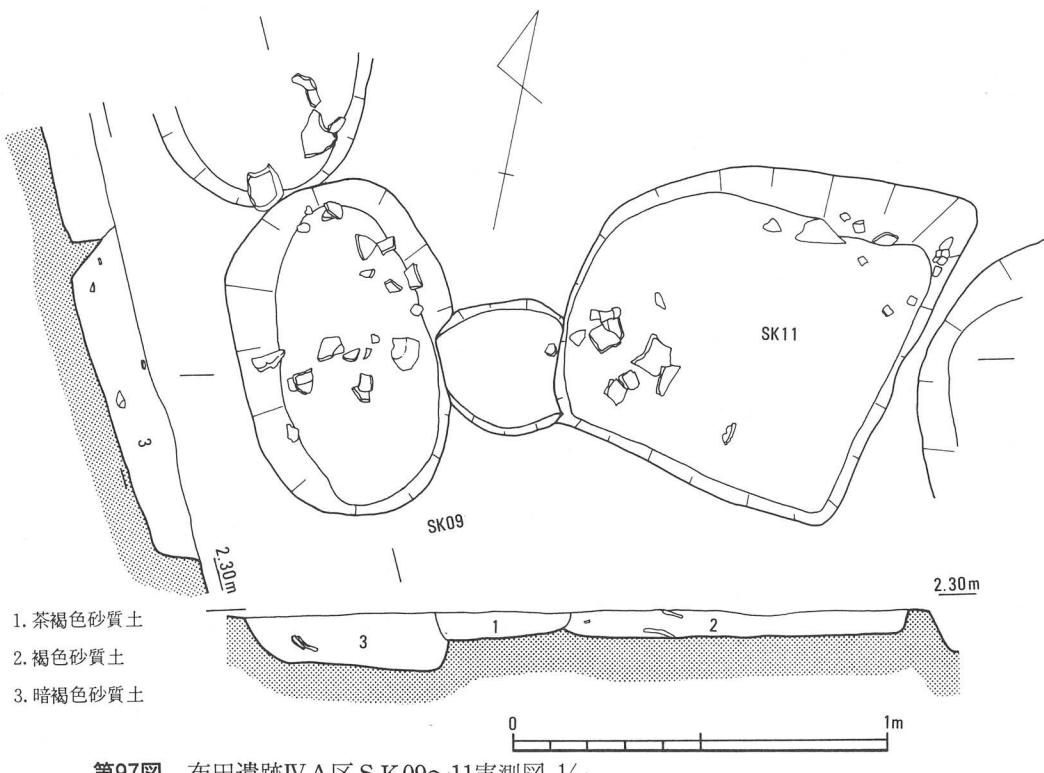
土器(第92図、5・6、図版35-12~14) 壺形土器で5の端部には
上下に押圧文列が回る。IV A区S D03の土器に類似する。

石器(第94図、図版37-32、38-2) 石鎌(1)と石庖丁穿孔具(2)が
出土する。石鎌は横長の石材を用い、背部端にくり込みを入れて基部を造



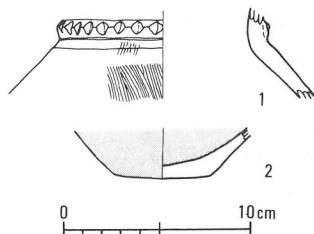
第96図 布田遺跡IV A区
SK18出土遺物 $\frac{1}{2}$

布田 遺 跡

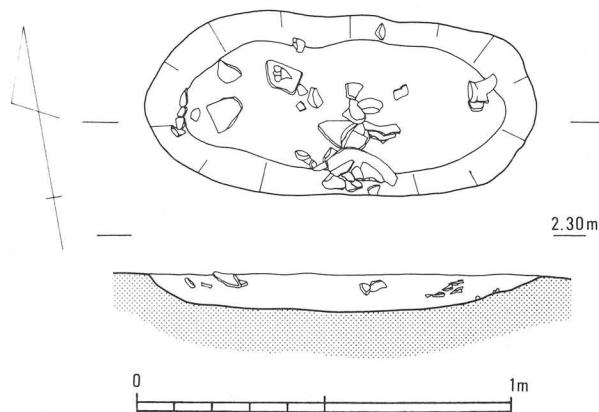


第97図 布田遺跡IVA区SK09~11実測図 $\frac{1}{20}$

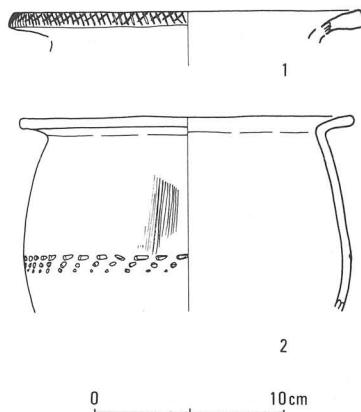
る。基部は扁平で柄を着装したものと考えられる。全体に刃部側に弧状をなす。穿孔具の出土は全国的にも稀である。刃部は先端から何回も剝離を行って多角錐状に整えられている。刃部には横方向の擦痕が顕著で、剝離の稜および先端が摩滅して丸くなっていること、かなり使用されたものと思われる。



第98図 布田遺跡IVA区SK09出土遺物 $\frac{1}{4}$

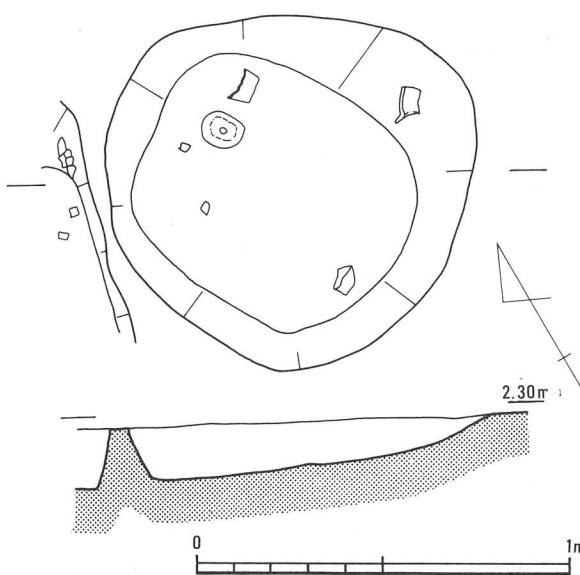


第99図 布田遺跡IVA区SK15実測図 $\frac{1}{20}$



第100図 布田遺跡IVA区SK15出土遺物 $\frac{1}{4}$

布田遺跡



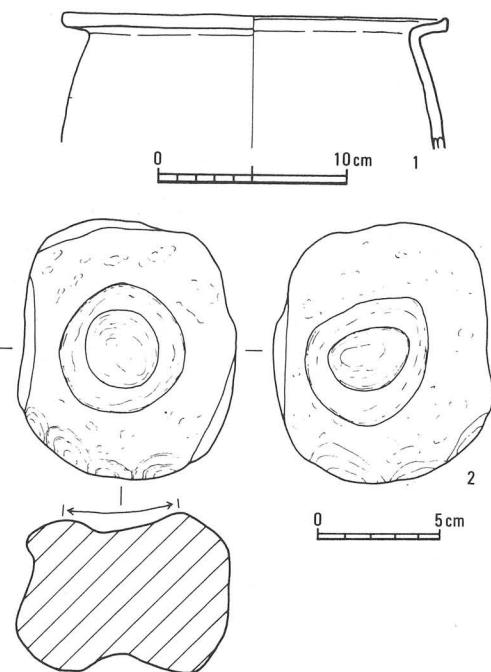
第101図 布田遺跡IV A区 SK16実測図 $\frac{1}{20}$
SK06・07・18 (第95図、図版28—2)

3つの土壤が重っており、SK06が最も新しいものである。遺物も06に伴って多く出土するが実測に耐えるものはない。第96図は18から出土した砥石である。流紋岩質凝灰岩製で破片であるが、二面に研ぎ面を有する。

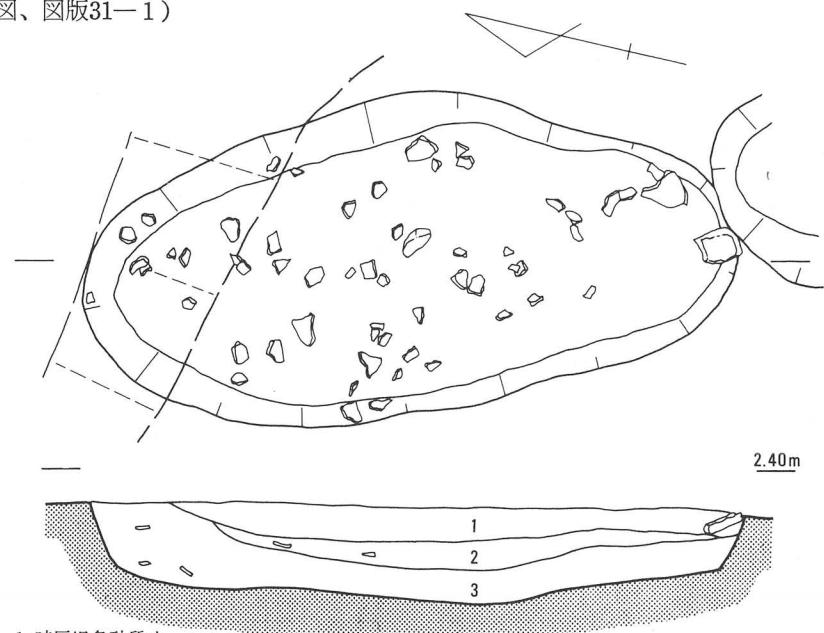
SK09~11 (第97図、図版31—1)

3つ並んで検出したが、掘り込みが浅く、特にSK10は小形で柱穴の可能性もある。遺物は09と11から出土する。第98図はSD09出土の土器で、2の底部片には内外面に漆が塗られている。

SK15 (第99
図、図版28—3)



第102図 布田遺跡IV A区 SK16
出土遺物 $\frac{1}{8}$



1. 暗灰褐色砂質土

2. 黒灰色炭化物層

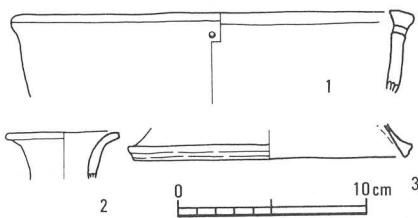
3. 黒灰色粘質土

第103図 布田遺跡IV A区 SK20実測図 $\frac{1}{20}$

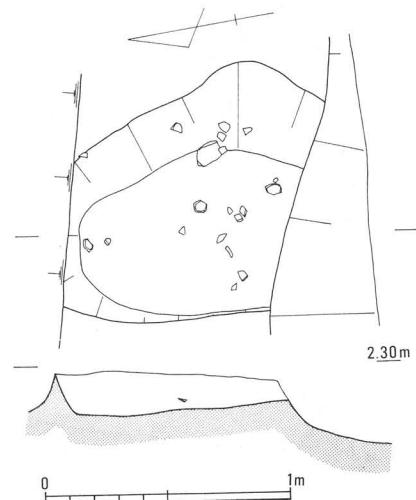
布田遺跡

長さ105cm、幅45cm、深さ15cm程度の長楕円形の土壙である。甕形土器2個体が出土している

(第100図)。くの字形口縁で、1には口唇部に斜格子目文を施す。2は球形の胴部に櫛による刺突文を回らす。



第104図 布田遺跡IV A区
SK20出土遺物 1/4



第105図 布田遺跡IV A区 SK
21実測図 1/30

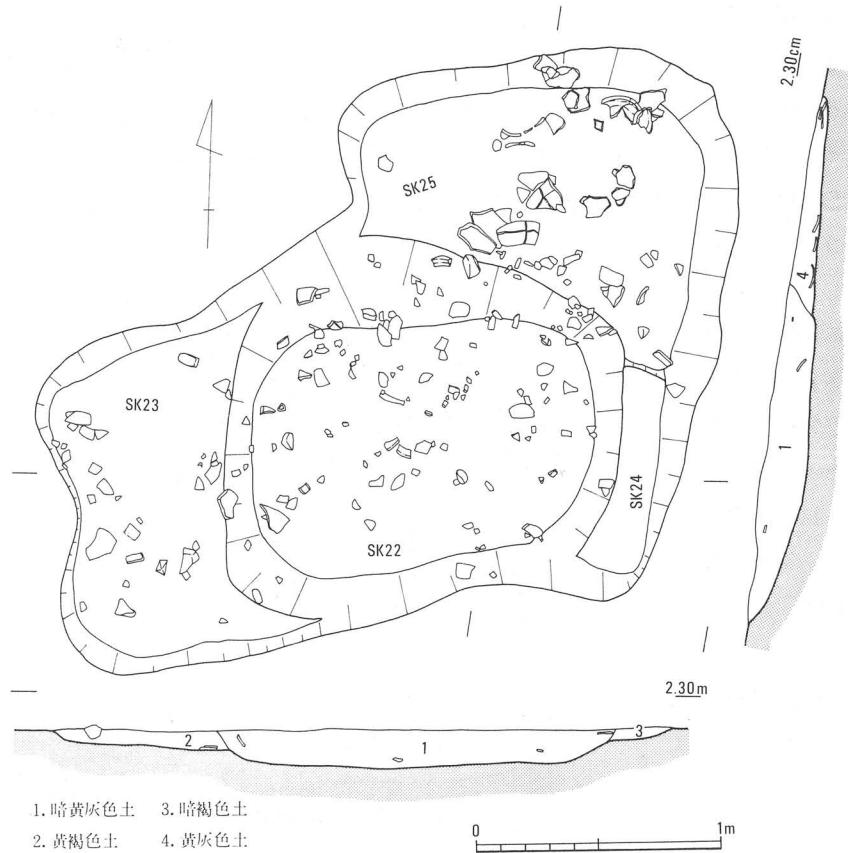
SK16 (第101図、図版31-2)

SK11に並んで発見された。直径95cm程度の円形を呈し、甕形土器と凹石が出土する。(第102図、図版35-19、37-40) 甕は口縁端上部をつまみ上げるものである。

凹石は目の粗い細粒花崗岩の表裏両面を用いている。凹部が深い。

SK20 (第103図、図版29-1)

長さ170cm、幅85cmの長楕円形を呈する。深さは25cm程度で3層の堆積土が確認された。特に第2層は炭化物を多量に含み、黒灰色を呈する。遺物は2~3層中



第106図 布田遺跡IV A区 SK22~25実測図 1/30

から出土する。

土器（第104図、図版35—20～22） 1は甕の口縁部で、直口ぎみの端部を肥厚させ、直下に焼成前の穿孔が認められる。2は小形壺、3は高坏の脚裾部である。

SK21（第105図）

S D01の北側に、同溝に切られた状態で検出された。現存長、幅ともに約90cmである。土壙内に堆積した灰色の粘質砂に多量の炭化物が含まれていた。遺物も少量出土する。

SK22～25（第106図、図版29—2）

IVA区南端で検出した。発掘当初、4つの土壙が切り合った状態で確認されたが、土層観察では明確に把握しきれなかった。中央のSK22とした部分が最も深く約15cmである。SK22・25とした部分から、完形に近い土器片や管玉未成品などが集中して出土する。

土器（107図1～8） 壺・甕・高坏が出土する。1・2は直口ぎみの壺形土器片であり、やや大形のものである。5・6は高坏片である。坏部は浅く、口唇に平坦面を持ち、口唇外面に刻目を入れる。脚部は突帯と櫛描きの平行沈線文、羽状文で飾る。脚端部は外側にはね上げるように屈曲させる。III区S D10の第4～第5段階の土器に相当する。（図版35—23～27）

管玉未成品（第107図9～14） 6点出土するがすべて厚手の未成品である。13・14は一辺1cm程度の四角柱をなし、ほぼ全面を研磨して施溝の跡が認められない。これに対して9～12も四角柱を意識したものと考えられるが、施溝だけで研磨は施されていない。このことから、板状未成品とは別に形割を行う段階で一応全面研磨した方柱を造る手法が存在したことが考えられる。その際、方柱を造り出すまでの過程では研磨を施さなかつたと思われる。方柱未成品に施溝・打割を行ってさらに4つの形割品を造ると思われるが、この段階の未成品は出土していない。この方柱未成品の時期は、土器との共伴関係でS D10の第4～第5段階のものと考えられ、板状未成品よりもやや新しい要素をもつ。SK22～25からはその他に施溝のない未成品も多く出土する。（図版37—27～31）

石器（第108図、図版38—3～5） 砥石が3点出土する。すべて砂岩製で長さは6cm程度である。1には断面がややV字状の溝がはいる。その他に二面を砥面として使用する。2は断面楕円形を呈し、両端を欠損するが全面を使用する。3は小さな平坦面がいくつも出来ており、全面を細かく使用している。

SK22～25は土壙状を呈しているが、出土遺物の状況からあるいは玉作の工房跡、またはそれに関連した遺構であった可能性もある。

SK29（109図、図版31—3）

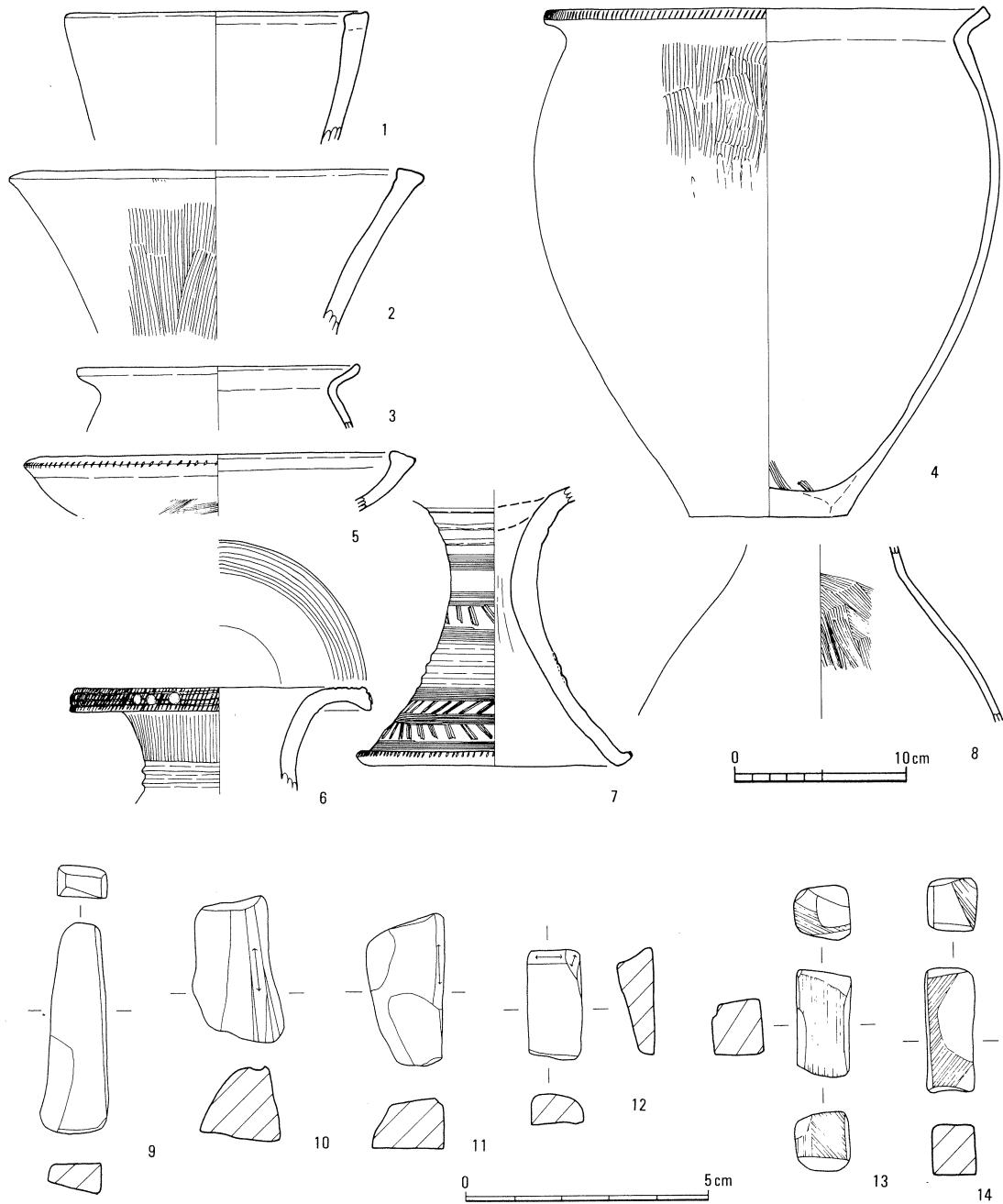
東半を排水溝で切られている。現存長、幅ともに約70cmで楕円形を呈する。深さ約30cmである。下半から、管玉未成品と土器が出土する。

土器（第113図1） 底部片が一点出土する。内面にやや雑な箇磨きが施されており、壺形土器の

布田遺跡

底部と思われる。

管玉未成品 (第111図、図版37—34～37) 1は分割段階の未成品である。一辺に施溝痕が残るが、まだ研磨は施されていない。2～4は板状未成品である。3・4は厚さが0.4cmと薄く、施溝がわずかに残るが、両面をよく研磨整形している。3には、形割のための施溝がわずかながら行なわれている。



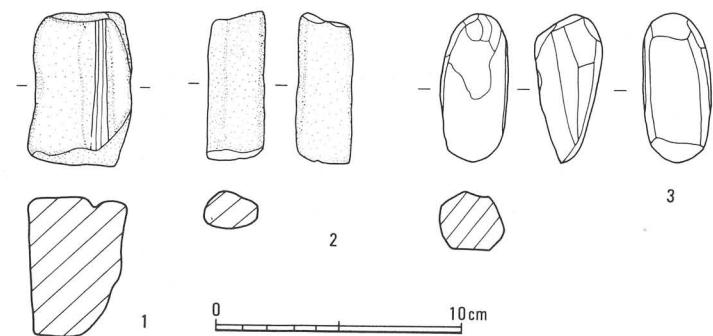
第107図 布田遺跡IV A区SK 22～25出土遺物(1) 上1/4 下1/10

布田遺跡

SK34 (第110図、図版29—

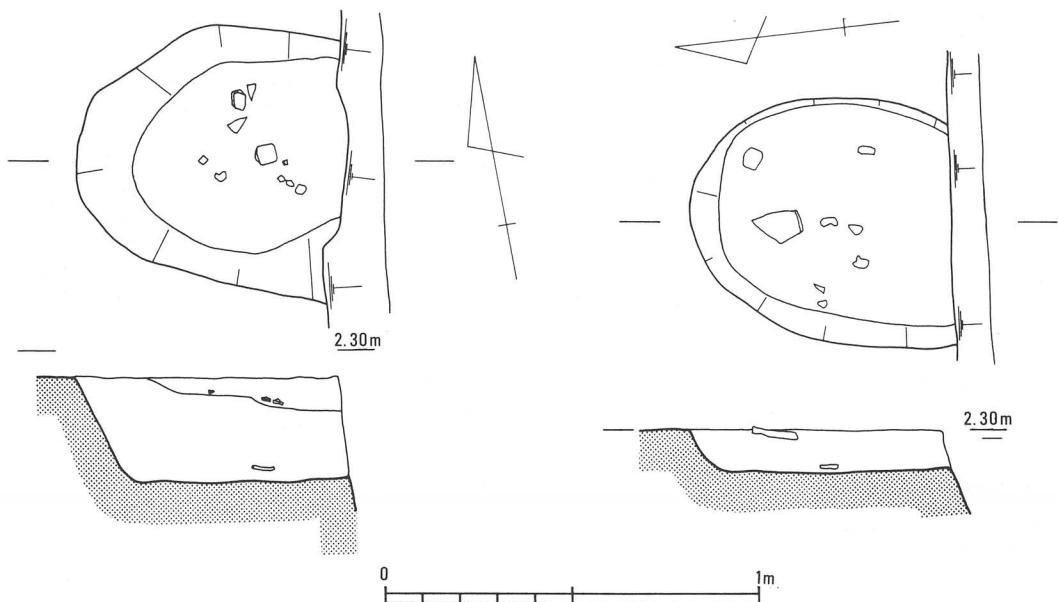
3)

IVA区中央で検出した。長さ70cm、幅65cmで深さは10cm程度であった。甕形土器と紡錘車が出土するが甕形土器はやや浮いた状態で検出された。(第113図2・3、図版35—29) 甕形土器は肉厚で



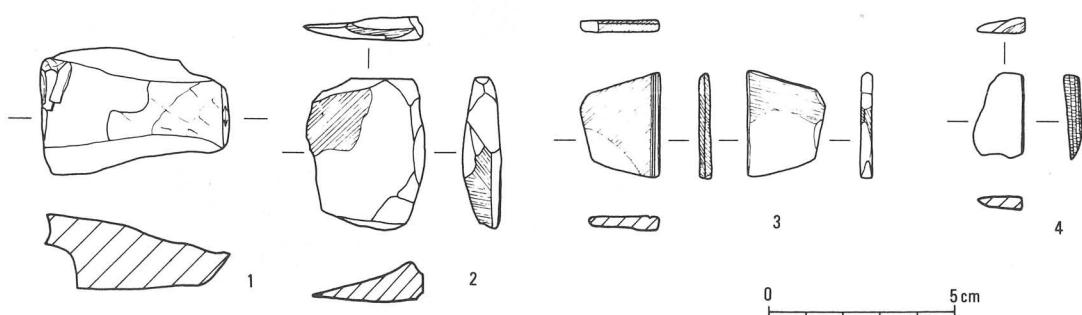
第108図 布田遺跡IVA区SK22~25 出土遺物(2) $\frac{1}{3}$

無文である。胴部は張らず、口縁が短く外反する。紡錘車は土器を転用したもので径約2.7cm、重さ4.8gである。五角形に近い形状をなすが、周縁は丸みを持たせている。



第109図 布田遺跡IVA区SK29実測図 $\frac{1}{20}$

第110図 布田遺跡IVA区SK34実測図 $\frac{1}{20}$

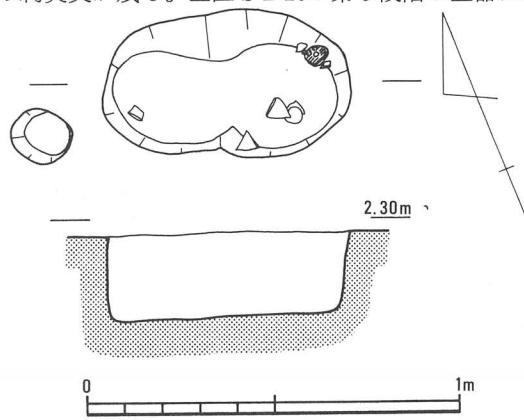


第111図 布田遺跡IVA区SK29出土遺物 $\frac{1}{2}$

布田 遺 跡

SK35 (第112図)

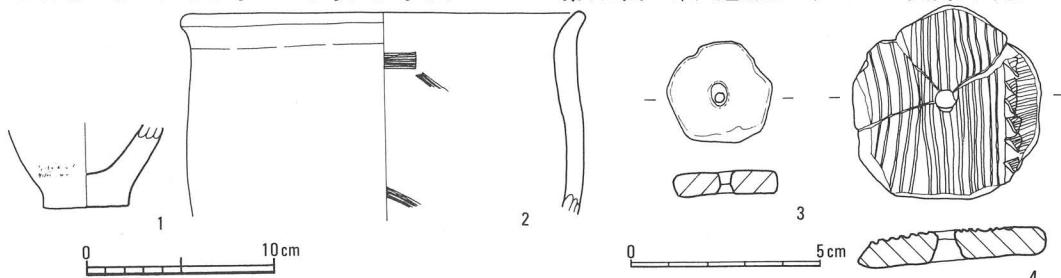
長さ65cm、幅約40cm、深さ22cmの楕円形の土壙で中央部がややくびれている。底面はほとんど水平になっている。上部から紡錘車が出土する。(第113図4、図版38—17・18) 甕形土器の胴部上半を転用したもので、櫛描平行沈線文と三角形の刺突文が残る。III区 S D10の第3段階の土器に相当するものである。直径5.1cm、孔径0.4cm、重さ22.8gを測る。



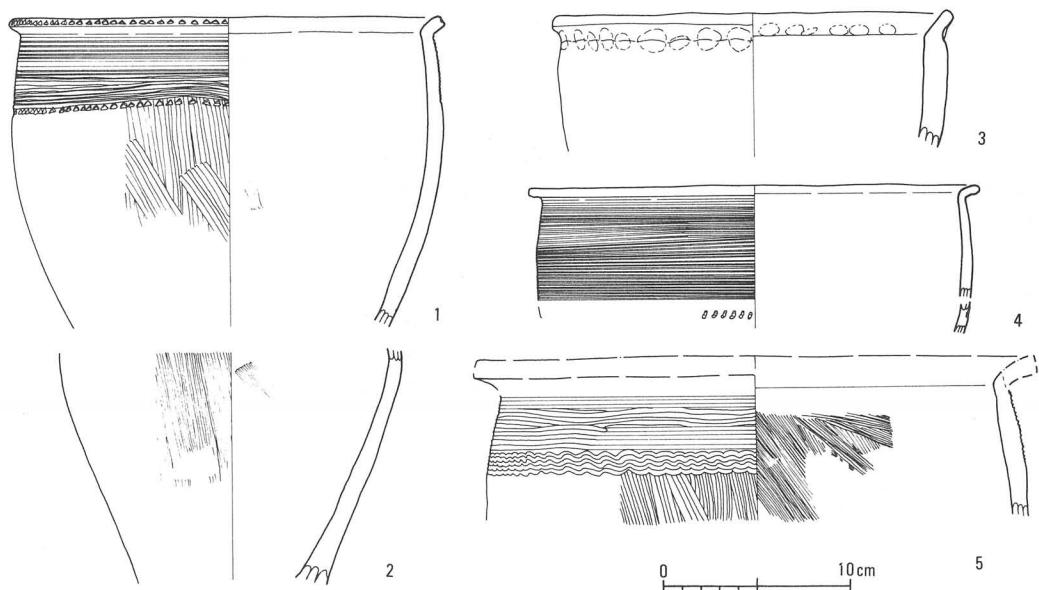
SK37 (第85図、図版30—1)

S I 01の内部に、S I 01堆積土の上部から掘り込まれている。わずかしか残っていないが平面やや方形をなし、掘込断面は弧状になる。土層観察では、北側は急激に立ちあがっているが、あるいは隣に並んだSK38とひとつになるものであったかもしれない

第112図 布田遺跡IV A区 SK35実測図 1/20



第113図 布田遺跡IV A区 SK29・34・35出土遺物 1/4



第114図 布田遺跡IV A区 SK37出土遺物(1) 1/4

ない。土壤の深さは約60cmを測り、灰色のやや粘性ある砂と炭化物を大量に含む褐色砂が互層をなして堆積している。遺物は下半の褐色砂層から出土する。

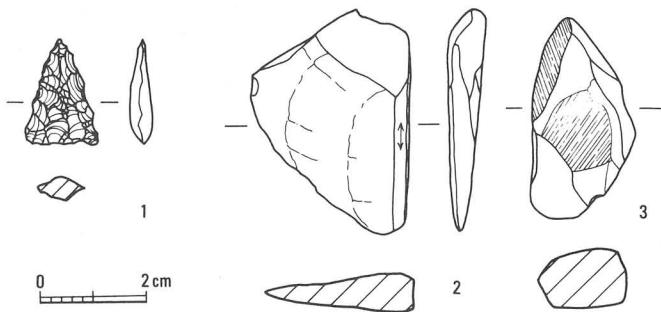
土器（第114図、図版36—2～6）

すべて甕の破片で2は胴部片である。胴部はあまり張らず口縁は短く外反する。口縁下に櫛描きの平行沈線文を15～30条施し、さらにその下に波状文、櫛状工具による刺突文などを回らせる。1にはさらに口唇部に櫛状工具による三角形の刺突文を回らしている。内外面ともに刷毛目調整を施し、内面にはさらにナデを施す場合が多い。3の口縁には、口縁を外反させる時にいたと思われる指頭圧痕が著しく残る。いずれもSD10出土土器の第3段階に相当する。壺形土器は確認できなかった。

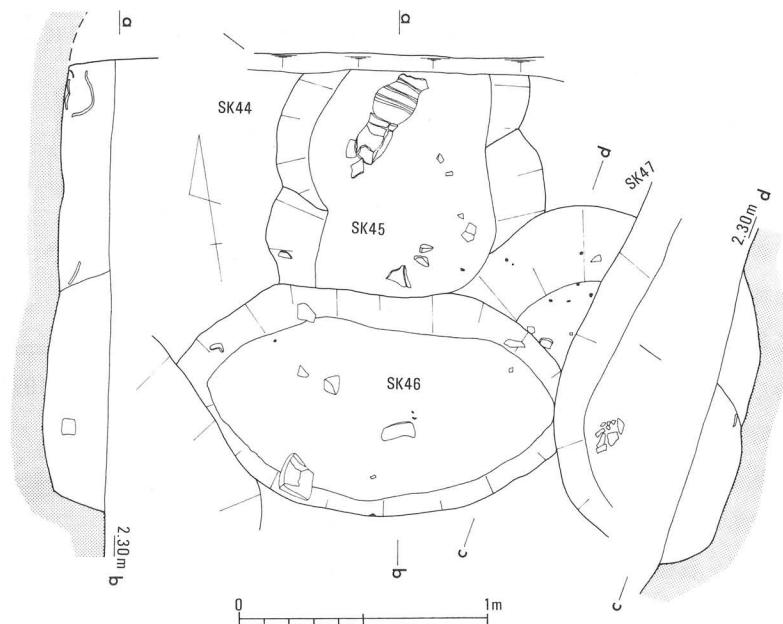
石器・石製品（第115図、図版36—12・13、37—38・39） 石鏃と管玉未成品が出土する。石鏃（1）は黒曜石製の平基式で二等辺三角形を呈する。両面ともに粗い二次調整を施す。管玉未成品はどちらも板状のものである。2は一辺に施溝痕が認められ、その側面に研磨が施されている。3は施溝なく、研磨が認められるのみである。

SK44～47（第116図、図版30—2）

SD01とSK03の間で検出した。調査終了間際であったため、切り合いの状況が充分につかめなかつた。SK46が一番よく残っており、現存長150cm、幅90cmを測る。深さは約25cmである。SK44・45・47は深さはいずれも20cm程度ではほとんど変わらないが、掘り方の肩部が一連のものでなく、3つの土壤が重なると理解した。SK45では壺形土器片が底面近くで検出された。SK47には土器の小片

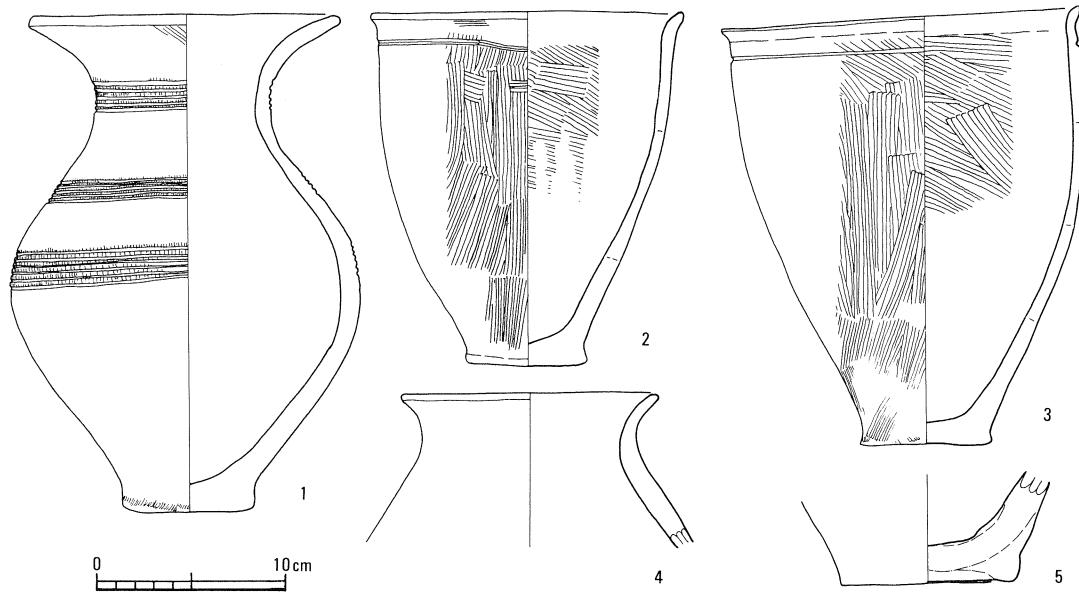


第115図 布田遺跡IV A区 SK37出土遺物(2) 1/10



第116図 布田遺跡IV A区 SK44—47実測図 1/30

布田遺跡



第117図 布田遺跡IV A区SK 44~46出土遺物 1/4

と黒曜石のチップが
少量出土するのみで
あった。

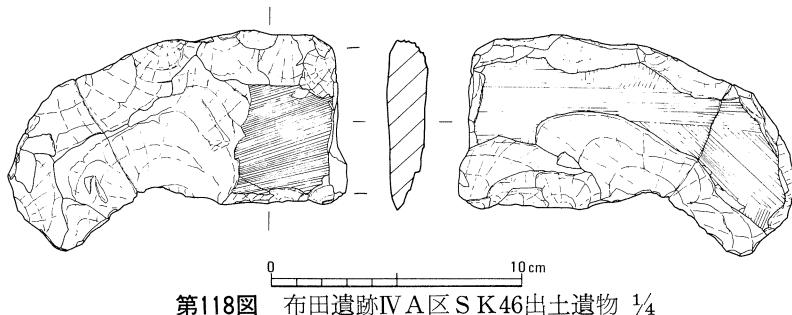
土器（第117図、
図版36—8～10）

S K44から壺と甕
がセットで出土した。

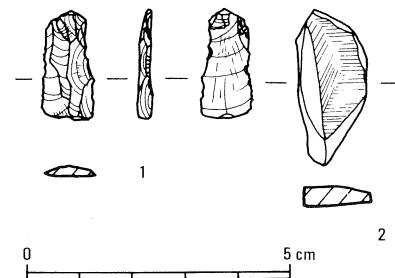
(1～3) 甕はどちらも約2分の1を欠損する。大形のもの（3）に小形のもの（2）を差し込み、さらにそれらを壺の底部にかぶせた状態で出土する。甕は刷毛目調整著しく、口縁下に沈線を一条回らせる。大きさが異なるだけで形態は全く同一である。壺はほぼ完形で球形に近い胴部に、頸部は短く、口縁は大きく外反する。頸部から胴部にかけて3段に籠描きの平行沈線文を施している。S D03出土土器と同様の形態を持っているが全形を知ることのできる好資料である。4はS K45から出土する壺形土器で、胴部が大きく張り、口縁は短く外反する。5はS K46出土の底部片である。外面は籠磨きを施していると思われる。

石器・石製品（第118・119図、図版37—33、38—1）

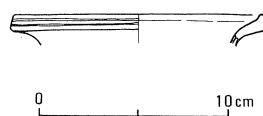
S K46から緑色凝灰岩製の石鎌片が出土する。（第118図）基部側を欠損するが、背部、刃部の両側から二次調整



第118図 布田遺跡IV A区SK 46出土遺物 1/4

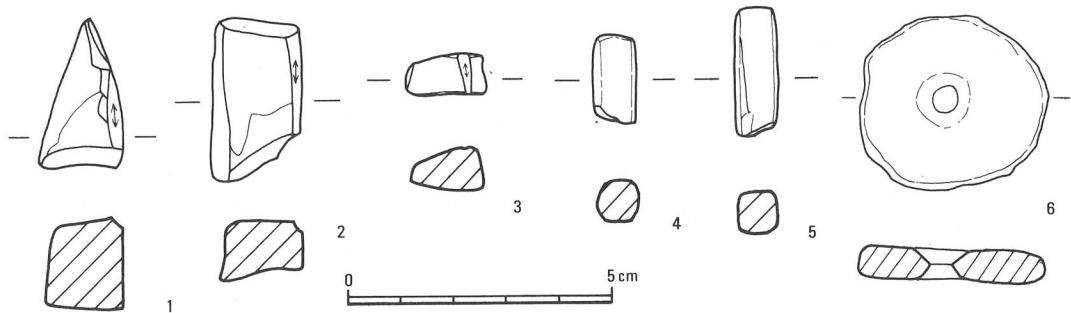


第119図 布田遺跡IV A区SK 45
出土遺物 1/10



第120図 布田遺跡IV A区P 4
出土遺物(1) 1/4

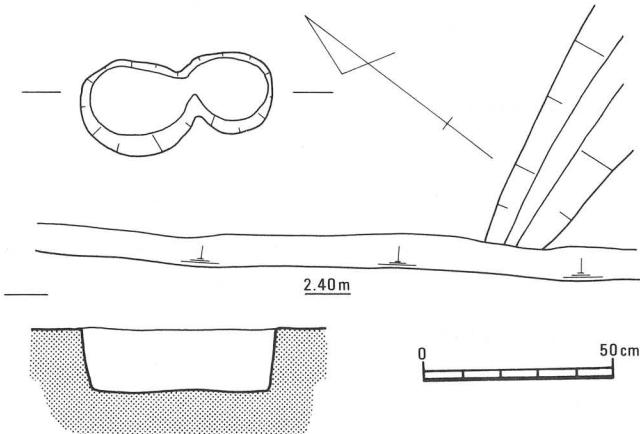
布田遺跡



第121図 布田遺跡IV A区 P 4出土遺物(2) $\frac{1}{10}$

を施し、全体に弧状をなす。両面ともに体部に研磨が施されている。刃部先端部分は大きな剥離面をそのまま刃として利用している。第119図はSK45から出土した刀器と管玉未成品である。1は細石刃風の縦長の剥片を利用する。側縁の一部に細かな二次調整を加えており、両側縁に刃こぼれ認められる。2は板状の未成品であるが施溝は認められない。

片面に研磨を施している。



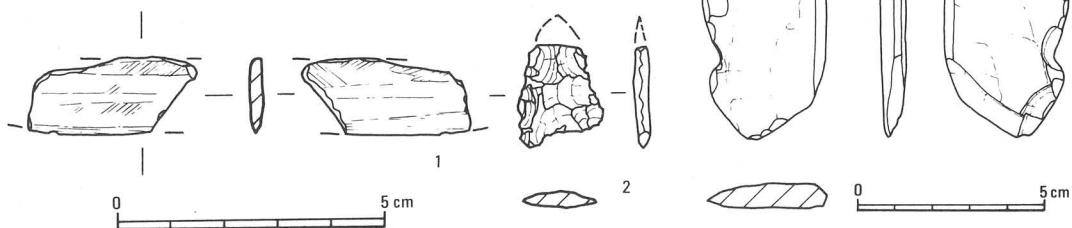
第122図 布田遺跡IV A区 P 4 実測図 $\frac{1}{20}$

(4) その他の遺物

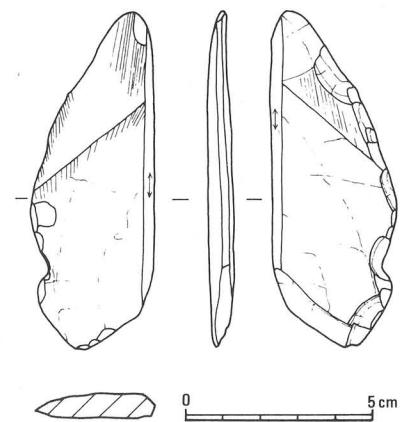
IVA区ではその他に明褐色砂質土上面から、遺物が少量出土する。また、柱穴状のピットおよび試掘溝から若干好資料が出土しているので合わせて報告しておく。

P 4 (第122図)

調査区の西側SD02付近で発見された柱穴状のピットである。径25cmと22cmのピットが2個ならぶ。内部から土器、紡錘車、管玉未成品が出土する。土器はくの字形口縁の甕形

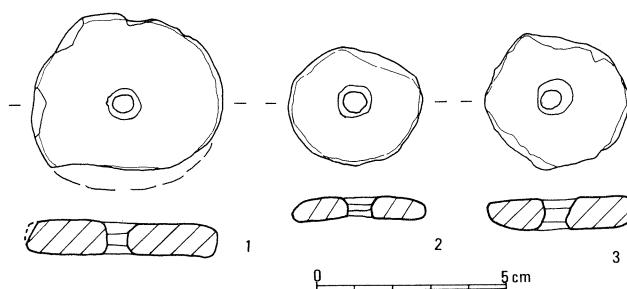


第123図 布田遺跡IV A区明褐色砂質土出土遺物(1) $\frac{1}{10}$



第124図 布田遺跡IV A区明褐色砂質土出土遺物(2) $\frac{1}{2}$

布田遺跡



第125図 布田遺跡IV A区明褐色砂質土土遺物(3) $\frac{1}{2}$
0.5cm、重さ7.9gを測り、周縁は丸みを帯びている。

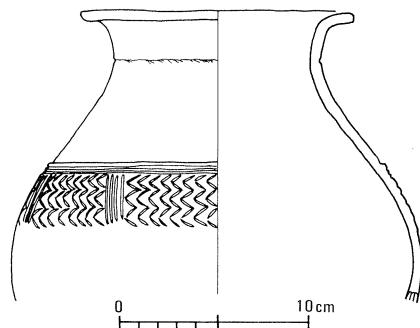
土器（第120図）で、口縁端部に2条の沈線を回している。第121図1～5は管玉未成品である。4・5は特に方柱状をなし、形割品に全面研磨を行った段階のものである。SK 22～25と同様の製作過程を持つと思われる。同図6は土器片を転用した紡錘車である。直径約3.4cm、孔径

明褐色砂質土

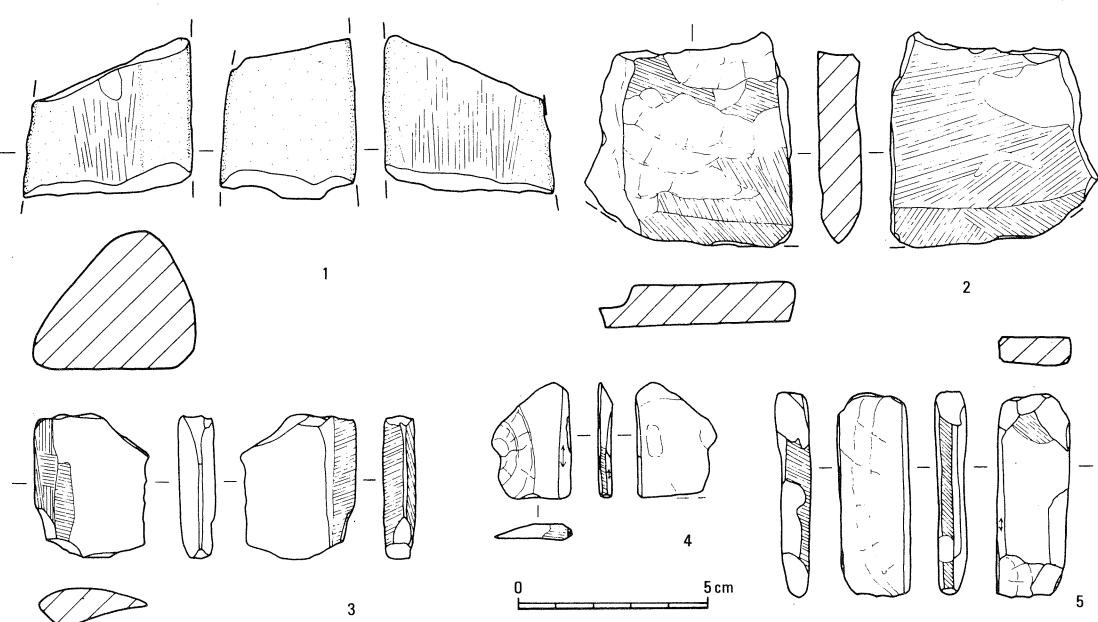
遺構の掘り込まれた層であるが、特に遺構に伴わない資料がある。以下に土器以外について述べる。

石器・石製品（第123・124図、図版36—14、38—7・8）
第123図2は流紋岩製石鎌で、調整の粗い雑なつくりである。同図1は流紋岩製の石鋸と思われる。刃部は磨耗著しく、擦痕も多く残る。第124図は板状の管玉未成品で、直線的な一辺に両面から施溝を行っている。

紡錘車（第125図、図版38—19～21） 3点出土するがいずれも土器を転用したもので、1～3は各々、



第126 布田遺跡第9グリッド出土
遺物(1) $\frac{1}{4}$



第127図 布田遺跡第9グリッド出土遺物(2) $\frac{1}{2}$

直径5.0cm、3.5cm、3.5cm、重さ20.7g、5.7g、12.1gを測る。

試掘第9グリッド

試掘の時点で多数の遺物が出土したが、伴出の遺構が断定できない。羽状文を持つ壺形土器（第126図、図版36—7）が出土する。肩部に沈線で、区画された羽状文を持ち、頸部には沈線状の筋がはいる。石鎌が3点ある。（第128図）1は木葉形を呈し、2・3は平基式である。第127図1は自然石を利用した砥石で二面を使用する。2・3は各々石庖丁、石剣の破片と思われる。4・5は板状の管玉未成品で、5は長方形に整形された形割前段階のものである。（図版36—15～17、37—25・26）

第6表 布田遺跡IV A区石器・石製品計測表(1)

挿図番号	遺物名	遺構 (層位)	全長 (現存長) cm	最大幅 cm	重量 (現重量) g	色調	石質	備考	写真番号
68	石鎌	SD01	8.4	10.6		黄灰色	流紋岩	破片	30—20
69-1	石鎌	〃	1.75	1.25	0.5		黒曜石	平基式	30—17
2	〃	〃	2.5	0.6	1.3		〃	凹基式	15
3	〃	〃	2.32	1.72	1.25		〃	平基式	16
4	刃器	〃	2.9	1.7			〃		18
5	〃	〃	2.7	3.3			〃		19
6	石鋸	〃	(2.3)	2.8		灰白色	流紋岩質凝灰岩	破片	
7	〃	〃	(3.3)	3.6		〃	〃	〃	
8	〃	〃	(4.5)	3.4		黄灰色	〃	〃	
70-1	管玉未成品	〃	5.4	5.6		明緑灰色	緑色凝灰岩	施溝1箇所	37—14
2	〃	〃	2.9	6.3		〃	〃	〃1〃	19
3	〃	〃	4.1	4.8		〃	〃	右側縁研磨	13
4	〃	〃	(6.4)	4.1		〃	〃	施溝2箇所	6
5	〃	〃	(7.7)	5.8		〃	〃		3
6	〃	〃	2.8	3.1		〃	〃		16
7	〃	〃	(4.1)	4.0		〃	〃	施溝2箇所	8
8	〃	〃	(5.6)	3.8		〃	〃	〃1〃	2
9	〃	〃	4.3	3.0		〃	〃	〃2〃	17
10	〃	〃	5.5	5.9		〃	〃	〃2〃	15
11	〃	〃	4.4	3.1		〃	〃	〃2〃	30—3
71-1	〃	〃	3.2	3.6		〃	〃	〃3〃	37—4
2	〃	〃	(3.5)	3.5		〃	〃	〃1〃	12
3	〃	〃	(3.2)	2.3				右側縁研磨	30—7
4	〃	〃	2.6	2.0		灰黄色	流紋岩質凝灰岩	施溝2箇所	4
5	〃	〃	(2.8)	2.8		明緑灰色	緑色凝灰岩	右側縁研磨	37—18
6	〃	〃	(2.2)	2.5		〃	〃	施溝1箇所	9
7	〃	〃	(2.9)	2.2		〃	〃	裏面研磨	30—8
8	〃	〃	(2.3)	2.6		〃	〃	全面研磨	37—11
9	〃	〃	(4.0)	2.2		〃	〃	施溝1箇所	7
10	〃	〃	4.0	1.8		〃	〃	全面研磨	10
11	〃	〃	(3.9)	1.8		〃	〃	施溝1箇所	30—13
12	〃	〃	(1.8)	3.6		〃	〃	〃2〃	37—1
13	〃	〃	3.1	2.1		〃	〃	〃2〃	30—12
14	〃	〃	(3.7)	1.6		〃	〃	全面研磨	14

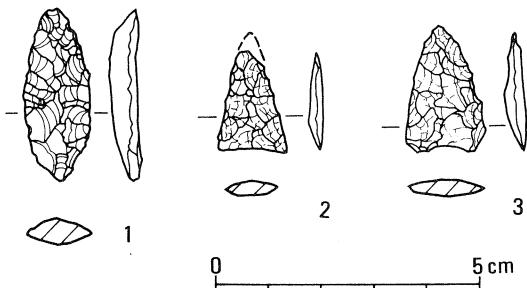


図128図 布田遺跡第9グリッド出土遺物(3) 7/10

(足立克己)

布田遺跡

第7表 布田遺跡IVA区石器・石製品計測表(2)

捕図番号	遺物名	遺構 (層位)	全長 (現存長) cm	最大幅 cm	重量 (現重量) g	色調	石質	備考	写真番号
71-15 16 17	管玉未成品	S D01 〃 〃	(2.9) (3.4) (1.8)	1.5 2.1 1.2	(0.7)	明緑灰色 〃 〃	緑色 〃 〃	凝灰岩 〃 〃	施溝1箇所 全面研磨 施溝2箇所
72-1 2 3 4 5	管 玉	〃 〃 〃 〃 〃	(3.3) (2.4) (1.9) (1.3) (1.2)	1.4 1.6 1.3 0.4 0.3	(0.2) (0.2)	〃 〃 〃 〃 〃	〃 〃 〃 〃 〃	施溝1箇所 全面研磨 施溝2箇所 穿孔途中	30-10 37-5 30-9 30-11 6 5 32-18 19
81-1 2	石 玉 石庖丁	S D04 〃	2.3 6.9	2.4 8.2		黄灰色 暗灰色	砂岩 黑色粘板岩質 岩	穿孔途中5箇所 破片、穿孔2箇所	38-16 6
84	石 鋸	S I 01	2.4	1.6	0.8		黒曜石	0.6 0.6(脚長)	36-11
94-1 2	石 錐 石庖丁穿孔 具	S K05 〃	7.9 6.0	13.1 1.9		明緑灰色 緑灰色	流紋岩質凝灰岩 流紋岩	½欠損 刃部に擦痕あり	38-2 37-32
96	砥 石	S K18	(4.3)	4.1		灰白色	流紋岩質凝灰岩	両面使用	37-41
102	凹 石	S K16	10.4	8.8		〃	細粒花崗岩	〃	37-40
107-9 10 11 12 13 14	管玉未成品	S K22 〃 〃 〃 〃 〃	4.3 (3.0) 3.1 2.2 (2.1) (2.5)	1.4 1.8 1.5 1.1 1.0 0.9		明緑灰色 〃 〃 〃 〃 〃	緑色 〃 〃 〃 〃 〃	凝灰岩 〃 〃 〃 〃 〃	全面研磨 施溝1箇所 〃1箇所 〃2箇所 全面研磨 施溝1箇所
108-1 2 3	砥 石	〃 〃 〃	6.2 (6.0) 6.0	4.2 2.3 2.6			砂岩	V字状施溝あり 全面使用 全面使用	38-3 5 4
111-1 2 3 4	管玉未成品	S K29 〃 〃 〃	3.4 4.0 (2.8) 2.3	4.9 3.2 2.1 1.2		明緑灰色 〃 〃 〃	緑色 〃 〃 〃	凝灰岩 〃 〃 〃	施溝1箇所 全面研磨 側面に擦痕あり
115-1 2 3	石 鋸 管玉未成品	S K37 〃 〃	2.0 (4.2) (3.8)	1.1 2.8 1.9	(0.9)	明緑灰色 〃	黒曜石 緑色 凝灰岩	平基式 施溝2箇所	36-12 37-38 39
118	局部磨製石 錐	S K46	8.8	13.6		〃	〃	一部欠損	38-1
119-1 2	刃 器 管玉未成品	S K45 〃	2.1 2.9	1.0 1.3	1.6	黄緑灰色	黒曜石 緑色 凝灰岩	刃こぼれあり 片面研磨	37-33
121-1 2 3 4 5	〃	P-4 〃 〃 〃 〃	2.8 3.1 0.8 1.7 2.3	1.4 1.7 1.5 1.3 0.8	1.1 1.3 1.3 2.0	明緑灰色 〃 〃 〃 〃	〃 〃 〃 〃 〃	施溝1箇所 〃1箇所 〃1箇所 未穿孔 〃	37-24 23 20 22 21
123-1 2	石 鋸 石 鋸	明褐色砂質 上 〃	3.2 (1.9)	1.4 1.58	(0.85)	緑灰色 灰色	流紋岩	刃部に擦痕あり 0.3(脚長)	38-8 36-14
124	管玉未成品	〃	8.1	3.2		明緑灰色	流紋岩質凝灰岩	施溝2箇所	38-7
127-1 2 3 4 5	砥 石 石庖丁 磨製石剣片 管玉未成品	第9グリップ 〃 〃 〃 〃	(4.0) (5.7) (3.8) (3.2) (5.4)	4.5 5.5 2.9 2.1 1.9		黄灰色 灰黄色 明緑灰色	黒曜石 緑色 凝灰岩	両面使用 全面研磨 1側縁研磨 施溝3箇所 〃2箇所	38-9 11 10 37-25 26
128-1 2 3	石 鋸	〃 〃 〃	3.25 (1.9) 2.4	1.25 1.3 1.5	2.3 (0.6) 1.0	黒硬質 砂岩	曜砂岩	尖基式 平基式 回基式	36-17 15 16

IVB区の遺構と遺物

IVB区では、3本の溝、1棟の住居跡状遺構、14個の土壙を確認した。調査区南側では、遺構面の下に、多量の遺物を含む包含層、杭列遺構を確認した。出土遺物は、全て弥生時代のものであった。

(1) 溝 状 遺 構

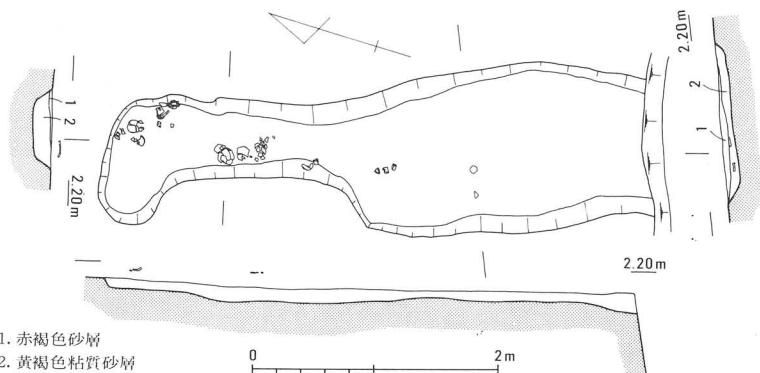
SD01(第129図、図版41—2)

南北に伸びる溝で、幅130cmを測る。南側はトレンチにかかるため不明である。溝は、北端より203cm南で、幅61cmと狭くなり、北端で西側に鉤状に折れている。深さは、幅の広い部分で8cm、狭い部分で16cmとなる。遺物は、いずれも底面よりやや浮いた状態で出土したが、大半は狭い部分に集まっている。

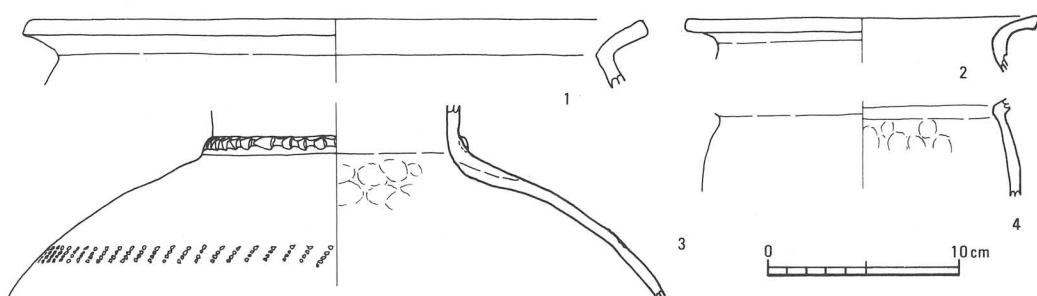
土器(第130図、図版45—3~18) 壺形土器・甕形土器などの破片が出土した。壺形土器(3)は、強く肩が張り、頸部は直線的に立ち上がる。頸部下端に指頭圧痕文を有する貼付突帯を回らし、胴部は、4本単位の櫛描刺突文を回らす。甕形土器(1・2・4)は、口縁がくの字状に強く屈曲し、端部はあまり肥厚しない。

石器(第131図)

砥石が1点出土した。流紋岩製で、自然石の平坦面を底面として利用している。使用痕は片面にのみ認められる。

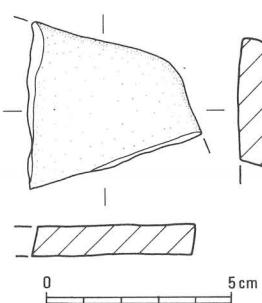


第129図 布田遺跡IVB区SD実測図 1/60



第130図 布田遺跡IVB区SD01出土遺物(1) 1/4

布田遺跡



第131図 布田遺跡IV B区
SD01出土遺物(2)

SD02・04 (第132図、図版41—3)

東西方向に隣合って伸びる。SD02は、幅54~100cm、深さ10~22cmで、西へ向いてやや低くなっているようである。SD04は、幅70~110cm、深さ20cmで、東西で深さはあまり変わらない。この2本の溝は、トレンチ東側では確認できなかったが、IVA区では、断面で確認している。遺物は、大部分が底面直上より出土した。

土器 (第134図、図版45—1~7・19~21) SD02からは、壺形土器(1~3)、甕形土器(4~6)などの破片が出土している。

壺形土器はいずれも口径17~20cmの口縁が大きく外反するものである。2は口縁端部が下方にやや肥厚し、3本単位の櫛描刺突文を回らす。甕形土器はいずれも口縁がくの字状に屈曲し、口縁端部は肥厚しない。4は胴が大きく張る。

5は胴外面上半に縦の刷毛目調整、下半には縦の笠磨きを施す。内面は縦の刷毛目調整である。

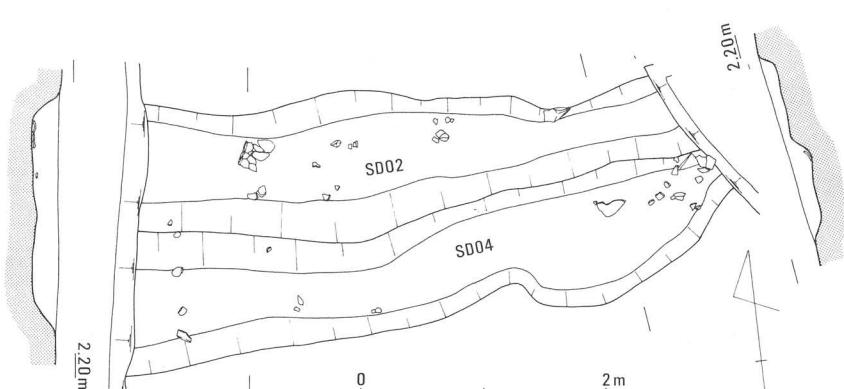
SD04からは、甕形土器(7~9)などの破片が出土した。いずれもくの字状の口縁で、口縁端部は肥厚しない。7は胴部外面に縦の刷毛目調整を施し、8は胴部内面に刷毛目調整を施す。

石器 (第133図、図版46—13) SD02から石庖丁1点を一部折れた状態で検出した。凝灰岩製でほとんど完形品である。背部は外湾し、二次加工を施している。刃部は直線的に研磨しているが鋭さはなく、丸くなっている。両面、背部、両側面ともに研磨している。穿孔はない。

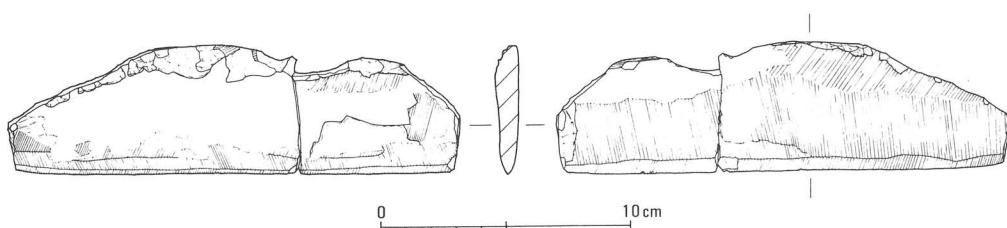
(2) 住居跡状遺構

SI01 (第
136図、図版
39—1)

西側は道路
のため、調査
できなかった
が、南北300
cmの隅丸方形
の平面プラ

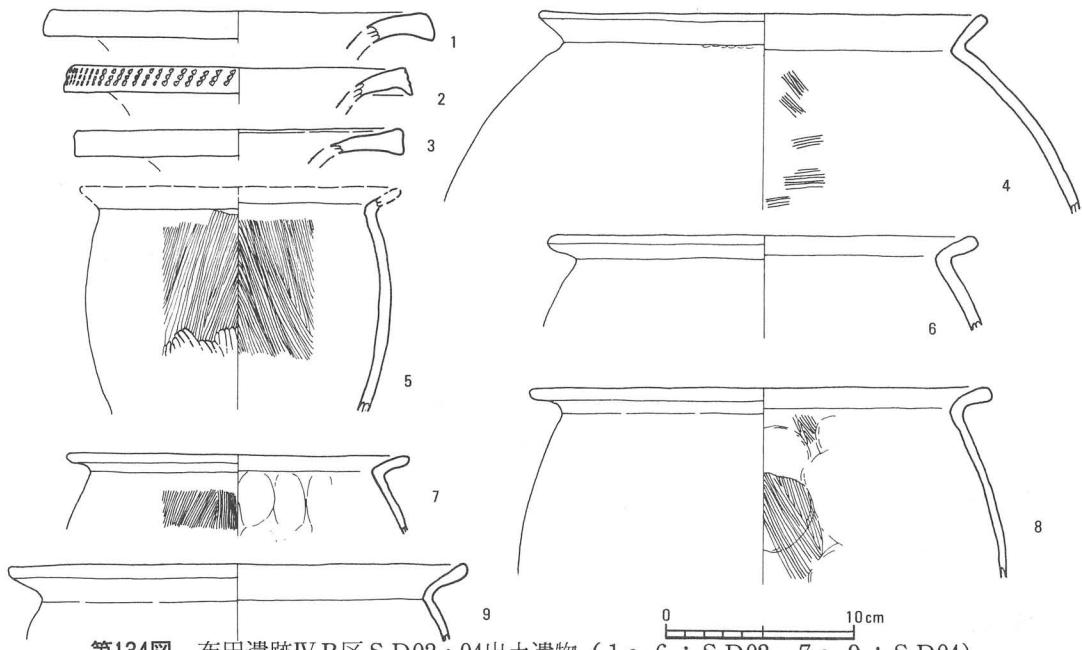


第132図 布田遺跡IV B区 SD02・04実測図 1/60



第133図 布田遺跡B区 SD02出土遺物 1/3

布田遺跡



第134図 布田遺跡IV B区 S D02・04出土遺物 (1~6 : S D02、7~9 : S D04)

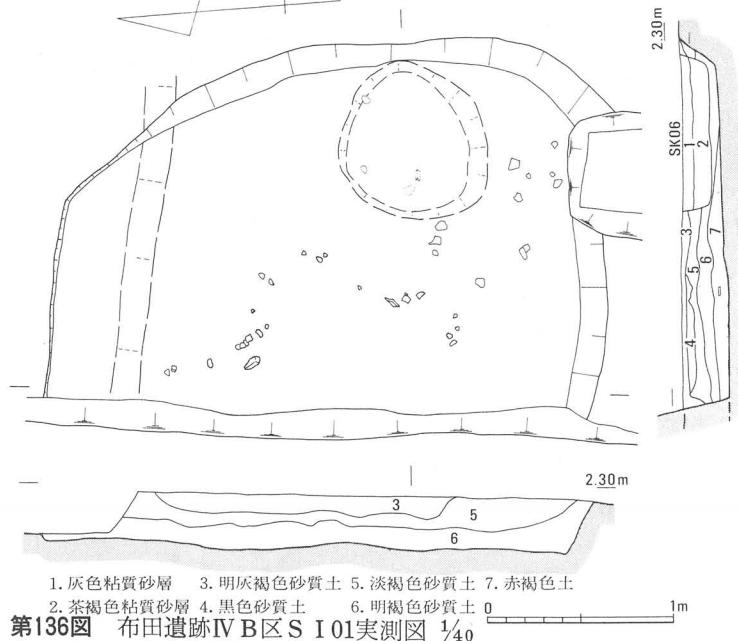
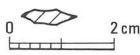
ンを呈している。壁高は30cmで、側溝や柱穴は確認できなかった。遺構中央部にあたる位置に南北130cm、厚さ3cmの焼土層を確認したが、西への広がりは不明である。遺物はいずれも床面より浮いた状態で検出した。

土器 (第137図1~3、図版45~8~12) 壺形土器などが出土した。1は口縁が短く外反し、胴部が強く張る。2は短い頸部をもち、口縁はゆるやかに外反する。3は口縁が大きく外反し、端部が下方に肥大する。いずれも磨耗が著しく、調整は不明である。

石器 (第135図・第137図4、図版46~11

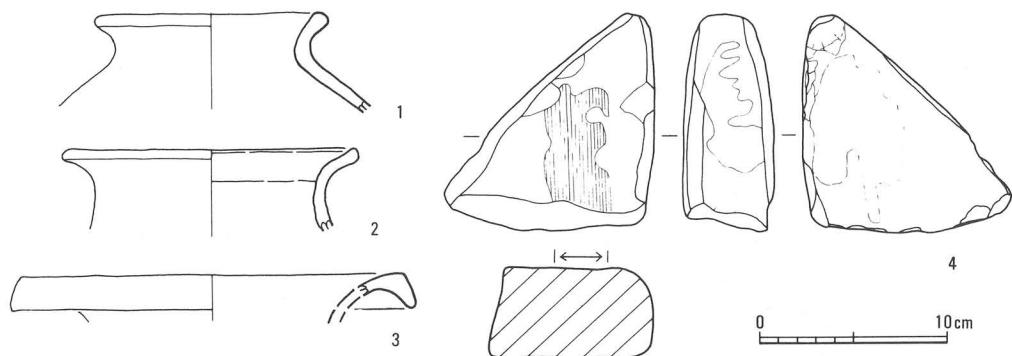
・15) 石鏃と砥石が各1点出土する。石鏃は黒曜石製で、片方の脚を折損する。縦長の二等辺三角形を呈し、基部に浅いわたぐりをいたれた凹基式である。全

第135図
布田遺跡
IV B区
S I 01
出土遺物
(1) 7/10



第136図 布田遺跡IV B区 S I 01実測図 1/40

布田遺跡



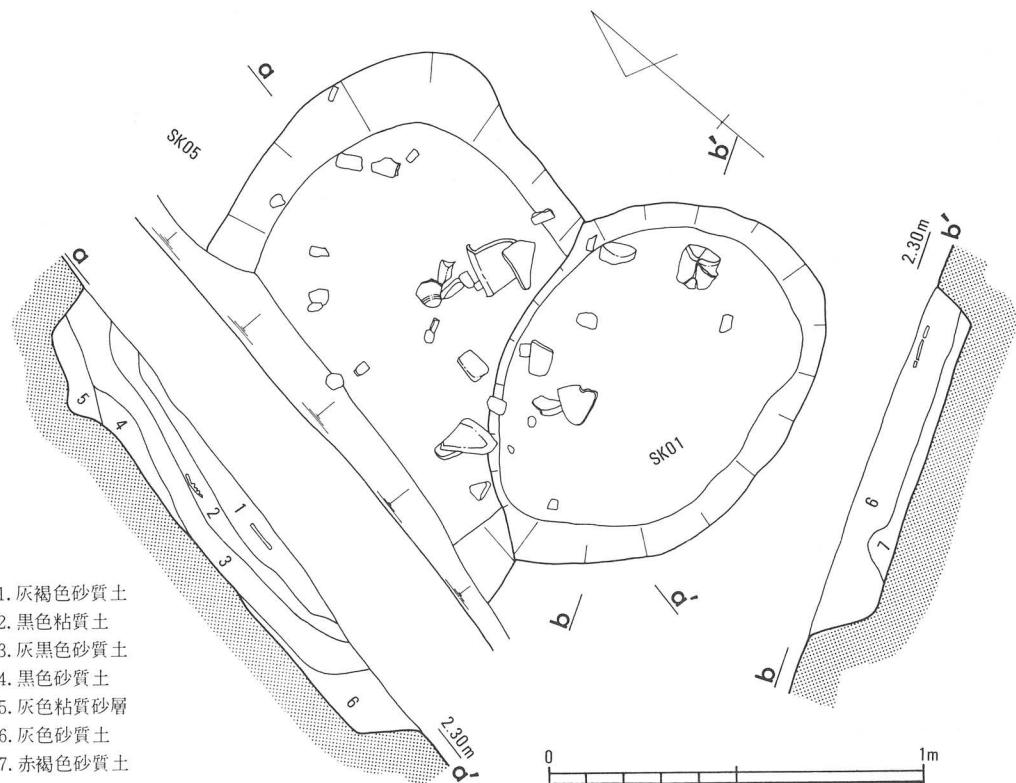
第137図 布田遺跡IV B区 S I 01出土遺物(2) 1/4

体に粗い二次加工を施す。砥石は玄武岩製で、自然石の平坦面を利用している。割れ面以外の3面に使用痕が認められる。

(3) 土 壤

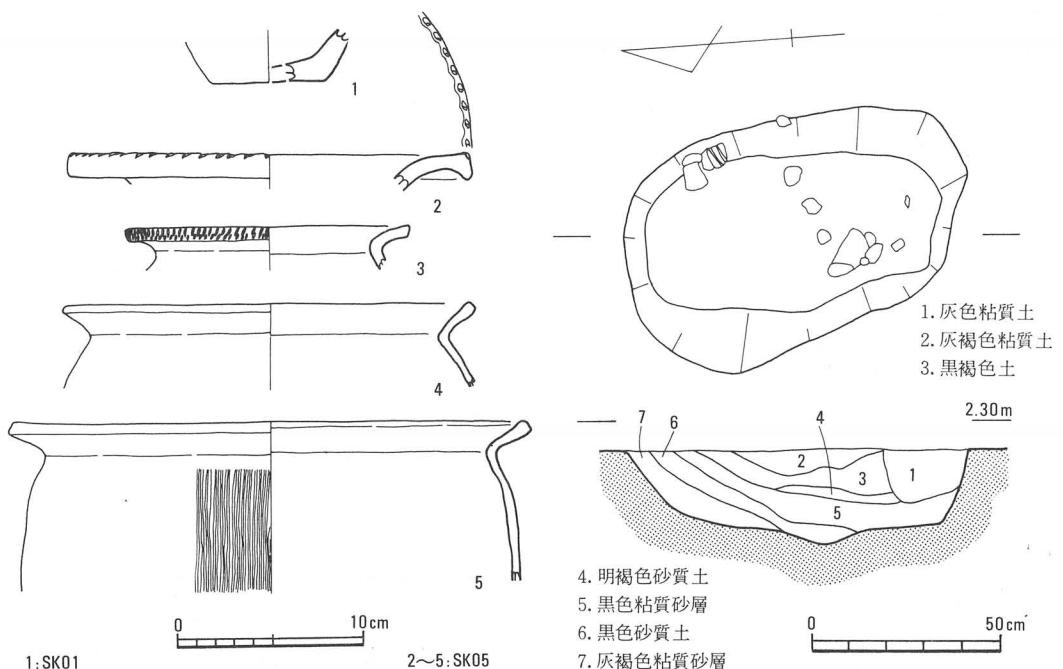
SK01・05 (第138図、図版40—1、44—1)

SK05がSK01を切り込んでいた。SK01は長径110cm、短径80cm、深さ15cmを測り、東西に主軸をもつ橢円形の土壙である。SK05は長辺117cm、深さ20cmの方形の土壙であると思われるが、



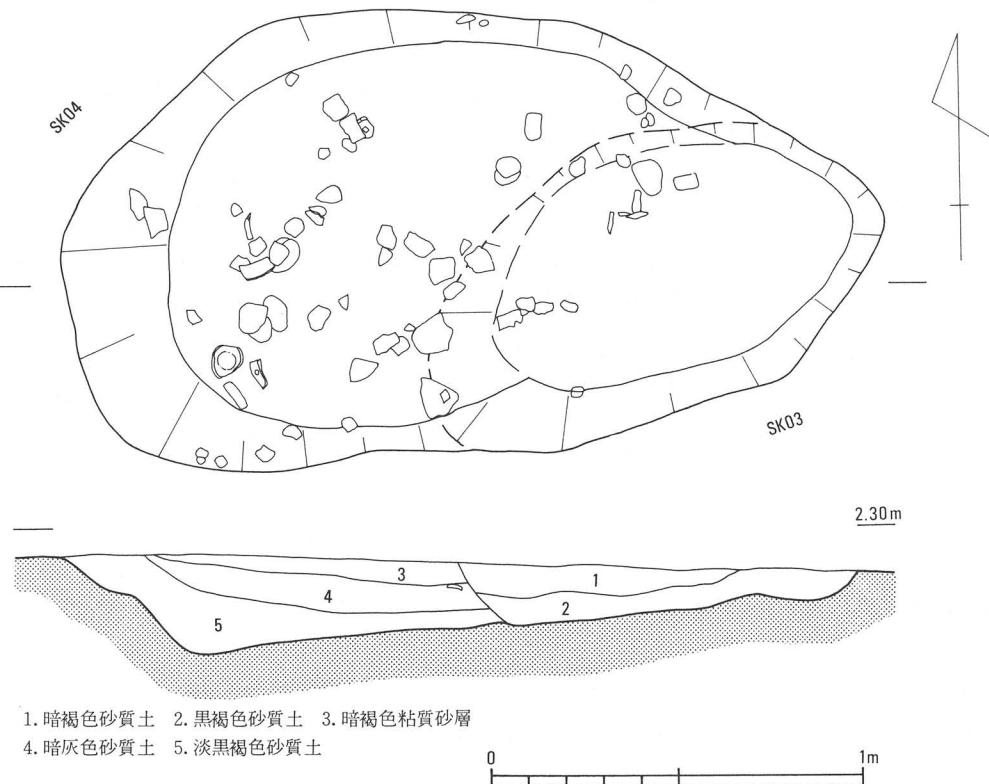
第138図 布田遺跡IV B区 S K01・05実測図 1/20

布田遺跡



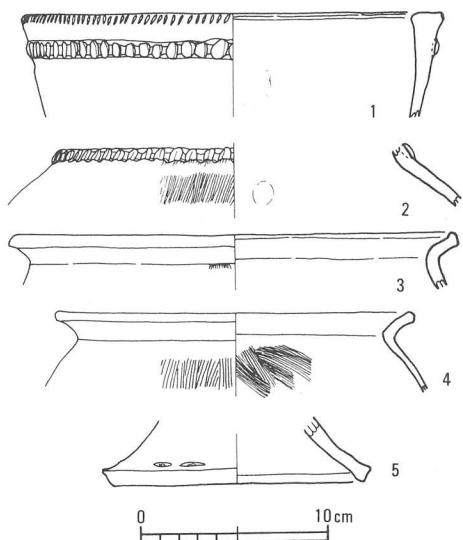
第139図 布田遺跡IV B区 S K01・05出土遺物 1/4

第140図 布田遺跡IV B区 S K02実測図 1/20



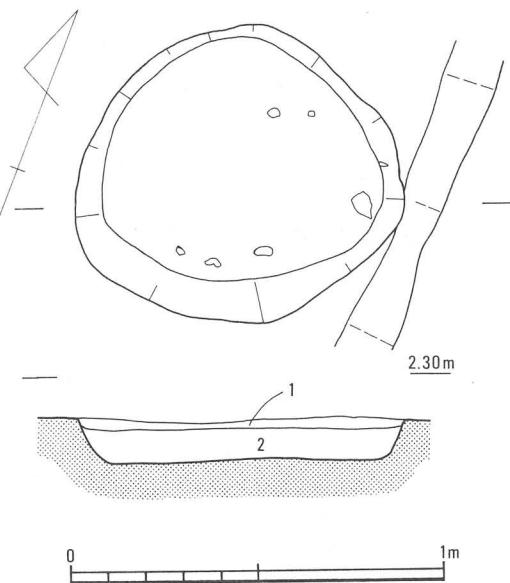
第141図 布田遺跡IV B区 S K03・04実測図 1/20

布田遺跡



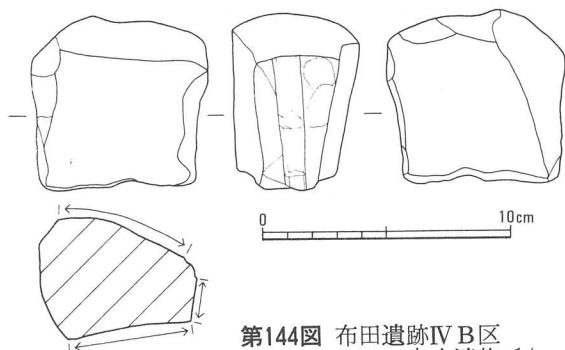
1:SK02, 2:SK03, 3~5:SK04

第142図 布田遺跡IV B区 S K02~04
出土遺物 $\frac{1}{4}$



1.灰色粘質砂層 2.茶褐色粘質砂層

第143図 布田遺跡IV B区 S K06 $\frac{1}{20}$



第144図 布田遺跡IV B区
S K04出土遺物 $\frac{1}{3}$

出土した。SK05では壺形土器(2)、甕形土器(3~5)などが出土した。壺形土器は口縁が大きく外反し、端部は下方にやや肥厚して上端に刻目を回らす。甕形土器はいずれもくの字状の口縁をなし端部はあまり肥大しない。3は口縁が強く屈曲し、端部に上下2段に刻目を入れる。5は胴部外面に縦の刷毛目調整を施す。

SK02 (第140図、図版39-2)

長辺96cm、短辺58cm、深さ20cmを測り、南北に主軸をおいた長方形の土壙である。遺物はほとんどが床面直上で出土している。

土器 (第142図1、図版45-24) 口縁が胴部からまっすぐに立ち上がる甕形土器である。口縁上面を平坦につくり、端部に刻目を回らす。頸部には指頭圧痕文を有する貼付突帯を回らす。

SK03・04 (第141図、図版39-3)

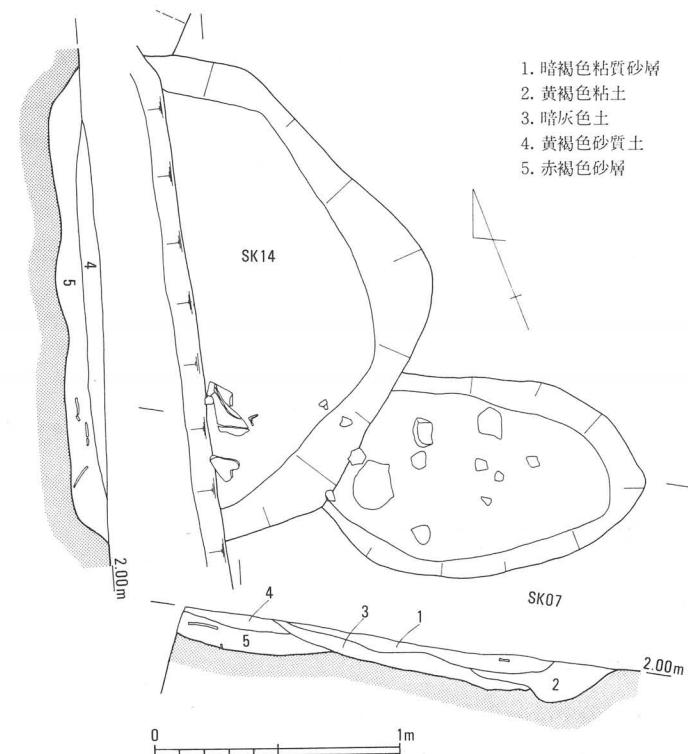
西側は道路のために確認できなかった。SK05には、中央北寄りに、36cm×30cm、厚さ13cmの範囲にわたって炭化物、焼土の堆積がみられた。この中には、成形痕をもつ焼けた粘土塊を含んでいる。遺物はほとんどが浮いた状態で出土した。

土器 (第139図、図版45-22・23・26~29) SK01では底部(1)など数片が

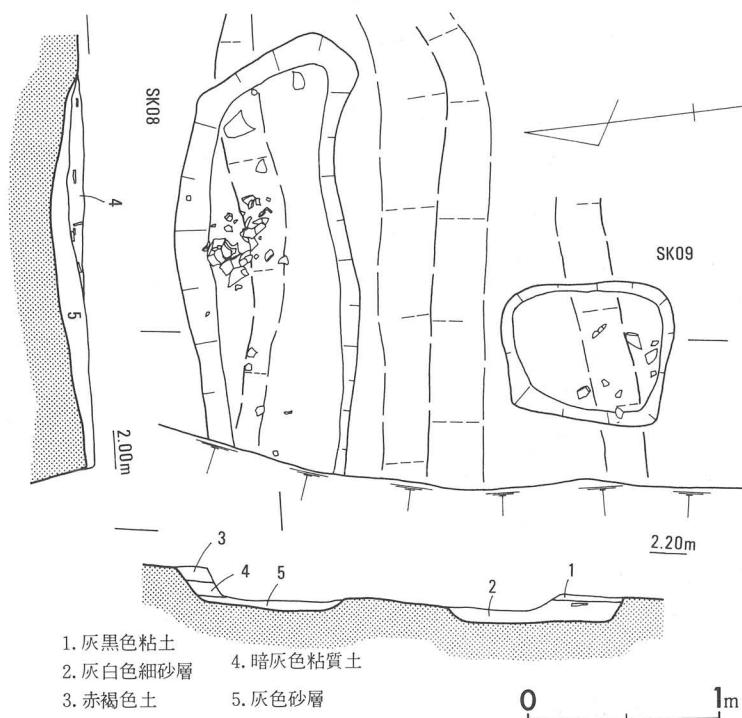
SK03はSK04の東側にはとんど重なり合っている。SK03は長径130cm、短径73cm、深さ15cmを測り、主軸は西より約23°南へずれた橢円形の土壙である。SK04は、長径約200cm、短径117cm、深さ23cmを測り、東西に主軸をもつ橢円形の土壙である。遺物はSK04では全体に散在し、SK03では非常に少なかった。

土器（第142図2～5、図版45～25～・30～34）SK03からは甕形土器などを確認した。胴部が強く張り、頸部に指頭圧痕文を有する貼付突帯を回らす。胴部外面は縦の刷毛目調整を施す。SK04からは甕形土器（3・4）、高环形土器（5）が出土した。甕形土器はくの字状の口縁で、端部は肥厚しない。胴部外面は縦の刷毛目調整を施し、3は内面にも刷毛目調整を施している。5は高环形土器の脚部で外面に縦の箒磨きを施している。

石器（第144図、図版52～10）砥石が1点出土した。凝灰岩質砂岩製で、自然石の平坦面を利用している。3面を使用しており、側面には浅い溝状の使用痕を残してい

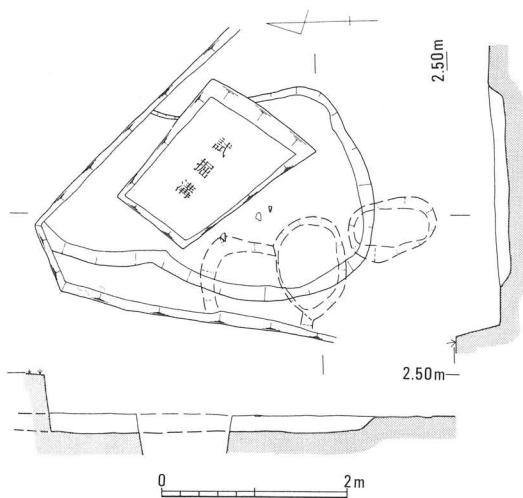


第145図 布田遺跡IV B区SK07・14実測図 1/30



第146図 布田遺跡IV B区SK08・09実測図 1/40

布田遺跡



第147図 布田遺跡IV B区SK10
実測図 $\frac{1}{40}$

る。

SK06 (第143図)

S I 01の中に掘り込まれた土壙で、直径約85cm、深さ約10cmを測る。不整円形を呈する。当

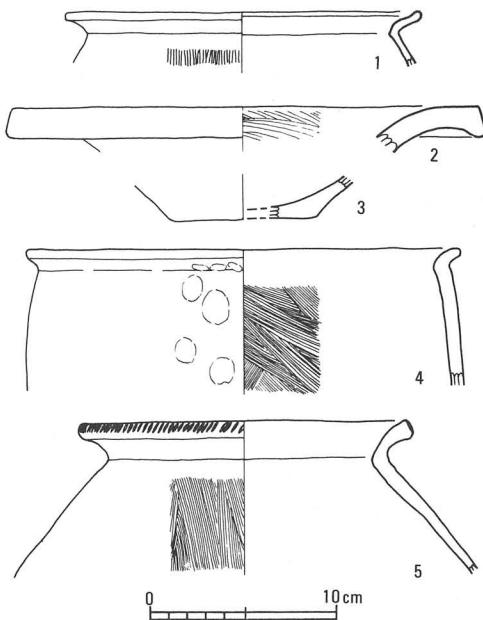
初、ひとつの土壙と考えられたが、土層観察の結果、S I 01の埋土との切合の線が明確でなく、あるいはS I 01の一部に含まれるものであったかもしれない。遺物は土器の小片が出土するのみである。

SK07・14 (第145図、図版40—2)

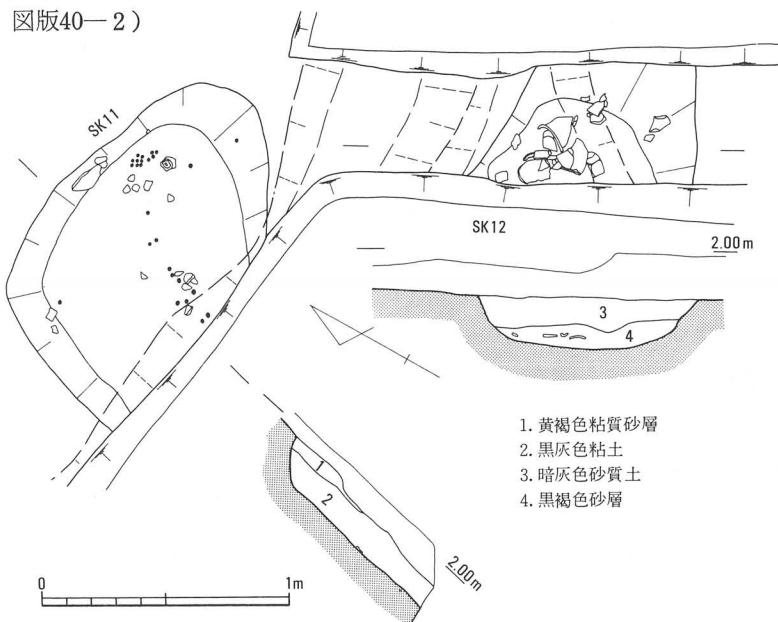
SK07がSK14を切り込んでいる。SK07は長径140cm、短径80cm、深さ12cmを測る楕円形の土壙である。SK14は西側を排水溝で切られているため平面形は不明であるが、南北195cm、深さ15~20cmを測る。遺物はいずれも底面直上で検出した。

土器 (第148図15、

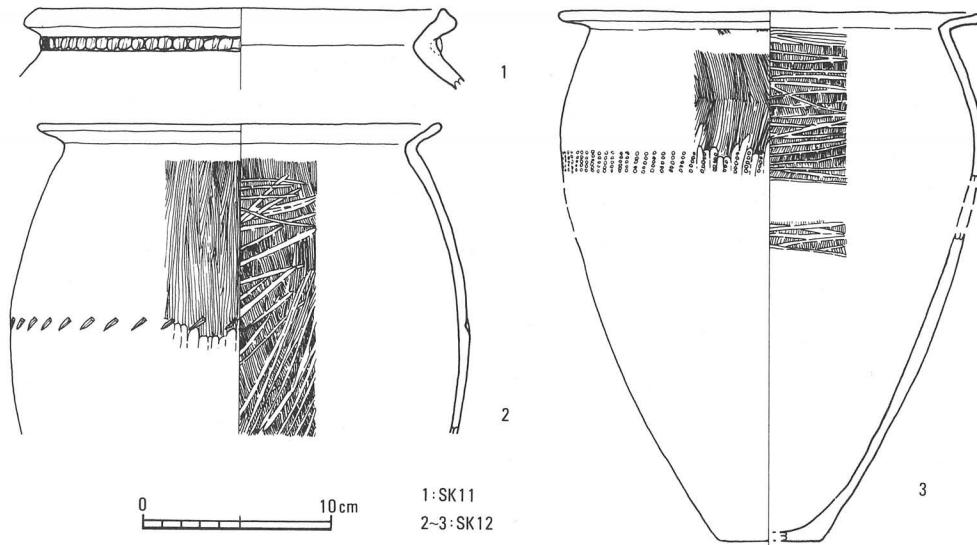
図版45—35~37) S



1:SK07
2~3:SK08
4:SK10
5:SK14
第148図 布田遺跡IV B区SK07・08・10・
14出土遺物 $\frac{1}{4}$

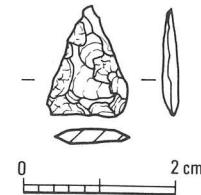


第149図 布田遺跡IV B区SK11・12実測図 $\frac{1}{30}$



第150図 布田遺跡IVB区SK11・12出土遺物 1/4

K07からは、口縁がくの字状に強く屈曲する甕形土器（1）が出土した。口縁端部は肥厚せず、胴部外面に縦の刷毛目調整を施す。SK14では口縁がくの字状となる甕形土器（5）が出土した。口縁端部がやや肥厚し、刻目を回らす。胴張りが強く、外面に縦の刷毛目調整を施す。

第151図 布田遺跡
IVB区SK11
出土遺物 1/1

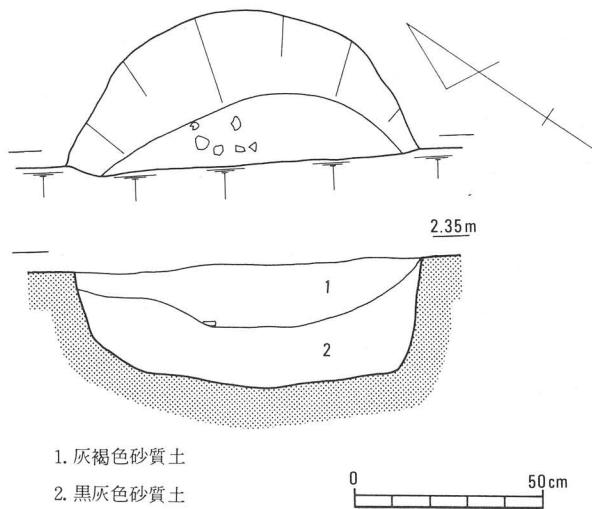
SK08・09（第149図、図版40—3）

SK08はSD02に切り込まれた東西に細長い土壙である。西側は排水溝のため不明である。幅94cm、深さ20cmを測る。SK09は、SD04に切り込まれた長辺91cm、短辺75cm、深さ15cmを測り、南北に主軸をもつ方形の土壙である。遺物は土器数片が出土した。SK08から壺形土器（第148図2）、底部（同図3）などが出土した。

2は口縁が大きく外反し、端部は下方にやや肥厚する。内面には横の刷毛目調整を施す。

SK10（第147図、図版44—2）

北側は調査区外のため確認していないが、残存長315cm、幅240cm、深さ15cmを測る不整形な大形の土壙である。甕形土器（第148図4）などが出土した。口縁はくの字状で短く、胴部内面に刷毛目調整を施す。



第152図 布田遺跡IVB区SK13実測図 1/20

布田遺跡

SK11・12（第149図、図版41—1）

どちらも表面観察ではプランを確認できず、包含層を下げる途中で確認したため、一部分しか残せなかった。SK11は長辺130cm、短辺約90cm、深さ15cmを測る不整形な土壙である。SK12はSD04の下層10cmに掘られた幅80cm、深さ20cmの土壙である。

土器（第150図、図版45—40・41、46—2・3） SK11では甕形土器（1）などを検出した。口縁はくの字状で、端部がやや肥厚する。頸部には指頭圧痕文を有する貼付突帯を回らす。SK12からは底面直上より甕形土器（2・3）などが出土した。ともにくの字状の口縁で、端部は肥厚しない。胴部の最も張った部分に5本単位の櫛描刺突文を回らす。

石器（第151図、図版46—12） SK11から多量のチップとともに石鏃が1点出土した。硬質砂岩製の扁平なものである。やや縦長の二等辺三角形を呈する平基式のものである。全体に粗い二次加工が施され、裏面中央には第1次剥離面を残している。

SK13（第152図）

包含層発掘中に確認したため、一部分しか残せなかった。深さ30cmを測る。土器片少量が出土した。
(園山和男)

(4) その他の

調査区南北に南北トレンチを入れたところ、深い落ち込みが確認された。（図版42—1）当初、大きな溝と考えた（SD03）が、調査が進むにつれ、意宇平野を流れる旧河道の淀のようなところではないかという結論に達した。IVB区南側トレンチでは、包含層は南へ約10mで遺物が少くなり、粗い砂が多くなる。また、IVB区以南では、表土下1.5m～2mで砂礫層となっている。

この落ち込みに厚い包含層が認められ、多量の遺物が出土した。包含層は大きく2層に分けられる。上層は褐色土で、多量の土器・石器を含む。下層は黒色粘土と青灰色砂質土が互層をなして堆積している。下層が淀の底になると考えられ、大量の土器・石器・木製品の他に、流木・植物種子、纖維、貝類などが出土した。種子はトチ、クリ、カシ、クルミなどが確認された。さらに、落ち込み下面から円形に配列した杭列が検出された。以下、包含層および杭列遺構について説明する。

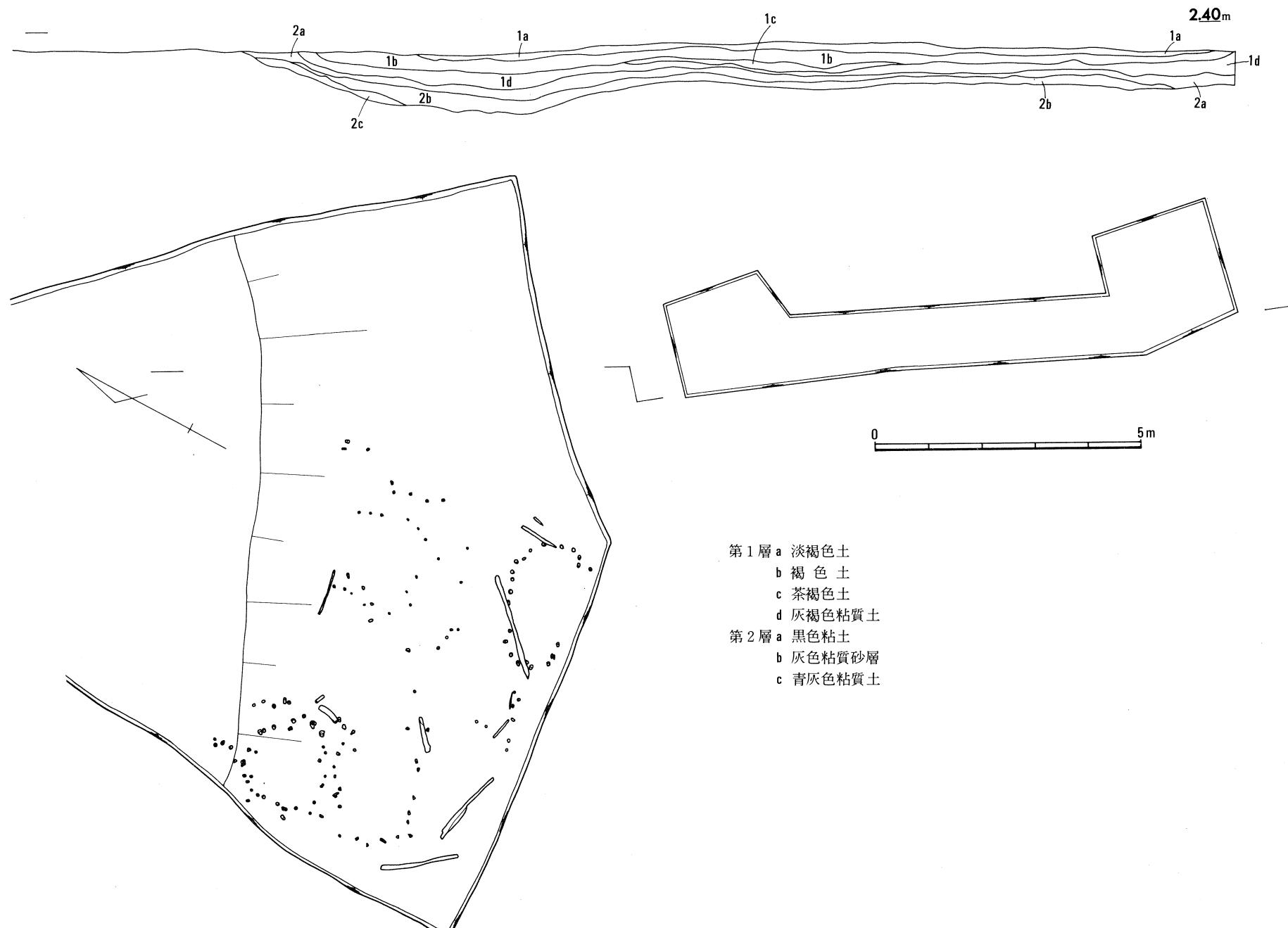
(a) 包含層出土土器（図版46—16～23、47、48、49、50—1～53）

石器・木製品とともに大量の土器が出土した。ほとんどが破片であってその量はコンテナ8箱に及んだ。このうち、できるだけ多くをここにのせた。

上層土器（第154図・第155図） 壺形土器・甕形土器・高坏形土器などが出土した。大部分の土器は器表が磨耗しており、風化にさらされた時期のあったことが考えられる。

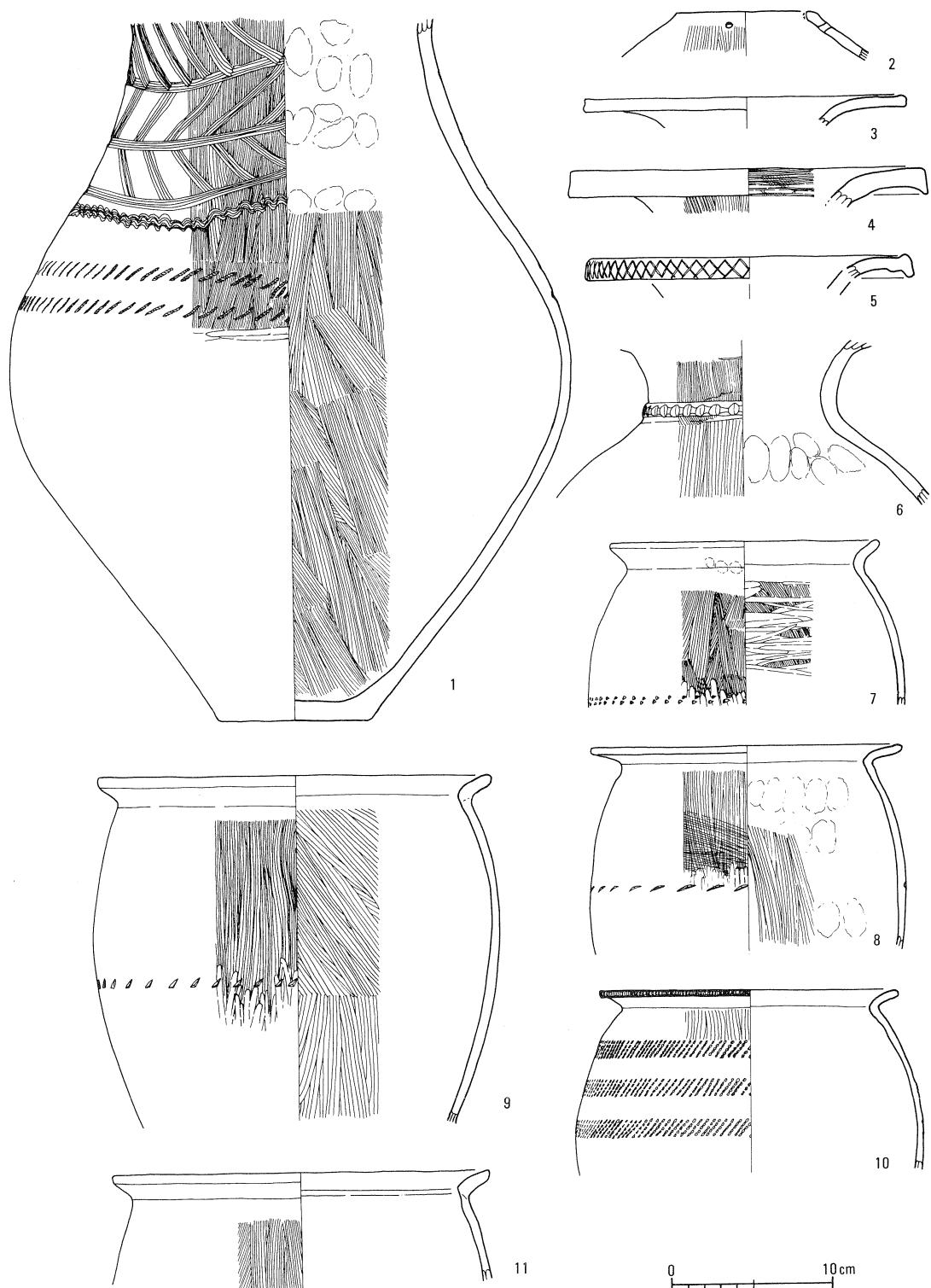
壺形土器（154図1～6） 1は半截された状態で内面を上にして出土した。これは遺構に伴うものであった可能性もある。口縁部を欠く。頸部からゆるやかに肩部に続き、強い胴張りをもつ。

布田遺跡



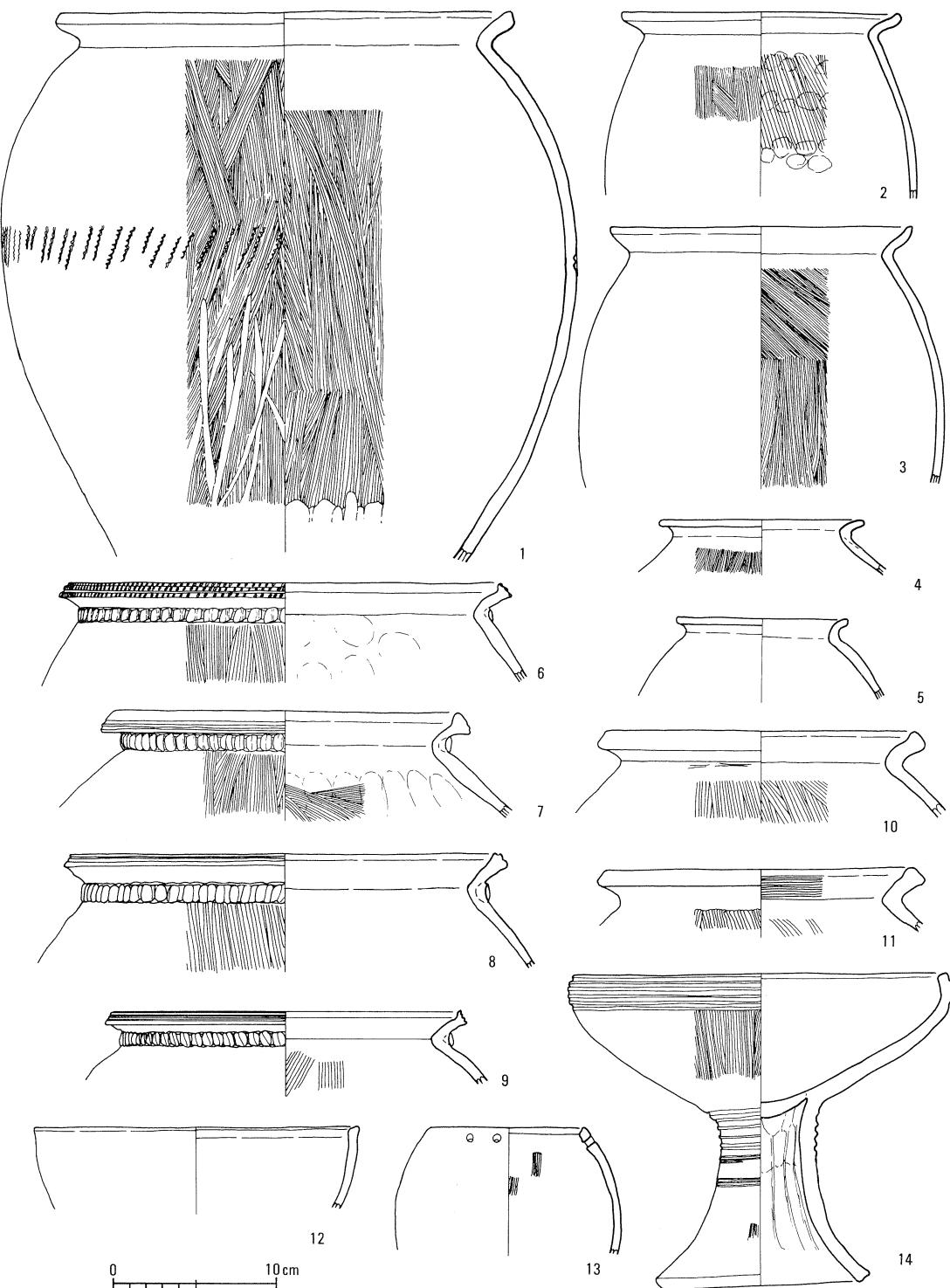
第153図 布田遺跡IV B区杭列実測図 $1/100$

布田遺跡



第154図 布田遺跡IV B区包含層上層出土土器(1) 1/4

布田遺跡



第155図 布田遺跡IV B区遺物包含層上層出土土器(2) 1/4

頸部には4本単位の櫛状工具による平行沈線文と斜行沈線文が交互に3段にわたって描かれ、その下に同一工具による波状文を回らす。肩部には10本単位の櫛描刺突文を2段に回らす。外面は頸部から胴部にかけて縦の刷毛目調整を施し、胴部下半は笠磨きを施す。胴部内面は縦の刷毛目調整を施す。2は胴部が球形に張り出す無頸壺である。口縁端部は肥厚しないで平坦につくる。口縁下に小孔を穿っているが、本来は2孔あったと思われる。外面は縦の刷毛目調整を施す。3～6は口縁が大きく外反し、筒形の頸部に続くものである。5は口縁端部に斜格子目文を回らす。6は胴張りが強く、頸部下端に指頭圧痕文を有する貼付突帯を回らす。

壺形土器（第154図7～11、第155図1～11） 口縁の形態から大きく4つに分けることができる。

A₁類（154図7） 口縁はくの字状で、屈曲部は丸みをもち、口縁端部は肥厚しない。胴がやや張り、内面には縦の刷毛目調整のち笠磨きを施す。

A₂類（第154図8～11、第155図2・3） 口縁はくの字状で内面屈曲部にやや稜がたつ。口縁端部はわずかにつまみ出す。胴張りがやや強くなる。胴部内外面ともに縦の刷毛目調整を施す。口縁端部に刻目を回らすものと無文のものがある。胴部には刺突文を回らす場合が多い。

B類（第155図1・10・11） 口縁はくの字状で、口縁部がやや肥厚する。器壁はやや厚くなる。胴部内外面ともに縦の刷毛目調整を施し、1は胴張部に貝殻による刺突文を回らす。

C類（155図6～9） 口縁はくの字状に強く屈曲し、端部は上下に肥厚する。端部に数条の凹線文を回らし、頸部には指頭圧痕文を有する貼付突帯を回らしている。胴部が強く張り、内外面ともに縦の刷毛目調整を施す。

以上の他に胴部が強く張り、口縁は短く、屈曲部が丸く、くの字状に外反する比較的小形のもの（第155図4・5）が出土している。

高環形土器（第155図12・14）

環部および完形品が出土した。12は口縁端部がやや丸みを帯びている。内外面ともに笠磨きを施す。14はやや内傾する口縁部の外側に5条の凹線文を回らす。環部外面には縦の刷毛目調整を施し、内面には笠磨きを施している。筒部には7条の凹線文を回らし、以下に笠状工具による螺旋状の沈線を2段に回らしている。脚端部はあまり開かず、環部に比較して小さい。

その他に無頸壺（第155図13）が出土した。球形の胴部をもち、口縁に2つの小孔を穿っている。内外面ともに縦の刷毛目調整を施す。脚台のつくものと思われる。

下層土器（第156図～第161図）

壺形土器・甕形土器・高環形土器・ミニチュア土器などが出土した。遺存状態がよく、河底に堆積したままあまり移動しなかったことを示していると思われる。

壺形土器（第156図、第157図1）

口縁部の形態・文様の有無から大きく3つに分けることができる。

A類（第156図1～4） 肩部から頸部にかけてゆるく外反する。口縁部はあまり伸びず、端部

布田遺跡

が上下にやや肥厚する。全体に小形のもので無文である。外面は縦の刷毛目調整を施し、内面は箆磨きを施す。出土数は極めて少ない。

B類（第156図5～12・16） 口縁が朝顔状に大きく外反し、端部は上下に肥厚している。全体に大形品が多いようである。文様の特徴によって以下のように細分できる。

B₁類（第156図8） 口縁端部、口縁上面に全く文様をもたない。出土数は少ない。

B₂類（5～7・9～12） 口縁端部、あるいは口縁上面に多種多様な文様を施す。文様は箆状工具、あるいは櫛状工具を用いている。肥厚させた口縁端部に箆状工具による斜格子目文を施すもの（11、12）があり、11は口縁上面に3本単位の斜格子目文、刺突文をもつ。12は刺突文をもち、口縁上端部には刻目をもつ。他に口縁端部は無文で、口縁上面に櫛描波状文等をもつもの、円形浮文をもつものなど多様である。このタイプの土器が最も多く出土している。

B₃類（16） 口縁端部に2条の凹線文を回らす。他に凹線の上から斜行单沈線文を回らす土器もある。出土数は少ない。

C類（第156図14・15） 頸部から胴部にかけてやや強く屈曲し、頸部はやや直線的である。口縁は大きく外反し、端部は上下に肥厚する。頸部下端には指頭圧痕文を有する貼付突帯を施す。口縁端部には、箆状工具による斜格子目文、斜行短沈線文を施す。15は頸部が短い大形品である。

D類（第156図13・18） 口縁がやや外反しながら直線的に立ち上がり、端部はやや肥厚して平坦面をつくる。頸部には断面三角形の刻目突帯を施す。13は口縁上端部に4本単位の斜格子目文を施し、3個をセットとする円形浮文を施す。18も同じタイプと思われ、頸部からゆるく広がった肩部にも断面三角形の刻目突帯を回らす。内面は箆磨きを施す。

他に小形の壺形土器が出土している。（第156図19・20、第157図1）19・20は胴部片であるが、調整は甕形土器に類似している。19の外面は全面に箆磨きを施す。第157図1は横に広い球形の胴部で、胴張部に断面三角形の貼付突帯をもつ。外面は丁寧な箆磨きを有する。

また、赤色顔料を施した壺形土器片が出土している。（第156図17）肩部片で櫛描文の上をなぞるように施す。塗料については、鳥取大学医学部法医学教室池瀬淳氏に鑑定を依頼した。鑑定は発光分光分析による多元素同時測定が行われ、その結果、この赤色塗料はベンガラ（赤鉄鉱、 Fe_2O_3 ）様の物質が含有されていることが確認された。

壺形土器（第157図3～15、第158・159図・第160図1～11） 出土数は最も多いが形態的には比較的まとまっているようである。スヌの附着したものが多く、完形品はなかった。口縁の形態、文様などから以下のように分類できる。

A類 口縁がくの字状に屈曲し、端部は肥厚しない。全体に薄手のつくりである。包含層出土遺物のうち、最も多量に出土している。頸部および口端部の形態から、さらに4つに細分できる。

A₁類（第157図3・5～8・12・14・17・第158図3～7） 屈曲部内面が丸みを持っており、口縁端部も丸くつくり出す土器である。7を除いて胴部内面には箆磨きを施す。

A₂類（157図4・9～11・13・15・16、第158図1・2・9・11・18、第159図3・4・6） 屈曲部内面にやや稜が立ち、口縁端は丸くつくり出すものである。内外面ともに刷毛目調整を施す場合が

多く、中には外面にナデを施すものもある。A₁類よりもやや胴張りが強い。

A₃類（第158図8・10・12～14、16・17・20、第159図1・5・10・11）屈曲部内面に稜が立ち、口縁端部は上部をわずかにつまみ上げる。内面は刷毛目調整を施すものが多く、なかには範磨きを行うものもある。外面は胴部上半に刷毛目を施す場合が多く、下半は縦方向に範磨きを行う。胴部に刺突文を施す場合が多い。口縁端部に刻目を有するものもある。

A₄類（第158図15、第159図2・9・12）口縁端部が上下にやや肥厚する土器である。出土数は少ない。口縁端部に刻目を有するものが多い。胴部には刺突文を施す。胴部以下の破片（第159図7・8・13）もこのA類に含まれるものである。

B類（160図1・5～11）口縁はくの字状でやや強く屈曲する。端部は肥厚して、はっきりした平坦面をつくる。全体に厚手となり、胴張りも強くなつて卵形をなす。内外面ともに刷毛目調整を施す。出土点数はやや多い。口縁端部に斜行短沈線文や斜格子目文を施すものがある。胴部には刺突文、三角形の刺突文等が施される。底部はやや小さく、胴部との境がない。やや上げ底である。

C類（第159図14・15、第160図2～4）口縁は胴部から屈曲せずにやや内傾気味にのび、端部がやや肥厚して平坦面をつくり出す土器群である。文様の形態によって2つに細分できる。

C₁類（159図14・15）口縁部に3本の断面三角形の刻目突帯を施し、端部にも刻目を施している。やや厚手の口縁となる。その他に口縁端部平坦面に櫛描きの斜格子目文、波状文、刺突文、円形浮文などを施すものもある。

C₂類（第160図2～4）口縁部に指頭圧痕文をもつ貼付突帯を施すもので、C₁類に比べて口縁がやや薄手となる。全体に文様が少なくなり、2は口縁に3本単位の櫛描刺突文を施す。C₁類に較べて出土数は少ない。

高坏形土器（第160図12～17、第161図1～8）完形品は1点だけで、他は全て坏部、脚部の破片である。坏部の形態から次の3つに細分することができる。

A類（第160図12～14）坏部は半球状の体部に逆L字状に開く口縁が付く。脚柱部は太く徐々に裾が広がり、脚端部はハの字状に大きく開く。端部はナデで平坦面をつくり出す。外面は坏・脚とともに刷毛目ののち、縦方向に範磨きを施す。坏部内面は横位に範磨きを施している。13は口縁部上面に斜格子目文と円形浮文、口縁端部に刻目を施している。

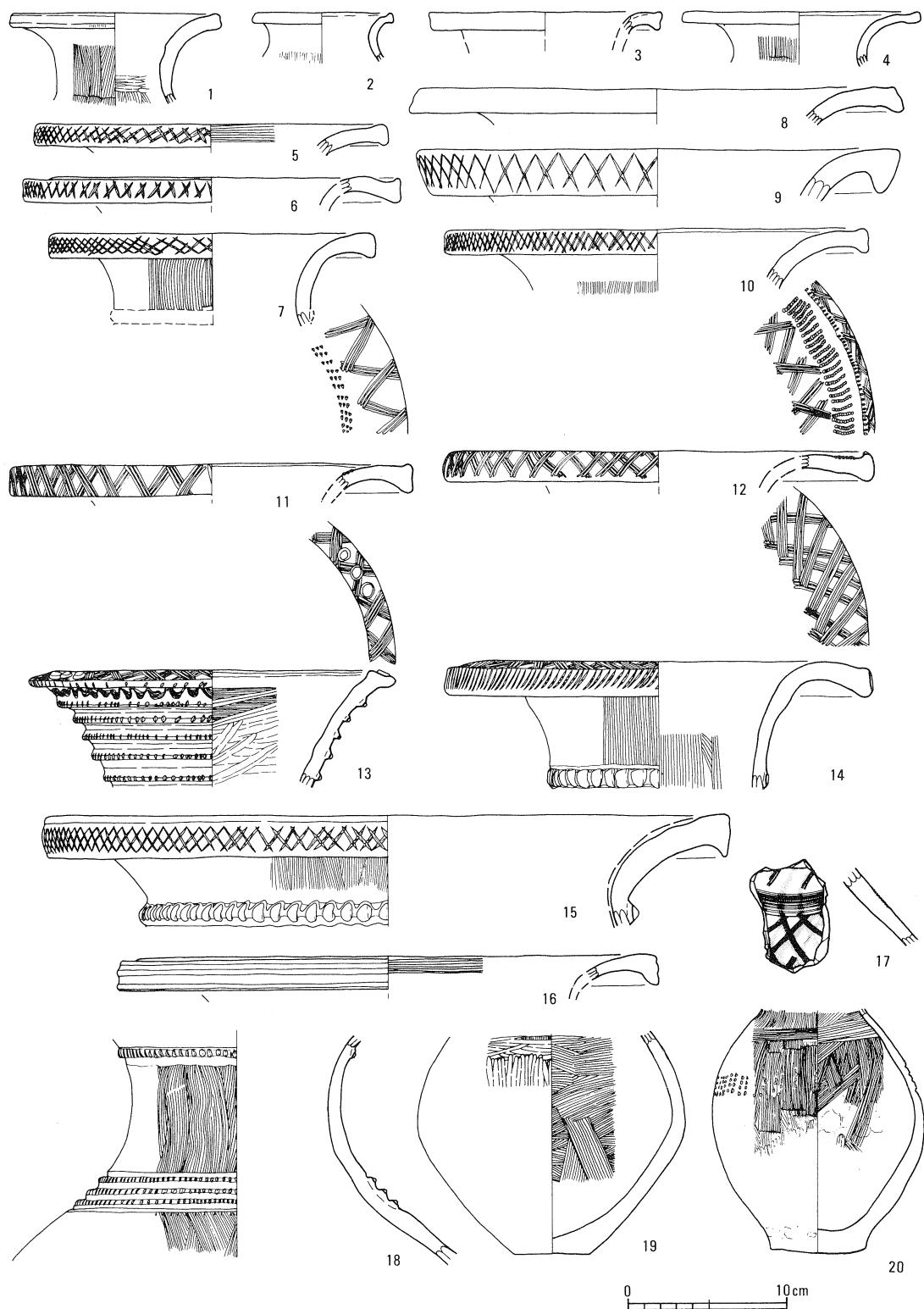
B類（第160図16・17、第161図1・2）坏部はやや浅く、口縁部は体部から立ち上がったままで終る。口縁端部は内外にやや肥厚する。端部外側は突帯状に貼付け、刻目が回る場合が多い。

C類（第160図15、第161図3）口縁が肥厚も外反もしない土器である。端部外面に刻目を回らす。端部内面はやや突出ぎみである。脚部も何点か出土する。（第161図4～8）特に断定はできないが、焼成や色調などから5・6はA類、4・7・8はB・C類の脚と思われる。

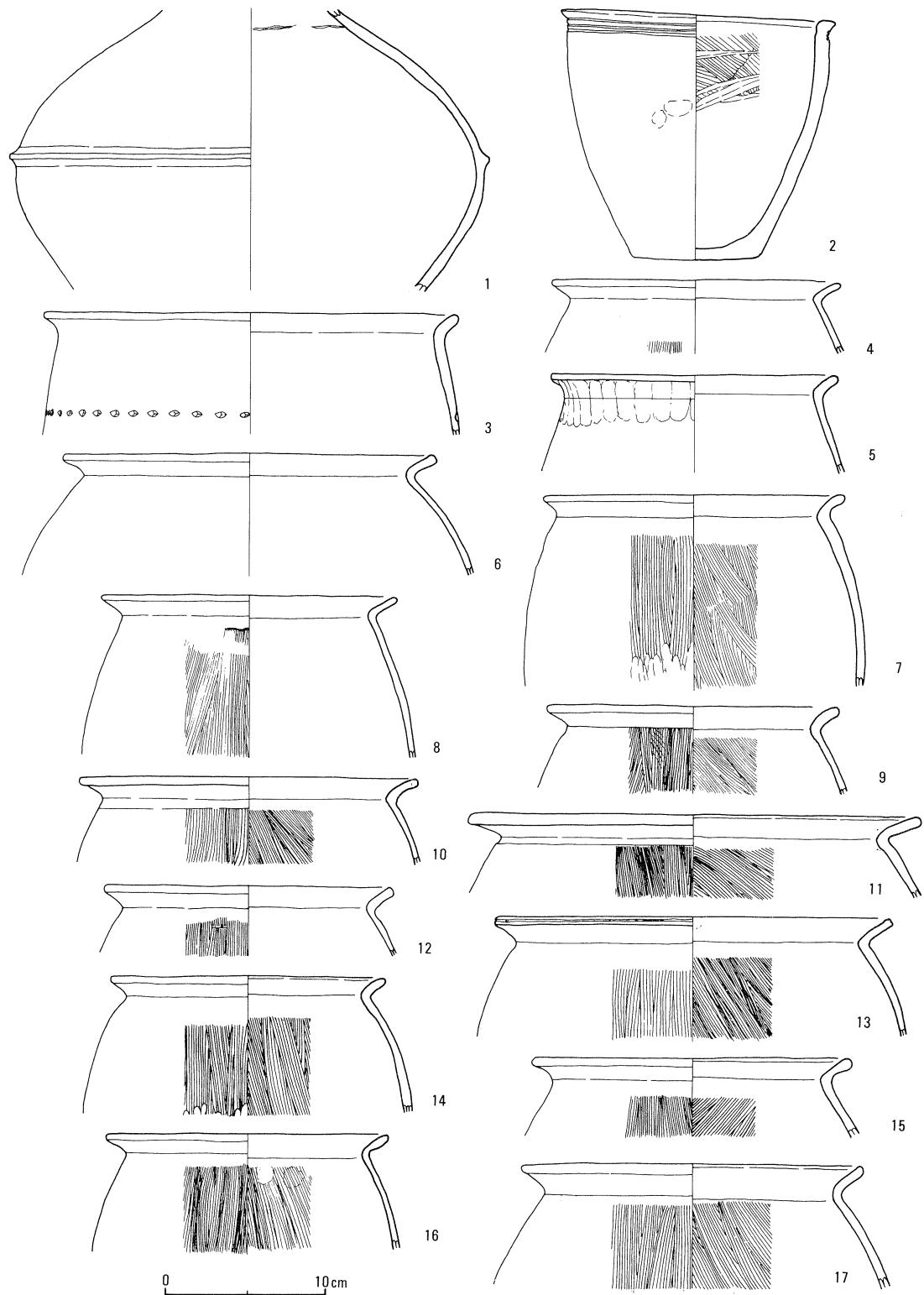
その他に鉢形土器、ミニチュア土器、底部穿孔土器などが出土した。（第157図2、第161図9～13）

鉢形土器（第157図2）ほぼ完形のものである。直口のやや深めの土器で、広い底部をもつ。

布田遺跡

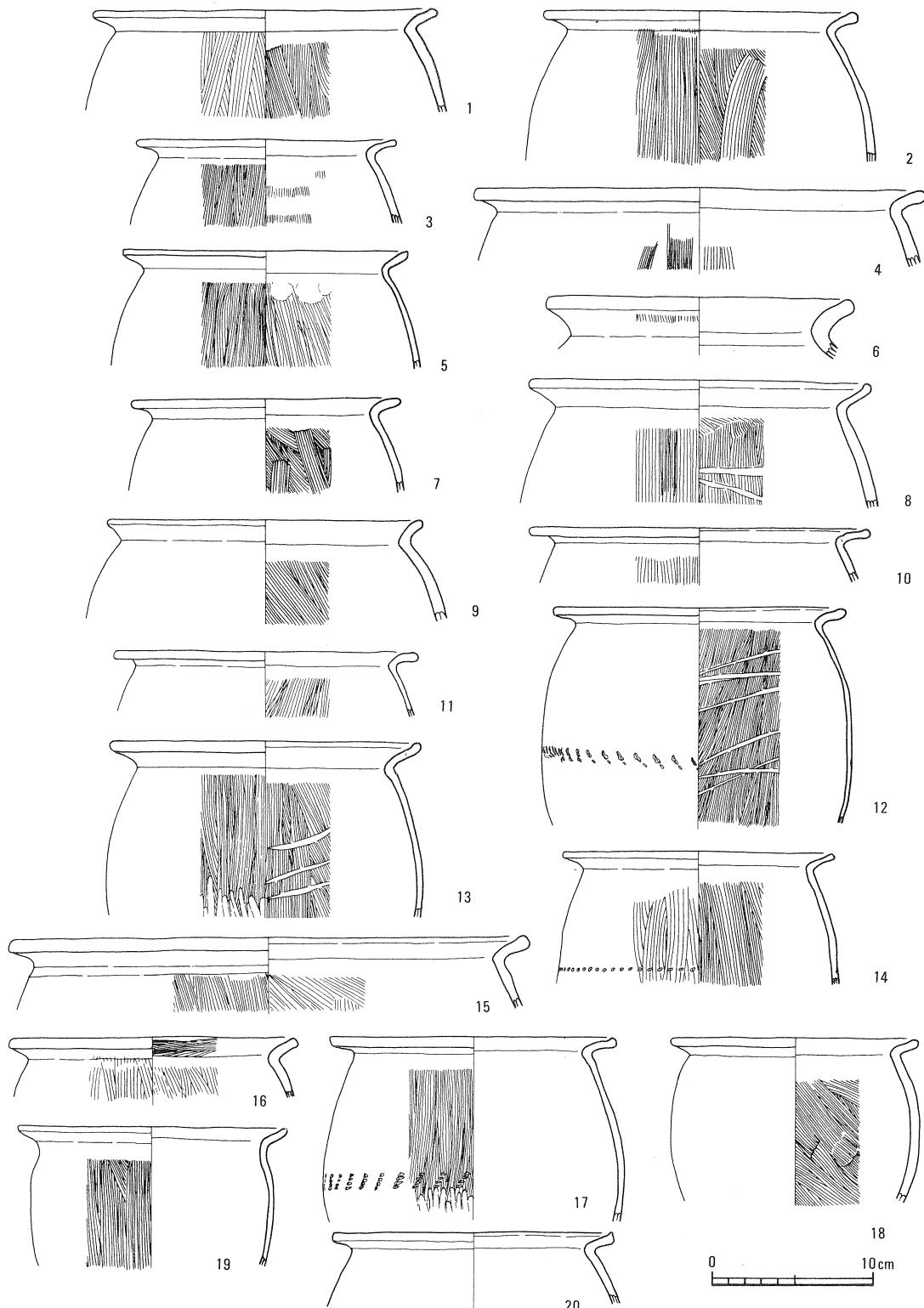


第156図 布田遺跡IV B区遺物包含層下層出土土器(1) 1/4



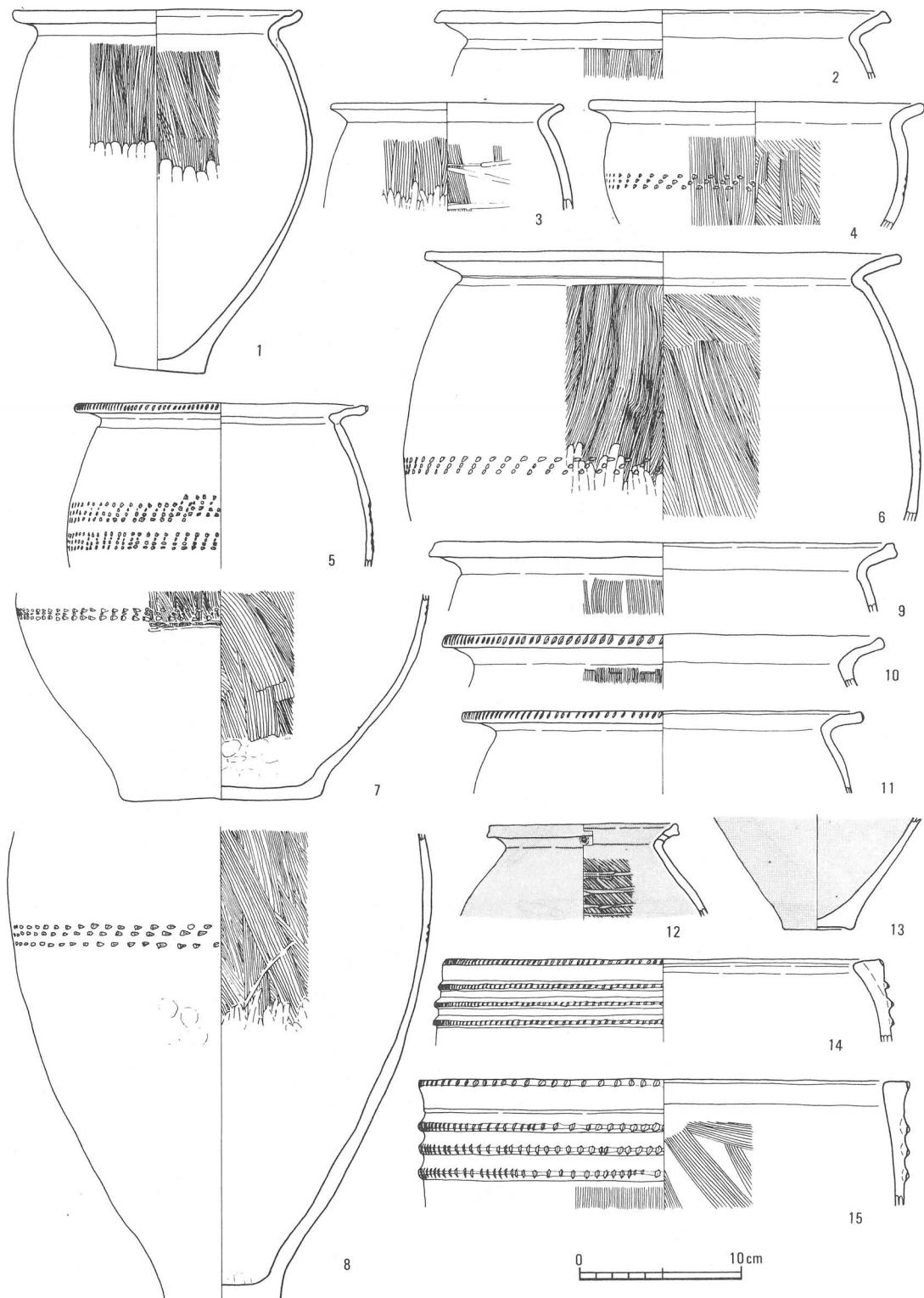
第157図 布田遺跡IV B区遺物包含層下層出土土器(2) 1/4

布田遺跡



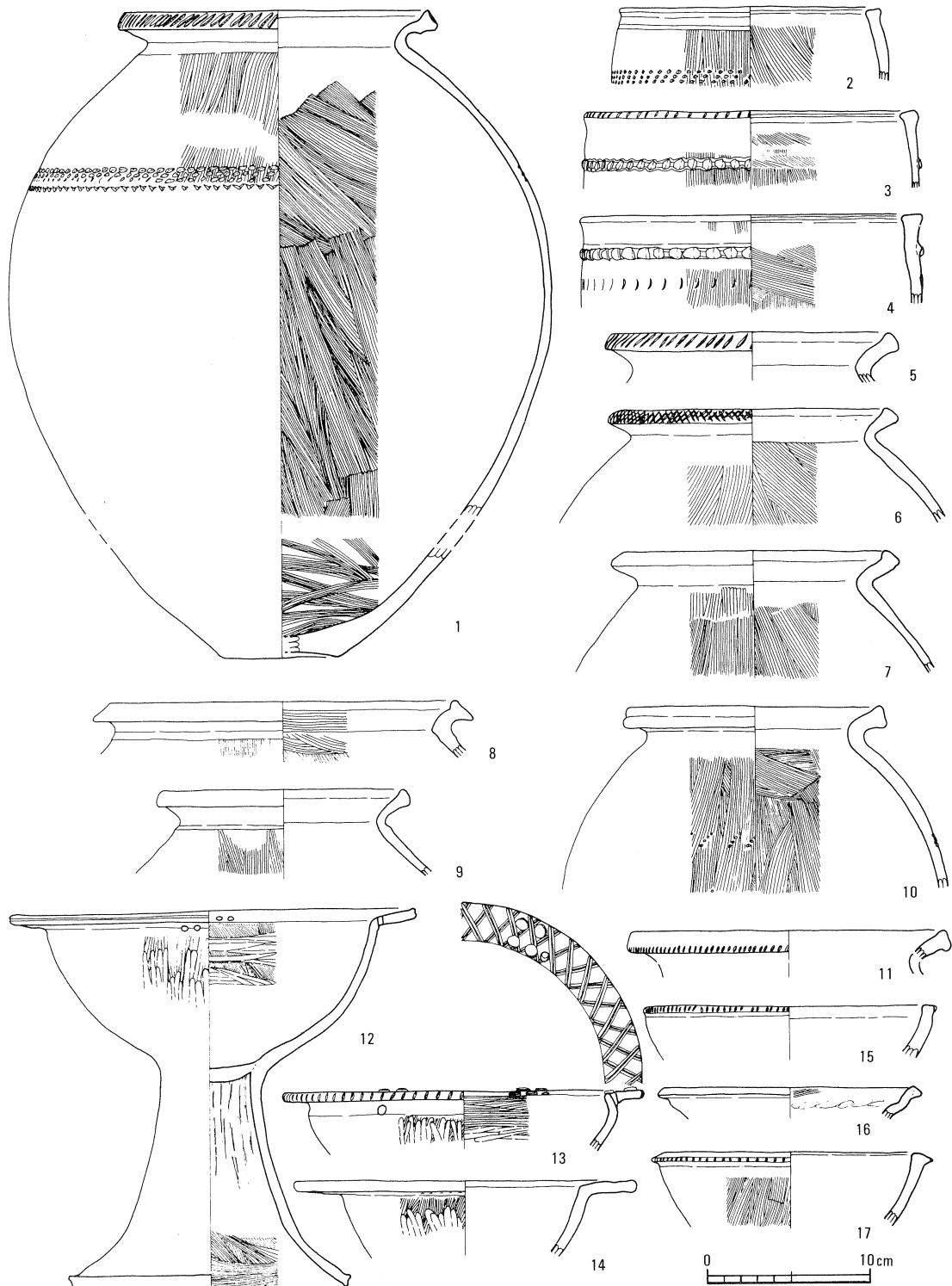
第158図 布田遺跡IV B区遺物包含層下層出土土器(3) 1/4

布田遺跡



第159図 布田遺跡IV B区遺物包含層下層出土土器(4) 1/4

布田遺跡



第160図 布田遺跡IV B区遺物包含層下層出土土器(5) 1/4

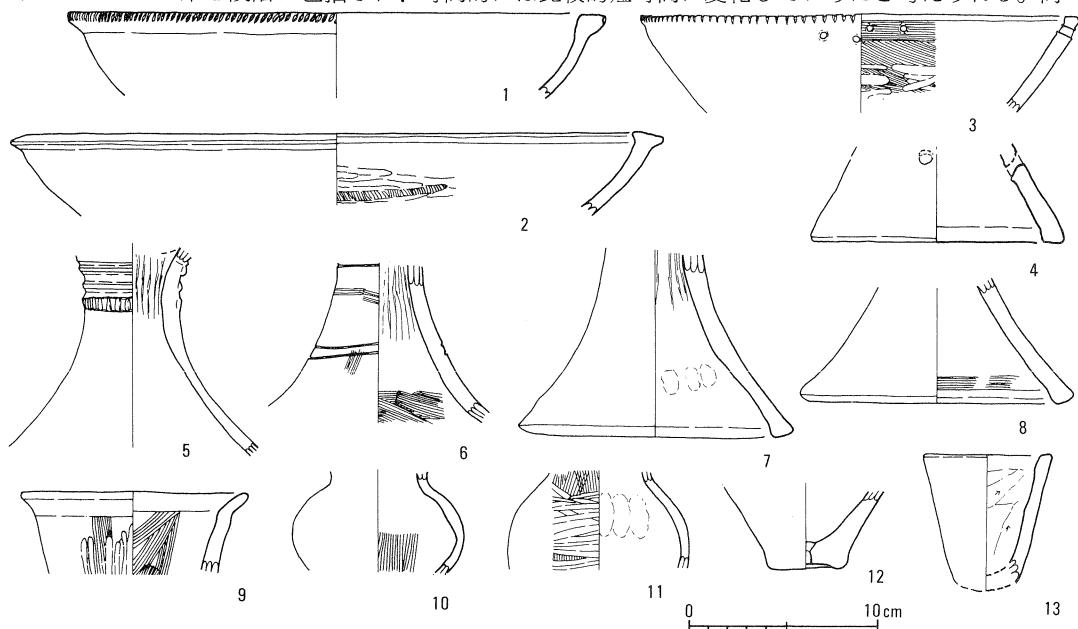
口縁端部をやや外反させて平坦面をつくり出す。内外面ともに範磨きを施す。外面全体にススの附着した黒褐色の土器である。

ミニチュア土器（第161図9～11・13） 6点出土した。9は鉢形を呈し、口縁がゆるく外反し端部は丸くくる。外面は範磨き、内面は刷毛目調整を施す。13は胴部が直線的にのびる直口の土器で、口縁端部は角ばっている。外面は範磨きを施し、内面は粗いナデを残す。コップ形の土器である。10・11は壺形土器で、10は扁平球、11は球形の胴部を持つ。どちらも外面は範磨きを施す。

底部穿孔土器（第161図12） 4点出土した。小さい底部の中央に内外両側から丁寧に穿孔を行う。

包含層出土土器は以上のように分類できるが、上層の土器の中には下層土器と同一の特徴を持つものがある。壺の1・3～5、甕A・B類がそれで、それぞれ下層の壺B類、甕A類に相当するものである。これらは後で述べるが、土層の関係から、総体的には下層が古く、上層が新しい段階の土器である。下層の甕B₁、B₂類はⅢ区 S D10の壺3a、3b類に相当し、第Ⅳ段階に属するものである。壺A類は小形品であるが、B₁・B₂類と同様に大きく開く口縁を持ち、頸部に段や平行沈線文を持たないところから壺B₁・B₂類に伴うものと考えられる。壺B₃・C類は、B₁・B₂と同様の口縁形態を示すが、頸部の指頭圧痕付貼付突帯や口縁端の平行沈線文など、これらよりも後出する要素を持っており、S D10の甕3c類に相当するものである。甕D類はS D10の壺4a類と同一である。

下層の甕A類は4つに細分したが、口縁の形態がA₁からA₄へ徐々に発展が認められる。甕B類はA₄類がさらに発達した形態であり、A類はS D10の甕4a・b類に、B類はS D10の甕5a類に相当するものである。これで明らかなように下層の甕形土器は口縁に一連の発達が認められるが、すべてS D10の第4段階に包括され、時間的には比較的短時間に変化していくと考えられる。同



第161図 布田遺跡IV B区遺物包含層下層出土土器(6) 1/4

布田遺跡

様に壺形土器も、出土数の少ない壺B₃・C類を除くと、すべて第4段階に含まれており、包含層下層の時期がSD10の出土土器の第4段階に限定されることが理解される。

これに対して上層の土器は、指頭圧痕を持つ壺や甕が主体をなし、下層よりも一段階新しく、SD10の第5段階に属するものである。上層中に含まれる下層と同時期の土器は、両層の漸移層部分にあたり、下層土器の段階から上層段階へ徐々に形態が変化していったことを示すものと思われる。

以上の諸点を総合して、もう一度布田遺跡の土器の変遷をみてみると第8表のようになる。布田遺跡出土の土器で最も古いと考えられるのはⅢ区灰色砂層から出土した壺形土器である。単独の出土で、他の器種については不明であるが、壺としては球形に近い胴部をなし、肩部に明確な段を持つなど、Ⅲ区SD10の第1段階とした土器群よりも古い形態を示しており、布田遺跡第I期の土器として把握したい。第II期以後はSD10の各段階に則って、それぞれ第II期～第VI期を設定できる。第II期は、IVA区のSD03やSK44の資料が標準になると思われる。第III期・第IV期は形式学的には一時期を設定できるが、出土資料が少なく、やや確定要素に不安が残っている。第V期、第VI期は布田遺跡の中心をなす時期である。特に第V期はIVB区包含層下層に単純層が確認できており、明確な指標になると思われる。第VI期はSD10あるいは包含層上層の資料をあてることができるとと思われる。

これら各期の土器は、前期から中期にかけての土器であり、従来の島根県内の弥生土器編年のⅡ～V期に相当するものである。^{註8} 布田遺跡第II期の壺形土器は、口縁が大きく開き、頸部が筒状にやや長くなる特徴があり、従来のII期に属するものである。しかし、もう少し細かく見てみると、肩部に段を持たず、前期の中でも新しい要素を持ち、また中期土器にみられる櫛描沈線文も持たないところから、前期末頃に比定できる。この中で、胴部に押圧のある貼付突帯を施す壺形土器（第76図17）や、口縁下に平行沈線とともに円形刺突文を施す甕形土器（第77図14～16）は特に瀬戸内地方の影響を受けた土器として特徴的である。布田遺跡第I期は第II期よりも古く、また前期でも古式の形態ではないところから、前期後半、あるいは前期後葉ぐらいに位置すると考えられる。布田遺跡第III期は、形態的には第II期とほとんど変わることはないが、平行沈線文に櫛を使用するところから中期初頭頃と思われる。布田遺跡第IV期は、Ⅲ区SD10の壺形土器の分類の際に述べたように、第III期と第V期の壺の間に形態的に隔たりがあるところから、あえて設けたものである。甕形土器では多条化した平行沈線文を持つ土器（第65図7）がこの段階に属すると思われる。従来の編年のIII期に相当するものである。布田遺跡では、この時期の資料が極めて少ないと、島根県内

第8表 布田遺跡出土土器編年

布田遺跡 の編年	Ⅲ区 SD10	壺形土器		甕形土器		高坏形土器	
		包含層下層	その他	包含層下層	その他	包含層下層	その他
第I期			Ⅲ区 灰色砂層				
II	第1段階				IVA SD03 IVA SK44		
III	2						
IV	3				IVA SD01 IVA SK37		
V	4	A・B ₁ ・B ₂		A (1,2,3,4) ↓ B	IVA SD01	A・B・C	
VI	5	↙ C	↓ B ₃	包含層上層 C			包含層上層

でもこの時期の土器は類例が少なく、今後の資料増加と研究に期待される。布田遺跡第V期は從来の編年でIV期に相当し、中期を代表する土器である。県内での資料は土壙墓や時期の明確でない包含層などから多数出土しているが、今回のように遺構や単純層からまとまって出土するのははじめてであり、第V期内での器形のヴァラエティや形態変化を系統的に把握できる好資料である。ただし、甕形土器には第III期の土器の形態に通じるものもあり、あるいは第IV期にさかのぼるものもあるかもしれない(IVB区包含層甕A₁など)。第V期で注目されるのは、この段階にやや逆L字状につくり出す口縁を持つ高環形土器(IVB区包含層下層A類)の存在が明らかになったことである。環部が直口ぎみで、端部がやや肥厚する高環形土器(同B・C類)は瀬戸内から畿内・山陰地方に広く出土しているが、逆L字状口縁を持つ土器は類例が少なく、島根県内ではタテチョウ遺跡等で出土しているのみである。畿内第III様式に類似する高環があるが、県内の資料とはやや様相を異にする。九州の中前期前半の須恵系の土器の中に、椀形の環部を持つ高環があり、形態的にはむしろこちらの方によく似ているといえる。この類の土器は山口県にも数例出土しているようで、伝播ルートは明らかではないが、あるいは九州系の土器の可能性がある。布田遺跡第VI期は、いわゆる凹線文が出現する時期で、從来の編年ではV期に相当し、中期後葉にあたるものである。壺・甕・高環とともに凹線文や沈線文、指頭圧痕のある突縁などを施す点に特徴がある。

以上のように布田遺跡出土土器には、弥生前期後半ないし後葉から中期後葉まで存在し、第I期～VI期に分けることができる。しかも、各時期の土器がそれぞれ系統立てて把握できるという特徴がある。

(園山和男・足立克己)

(b) 石器(図版51—1~8、52—1~9・11~18)

包含層からは上下両層にわたって多数の石器が出土している。出土石器を網羅することはできないが、上下各層で石器の組成が多少異っている。以下各層ごとに報告する。

上層の石器(第162図、第163図)

石鎚、砥石を中心にして、石包丁、石匙等が出土している。

石鎚(第162図1~7) 1、2は硬質砂岩製、3~7は黒曜石製の打製石鎚である。1、3が平基式、2・4~6が凹基式だが、4~6は、わたぐりが浅い。いずれも第一次剝離のち調整剝離を加えるが、そのうち1、2、5には粗い二次加工が施されているのみである。また、5の裏面中央には第一次剝離面が大きく残る。6は全面に細かな調整剝離が施されている。1、2、6は二等辺三角形を呈し、3、4はほぼ正三角形を呈す。5は体部中程から両側縁部が平行に延び、五角形を呈す。7は全長3.04cmを測る未成品である。厚みがあり、剝離加工も粗く、断面の形も不整形であるところから整形途中と思われる。

砥石(第162図11・13~17、第163図3~5) いずれも欠損品であるが、自然石を砥石として転用する。11・16は流紋岩質凝灰岩を利用。断面は長方形で、4面の平坦面を砥石として使用する。磨滅して滑らかになっている。17は目の粗い凝灰岩質砂岩である。形は不整形だが、5面全面を使用している。全面とも使用のために磨り減って凹んでいる。13~15は小形の砥石である。13

布田遺跡

は流紋岩である。いずれも平坦面を1面、砥面とする。14は河原石を砥石として転用。13、15は材質的には固く、13の砥面にはわずかだが擦痕もみられる。現在長7.2cmを測り、安山岩製。両面の平坦面を砥面とする。わずかに磨耗している。3、4は大形の砥石である。それぞれ流紋岩、玄武岩の自然石を利用する。3は片面を砥面とし、全面に長めの擦痕が残る。4は両面と側面の3面を使用し、わずかに擦痕もみられる。表面には一端に長さ1cmから2cmまでの浅い溝が4筋、反対側には長さ2.6cmの浅い溝が1本残る。それぞれ中央は磨滅している。ほぼ完形品である。

石皿（第163図2） 現存長9.7cmの石皿様石器の破片で、材質は凝灰質流紋岩。一端にわずかだが剝離面を残す。上面の浅い凹みは磨耗が著しい。

凹石（第163図1） 流紋岩質凝灰岩の自然石を使用し、一部に自然面を残す。長さ17.4cmを測る完形品である。深さ約0.9cmの凹みの内部は磨耗しており、植物の実などを磨り潰したと考えられる。また側面の平坦面を砥石として使用しており、斜めに細かい研磨痕が認められる。

礫石器（第162図12） 長さ8.4cmで、流紋岩質凝灰岩の自然礫を使用する。頭部を打ち欠いており、刃部は両面から大きく剝離加工を行い、鋭角につくり出す。手斧様のものである。

石匙（第162図10） 長さ8cmの流紋岩製で、薄手の縦長の剝片を使用。片面は右方向からの大きな剝離面を残し、側縁部に細かな二次調整を加える。また、側縁部の上側をわずかながら研磨している。頂部は両側から抉りを入れ、つまみを造り出している。もう一面は第一次剝離面を大きく残し、両側に細かな剝離を入れる。

石庖丁（第162図9） 流紋岩質凝灰岩製の破片。片面は刃部中心に全面に研磨を施すが、もう一面は刃部付近のみに研磨痕が残る。両面からの研磨により刃部を研ぎ出す。

用途不明品（第162図8、第163図6） 8は長さ12.3cmを測る流紋岩の自然石を利用する。片面には右方向からの剝離を加え、もう一面は周縁部の一部に粗い剝離を施す。両端は折れている。風化が著しい。扁平片刃石斧の未成品の可能性がある。6は流紋岩製の支脚頭部片と思われる。断面三角形を呈し、一部に火を受けて黒斑が残る。

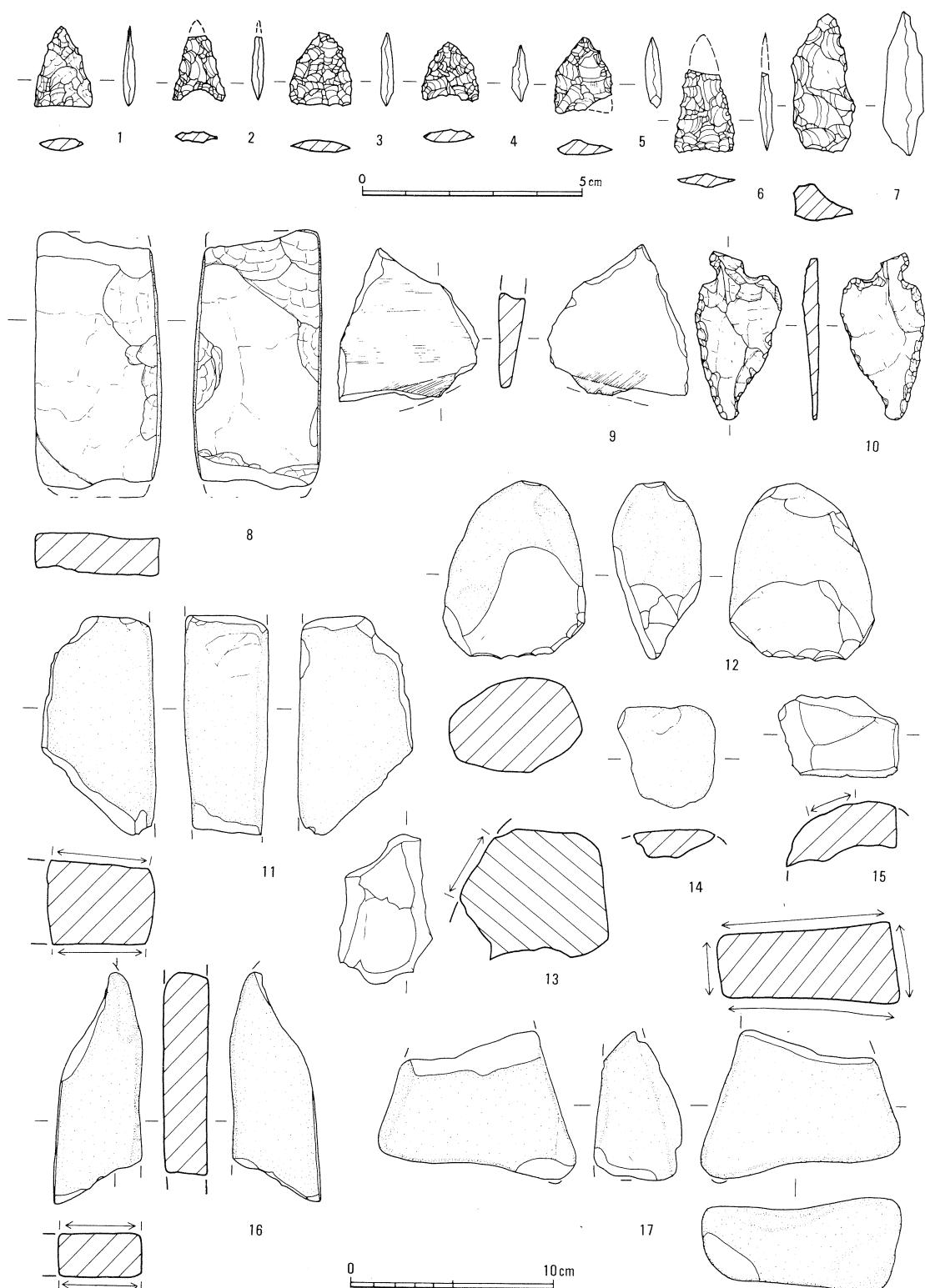
下層の石器（第164図、第165図）

砥石、凹石、石庖丁、スクイバーが出土している。

石庖丁（第164図1～3） 1・2は大形の石庖丁である。1は安山岩製で、半月形を呈する。横長の剝片を利用し、ゆるやかに弧を描く刃部を持つ。刃部は研磨して、やや細かな二次調整を加えるが、あるいは刃こぼれもあるかもしれない。背部と側辺は折半している。面両ともに研磨して表面を整えている。2は黒色頁岩の板材を使用。二等辺三角形を呈し、等辺の一方に研磨を施して刃部をつくり出す。等辺のもう一方には研磨が全く施されていない。背部にはわずかながら調整剝離が施されている。刃部には大きな欠損部がある。等辺の一方は背部と同じ厚さで、刃部の部分だけが薄くなっているところから、一応これを成品とみなしたい。3は緑色凝灰岩製で、石庖丁と思われる。両面研磨しているが、片面は磨滅が著しい。背の部分も研磨されて平坦になっている。

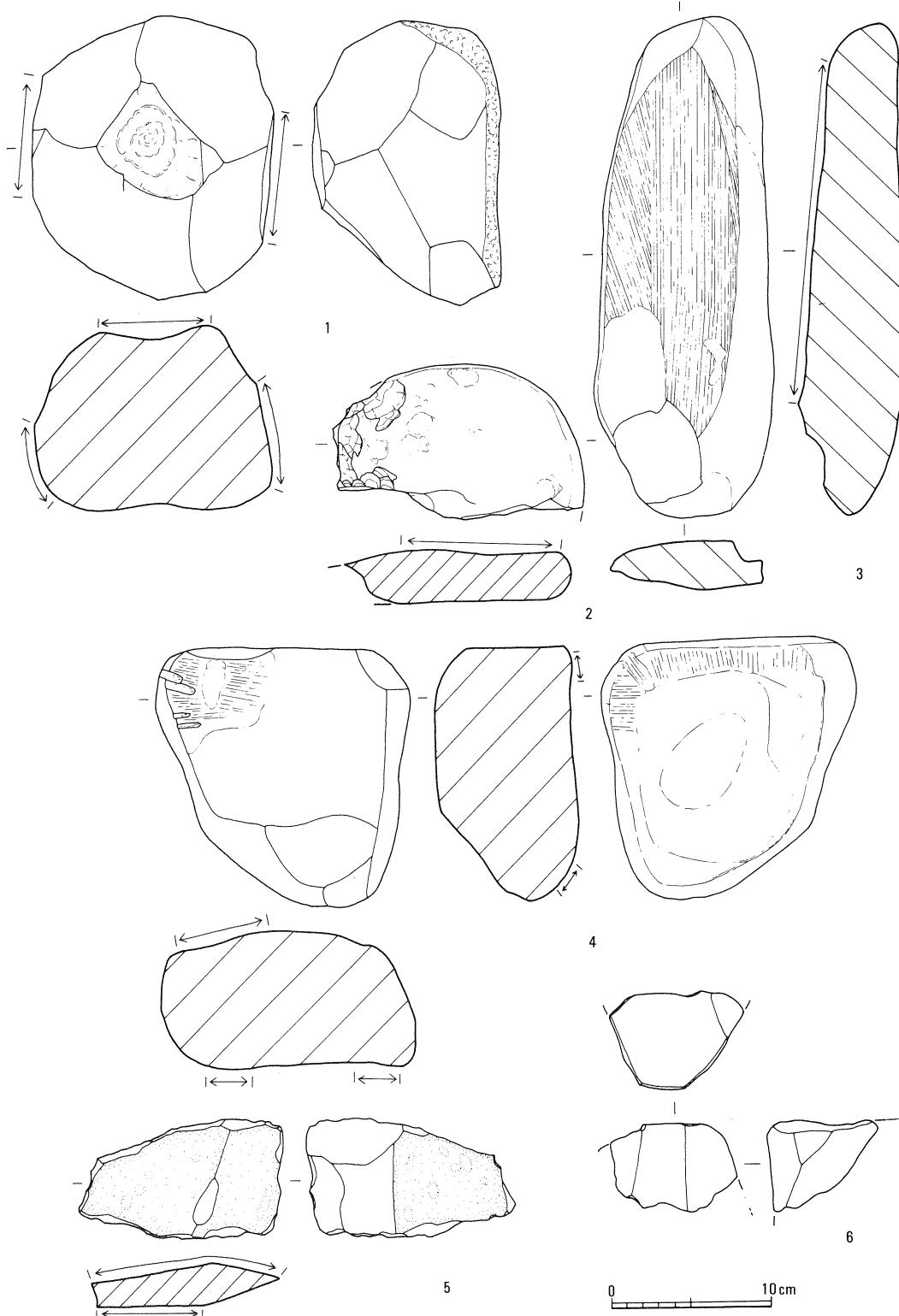
二次加工のある剝片（第164図4） 玉髓製で縦長の剝片を使用。背部に自然面を残す。刃部には細かな剝離がみられる。

布田遺跡

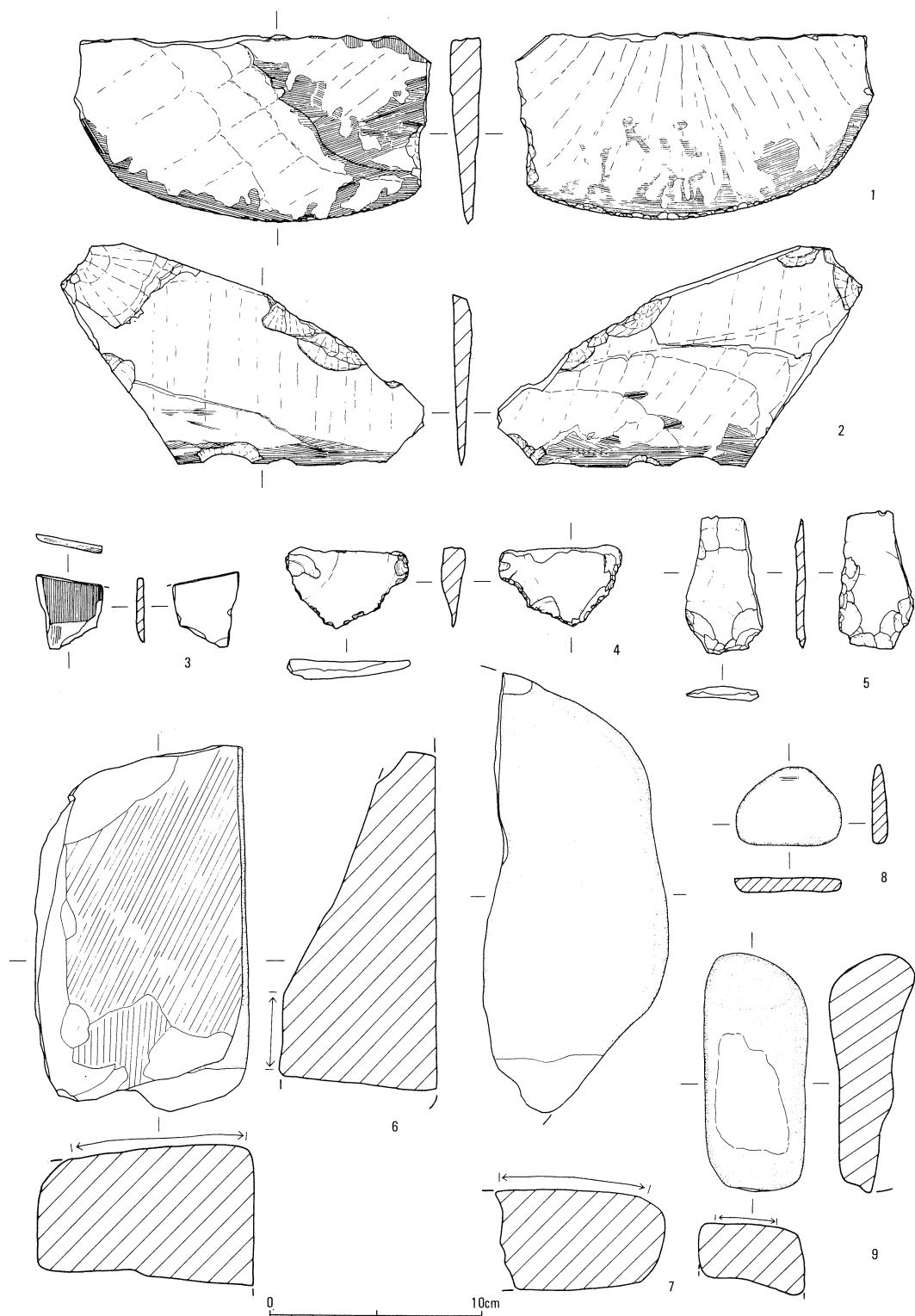


第162図 布田遺跡IV B区遺物包含層上層出土土器(1) 1~7 : 7/10 8~17 : 1/3

布田遺跡

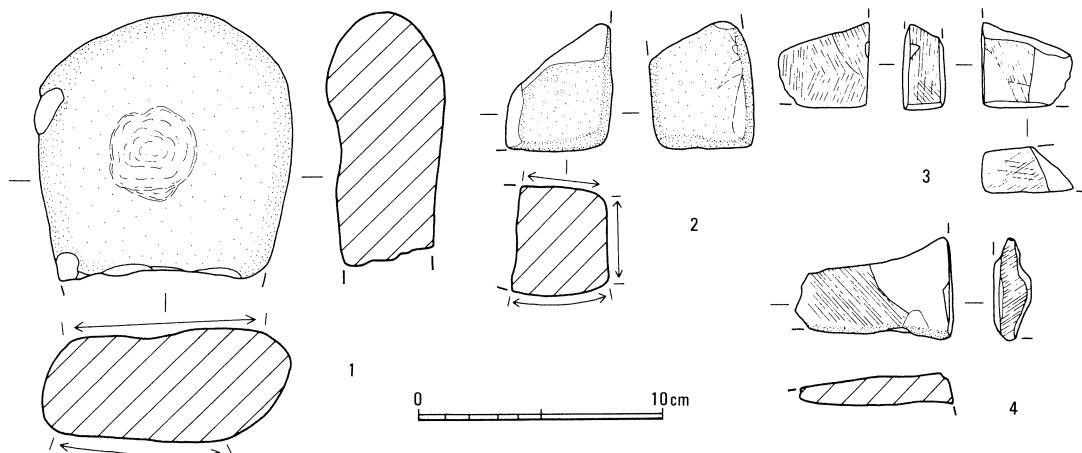


第163図 布田遺跡IV B区遺物包含層上層出土土器(2) 1/4



第164図 布田遺跡IVB区遺物包含層下層出土土器(1) 1/3

布田遺跡



第165図 布田遺跡IVB区遺物包含層下層出土土(2) 1/3

スクレイパー（第164図5） 硬質砂岩製で、長さ6.35cmを測る。扁平な縦長の剝片を使用する。短辺部に粗い剝離を加えて刃部とする。

砥石（第164図6～9、第165図2～4） 6・7はともに安山岩製である。それぞれ現存長17cm、20.4cmを測る大形品で、手頃な自然石を転用する。6は比較的平坦な面を砥面として使用し、研磨痕も残す。裏面は割れて現存しない。7は楕円形を呈する砥石の一部である。片面を砥面とし、中央部にはわずかながら擦痕も残り、磨り減って平滑である。9は流紋岩質凝灰岩の自然石を利用する。中央部がやや磨り減ってわずかながら擦痕も認められる。8、2～4はいずれも小形の砥石である。8、4は自然石を転用する。8は流紋岩質凝灰岩製で、不整円形の平坦面が磨滅する。4は表面の一部と側面の平坦面を砥面としている。2、3は材質がそれぞれ流紋岩、凝灰岩で、ほぼ方形に近い形に加工する。2は現存長3.4cmで4面全面を砥面とし、細かな擦痕がみられる。使用のための磨滅が著しい。3は現存長5cmで、表裏面と、側面の3面を砥面として使用する。

凹石（第165図1） 現存長10.5cmの細粒花崗岩製で、不整円形の自然石を使用する。風化のためもろく、中央部には敲打による浅い凹みができる。裏面も砥面として使用したのか磨滅している。

以上のように、包含層上層では砥石類の他、石鎌が多いのに比べ、下層の石器は石庖丁、スクレイパーの類が多い。これは布田遺跡における時期相をある程度反映するものかもしれない。

下層から出土するような紐通し穴をもたない大形石庖丁は、島根県内では今のところ類似がない。九州や本州西端部、あるいは京都府途中ヶ丘遺跡で発見された弥生前期の大形石庖丁は、背部に抉りあるいはつまみ状の突出部をもち、形が整っているのに対し、布田遺跡出土のものは形が不整形で、つくりも雑な点に特色がある。しかし、これらはIII区などで出土する打製石鎌などとともに、九州系の磨製石器の系統に含まれるもので、中期以降の終末期の形態であると考えられる。なお、打製石鎌については、松江市タテチョウ遺跡でも類似品が出土している。 (片岡詩子)

(c) 石製品（第166～168図、図版51—9～38）

上下両層から管玉未成品が多数出土する。また下層から石劍が1点出土している。

石劍（第168図1） 全長13.5cm、最大幅3.1cm、厚さ1.1cmを測る。玄武岩製の局部磨製石劍で

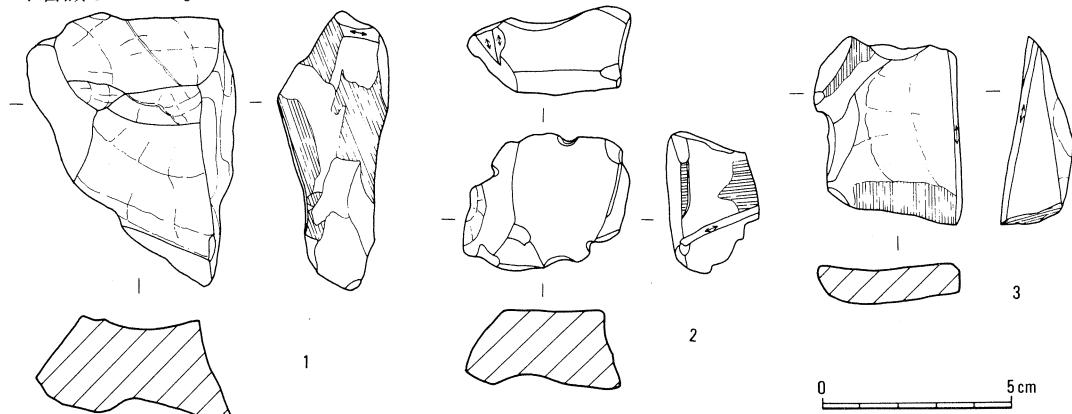
ある。基部はやや丸みを帯びており、両側縁はほぼ直線をなす。体部中央からゆるやかに湾曲して刃部をつくり出す。両面ともに数回の剥離を行ったのち、縁辺部に二次加工を施す。二次加工は片側ずつ交互に押圧剥離を加えている。側面からみると鋸歯状を呈する。両側縁部の下半部は研磨を施して滑らかな線をつくり出す。また両面とも、剥離面を残しながら、上半部に丁寧な研磨を施す。刃部が鋭いのに比べて、剣尾はゆるやかな弧を描き、研磨を施す。島根県内において、鉄剣を模した磨製石剣がタテチョウ遺跡をはじめとし、いくつか出土しているが、このような局部磨製石剣は他に類をみない。瀬戸内や畿内でみられる打製尖頭器の手法を石剣に転じたものと思われる。基部が薄くなっている、この部分に柄を着装して短剣状に使用したことが考えられる。

管玉未成品

上層に多く出土し、下層ではやや少ない。

上層（第166・167図） 分割段階から板状未成品の段階までのものが出土している。第166図および第167図1は分割段階の未成品である。不定方柱形の一辺ないし二辺に施溝痕が残る。いずれも局部的に研磨が施されており、表面を整形しようとする意図が窺える。第166図2～10は板状の未成品である。厚さ0.5～1.0cmで、ほとんどが長方形に近い形になっている。両面を研磨するものが多く、最低一辺は直線になる部分があり、そこに施溝痕が認められる。またいずれも折半したのち、側面に研磨を施している。13は折半した側面に平行にさらに施溝が認められるものである。厚さ0.6cmで溝までの幅は約0.7cmである。14・15は両面全面に研磨が及び、側面も研磨して整えられたものである。特に15は長軸に沿ってもう一本施溝を施せば、方柱状未成品の完成である。16は同じ板状のものであるが、碧玉製の成品である。平面不整長方形をなし、四隅に弧状の磨切痕が残る。これは板状の未成品に何らかの穿孔具で穴を4ヶ所あけ、その間を施溝、打割して長方形を作り出したものである。両面および四辺に丁寧な研磨を施している。これに類似するものが松江市平所遺跡で出土している。やはり碧玉製で報告では管玉未成品としてある。布田遺跡においては、管玉未成品は緑色凝灰岩を使用しており、碧玉製のものはない。したがって管玉とは違った玉類である可能性が強いといえる。

なお、上層からその他に扁平な結晶片岩製の石鋸片が出土する。(17)刃部は直線的で、先端が丸く磨滅している。



第166図 布田遺跡IV B区遺物包含層上層出土管玉未成品(1) 1/2

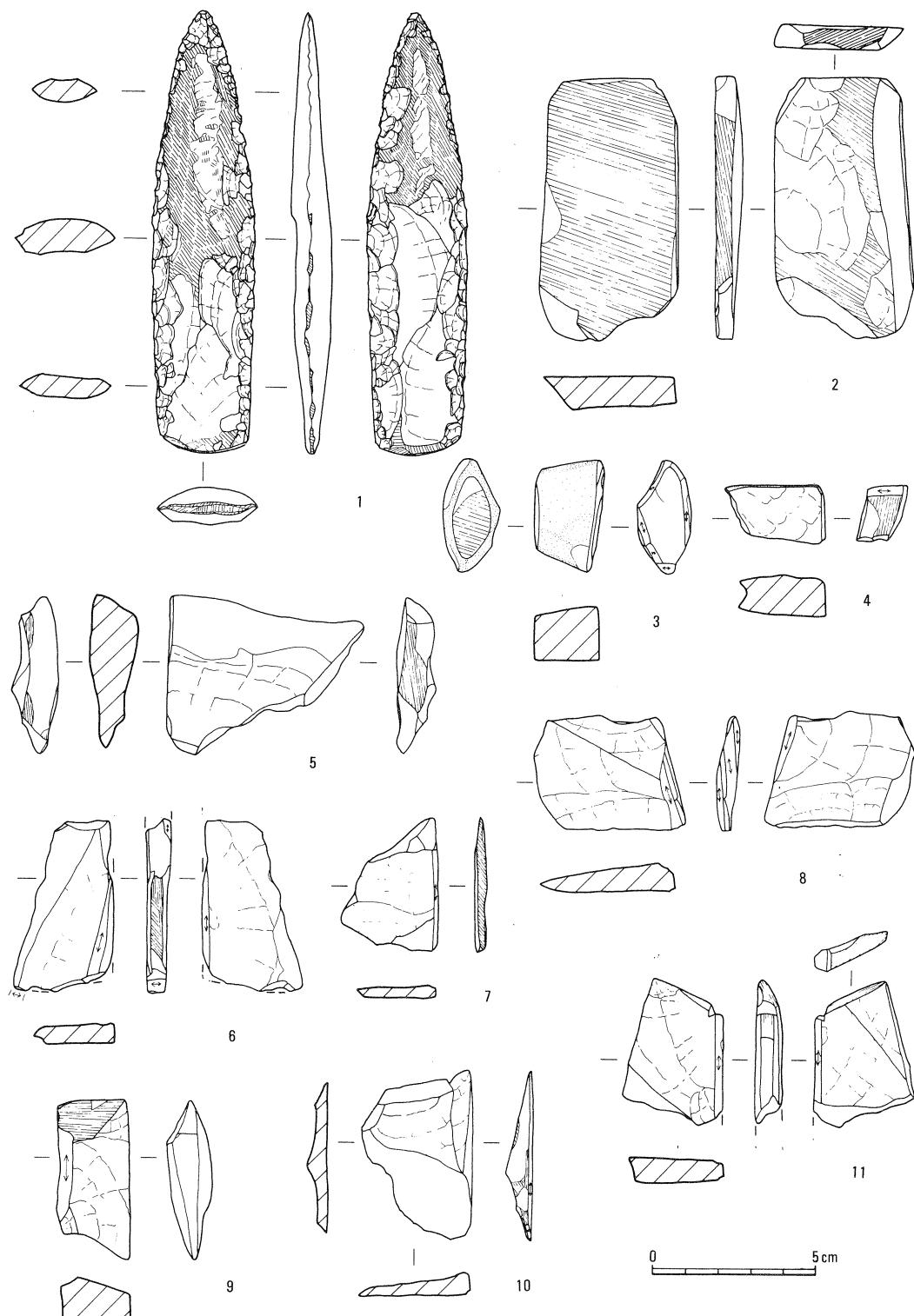
布田遺跡

下層(第168図2~10) 分割および板状段階の未成品が出土する。2は施溝痕が残っておらず、両面および3方の側面に研磨を施す。3は一つの面に5ヶ所施溝が行われている。反対の面は研磨が施されるのみで、施溝痕は認められない。このことから、一面のみに施溝を行って、そこから打割して板状未成品を取ったと考えられ、石器の石核のようなものと思われる。他の板状未成品のつくり方とは趣きをやや異にする。その他は、ほとんどが施溝痕のある板状未成品である。施溝部分の側面は必ず研磨して整形されている。

(足立克己、片岡詩子)



第167図 第167図布田遺跡IV B区遺物包含層上層出土管玉未成品(2) 1/2



第168図 布田遺跡IV B区遺物包含層下層出土石製品 1/2

布田遺跡

第9表 布田遺跡IV B区石器計測表(1)

插図番号	遺物名	遺構 (層位)	全長 (現存長) cm	最大幅 cm	重量 (現重量) g	色調	石質	備考	写真番号
131	砥石	SD01	(4.4)	4.6		黄灰色	流紋岩		46-14
133	石庖丁	SD02	5.2	18.3		黄灰色	凝灰岩	両面研磨	46-13
135	石鎌	S I 01	2.2	1.25	0.9		黒曜石	0.25 (脚長)	46-11
137	砥石	"	(11.5)	11.1		暗灰色	玄武岩	全面使用	46-15
144	"	SK04	(6.9)	7.2		灰白色	凝灰質砂岩	"	52-10
151	石鎌	SK11	1.5	1.0	0.3	灰色	硬質砂岩	平基式	46-12
162-1	"	SD03上層	1.75	1.32	0.5	"	"	"	51-4
2	"	"	(1.9)	1.65	(0.9)	"	"	0.2 0.2(脚長)	
3	"	"	1.6	1.4	0.6	黒曜石	平基式	51-1	
4	"	"	1.3	1.3	0.4	"	"	0.120.12(脚長)	2
5	"	"	1.6	1.35	0.5	"	"	0.1 (")	5
6	"	"	(1.8)	1.35	(0.6)	"	"	凹基式	6
7	"	"	3.02	1.35	3.2	"	"	未成品	3
8	不明	"	(12.3)	6.0		黄灰色	流紋岩	板状を呈す	52-5
9	石庖丁	"	(7.3)	6.0		黄灰色	流紋岩質凝灰岩	破片	6
10	石匙	"	8.0	4.1		灰色	流紋岩		7
11	砥石	"	(10.4)	5.3		灰白色	流紋岩質凝灰岩	全面使用	3
12	礫石器	"	8.4	7.0		灰白色	流紋岩		9
13	砥石	"	(4.6)	6.5		灰白色	流紋岩	片面使用	1
14	"	"	(4.7)	4.8		灰白色	不	明	
15	"	"	(3.8)	5.2		緑灰色	"	"	
16	"	"	(9.9)	4.2		灰白色	流紋岩質凝灰岩	両面使用	52-2
17	"	"	(7.0)	9.5		"	凝灰岩質砂岩	全面使用	10
163-1	"	"	17.4	15.3		淡黄色	流紋岩質凝灰岩	片面使用	52-8
2	石皿	"	(9.7)	13.5		黄褐色	凝灰質流紋岩	"	
3	砥石	"	11.5	6.5		淡綠色	流紋岩	"	
4	"	"	15.8	15.7		黄灰色	玄武岩	両面使用	
5	"	"	(7.2)	12.9		黄褐色	安山岩	"	
6	不明	"	(6.1)	8.4		明黄褐色	流紋岩	変形6角形	
164-1	石庖丁	SD03下層	8.7	16.8		とびいろ	安山岩	両面わずかに研磨	52-18
2	"	"	10.3	17.1		暗灰色	黑色	頁岩	17
3	"	"	(3.5)	3.1		明緑灰色	緑色	凝灰岩	
4	二次加工のある剝片	"	5.8	3.8		茶褐色	玉	自然面を残す	53-12
5	スクレイパ	"	6.35	3.65		灰色	硬質砂岩		11
6	砥石	"	(17.0)	10.0		緑灰色	安山岩	片面使用	
7	"	"	(20.4)	7.9		"	"	"	
8	"	"	3.6	4.9		黄灰色	流紋岩質凝灰岩	"	
9	"	"	11.0	5.0		"	"	"	
165-1	凹石	"	(10.5)	10.4		灰白色	細粒花崗岩	両面使用	52-16
2	砥石	"	(5.0)	4.2		黄灰色	流紋岩	全面使用	14
3	"	"	(3.4)	3.6		白灰色	凝灰岩	"	15

第10表 布田遺跡IV B区石器・石製品計測表(2)

挿図番号	遺物名	遺構(層位)	全長(遺存長)cm	最大幅cm	重量(g)(現重量)	色調	石質	備考	写真番号
165-4	低石	S D03下層	(4.1)	6.3		灰白色	不	明片面使用	
166-1	管玉未成品	S D03上層	7.4	5.6		緑黃灰色	綠色凝灰岩	施溝1箇所	51-18
2	"	"	3.7	4.4		明綠灰色	"	"1"	17
3	"	"	(5.0)	3.9		"	"	"1"	14
167-1	"	"	4.7	3.2		"	"	"2"	51-21
2	"	"	(3.8)	2.4		"	"	"1"	25
3	"	"	(4.9)	2.8		"	"	"1"	22
4	"	"	(3.5)	2.1		"	"	"1"	19
5	"	"	(3.9)	3.1		"	"	"1"	28
6	"	"	(4.4)	3.7		"	"	全面研磨	9
7	"	"	3.8	4.1		"	"	施溝2箇所	10
8	"	"	(2.5)	2.9		灰白色	流紋岩質凝灰岩		26
9	"	"	(2.4)	2.0	(5.8)	"	"	両面研磨	20
10	"	"	(3.1)	2.5		明綠灰色	綠色凝灰岩		27
11	"	"	(2.6)	1.4	(2.6)	"	"	片面研磨	24
12	"	"	(1.4)	3.0	(3.6)	"	"	施溝1箇所	23
13	"	"	(4.5)	2.3		"	"	"1"	11
14	"	"	3.7	(2.5)		"	"	"1"	13
15	"	"	4.1	1.0	2.8	暗オリーヴ灰色	"	"2"	12
16	"	"	4.5	2.9		"	"	"3"	15
17	石鋸	"	1.5	2.9		紫灰色	結晶片岩	両端欠損	8
168-1	石劍	S D03下層	13.5	3.1		暗灰色	玄武岩	完形品	51-16
2	管玉未成品	"	(8.1)	4.2		明綠灰色	綠色凝灰岩	全面研磨	38
3	"	"	3.4	2.0		灰白色	"	施溝5箇所	32
4	"	"	(1.8)	3.0		柳色	"	"1"	35
5	"	"	(4.7)	5.9		明オリーヴ灰色	"		30
6	"	"	(5.2)	3.1		明綠灰色	"	施溝4箇所	29
7	"	"	4.1	3.0		緑灰色	"	"1"	36
8	"	"	3.5	4.6		"	"	"2"	33
9	"	"	4.8	2.1		明綠灰色	"	"1"	34
10	"	"	5.2	3.5		灰オリーヴ色	"	"2"	31
11	"	"	(4.5)	3.1		明綠灰色	"	"2"	37

(d) 土製品(第169図、図版50—34~39)

上層から分銅形土製品と小形の土版、下層からは紡錘車、土玉、線刻をもつ土版が出土している。

分銅形土製品(1) 4分の1だけ残る。長さ5.7cm、幅5.2cm、厚さ1.1cmを測る。辺部には側面と表面からそれぞれ対応するように5対の穿孔がなされているが、貫通しているものはない。側面には単沈線文が施されている。両面ともに平坦につくられ、範磨きを施している。裏面では範磨きの前に刷毛目調整が施されていたことが知られる。

紡錘車(2・3) 2点出土しており、いずれも完形品である。2は土器の胴下半部から転用したもので、表裏両面から丁寧に穿孔している。周辺部は丸くなめらかに調整している。径4.3cm、厚さ0.9cm、孔径0.6cm、重さ22.9gを測る。3は手捏製品で、中央がレンズ状にややふくらむ。

布田遺跡

周辺はやや平らな面を残して丸くしている。丁寧なつくりである。径4.0cm、厚さ1.0cm、孔径0.6cm、重量18.8gを測る。

土玉(4) 1点を出土しており、完形品である。手捏製品で、球形をなしている。穿孔は両面から行われているが、中心部からはずれている。径2.8cm、孔径1.2cm、重量17.1gを測る。

線刻をもつ土版(5・6) 表面上に数条の線刻をもつ板状の土器片で、用途不明のものである。裏面がほとんど平坦であるのに対し、表面はややふくらむ。両面ともナデ調整を施す。5はやや幅広で深めの線刻が3条、細い線刻も1条、相似た方向に走っている。現存部分は長さ9.5cm、幅10.0cm、厚さ1.9cmを測る。6は上層より出土したやや小形の破片である。幅広の線刻2条が約80°の角度で交わるように施されている。細い線刻も1条みられる。現存部分は長さ6.5cm、幅5.7cm厚さ1.5cmを測る。

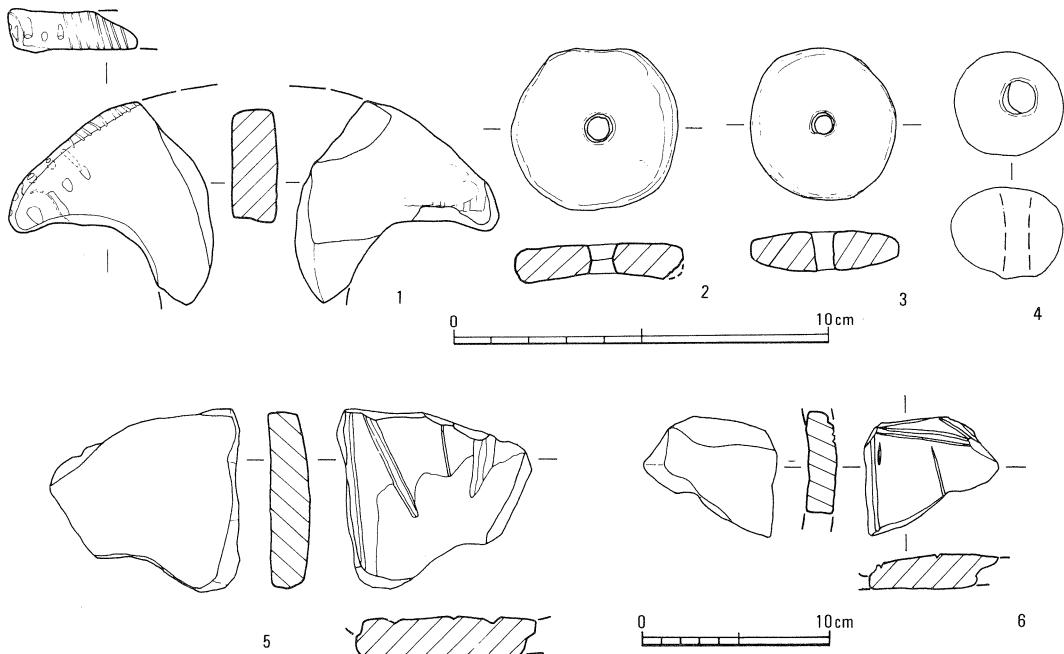
(e) 木製品(図版52—22・23・53)

包含層下層において、土器・石器などとともに、大量の木製品・自然木などが出土した。これらの遺存状態は良好で、大半の木製品で加工痕を確認することができた。出土した木製品は一部に加工がみられるものも含めると百数十点に及んだ。以下、主な遺物について説明する。

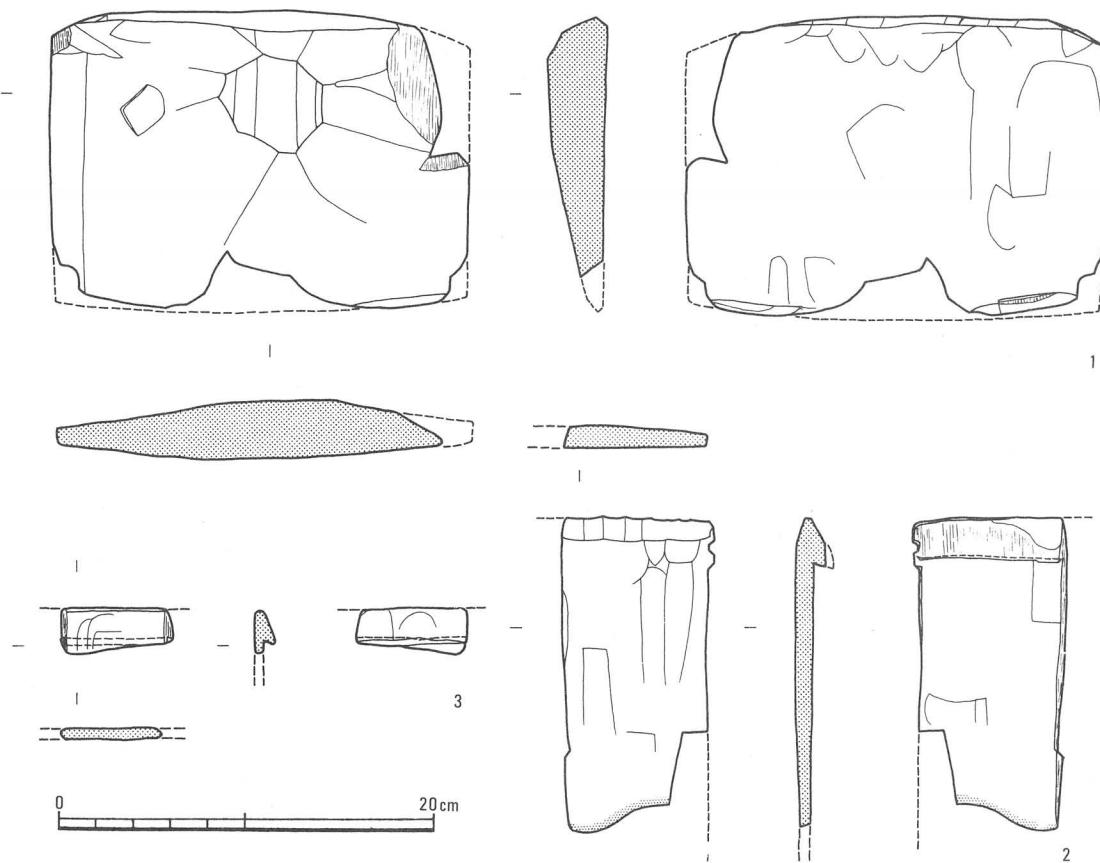
農具(第170図、第171図、第172図1・2)

鍬および鋤が未成品も含めて6点出土している。

鍬(第170・171図) 第170図はいずれも広鍬である。1は幅広のもので、柄孔を穿つ前の段階まで仕上げられたものである。舟形隆起はつくり出さず、周辺部から柄孔部へ盛りあげて厚く作っており、刃部は両面から削って尖らせている。前面は平坦に削る。カシ材。2・3はいずれも頭部



第169図 布田遺跡IVB区遺物包含層下層出土土製品 上1/2 下1/4



第170図 布田遺跡IV B区遺物包含層下層出土木製品(1) 1/4

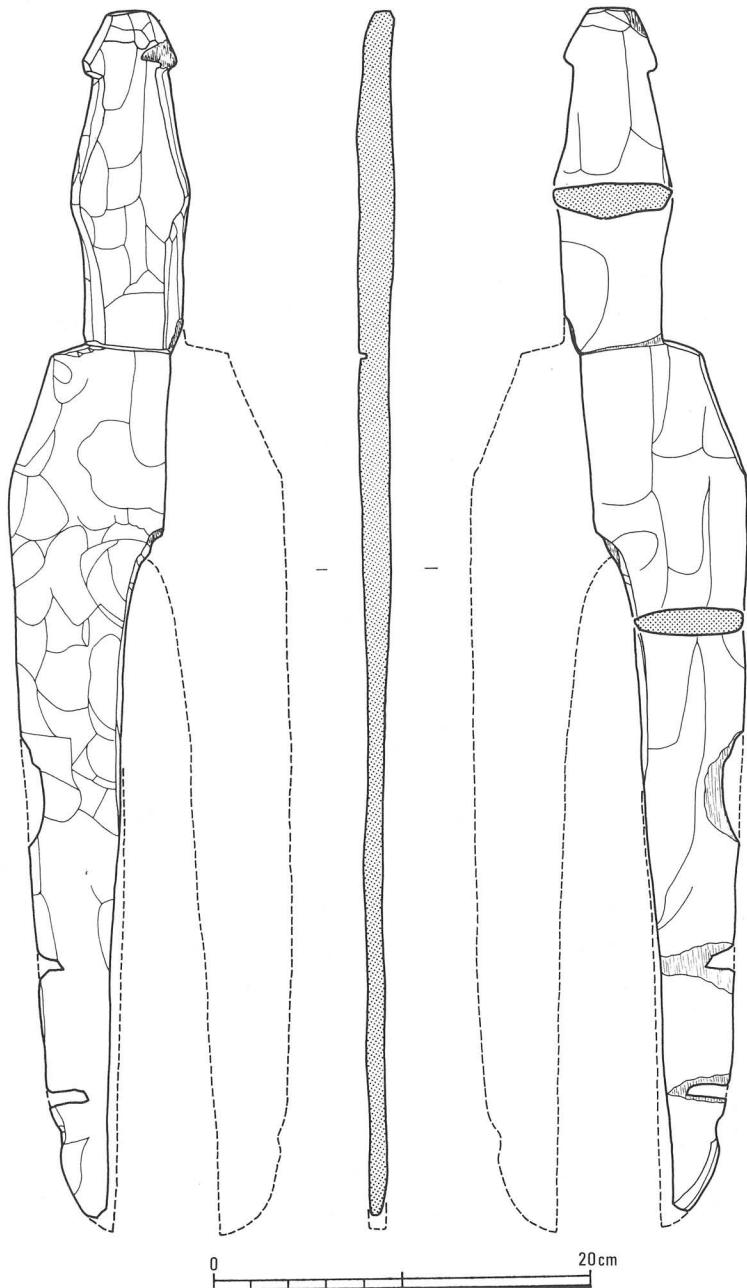
片である。頭部先端沿いに段をつくり出す。段は2で 66° 、3で 54° の角度をもって刃部方向にかえりをもつ。2は側辺も残っており、段部側面はやや突出して抉りを施している。このような抉りは松江市西川津遺跡出土の広鋏にもみられるものである。またこれらの鋏は、身厚1cm(2)・0.5cm(3)と薄手であり、段部厚も2cm前後と非常に華奢なものである。いずれもカシ材。第171図は二叉のものと思われ、柄部はなすび状のものに似る。刃部は片方を残すのみであるが、細長く先端付近でくびれる。肩部は角をおとしている。柄部と刃部の境界部後面には深さ4mmの切れ込みが入る。また柄部後面は角をとって丸くしている。全体に削り痕が明瞭に残っているが、刃部先端は磨滅している。カシ材。

鋏 (第172図1・2) 2点出土しているが、いずれも小片である。1はやや下がり気味の肩部をもち、上面方向に反っている。柄孔は方形で、長さ3.2cmを測り、着柄角度は 22° である。上面に擦れたような痕跡が認められ、裏面はかなり表面が荒れている。2は刃部片である。刃縁は丸みをもっており、先端部へ向けてやや反りぎみである。頭部側は焼失している。表面はかなり荒れており、遺存状態も悪い。

工具 (第172図3)

斧の柄の未成品と思われる。台部のみを残し、柄部は折れている。側面を木理に対して直角に幅

布田遺跡



第171図 布田遺跡IV B区遺物包含層下層出土木製品(2) 1/4
狩猟具 (第173図1～3)

弓と思われる木製品が3点出土している。1は弓身の中ほどで折損するが、わずかに彎曲する。樹枝をほとんど加工せずに利用するが、弓弭付近を削って細くする。弓弭は両側面を切り取っている。2は弓弭部片で、1と同様に弓身がわずかに彎曲しており、樹枝をほとんど加工せずに利用している。弓弭は周囲から先端に向って斜めに削って尖らせている。3も弓弭部分で樹枝を加工せずにそのまま利用するが、弓身はまっすぐに伸びているようである。弓弭は両側面を削り落し、段を

4.5cmで浅く抉りとつている。

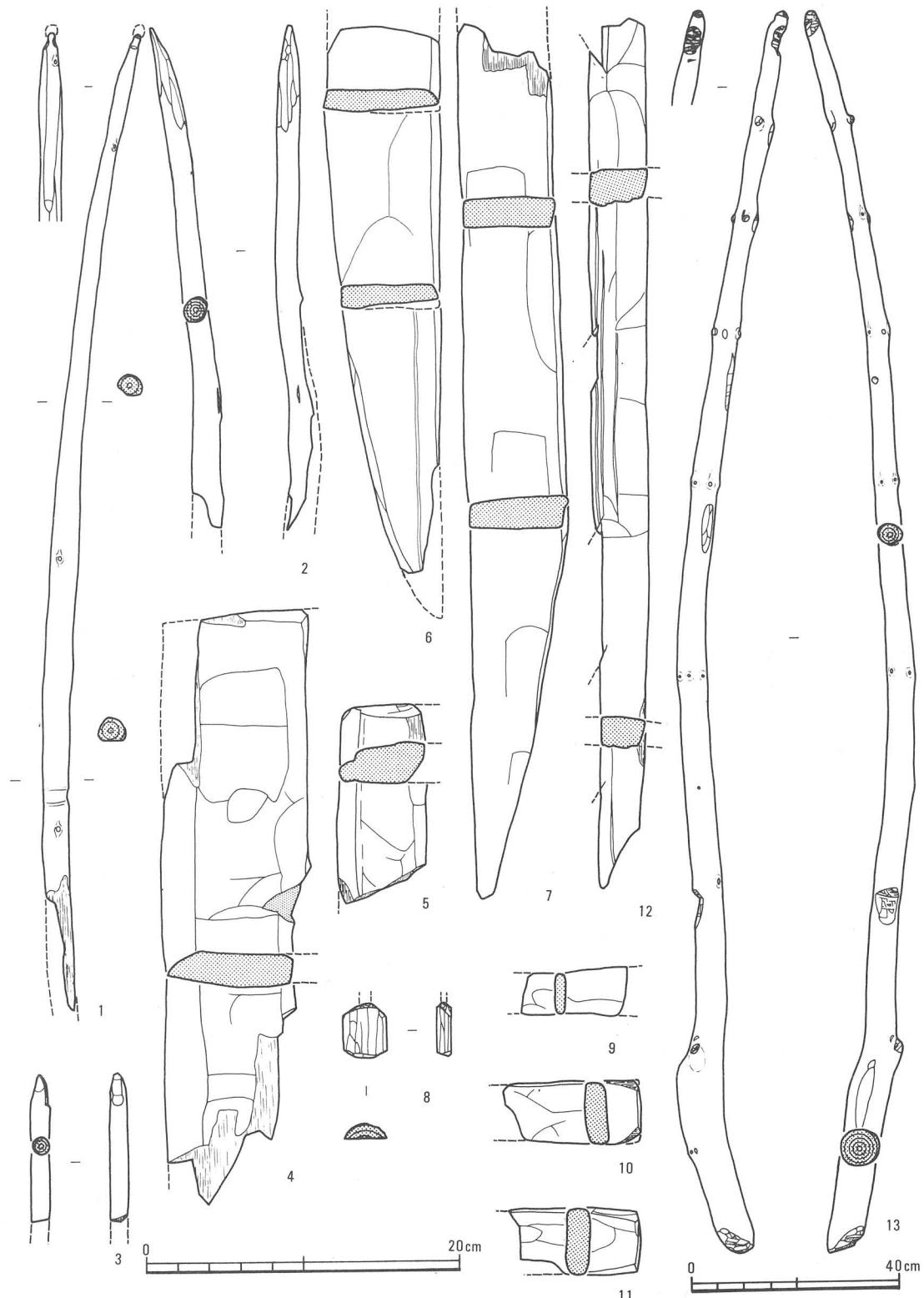
容器 (第172図4～6)

匙状の木製品が3点出土している。4は身のほとんどを欠いている。柄の上端は背面に約110°の角度で屈曲しており、屈曲部は先端が広がった台形状を呈する。屈曲部には両側に小さな突起を作り出す。柄の断面は蒲鉾形を呈する。身の上縁は柄の上面に対して一段高くなり、割り込みは比較的浅いようである。非常に丁寧なつくりである。ヤマグワ材。5は4の身の先端部とも考えられるものである。硬質で黒色をしており、木目はほとんどつぶれている。割り込みは浅く丁寧なつくりである。6は小形品の柄の一部である。断面は橢円形をなし、身の上縁は柄の上面に対して一段高くなる。身の割り込みは浅い。非常に丁寧なつくりである。トネリコ類。



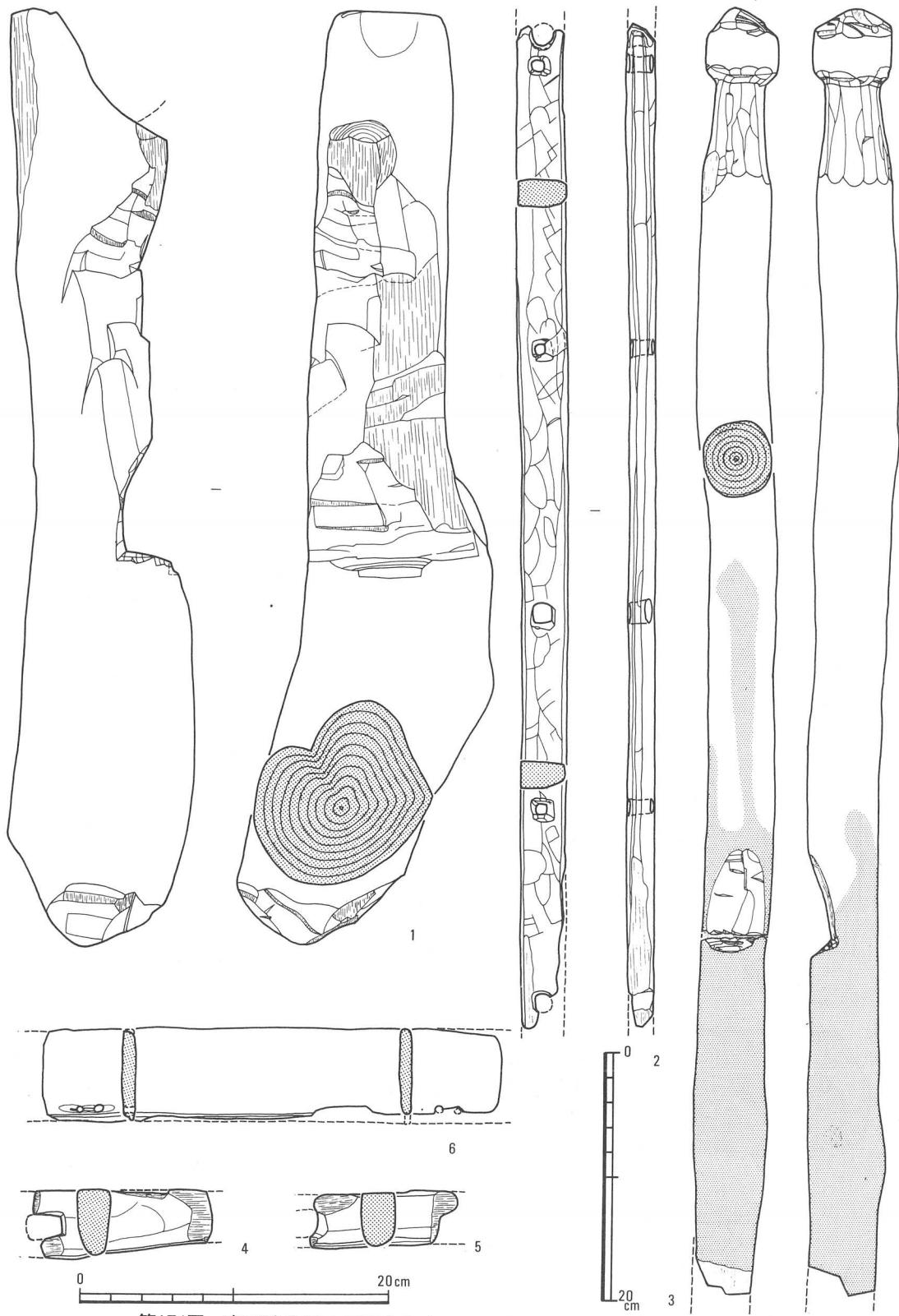
第172図 布田遺跡IV B区遺物包含層下層出土木製品(3) 1/4

布田遺跡



第173図 布田遺跡IVB区遺物包含層下層出土木製品(4) 1/4
13のみ約 1/12

布田遺跡

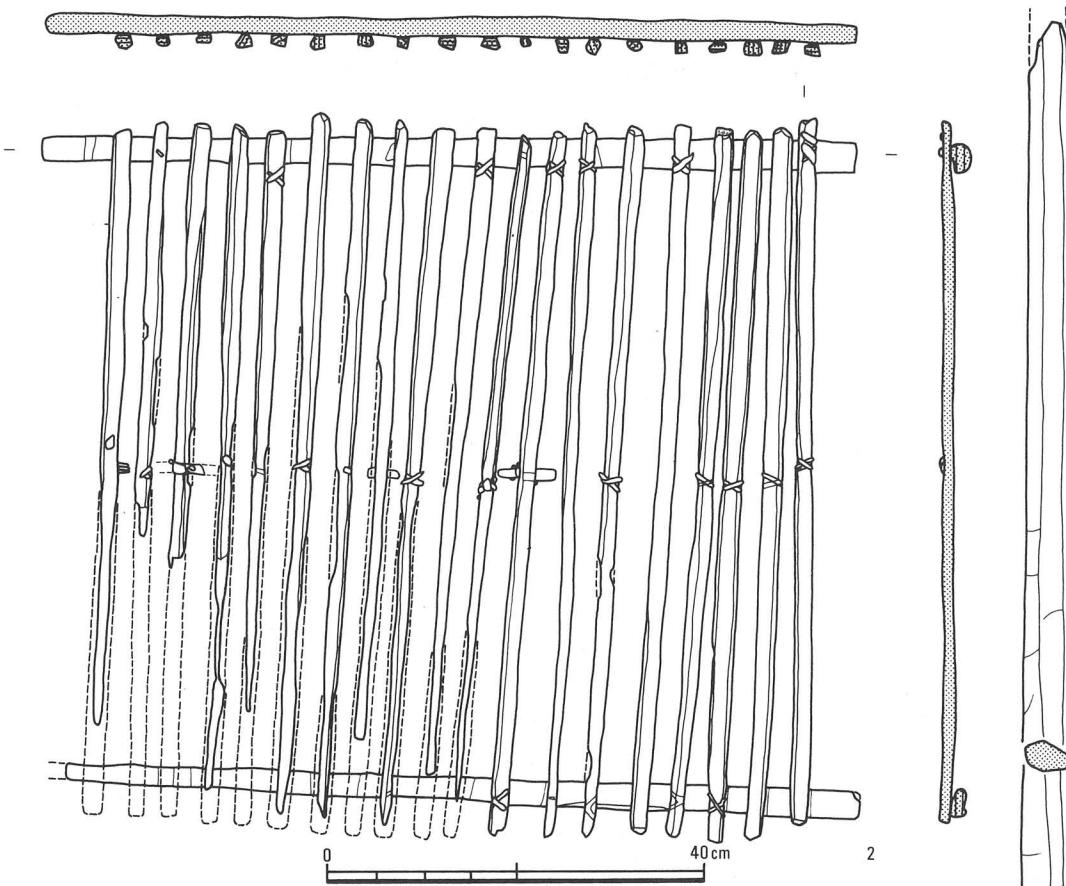


第174図 布田遺跡VI B区遺物包含層下層出土木製品(5) 1/4

布田遺跡



第175図 布田遺跡VIB区遺物包含層下層出土木製品(6) 1/4



第176図 布田遺跡VI B区遺物包含層下層出土木製品(7) 1 : 1/10 2 : 1/8

画して扁平な突起をつくり出している。表面が炭化している。

用途不明品（第173図4・13、第174・175・～176図）

用途不明の加工木材が多量に出土しているが、その形態で分類して記述する。

①組み合せ部材（第173図12・13、第174図1～5） 基本的には棒状材であるが、穿孔・抉りをいれて組み合わせて使用すると考えられるものを特に組み合せ部材とした。第173図13は細身の樹木の両端を切断して使用したもので、上下の端部近くに抉りを入れて組み合せ部を作る。抉りは互いに反対方向を向いており、建築用材と考えられる。第174図3は棒材の先端部を拳状に削り出し、先端より約70cmのところに抉りを入れる。端は折損する。他に加工はなく、全体に樹皮を残す。建築用材と考えられる。第174図2は片面に面取りを施した断面長方形の棒材である。両端を欠く。一辺1.6cm～2.2cmの方形の孔を一定間隔に7個穿つ。穿孔は両側から行われている。加工は丁寧である。同図4・5は、2と同じ性格のもので、どちらも両端を欠くが断面形、大きさはともに2によく似る。4は方形孔部から幅がやや大きくなる。孔は両側から穿孔するため中がやや狭くなっている。第173図12は角材に切り込みを入れた未成品である。第174図1は加

布田遺跡

第11表 布田遺跡IVB区包含層出土木製品観察表

挿図番号	品名	法量(cm)			樹種	備考	写真番号
		長さ	幅(径)	厚さ			
170-1 2 3	鍬	16.0	22.4	3.0	カシ	未成品 焼け焦げ	52-22 23
		16.7	7.8	1.0			
		2.5	6.0	0.5			
171	又 鍬 (刃部)	64.0	8.1	1.7	カシ		53-1
		46.0	3.7	1.0			
172-1 2 3 4 5 6	鋤 斧の柄	24.5	9.4	1.0	{ヤマ イグワ トネ リコ	焼け焦げ 未成品	53-12 13
		19.3	7.2	0.9			
		27.0	6.4	4.0			
		20.0	3.4	1.4			
		5.2	3.5	0.5			
		12.1	1.4	0.8			
173-1 2 3 12 13	弓	63.4	1.9	—		焼け焦げ 未成品	53-3
		32.0	1.5	—			
		9.4	1.2	—			
		54.8	3.7	1.9			
		237.3	5.4	—			
174-1 2 3 4 5	組み合わせ部材	61.5	11.1	—		未成品 焼け焦げ	53-6
		80.6	4.0	2.0			
		103.5	6.0	—			
		9.5	3.4	2.3			
		11.3	3.1	2.0			
173-4 5 6 7	板状材	37.9	9.2	1.9		焼け焦げ	53-2 8
		12.9	5.7	2.5			
		35.0	7.3	1.5			
		56.5	6.4	2.1			
173-6	板状材	29.6	6.0	0.9			
175-2 3 4 5	棒状材	67.3	3.4	1.7		焼け焦げ 未成品 焼け焦げ	
		71.6	3.8	2.8			
		73.0	3.8	—			
		28.4	7.6	—			
176-1	棒状材	200.8	6.6	4.4			
175-1	船形材	58.7	13.4	4.1		未成品	53-5
176-2	組物	86.4	77.6	3.6			
173-8 9 10 11 —	用途不明品 樹皮	3.4	2.8	0.9		未成品 未他5本	53-9
		6.5	2.9	0.9			
		8.2	4.2	1.4			
		8.7	4.0	1.1			
		31.0	2.4	0.03			

工の初期段階のものと考えられる。割り込みの形が第173図13、第174図3と同じであるので組み合わせ部材の未成品としておく。

②板材（第173図4～7、第174図6）

第173図4・5は板の端部である。4は端部を両面から斜めに切断し、側面は木目に沿って斜めに割り裂く。5も端部を両面から斜めに切断する。側面は段を削り出しているが、磨滅のため角がとれてまるくなっている。第173図6・7は片側を斜めに削って先端を尖らせた細長い板状品である。端は折損している。これらはすべて矢板ではないかと考えられる。第174図6は両端を欠く薄手の板状品で、全幅も不明である。側面に狭い段を削り出し、段に沿って径0.4cmの小孔を1.2cm間隔で2つずつ2セット穿っているのが確認できる。孔間が溝状に抉れているのは使用のためとも考えられる。段部で別の材と組み合わせ、小孔を使って縛り合われたのであろう。

③棒材（第175図2～5、第176図1）

第175図2～4はすべて折損した杭材である。芯持ちの丸太材をそのまま利用したもの(2)、方形に削って角材状にしたもの(3・4)など様々である。4は側面に段を削り出しており、やや細目の材を使用する。尖端部付近は焼損する。第176図1は杭列にひっかかった形で出土した。端は折損するが、面取りを施した角材である。これが杭列遺構と関係するものかどうかは不明である。第175図5は両端ともに二面から斜めに切断する。他に加工の認められない芯持ちの丸太材である。樹皮を残し、全体に炭化が著しい。

④舟形材（第175図1）

木目に沿って湾曲した板状品で、両端を垂直に切断する。側面部も同様に切断し加工を施す。外面には明瞭な削り痕を残す。内面は年輪界線に沿って縦に割れており、溝状のくり込みらしきものが認められる。その形状により小形の舟の未成品ではないかと考える。

⑤組物（第176図2）

1辺1.5cm前後の角材を平均2.5cm間隔で19本並べ、両端に1本ずつ角材をわたす。これは幅3.0cm、厚さ2.0cm程のもので、幅3～5mmの紐でそれぞれを縛る。中央には幅10mmの紐を上下交互にわたし、それを1本の紐でそれぞれの角材に縛っていく。その形態からみて小型のおりのようなものの構造材と考えられる。

その他に亀甲状の小片（第173図8）や板状の破片（同図9～11）なども出土している。

包含層の木製品は以上のように多種に及ぶが、次のような特徴が認められる。農具は破片ばかりで出土数も少ないが、全体に薄手で華奢であり、形も小さいものが多い。加工木材中で棒材・板材が大半を占め、中でも杭材の数量が多い点が注目される。これは次に述べる杭列遺構の存在と無縁でないと思われる。また木製品の中に焼損したものがかなりあることも興味深い。包含層の形成時期が短かいということから、堆積前に火災に逢ったことも考えられる。

布田遺跡

(f) 杭列遺構 (153図)

包含層下面に杭列が円形に廻っていた。完全に囲んだ状態で確認したものは1つだけで、径1.5mを測る。他に円形に配列されている杭列が4組確認される。いずれも連続しない。これらの杭はかなり深くまで打ち込んである。各杭列は狭い範囲に並んでいるが、互いに有機的につながるかどうかは不明である。この杭列以南が意宇川の旧河道にかかるため、あるいはそれに関係した遺構であるかもしれない。

(園山和男)

その他の遺物

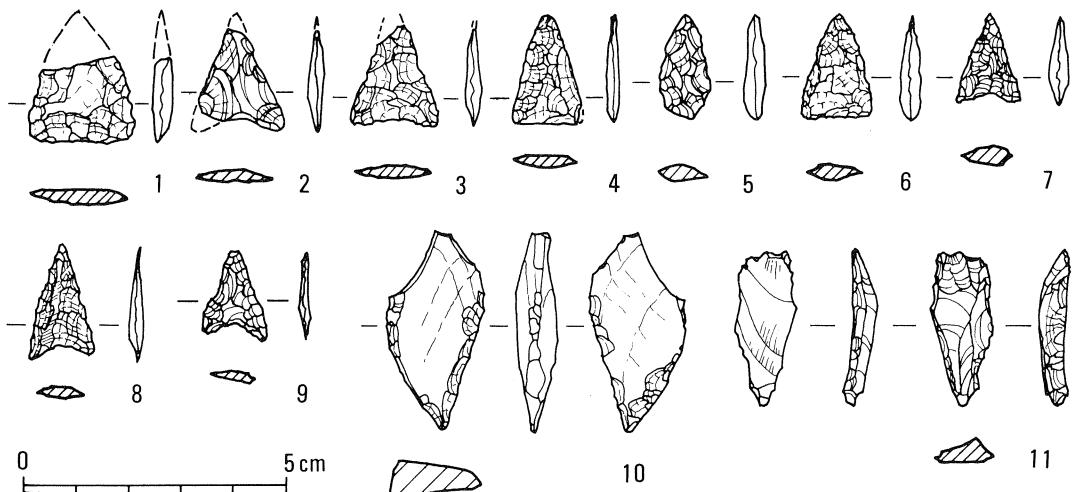
布田遺跡では先にも述べたように、以前から耕作中に遺物が出土しており、今回の調査でも耕作土中から遺物が多く出土している。また、調査期間中に周辺の用水路工事地点で採集した資料もあり、ここに合わせて報告するものである。ただし、弥生土器については遺構から出土したものと何ら変わることろがないのでここでは省略する。

石器 (第177図、第178図、図版54—1~10)

石鏸、刃器、石庖丁、石鋸、石劍、砥石、扁平片刃石斧等が採集されている。

石鏸 (第177図1~9) 材質は7、9が黒曜石で、その他は硬質砂岩製である。基部をみると三形式に分類することができる。1、4、6は平基式、2、3、7~9は凹基式であるが、どれもわたぐりは比較的浅く、特に3はほとんど平基式に近い。5は木葉形を呈し、基部がやや丸くなるものである。形状は、5を除いては側縁が等辺をなし、いずれも第一次剝離のうち、側縁部に細かな調整剝離を加える。1・2には第一次剝離面が大きく残る。9は両側縁中央部にやや割り込みがある。

刃器 (第177図10・11) 10は長さ3.75cmを測り、縦長の剥片を使用する。側縁部の一方に調整

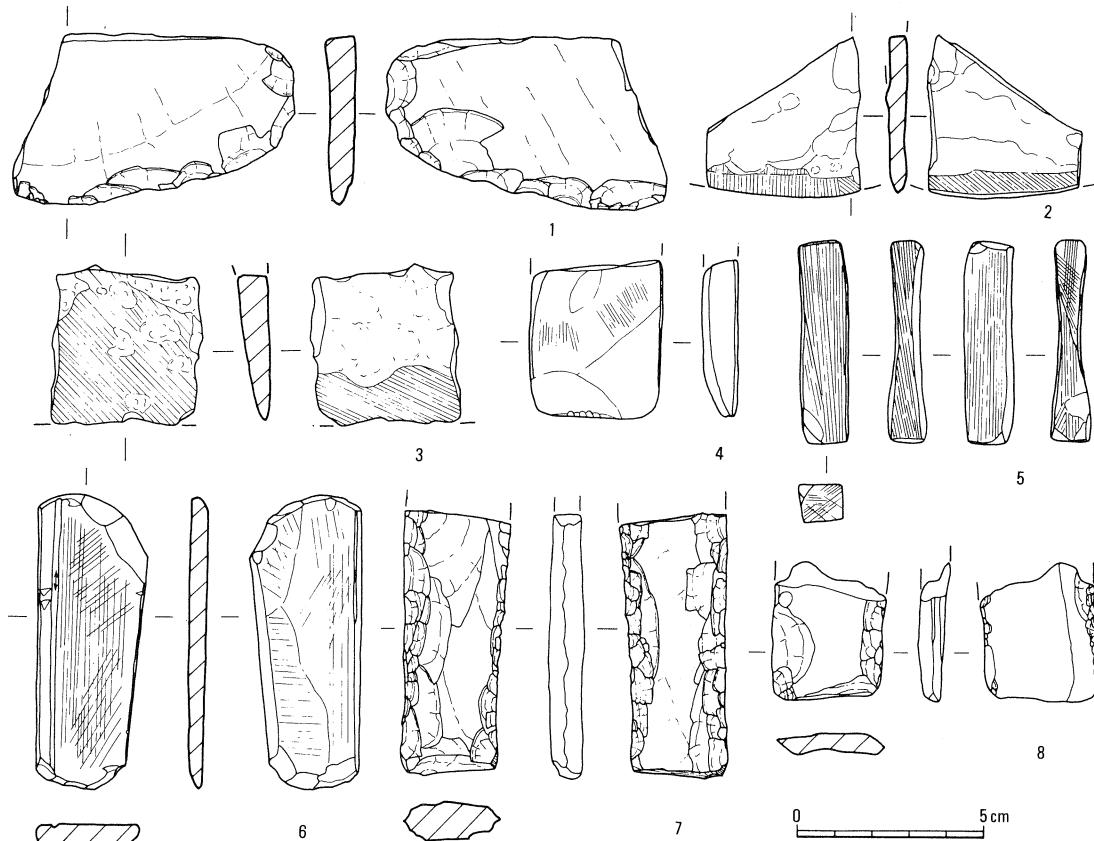


第177図 布田遺跡採集の石器 (1) 7/10

布田遺跡

剝離を施し、刃部とする。11は長さ2.85cmを測り、小形で縦長の剥片を利用する。片面の両側縁部に調整剝離を施す。材質はいずれも玉髓である。

石庖丁（第178図1・3） 1・3とも流紋岩製で、板状の剥片を利用する。1は2分の1を欠損し、刃部を中心に粗い剝離を施す。穿孔は認められず、研磨は行われていない。3は小片だが石庖丁と思われる。片面に全面研磨を施し、他面は刃部のみ研磨する。



第178図 布田遺跡採集の石器(2) 1/2

第12表 布田遺跡採集石器計測表(1)

挿図番号	遺物名	全長 (現存長)cm	最大幅 cm	重量 (現重量)g	石質	備考	写真番号
177-1	石 鎌	(1.67)	2.02	(1.25)	硬質砂岩	平基式	46-6
2	〃	(1.9)	1.65	(0.9)	〃	0.2 (脚長)	
3	〃	(1.9)	1.65	(0.8)	〃	凹基式	9
4	〃	2.1	1.3	0.8	〃	平基式	8
5	〃	1.94	1.0	0.75	〃	尖基式	10
6	〃	2.0	1.34	0.9	〃	平基式	12
7	〃	1.7	1.23	0.6	黒曜石	0.2、0.2(脚長)	54-3
8	〃	2.2	1.3	0.5	硬質砂岩	0.3(脚長)	4
9	〃	1.7	1.3	0.3	黒曜石	0.3 (脚長)	1
10	刃器	(3.75)	1.95		玉髓		46-7
11	〃	(2.85)	1.1		めのう		4

布田遺跡

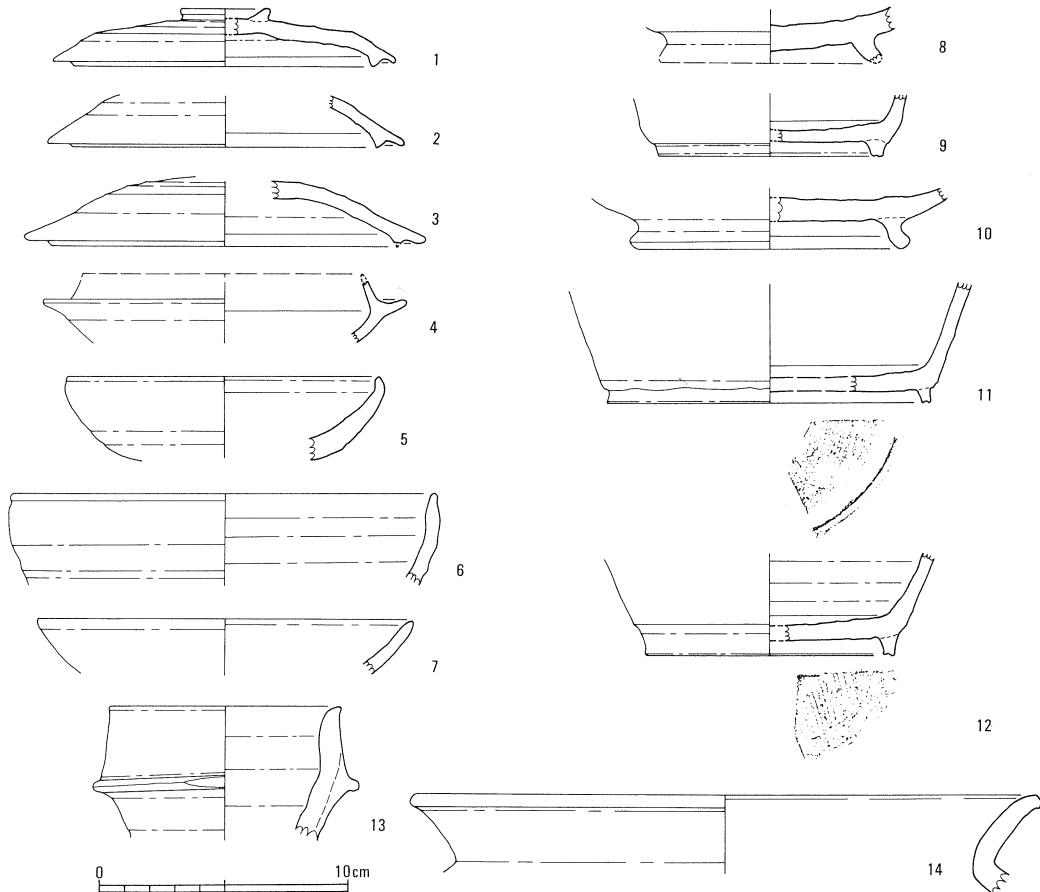
第13表 布田遺跡採集石器計測表(2)

挿図番号	遺物名	全長 (現存長)cm	最大幅 cm	重量 (現重量)g	石質	備考	写真番号
178-1	石庖丁	4.5	7.5		流紋岩	½欠損 刃部研磨	54-6
2	石鋸	(4.3)	4.0		〃	刃部研磨片	9
3	石庖丁	(4.2)	3.9		〃	破片	7
4	扁平片刃石斧	(4.2)	3.5	(21.8)	〃	刃こぼれあり	8
5	砥石	5.4	1.3		不明	全面使用	10
6	管玉未成品	7.8	3.0		緑色凝灰岩	明緑灰色、施溝あり	12
7	石剣	(2.9)	7.0		流紋岩	基部側縁のみ研磨	11
8	〃	(3.7)	3.0		硬質砂岩	破片	

石鋸(図2) 流紋岩の扁平な石材を使用する。刃部を丁寧に研磨する。刃先が丸くなり、刃縁に沿って擦痕が認められる。

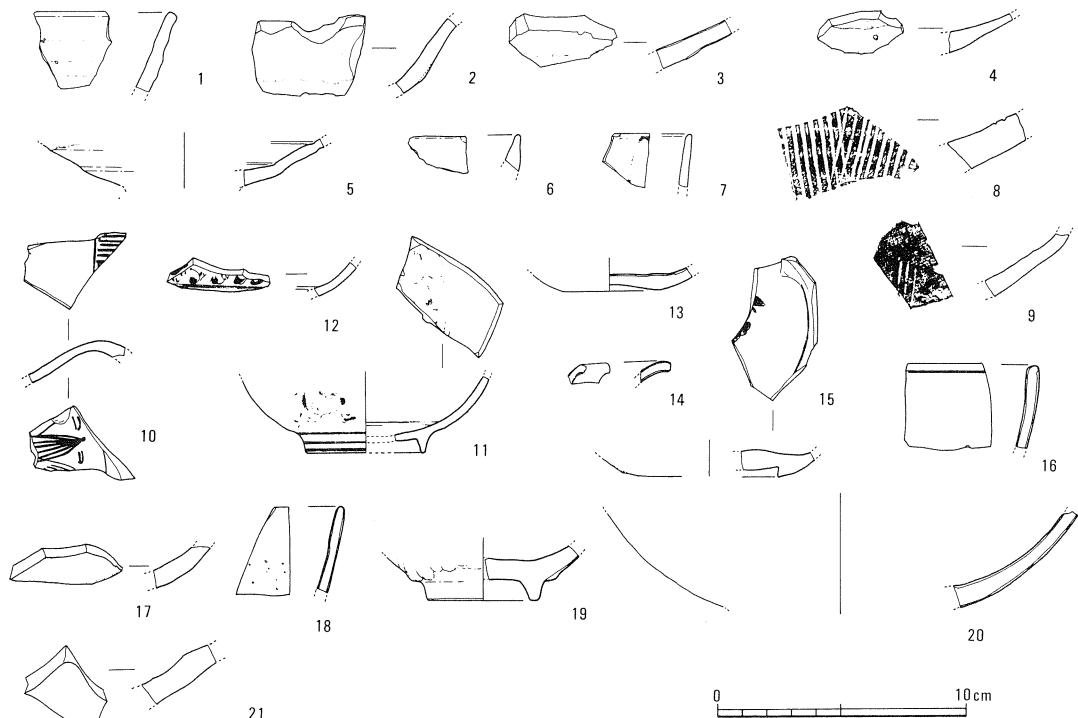
扁平片刃石斧(同図4) 緑色凝灰岩製で、刃部のみ残存。片面を研磨し刃を研ぎ出す。刃部には細かな刃こぼれが認められる。

砥石(同図5) 全長5.4cm、厚さ1cmを測る小形品である。四面を砥面として使用し、細かな研磨痕がはっきりと残る。中央が磨り減って凹んでおり、使用頻度の激しかったことを物語る。



第179図 布田遺跡採集の須恵器 1/3

布田遺跡



第180図 布田遺跡採集の陶磁器 $\frac{1}{3}$

石剣（同図7・8） 7は現存長7.05cmで、流紋岩製の縦長の剥片を用いる。両面ともに第一次剝離面を残しながら側縁部にやや細かい調整剝離を施す。側縁の一方には研磨が施されており、直線的になる。もう一方の側縁部下端にもわずかに研磨が認められる。8は硬質砂岩製で比較的薄い剥片を利用し、側縁部に細かい剝離を施す。

管玉未成品（同図6） 緑色凝灰岩製の板状未成品。両面および両側面に研磨が施されるが、研磨方向は一定ではない。片面の側辺に沿って深さ0.7cmのV字状の溝が残る。その側面は角がとれて丸みを帯びている。形割品をとる以前の段階のものである。

（片岡詩子）

須恵器（第179図、図版54—30～44）

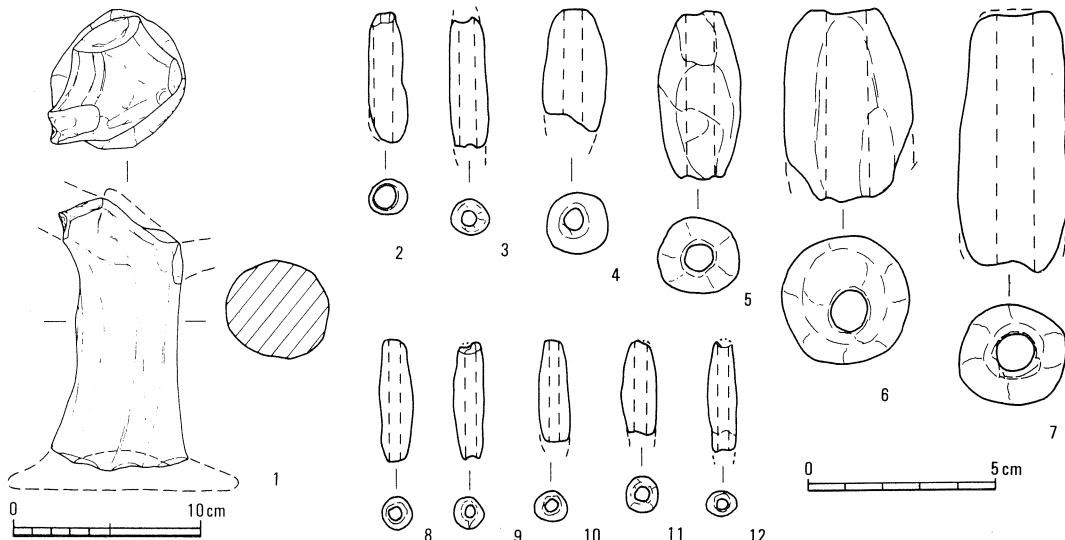
IIA・B区の第1層や試掘グリッド等より出土している。1～3は蓋である。いずれも口縁部内側にかえりを持つ。1は薄く扁平な輪状つまみを持つ。4～12は壺であり次のような種類がある。

第1類（4） 壺と蓋が逆転する以前のものである。立ちあがりはやや短く内傾するし、受部は長くなっている。

第2類（5・6） 高台のつかないものである。5は口縁端部がやや内傾する。6は内湾気味に立ちあがり、端部は直口する。

第3類（8～12） 高台が付くものである。8・10は高台が外方に開き、端部はやや丸くなる。体部は丸みをもって立ちあがる。8の底部は笠切りのうち回転ナデを施す。9～12は短く直線的な高台を持つ。体部は角ばって直線的に立ち上がる。いずれも高台端部が凹む。11・12の底部は各々

布田遺跡



第181図 布田遺跡の土製品採集の土製品計測表 $\frac{1}{2}$ 1のみ $\frac{1}{4}$

回転糸切り、静止糸切りで未調整である。なお、7は壺口縁部と思われるが形態がはっきりしない。

13は壺の口縁部と思われる。復元口径9.4cm。逆くの字状になり、稜部に受け部状のものを回らせる。14は甕で、口縁部がくの字状に外反し、端部はやや丸みを帯びる。

以上のうち、壺第1類は山本清氏の山陰の須恵器編年の第三期にあたり、1～3は柳浦俊一氏編^{註11}年の第1式に相当するものである。^{註12}8・10は同第2式に、11・12は同第4式に相当すると思われる。これら採集須恵器の大半は、周辺の出雲国府、国分寺、国分尼寺等に關係する時期のものである。

(吉岡七江)

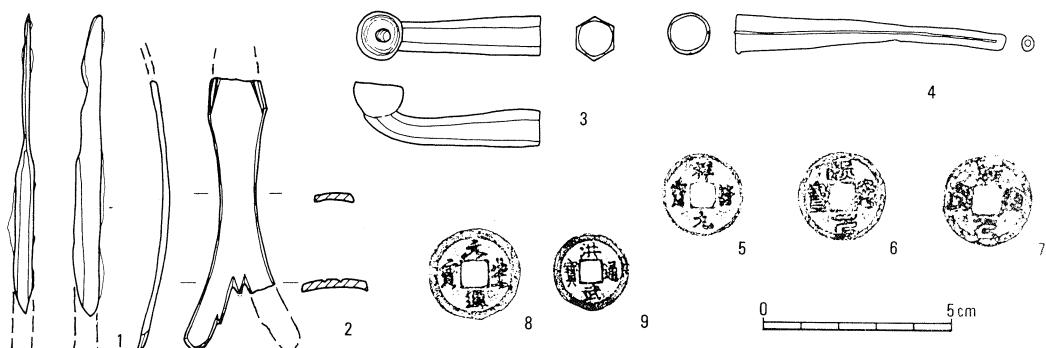
陶磁器（第180図、図版54—45～65）

陶磁器はI層（耕作土）、II層からの出土で、遺構に伴うものはない。図示したもののうち、3、11～21が中国製、他は日本産で、いずれも中世～近世にかけての時期のものである。中国製青磁のうち、15は見込に花のスタンプを押した碁笥底の皿、14・16～19は碗、13は小皿、21は壺であろう。このうち17は広い線刻蓮弁文

をもつ。15～16世紀ごろと考えられる。11・12は青花碗である。11はいわゆる蓮子碗の器形で、底部が丸く外面にとがっている。内外面とも牡丹文を描いている。12は腰部に唐草文を回らすが、器形は11と同様であろう。断面に漆が付着している。16世紀代のものと思われる。

第14表 採集土製品計測表

插図番号	出土地点	全長 (現存長)cm	最大径 cm	孔径 cm	重量 (現重量)g	写真番号
181-2	II A区 第I層	3.3	0.9	0.4	(2.2)	54-28
3	〃	(3.5)	0.9	0.4	(2.2)	23
4	II C区	〃	(3.2)	1.7	0.5	(6.4)
5	II B区	〃	4.4	2.1	0.8	14.6
6	〃	〃	(5.1)	3.4	1.1	(50.9)
7	〃	〃	(6.8)	2.9	1.0	(45.5)
8	II C区	〃	3.2	0.9	0.3	1.9
9	II B区	〃	3.1	0.8	0.3	1.7
10	II A区	〃	(2.6)	0.8	0.3	(1.4)
11	II C区	〃	(2.5)	0.9	0.4	(1.9)
12	II B区 第II層	(2.8)	0.8	0.3	(1.6)	25



第182図 布田遺跡採集遺物 1/2

1～5、9は唐津焼である。このうち1、2は碗、3～5は小皿、9は擂針で内面に3本以上の条がはしる。慶長から元和にかけてのものであろう。

7、10は伊万里で、7は網目文を描いた碗、10は皿と考えられる。

8は備前焼の擂鉢の破片である。器面は茶褐色、器肉は青灰色を呈し、1mm以下の砂粒が含まれる。焼成は良好。内面は10本以上を単位とした条がはしり、よく使用された為か、磨滅している。

6は美濃、瀬戸系のいわゆる天目茶碗である。乳白色でガサガサの胎土である。小破片のため口径の復元は不可能である。

(内田律雄)

土製品（第181図、図版54—19～29・66）

土製支脚と土錐がある。1は調査区周辺採集の土製支脚である。土師質で体部はつまっている。先端部分を欠損するが、V字形に突出する二股の突起と背面の小突起を持つ。体部はやや角ばった円柱状で、裾部は端部を欠く。あげ底になる。本報告書のVの才の峠遺跡出土のものとほぼ同型である。2～12はII区の第I・II層より出土した管状土錐である。いずれも両端がすばむ紡錘形をしている。大形（6・7）、中形（4・5）、小形（2・3・8～12）に分けられる。ほとんどが欠損品である。大形、中形のものは灰褐色ぎみで、小形のものは赤みがかっている。これは時期差を示すものと思われる。

金属製品（第182図1～4）

第I層より出土しており、いずれも中世以降のものと考えられる。1は鉄製ヤスと考えられる。全面に鋸が付着しているため形が不明瞭ではあるが、先端部が扁平で尖っており、その下に逆刺が付き、基部になると断面長方形を呈する。2は端部を欠くが銅製の装飾具と思われる。板状でやや湾曲しており、外面の縁辺に彫り込みが施されている。3・4は別個体ではあるが煙管の雁首と吸い口の部分である。3の煙導部は断面六角形をなす。4はおそらく一枚の真鍮の箔を筒状に曲げて作られたものと考えられる。

布田遺跡

古銭（第182図5～9、図版54—13～18）

II区の第I層より出土し、うち五枚が判読できた。銭文は、5は「祥符元宝」（初鑄、北宋大中祥符元年、1008年）、6・7は「熙寧元宝」（初鑄、北宋熙寧元年、1068年）、8は「元豐通宝」（初鑄、明洪武元年、1368年）で背文を持つが判読できなかった。これらは中国からの渡来銭の類だが、公鑄または私鑄かは不明である。このような宋・明銭が日本で流通していたのは主に平安時代末～江戸時代初頭である。こうした古銭の出土状況と前出の表採陶磁器の年代とを考え合せると、中世末～近世初頭の遺構等が本遺跡の周辺にあったと推定できよう。^{註13}

（吉岡七江）

4 小 結

以上のように布田遺跡は、意宇川の旧河道に挟まれた微高地上に立地し、今回の調査で弥生時代前期～中期の溝状遺構を中心として、土壙、住居跡状遺構、古墳時代の溝、土壙、さらに歴史時代の掘立柱建物などが営なまれたことが判明した。島根県内では出雲国庁跡の調査を除くと、今日まで沖積平野における大規模な調査例がなく、今回の調査で沖積地における弥生～古墳時代の集落に関する多くの新知見が得られた。

布田遺跡に集落を営み始めたのは弥生前期末頃と考えられる。この頃の遺構には土壙と溝状遺構があるが、今回の調査区が遺跡の東端部に位置するとはいえ、その数も少なく、集落としては規模が小さかったことが考えられる。この時期からすでにIII区S D10は存在していたと考えられる。S D10はIII区を東西にやや弧状に走り、南側にしか遺構がないところから環濠状のものではなかっかと思われる。当遺跡の中心となるのは弥生中期中葉～後葉である。溝が何本も東西に走り、その間には土壙や住居跡状遺構が営まれている。土壙は、灰や炭化物、土器片などが検出されるところから、その多くが廃棄用の土壙と考えられる。古墳時代の井戸状土壙III区塙張部S K01から勾玉が出土している。墳墓以外でこのように勾玉が出土するのは極めて珍しく、また多数の土師器高环形土器も伴出していることから、祭祀的要素の強いものと考えられる。同様にIII区S D12の上層からも多数の高环形土器が出土しており、布田遺跡の特殊性を物語るものかもしれない。

III区から掘立柱建物跡を検出したことも特筆すべき点である。特に廂のついた建物跡S B01は、その柱穴の中から板の礎盤も発見されており、こうした例は島根県内では初めてである。布田遺跡の周辺には、出雲国庁や国分寺、国分尼寺等があり、これらに関係した遺構である可能性がつよい。

今回の調査では遺物に関してもいくつかの新事実を確認した。まず意宇平野周辺の弥生時代前期後葉～中期についての土器の変遷が把握できた。県内では現在、前期～中期を5期に区分する編年が一般的であるが、当遺跡の資料はそれを追証するものであり、また中期中葉から後葉にかけての器形のヴァラエティを明らかにすことができた点で、重要な資料といえる。第二の点は、弥生時代の石器組成が明らかになったことである。島根県では石器の出土例が少なく、石器研究の立ち遅れが指摘できるが、今回の調査で石器の種類もひととおり明らかになった。特に注目される点は中

期における打製石鎌、石庖丁、大型石庖丁の発見で、当地で伝統的な打製大形石斧の出土と考え合わせると、大陸系磨製石器が九州から伝播発展していく過程で、両者が共存、機能分化していった様子が明らかになったと思われる。

第三の点は、当遺跡で管玉を製作した事実を確認したことである。しかもその年代が弥生時代中期中葉～後葉と、県内での玉作開始時期をさらに遡らせたことである。山陰地方における弥生時代の管玉製作は近年まで全く不明であった。ところが、ここ数年内に鳥取県内で相続いで管玉の
^{註14}玉作工房跡が発見され、にわかに脚光をあびるようになった。もちろん布田遺跡の管玉未成品は県内では初めてであるが、鳥取県出土の未成品とは大きく異った点がある。すなわちそれは、本文中でも述べたように、管玉製作過程で未成品表面の研磨を何度も繰り返す点で、採用した石材に關係した当遺跡独特の手法である。今後これらの弥生時代の玉作過程や、墳墓に副葬された成品などの関係が玉作研究の最大の問題となろう。

その他に土師器の高坏は、従来から大東式と呼ばれている時期のもので、その形態や成形の方法を明らかにできた重要な資料である。

布田遺跡は意宇平野の微高地に立地し、弥生時代の遺構は西に、古墳時代以降にはさらに北あるいは東方にも広がると考えられる。今回の調査では、明確な竪穴住居跡や玉作工房こそ検出することはできなかったが、今後の調査次第では島根県を代表する沖積地の一大集落遺跡となる可能性もある。

(足立克己)

註1 近藤正「出土品」(『島根県文化財調査報告書』第五集1968年)

2 成瀬敏郎「意宇平野一その形式についてー」(『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』1975年)

3 桑飼下遺跡の場合は身が薄く、細長い石斧で、刃部の幅広のものが極めて多い。体部中央の磨耗度、あるいは刃部の縦方向の擦痕などから柄付きの突き鍬、つまり鋤先としての機能を想定している。

4 山本清「山陰の須恵器」(『山陰古代文化の研究』1971年)

5 前島己基「出雲玉作遺跡の一例—大原郡大東高校遺跡」(『玉』1、1970年)

6 高坏形土器の成形については長野県佐久市教育委員会『市道』1976年を参考にした。

7 『市道』の成形手法 b' とほぼ同じと考えられる。

8 島根県立八雲立つ風土記の丘資料館『八雲立つ風土記の丘研究紀要 I、弥生式土器集成』1977年

9 島根県教育委員会『タテチョウ遺跡発掘調査報告書 I』1979年

10 島根県教育委員会『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書—I—』1976年

11 前掲4と同じ

12 柳浦俊一「出雲における歴史時代須恵器の編年試案」(『松江考古』3 1980年)

13 日本銀行調査局編『図録日本の貨幣2原始・古代・中世』東洋経済新報社 1977年

14 清水真一「鳥取県下の玉作遺跡について」(『考古学研究』第28巻第4号、1982年)

土 器 観 察 表

插図番号	出土点	器種	法量(cm)	文様の特長	手法の特長	備考
III 区						
5	S D06	弥生壺形土器	口径(27.2)		・磨滅が著しく調整不明	・0.5~3mmくらいの小微砂粒を多く含む。焼成良好。あかるい黄澄
10-1	08	弥生甕形土器	口径(22.6)	・口縁下に2条以上の断面三角形の貼り付け突帯を有する	〃	・0.5~3mmくらいの小微砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
-2		〃	口径(16.2)		・口縁部外面ナデ。あと部分は磨滅が著しく調整不明	・0.5~2mmくらいの小微砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
11-1	09	弥生壺形土器	口径(18.8)		・磨滅が著しく調整不明	〃
-2		〃	口径(25.8)		・口縁部外面と内面上部ナデ。あと部分は磨滅が著しく調整不明	・0.5~1.5mmの小微砂粒を多く含む。焼成良好。灰味澄
-3		〃	口径(12.4)	・磨滅が著しくよくわからぬが口縁端部に1条または数条の沈線文がめぐる。頸部に突帯を貼り付け籠状施文具による押圧を施す	・口頸部、外面ナデ。あと部分は磨滅が著しく調整不明	・0.5~3mmくらいの砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
-4		〃		・頸部に櫛描きと思われる平行沈線文が3条めぐる	・磨滅が著しく調整不明	・1~4mmくらいの砂粒を多く含む。焼成やや良好。うすい黄澄
-5		〃		・頸部に押圧を有する貼り付け突帯をめぐらす	〃	・0.5~1mmくらいの小微砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
-6		弥生甕形土器	口径(19.2)	・口縁下に断面三角形の突帯が2条以上めぐる	〃	・1~2mmくらいの砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
-7		〃			〃	・1~3mmくらいの小微砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
-8		〃	口径(22.4)		〃	・0.5~1.5mmくらいの小微砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
-9		〃	口径(20.0)	・頸部に突帯を貼り付け指頭圧痕をめぐらせる	〃	・0.5~1mmくらいの小微砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
-10		〃	口径(19.0)	・口縁端部に浅い刻目がめぐる。頸部に突帯を貼り付け押圧を施す	〃	〃
-11		〃		・4本単位の櫛描き平行沈線文が12条めぐる	・内外面ともナデ	・破片。0.5~3mmくらいの小微砂粒を多く含む。焼成良好。外面暗い灰、内面にぶい黄澄
-12		弥生土器	口径2.3 底径4.0 器高2.6		・磨滅が著しく調整不明	・1~3mmくらいの小微砂粒を含む。焼成良好。うすい黄澄
14-1	S D10	須恵器 壺	口径(11.8)		・内外面とも回転ナデ	・0.3~0.5mmくらいの小微砂粒を多く含む。焼成良好、堅緻。外面灰色内面灰味緑、断面灰味澄
-2		須恵器 皿	口径(9.0)		・回転糸切り。体部内外面とも回転ナデ。底部内面一定方向ナデ、外面未調整	・0.5mmくらいの小微砂粒を多く含むが2mmくらいの砂粒もわずかに含む。灰色
15-1		弥生壺形土器	口径(12.8)		・磨滅が著しく調整不明	・小微砂粒を多く含む。3mm以下の砂粒も含む。焼成不良、もろい。灰褐色
-2		〃			〃	・1~2mmくらいの砂粒を多く含む。焼成良好。にぶい橙
-3		〃	口径(20.0)		・口縁端部ナデ。口縁部、外面上部横方向の刷毛目後ていねいなナデ、下部縦方向の籠磨き、内面横方向の籠磨き	・小微砂粒を多く含む。焼成良好、堅い。暗灰褐色

布田遺跡

插図番号	出土点	器種	法量(cm)	文様の特長	手法の特長	備考
—4	S D10	弥生壺形土器		。頸部に籠状施文具で平行沈線文が6条めぐる	。内外面ともていねいなナデ	。2mmくらいの砂粒とそれ以下の小砂粒を多く含む。焼成やや不良、もろい。外面、灰褐色、内面暗灰褐色
15—5		〃	口径(19.8)		。磨滅が著しく調整不明	。3mm以下の中砂粒を多く含む。焼成やや不良、もろい。赤味の強い肌色
—6		〃		。頸部に籠状施文具による5条の平行沈線文をめぐらせる	。頸部、横方向のていねいなナデ。胴部籠磨き?。内面ていねいなナデ	。2mmくらいの砂粒を多く含む。焼成やや不良、もろい。灰褐色。黒斑あり
—7 —8		〃	口径(10.5) 〃(10.8)		。口縁部、内外面とも横方向のナデ。頸部、外面刷毛目、内面磨滅が著しく調整不明	。微砂粒を多く含む。焼成やや不良、少しもろい。灰褐色
—9		〃	口径(13.3)		。磨滅が著しく調整不明	。2mm以下の砂粒を多く含む。焼成やや良好、少し堅い。淡い灰明褐色
—10		〃	口径(22.3)	。口縁端部に櫛状施文具(あるいは貝殻)で刺突文を施している	。口縁端部ナデ。あと部分は横方向のナデ	。1mm以下の小微砂粒を多く含む。焼成良好、堅い。白灰褐色
—11		〃	口径(26.0)	。口縁端部に籠状施文具で斜行沈線文を施したのち、円形浮文を上下2列にわたってめぐらせる	。磨滅が著しく調整不明	。微砂粒を多く含む。焼成良好、堅い。黄褐色～灰褐色
—12		〃	口径(26.0)	。口縁端部、籠状の施文具による斜行文をめぐらせる	。口縁部外面、横方向のていねいなナデ。あと部分は磨滅が著しくて調整不明	。1mm以下の小微砂粒を多く含む。焼成やや良好少しもろい。外面灰褐色、内面黒色
—13		〃	口径(25.6)	。遺存状態が悪く判然としないが、口縁端部に籠状施文具による斜行文又は刷毛による刻目が施されている	。磨滅が著しく調整不明	。1mm以下の小微砂粒を多く含む。焼成やや不良もろい。やや暗い灰褐色、内面は黒色
—14		〃	口径(21.4)	。口縁端部に刷毛による羽状文をめぐらす	。口縁端部ナデ。口縁部外面刷毛目後横方向ナデ。内面横方向ナデ	。1mm以下の小微砂粒を多く含む。焼成やや良好、少し堅い。灰褐色
—15		〃	口径(21.4)	。口縁端部に籠状施文具による羽状文をめぐらせる	。口縁端部ナデ。口縁部、外面横方向のナデ、内面でていねいなナデ	。1mm以下の小微砂粒を多く含む。焼成やや良好堅い。ややくすんだ灰白色
—16		〃	口径(23.2)	。口縁端部に刷毛で上下2列にわたって羽状に刻目を施している	。口縁端部でていねいなナデ。口縁部、外面籠磨き、内面横方向のていねいなナデ	。1mm以下の小微砂粒を多く含む。焼成良好、堅い。外面灰褐色、内面黒灰色
—17		〃	口径(23.1)	。口縁端部に4本単位の山形文を有する	。口縁端部横方向ナデ。口縁部外面横方向のていねいなナデ、内面上部横方向のていねいなナデ、下部磨滅が著しく調整不明	。1mm以下の小微砂粒を多く含む。焼成良好、堅い。灰褐色
—18		〃	口径(30.8)	。口縁端部に刷毛?で押圧して斜格子文をめぐらせる	。口縁端部ナデ。口縁部内外面ともていねいなナデ	。微砂粒を多く含む。焼成良好、堅い。やや白っぽい、灰褐色
—19		〃	口径(27.9)	。口縁端部に3本単位の櫛描き鋸齒文をめぐらせる	。口縁端部ナデ?。口縁部内面ナデ、外面横方向のナデ	。1mm以下の小微砂粒を多く含む。焼成やや良好堅い。暗灰褐色
—20		〃	口径(22.0)	。口縁端部に籠状施文具による斜格子文をめぐらせる	。口縁端部ナデ。口縁部、外面横方向のナデ、内面磨滅が著しく調整不明	。0.5～1mmくらいの小微砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
—21		〃	口径(27.5)	。口縁端部に半截竹管状の施文具で斜格子文をめぐらせる。同一施文具で口縁部内面にも羽状文を施す	。口縁部、外面でていねいなナデ?内面横方向のていねいなナデ	。1mm以下の小微砂粒を多く含む。焼成やや良好堅い。灰褐色
—22		〃	口径(25.2)	。口縁端部に4本単位の櫛描き鋸齒文をめぐらせる。口縁部内面に同一の櫛で波状文を2列にめぐらせる	。口縁端部ナデ。口縁部外面上部ナデ、下部刷毛目後ナデ、指頭圧痕が残る、内面横方向のていねいなナデ	。1mm以下の小微砂粒を多く含む。焼成やや良好堅い。灰味を帯びた焦げ茶色

布田遺跡

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)	文様の特長	手法の特長	備考
-23	SD10	弥生壺形土器	口径(19.0)	○口縁端部に籠状施文具で斜格子文をめぐらせる。口縁部内面に3本単位の櫛描き施文具で斜格子文を施す	○口縁部外面強いナデ、内面ていねいなナデ	○微砂粒を多く含む。焼成良好、堅緻。暗灰褐色。黒斑あり
-24		"	口径(22.4)	○口縁端部に籠状施文具で斜格子文を施し、口縁部内面に5本単位の櫛状施文具で刺突列点文を2列にめぐらせる	○口縁端部ナデ。口縁部外面刷毛目のちナデ、内面横方向ナデ	○1mm以下の小微砂粒を多く含む。焼成不良、もろい。外面くすんだ淡赤褐色、内面灰褐色
15-25		"	口径(23.8)	○口縁端部に籠状施文具で斜格子文を施す。口縁部内面に3本単位の櫛状施文具で刺突列点文をめぐらせる	○口縁端部ナデ。口縁部、外面上面ナデ。あと部分は磨滅が著しく調整不明	○1mm以下の小微砂粒を多く含む。焼成やや不良もろい。白っぽい灰褐色
-26		"	口径(15.4)	○口縁上面に3本単位の櫛描き斜行文を施した後、凹形浮文をめぐらせる。口縁端には刻目を入れ、その下には籠状施文具による刺突を有する突帯を貼り付ける、さらにその下には3本単位の櫛描き斜格子文を施す、次に7本単位のやや波状の櫛描き平行沈線文と櫛描き波状文をめぐらせる。口縁部下に1ヶ所穿孔する	○口縁部内外面とも横方向ナデ。胴部外面刷毛目後ナデ? 内面刷毛目後ナデ	○微砂粒をわずかに含む。焼成良好、堅い。暗灰褐色
16-1		"	口径(27.8)	○口縁部上面端部近くに突帯を貼り付け、指頭圧痕を施し、更にその下には、3本単位の櫛描き斜格子文を施している	○口縁部内面ていねいなナデ。あと部分は磨滅が著しくて調整不明	○微砂粒を多く含む1mm以上的小砂粒もわずかに含む。焼成やや良好、少しもろい。灰褐色。黒斑あり
-2		"	口径(19.2)	○口縁端部に籠状施文具で3条の平行沈線文をめぐらせた後、羽状に斜行文を施している。口縁部内面に4条以上の平行沈線文をめぐらせる	○口縁端部ナデ。口縁部外面上面ていねいな横方向のナデ、内面ていねいなナデ	○微砂粒を多く含む。焼成やや良好、少し堅い。灰褐色
-3 -4		"	口径(24.8) "(27.0)	○口縁端部に平行沈線文をめぐらせ、その上に籠状施文具で上下2列にわたり斜行文を施し、さらにその上に凹形浮文をめぐらせる	○口縁端部ナデ。口縁部内外面ともていねいなナデ	○微砂粒を多く含む。焼成やや良好、やや堅い。灰褐色
-5		"	口径(19.7)	○口縁端部に籠状施文具で3条の平行沈線文をめぐらせた後、その上に籠状施文具で上下二列に斜行文を施している。口縁部内面に平行沈線文5条をめぐらせる		○微砂粒を多く含む。3~4mmの砂粒もごくわずかに含む。焼成やや良好、堅い。灰~暗褐色。黒斑あり
-6		"		○口縁部内面および頸部外面に断面三角形の貼り付け突帯を2条以上めぐらせる	○口頸部内外面とも刷毛目後ナデ	○2mm以下の砂粒を多く含む。焼成やや不良、もろい。暗灰褐色
-7	II C区 SD10	"	口径(21.1)	○口縁端部に四線文が2条入る。口縁部内面に平行沈線文が5条めぐる	○口縁部外面ナデ。あと部分は磨滅してて調整不明	○0.5~1mmの小微砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄橙
-8	III区 SD10	"	口径(20.2)		○口縁部外面ていねいなナデ。あと部分は磨滅が著しくて調整不明	○1mm以下の小微砂粒を多く含む。焼成やや不良、少しもろい。やや褐色を帯びた灰白色
-9		"	口径(18.7)	○口縁端部に櫛描き平行沈線文が4条めぐる。口縁下方に断面三角形の突帯を貼り付ける	○内外面ともていねいなナデ	○1mm以下の小微砂粒を多く含む。焼成良好、堅い。灰褐色
-10		"	口径(24.5)	○口縁端部に櫛を基調とした四線文を4条めぐらせる。口縁下方に断面三角形の突帯を2条貼り付ける	○口縁端部ナデ。口縁部外面横方向ナデ、内面ていねいなナデ	○微砂粒を多く含むが2~3mmの砂粒も含む。焼成良好、堅い。白っぽい灰褐色
-11	弥生土器			○頸部に断面三角形の貼り付け突帯を4条めぐらせる	○内外面ともナデ	○1mm以下の小微砂粒を多く含む

插図番号	出土地點	器種	法量(cm)	文様の特長	手法の特長	備考
—12	III区 S D10	弥生壺形土器	口径(16.8)	○口頸部に断面三角形の貼り付け突帯が4条以上めぐらせる	○外面ナデ、内面磨滅が著しくて調整不明	○2mm以下の砂粒を含む ○焼成やや不良、もろい ○やや黄白色を帯びた灰褐色
—13		"	口径(18.2)	○口頸部に断面三角形の突帯を3条貼り付ける	○磨滅が著しく調整不明	○2~3mmの砂粒・微砂粒を含む。焼成やや不良少しもろい。白っぽい明褐色
—14		"	口径(30.2)	○口縁端部に円形浮文を貼り付ける	○磨滅が著しく調整不明	○0.5~1mmくらいの小微砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
—15		"	口径(23.4)		○口頸部外面ナデ。他の部分は磨滅が著しく調整不明	○1mmくらいの小砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
16—16 17	S D10	弥生壺形土器	口径(29.6) "(13.3)		○磨滅が著しく調整不明	○3mm以下の小微砂粒を多く含む。焼成やや良好少しもろい。灰褐色
—18		"	口径(28.0)	○磨滅が著しいためよくわからないが、口縁端部に凹線文が3条めぐり、その上に粘土紐を縦方向に3条貼り付ける	"	○0.5~1.5mmくらいの小微砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
—19		"	口径(25.1)		○口縁端部ていねいなナデ ○口縁部外面ナデ。頸部外面上部刷毛目、内面ていねいなナデ	○微砂粒を多く含む、4~5mmの砂粒も含む。焼成やや良好、少し堅い。灰褐色
—20 —21		"	口径(17.4) "(19.7)		○口縁部外面横方向ナデ。頸部外面刷毛目、内面ナデ	○1mm以下の小微砂粒を多く含み、3mm以下の砂粒も含む。焼成やや不良、もろい。灰褐色
—22		"	口径(13.5)		○口縁部外面ナデ。頸部外面刷毛目後横方向ナデ。内面ナデ?	○1mmくらいの小砂粒をごく少量と微砂粒を多く含む。焼成やや不良、少しもろい。明るい灰褐色
17—1		"	口径(23.8)	○頸部に指頭圧痕を有する貼り付け突帯を1条めぐらせる	○口縁部内外面ともていねいなナデ。頸部外面上部刷毛目後ていねいなナデ、下部刷毛目内面範磨き?。胴部外面刷毛目後横方向のナデ、内面範磨き?	○1mm以下の小微砂粒を含む。焼成やや良好、堅い。灰褐色
—2		"		○頸部に箇または爪で刺突を施した突帯を貼り付けている	○外面刷毛目部分的にナデ ○内面ナデ	○1mm以下の小微砂粒を多く含む。焼成やや不良、もろい。白味を帯びた灰褐色
—3		"	口径(14.5)		○内外面ともナデ	○2mm以下の小微砂粒を含む。焼成やや不良、もろい。灰褐色
—4	弥生甕形土器		口径(22.4)	○口縁端部に半截竹管状あるいは箇状施文具で刻目を施す。胴部に櫛描き平行沈線文を5条めぐらせる	○磨滅が著しく調整不明	○2~4mmの砂粒を多く含む。焼成不良、もろい。灰褐色
—5		"	口径(14.7)	○口縁端部に箇状施文具で刻目を施す。胴部上半に箇状施文具で平行沈線文を4~5条めぐらせる	○口縁部外面ナデ、内面横方向のナデ。胴部外面刷毛目、内面ナデ	○微砂粒を多く含む、3~5mmの砂粒も少し含む。焼成不良、もろい。灰褐色
—6		"	口径(21.3)	○口縁端部に箇状施文具による刻目をめぐらす。胴部上半に半截竹管状または箇状施文具による平行沈線文を4条以上めぐらせる	○口縁端部口縁部外面ナデ ○胴部外面刷毛目。内面刷毛目、指頭圧痕が部分的に残る	○2mm以下の砂粒を含む ○焼成やや良好、少し堅い。外面暗茶褐色~灰褐色、内面やや褐色を帯びた灰色
—7		"	口径(31.0)	○口縁端部に刻目をめぐらせる。胴部上半に櫛描き平行沈線文を7条めぐらせる	○口縁部内外面とも横方向のナデ。胴部外面(刷毛目の中?)ナデ、内面刷毛目	○4mm以下の砂粒を多く含む。焼成やや良好、少し堅い。灰褐色
—8		"		○口縁端部に刻目がめぐる。胴部上半に櫛描き平行沈線文が13条以上めぐる	○内外面ともナデ	○0.5~3mmくらいの砂粒を多く含む。焼成良好 ○にぶい黄澄

布田遺跡

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)	文様の特長	手法の特長	備考
—9	S D10 弥生甕形 土器	口径(20.0)		。胴部上半に櫛描き平行沈線文を4条めぐらせる	。外面ナデ。内面ていねいなナデ	。3mm以下の小砂粒を多く含む。焼成やや良好、少しもろい。灰色を帯びたオレンジ色
—10		〃	口径(25.0)	。口縁端部に篦状施文具で刻目をめぐらせる。胴部上半に6本単位の櫛描き平行沈線文を4回めぐらせ、その下に篦状施文具で刺突列点文を施してある	。口縁部内外面とも横方向のナデ。胴部外面刷毛目、内面ていねいなナデ	。3mm以下の砂粒を多く含む。焼成良好、堅い。外面暗灰～黒褐色、内面やや褐色を帯びた灰白色
—11		〃	口径(15.5)	。胴部上半に6本単位の櫛描き平行沈線文が16条以上めぐる	。口縁部外面ナデ、内面磨滅が著しくて調整不明。胴部内面ていねいなナデ	。1mm以下の小微砂粒を多く含む。焼成やや良好、少しもろい。暗茶褐色
—12		〃	口径(30.2)	。胴部上半に篦描き沈線文が1条めぐる	。磨滅が著しく調整不明	。2.5mmくらいの砂粒を多く含む。焼成良好。にぶい橙
—13		〃	口径(25.6)	。胴部上半篦状施文具で沈線文を1条施す	。内外面ともナデ	。2～3mmの小砂粒を含む。焼成やや良好、少し堅い。明るい灰褐色
17—14		〃	口径(17.2)		。口縁部外面下ていねいなナデ。あと部分は磨滅が著しく調整不明	。微砂粒を多く含み、3mmくらいの砂粒が少々含む。焼成やや良好、少しもろい。やや褐色を帯びた灰色
—15		〃	口径(17.4)		。内外面ともナデ	。3mm以下の砂粒を多く含む。焼成やや不良、少しもろい。灰褐色
—16		〃	口径(12.6)		。口縁部内外面ともナデ。胴部外面刷毛目、内面刷毛目	。3mm以下の砂粒、微砂粒を含む。焼成やや良好、少し堅い。外面灰褐色
—17		〃			磨滅著しく 調整不明	。3～4mmくらいの砂粒、微砂粒を多く含む。焼成やや不良、少しもろい。灰色の強い肌色。黒斑あり
—18		〃			。口縁部外面ナデ、内面横方向のナデ。胴部外面刷毛目後ナデ、内面ナデ	。1mm以下の小砂粒を多く含むが、4～5mmの砂粒も含む。焼成不良、もろい。黒色
—19		〃	口径(22.0)		。口縁部内外面とも横方向ナデ。胴部、外面刷毛目、内面刷毛目後?ナデ	。微砂粒を多く含み、23mmくらいの砂粒を含む。焼成やや良好。黒褐色
—20		〃	口径(18.2)		。口縁部、外面横方向のナデ、内面横方向ナデ?。胴部、内外面とも刷毛目	。1mm以下の小微砂粒を多く含む。焼成不良、非常にもろい。淡灰赤褐色
—21		〃	口径(19.2)		。口縁部外面横方向のナデ、内面横方向の刷毛目後横方向のナデ。胴部、外面縦方向の刷毛目後ナデ、内面刷毛目後ナデ	。微砂粒を多く含む。焼成やや良好、もろい。うすい灰褐色
18—1		〃	口径(17.7)		。口縁部内外面とも横方向ナデ?。胴部外面刷毛目?内面刷毛目	。微砂粒を多く含む。焼成不良、もろい。黒色～黒褐色
—2		〃	口径(21.5)		。磨滅が著しく調整不明	。微砂粒を多く含む。焼成やや不良、もろい。白っぽい灰褐色
—3		〃	口径(14.4)		。口縁部内外面とも横方向のナデ。胴部外面刷毛目、内面刷毛目後ナデ?指頭圧痕が残る部分あり	。微砂粒を多く含む。焼成やや良好、少しもろい。灰褐色
—4		〃	口径(15.2)		。口縁部内外面ともナデ? 。胴部外面ナデ?内面ナデ	。2mm以下の小微砂粒を多く含む。焼成やや不良もろい。白っぽい灰褐色
—5		〃	口径(15.9)		。口縁端部ナデ。口縁部、内外面ともナデ。胴部、外面刷毛目?内面刷毛目	〃

布田遺跡

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)	文様の特長	手法の特長	備考
—6	S D10	弥生甕形土器	口径(16.6)		○口縁端部ナデ。口縁部外面横方向のていねいなナデ ○あと部分は磨滅が著しく調整不明	○微砂粒を多く含み1mmくらいの小砂粒も含む。 焼成やや良好、少しもろい。やや黄色を帯びた灰褐色
—7		〃	口径(16.8)		○磨滅が著しく調整不明	○1mm以下の小微砂粒を多く含む。焼成不良、もろい。やや赤味を帯びた灰褐色
—8		〃	口径(17.5)		○口縁部外面ナデ、内面ナデ?。胴部外面刷毛目、内面ナデ?	○微砂粒を含む。焼成やや良好、堅い。灰～暗灰褐色
—9		〃	口径(19.8)		○磨滅が著しく調整不明	○1mm以下の小微砂粒を多く含む。焼成不良少しもろい。白っぽい灰褐色
—10		〃	口径(20.3)		○口縁部外面ナデ、内面刷毛目後ナデ。胴部外面刷毛目、内面ナデ	○1mm以下の小微砂粒を多く含む。焼成やや良好、堅い。暗灰～黒褐色
—11		〃	口径(16.2)		○口縁部内外面とも横方向ナデ。胴部外面横方向ナデ 内面刷毛目	○微砂粒を多く含む。焼成良好、堅い。やや褐色を帯びた灰色
—12		〃	口径(20.1)		○外面ていねいなナデ、内面横方向ナデ	○1mm以下の小微砂粒を多く含む。焼成やや不良少しもろい。外面黒褐色 内面灰褐色
—13		〃	口径(16.0)		○口縁端部ナデ。口縁部外面刷毛目後ナデ。あと部分は磨滅が著しく調整不明	○微砂粒を多く含む3mm以下の砂粒も含む。焼成やや良好少し堅い。灰褐色
18—14		〃	口径(17.2)		○口縁部外面横方向ナデ。胴部外面ていねいなナデ。内面は磨滅が著しく調整不明	○微砂粒を多く含む1mmくらいの小砂粒を含む。焼成やや良好、少し堅い。 ○白っぽい白褐色
—15		〃	口径(17.4)		○口縁部外面ナデ、内面横方向のていねいなナデ	○微砂粒を多く含む。焼成やや良好、少し堅い。 やや赤味を帯びた灰褐色
—16		〃	口径(30.2)	○口縁部下に箇状施文具で突帶を貼り付け刺突を施している	○内外面ともナデ	○1mm以下の小微砂粒を多く含む。焼成やや良好、少し堅い。白っぽい灰褐色
—17		〃	口径(18.5)		○口縁端部ナデ。外面横方向のナデ。口縁部内面横方向の刷毛目後ていねいなナデ。胴部内面ナデ	○微砂粒を多く含む。焼成良好、堅い。肌色に近い灰色
—18		〃	口径(19.8)	○頸部に貼り付け突帶をめぐらせ指頭圧痕を施している	○内外面とも磨滅が著しく調整不明	○微砂粒を多く含む。焼成やや良好、少しもろい。 ○白っぽい灰褐色。黒斑あり
—19		〃	口径(16.5)	○口縁端部に刷毛による刻目をめぐらせる。頸部に突帶を貼り付け刺突を施している	○口縁部内外面とも横方向のていねいなナデ。胴部外面ていねいなナデ、内面横方向のていねいなナデ	○微砂粒を多く含む。焼成良好、堅緻。明るい灰褐色
—20		〃	口径(21.6)	○口縁端部に凹線文が2条か3条めぐる。頸部に突帶を貼り付けて指頭圧痕を施している	○胴部内面ナデ。あと部分は磨滅が著しく調整不明	○0.5～1.5mmくらいの小微砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄橙。黒斑あり
—21 —22		〃	口径(15.3) 〃(15.8)	○口縁端部に箇状施文具で斜行文をめぐらせ、その後円形浮文を3ヶ所に施している。頸部に突帶を貼り付け、刺突を施し更に刻目を入れている	○口縁部内外面とも横方向のナデ。胴部磨滅が著しく内外面とも調整不明	○微砂粒を多く含む。焼成やや良好。灰褐色
—23		〃	口径(16.4)	○口縁端部に2条の凹線がめぐる。頸部に突帶を貼り付け爪または箇状施文具で2度にわたって刺突を施しているその上を部分的にナデつけていている	○口縁端部ナデ。口縁部外面横方向ナデ、内面ナデ。胴部外面刷毛目、内面刷毛目後ていねいなナデ	○微砂粒を多く含む。焼成やや良好、少しもろい。 ○灰褐色

布田遺跡

插図番号	出土地点	器種	法量(cm)	文様の特長	手法の特長	備考
—24	S D10	弥生甕形土器	口径(21.0)	。口縁端部に3条の平行沈線文をめぐらせる。頸部に突帶を貼り付けた後刺突を加え、その下部にも刻目を施している	。口縁部外面ていねいなナデ、内面横方向ナデ。あと部分は磨滅が著しく調整不明	。微砂粒を多く含む。焼成やや良好、少しもろい。灰褐色
—25		〃	口径(22.0)		。外面横方ナデ、内面ナデ	。1mm以下の小微砂粒を多く含むが3mmくらいの砂粒も含む。赤味の強い灰褐色
—26		弥生高坏形土器	口径(25.0)	。口縁端部に半截竹管状の施文具で刻目をめぐらせる	。外面磨滅が著しく、調整不明。内面ていねいなナデ	。坏部。微砂粒を多く含む。焼成やや良好、少し堅い。灰褐色
—27		〃	口径(28.6)	。口縁端部に箆状施文具で沈線文を1条めぐらせ、後同様の施文具で刻目を施す	。外面ナデ、内面ていねいなナデ、あるいは箆磨き?	。坏部。微砂粒を多く含む1~2mmくらいの砂粒もわずかに含む。焼成やや不良、少しもろい。黒色~黒褐色
—28		〃	口径(23.2)	。口縁端部に刻目をめぐらせる	。内外面ともていねいなナデ	。高坏。微砂粒を多く含む。焼成やや良好で堅い。やや白っぽい灰褐色
—29		〃	口径(23.4)		。口縁部外面上部ナデ。あと部分は磨滅が著しく調整不明	。坏部。0.5~1mmくらいの小微砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
—30		〃	口径(22.4)		。口縁端部ナデ。口縁部内面横方向ナデ。坏下部内面ナデ。あと部分は磨滅が著しく調整不明	。高坏。0.5~1mmくらいの砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
—31		〃	口径(20.5)		。外面刷毛目後でいねいなナデ、内面ていねいなナデ	。坏部。微砂粒を多く含む。焼成やや良好、少しもろい。白っぽい灰褐色
—32		〃	口径(23.0)	。口縁部に凹線文を5条めぐらせる	。坏上部外面ナデ、内面横方向のいねいなナデ。坏下部外面箆磨き、内面磨滅が著しく調整不明	。坏部。微砂粒を多く含む。焼成やや良好、少し堅い。白っぽい灰褐色
19—1		〃			。円板充填法。坏底部外面ナデ、内面ていねいなナデ。脚部外面刷毛目のちていねいなナデ、内面ナデ、しほり痕残る	。脚部。1mm以下の小微砂粒を多く含む。焼成やや不良、もろい。明るい灰褐色。黒斑あり
—2		〃			。外面磨滅が著しく調整不明。内面ナデ、絞り痕が残る	。脚部。2mm以下の砂粒を多く含む。焼成やや不良、もろい。肌色を帯びた灰褐色
—3		〃			。円板充填法。坏底部外面ナデ、内面中央ていねいなナデ、内面側面箆磨き。脚柱部外面縦方向箆磨き、内面ナデ、絞り痕が残る	。脚部。微砂粒を多く含む。焼成やや良好、少し堅い。灰褐色内面は黒色
—4		〃		。脚柱部上部に断面三角形の貼り付け突帶を3条めぐらせる	。坏底部内面箆磨き?。脚部外面箆磨き、内面上部絞り痕が残る下部横方向ナデ	。脚部。小砂粒を多く含む。焼成やや良好、堅い。淡黄灰色
—5	弥生蓋形土器		口径(4.4)		。天井部内面ナデ。あと部分は磨滅が著しく調整不明	。天井部に乳頭状のつまみを2ヶ有する。1~2mmくらいの砂粒を含む。焼成良好。うすい黄澄。黒斑あり
—6		〃	つまみ径(2.2)		。天井部平坦面ナデ。天井部外面箆磨き?内面ナデ?	。微砂粒を多く含む1mmくらいの小砂粒を含む。焼成不良、もろい。やや赤味を帯びた灰褐色
—7	弥生土器底部		底径(5.8)		。胴部外面刷毛目後ナデ。あと部分はナデ	。漆が塗布されている。0.5~1mmくらいの小微砂粒を多く含む。胎土うすい黄澄、漆くらいい赤
—8	弥生高坏形土器		底径(9.6)	。裾端部が凹線文状にくぼむ	。磨滅が著しく調整不明	。脚部。0.5~1mmくらいの小微砂粒を多く含む。焼成良好。灰色

插図番号	出土地点	器種	法量(cm)	文様の特長	手法の特長	備考
—9	SD10 弥生土器 底部	底径 (4.2)			・内外面ともナデ	・漆が塗布されている。 0.5mmくらいの微砂粒を 多く含む。焼成良好。胎 土うすい黄澄、漆くらい 澄
—10		〃	底径 (4.7)		・外面ていねいなナデ、指 頭圧痕が残る、内面ナデ	・漆が塗布されている。 0.5~1mmくらいの小微 砂粒を含む。焼成良好。 胎土うすい黄澄、漆くら い澄。黒斑あり
—11	弥生ミニ チュア壺 形土器				・外面刷毛目後ナデ。内面 ナデ	・0.5~1mmくらいの小微 砂粒を多く含む。焼成 やや良好、少しもろい。 うすい黄澄
—12		〃	口径 (2.2) 器高 (4.4)		・外面ナデ、内面底部中央 を中心にして刷毛状のもの を回転して成形してある	・0.5以下の小微砂粒を 多く含む。焼成良好、堅 い。黒色
—13	弥生壺形 土器			・4本単位の櫛描き平行沈 線文を7~8条ずつ2回め ぐらせ、その間に同一の櫛 により波状文を施す。また 平行沈線文の下に櫛描き斜 格子文を施している	・外面ナデ。内面縦方向刷 毛目	・破片。0.5mmくらいの 微砂粒を多く含む。焼成 良好。灰味澄
—14	弥生甕形 土器			・3本単位の櫛描き斜格子 文が施されている	・外面縦方向の刷毛目、内 面磨滅していく調整不明	・破片。0.5~1mmくらいの 砂粒を多く含む。焼 成やや不良、もろい。う すい黄澄
—15		〃		・口縁端部に半截竹管状施 文具による凹形刺突文をめ ぐらせる。胴部上半に4条 の平行沈線文をめぐらせ、 その間の凸部に口縁端部と 同様の凹形刺突文を各々施 している	・内外面ともナデ	・破片。0.5~1.5mmくらいの 小微砂粒を含む。焼成 良好。にぶい黄澄
—16		〃		・櫛描き平行沈線文を13条 以上めぐらせ、その下に三 角形の刺突列点文を施して いる	・内外面ともナデ	・破片。0.5~2mmくらいの 小微砂粒を含む。焼 成良好。うすい黄澄
30—1	SD12 上層	土師器 壺形土器	口径(16.4)		・外面磨減が著しく調整不 明、内面刷毛目後籠削り	・0.5~3mmくらいの砂 粒を多く含む。焼成良好 。うすい澄
—2		土師器 甕形土器	口径(14.4)		・外面横ナデ、内面刷毛目 後横ナデ	・0.5~1mmくらいの小微 砂粒を多く含む。焼成 良好。暗い灰
—3		〃	口径(18.4)		・内外面とも磨減が著しく 調整不明	・0.5~2mmくらいの砂 粒を多く含む。焼成良好 。うすい黄澄
—4		〃	口径(20.0)		・口縁部内外面とも横ナデ	・0.5~1mmくらいの小微 砂粒を多く含む。焼成 良好。うすい黄澄
—5		〃	口径(18.8)		・口縁部外面横ナデ、内面 刷毛目後横ナデ。胴部、外 面刷毛目後横ナデ、内面籠 削り	・0.5~2mmくらいの小砂 粒を多く含む。焼成良好 。うすい黄澄
—6		〃	(17.0)			
—7		〃	(19.0)			
—8		〃	口径(14.0)		・口縁部内外面とも横ナデ ・頸部内面籠削り	〃
—9		〃	口径(22.4)		・外面横ナデ、内面籠削り	・1~2mmくらいの砂粒 を多く含む。焼成良好。 うすい黄籠
—10		〃	口径(18.6)		・口縁部内面横ナデ。あと の部分は磨減が著しく調整 不明	・0.5~2mmくらいの砂 粒を多く含む。焼成やや 良好。うすい黄澄
—11		〃	口径(19.2)		・口縁部内外面ともナデ。 胴部外面磨減が著しく調整 不明、内面籠削り後ナデ	〃
—12		〃	口径(21.4)		・口縁部内外面とも横ナデ ・胴部内面籠削	・0.5~2mmくらいの砂 粒を多く含む。焼成良好 。うすい黄澄

布田遺跡

插図番号	出土地点	器種	法量(cm)	文様の特長	手法の特長	備考
—13	SD12 上層	土師器 壺形土器	口径(22.0)		○口縁部内外面とも横ナデ ○胴部磨滅が著しく調整不明	○0.5~2mmくらいの砂粒を多く含む。焼成やや良好。うすい黄澄
—14		〃	口径(23.2)		○外面磨滅が著しく調整不明。口縁部内面横ナデ。胴部内面ナデ	○0.5~1.5mmくらいの小微砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
—15		〃	口径(19.8)		○口縁部内外面とも横ナデ ○胴部外面刷毛目後ナデ、内面横方向の箝削り	○1~2mmくらいの砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
—16		〃	口径(16.0)		○口縁部内面下部刷毛目後横ナデ、あとの部分は磨滅が著しく調整不明	○0.5~2mmくらいの砂粒を多く含む。焼成やや良好。うすい黄澄
—17		〃			○胴部外面刷毛目後ナデ、内面箝削り	○口縁部欠損。0.5~2mmくらいの砂粒を多く含む。焼成やや良好。うすい黄澄
—18		土師器 壺形土器 ?	口径(29.4)		○外面磨滅が著しく調整不明、内面上部横ナデ、下部縦方向の箝削り	○0.5~2mmくらいの砂粒を多く含む。焼成良好。うすい橙
—19		土師器 壺形土器	口径(10.0)		○坏下部外面刷毛目。底部外面ナデ。あとの部分は磨滅が著しく調整不明	○0.5mmくらいの小微砂粒を含む。焼成良好。うすい黄澄
—20		〃	口径(11.4)		○外面磨滅が著しく調整不明、内面横ナデ	○0.5~1mmくらいの小微砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
—21		〃	口径(13.4)		○外面磨滅が著しく調整不明。内面ナデ	○0.5~2mmくらいの砂粒を多く含む。焼成良好。うすい橙
—22		〃	口径(14.8)		○外面上部横ナデ、下部磨滅が著しく調整不明、内面横ナデ	○0.5~2mmくらいの砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
—23		〃	口径(15.6)		○外面指頭圧痕が残るが磨滅が著しく調整不明、内面も調整不明	○0.5~1.5mmくらいの小微砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
—24		土師器 高壺形土器	口径(16.6) 底径(10.0) 器高(11.7)		○脚部に半球状の粘土塊を埋め込み坏底部中央が形成されたと思われる。坏上部外面横ナデ、内面刷毛目後横ナデ。坏底部外面ナデ、指頭圧痕が残る、内面ていねいなナデ。脚柱部外面箝磨き、内面横方向の箝削り。裾部外面ていねいなナデ、内面ナデ、絞り痕が残る	○0.5~2mmくらいの砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄。完形
—25		〃	口径(16.4)		○坏上部外面横ナデ、内面刷毛目後横ナデ、指頭圧痕が残る。坏底部外面ナデ、指頭圧痕が残る内部ていねいなナデ	○坏部。0.5~2mmくらいの砂粒を多く含む。焼成良好。うすい橙
—26		〃	口径(15.2)		○内外面とも磨滅が著しく調整不明	○坏部。0.5~2mmくらいの砂粒を多く含む。焼成良好。うすい橙
—27		〃	口径(18.0)		○坏上部外面横ナデ、指頭圧痕が残る内面横ナデ。坏底部外面ナデ、内面ていねいなナデ	○坏部。0.5~2mmくらいの砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
—28		〃	(16.0)			
—29		〃	口径(19.0)		○内外面とも横ナデ	〃
—30		〃	口径(17.4)		○外面横ナデ、内面刷毛目後横ナデ	○坏部。0.5~1mmくらいの小微砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
—31		〃	口径(17.6)		○坏上部外面磨滅が著しく調整不明、内面刷毛目後横ナデ。坏底部内外面とも磨滅が著しく調整不明	○坏部。0.5~1.5mmくらいの小微砂粒を多く含む。うすい橙
—32		〃			○底部内外面ともナデ?。磨滅が著しく調整不明	○坏部。0.5~3mmくらいの砂粒を多く含む。うすい黄澄

布田遺跡

插図番号	出土地点	器種	法量(cm)	文様の特長	手法の特長	備考
-33	S D12 上層	土師器高 环形土器	口径(15.2)		・外面横ナデ、内面磨滅が著しく調整不明	・环部。0.5~2mmくらいの砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
31-1		〃	口径(18.0)		・内外面とも横ナデ	〃
-2		〃	口径(19.0)		・磨滅が著しく調整がよくわからないが、外面横ナデ、内面刷毛目後横ナデと思われる	・环部。0.5~3mmくらいの砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
-3 -4		〃	口径(14.8) 〃(18.0)		・环上部外面横ナデ、内面刷毛目後横ナデ。环底部外面ナデ	・环部。0.5~2mmくらいの砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
-5		〃	口径(17.8)		・内外面とも横ナデ	・环部。0.5~2mmくらいの砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
-6		〃	口径(13.8)		・外面横ナデ、内面磨滅が著しく調整不明	・环部。0.5~2mmくらいの砂粒を多く含む。焼成良好。うすい
-7		〃	口径(15.6)		・外面磨滅が著しく調整不明、内面刷毛目後横ナデ	・环部。0.5~2mmくらいの砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
-8		〃			・环上部外面横ナデ、内面刷毛目後横ナデ。环底部外面ナデ、内面刷毛目後ていねいなナデ	〃
-9		〃			・脚部に半球状の粘土塊を埋め込み、环底部中央が形成されている。外面ナデ、内面磨滅が著しく調整不明	・环底部。0.5~2mmくらいの砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
-10		〃	底径(10.6)		・脚柱部外面刷毛目後箠磨き、内面上部横方向の箠削り、下部箠削り後横ナデ。裾部外面ていねいなナデ、内面ナデ、絞り痕が残る	・脚部。0.5~5mmくらいの砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
-11		〃	底径(10.2)		・环底部外面ナデ、内面ていねいなナデ。脚柱部外面箠磨き、内面横方向の箠削り。裾部外面ていねいなナデ、内面磨滅しているがナデと思われる絞り痕が残る	・脚部。0.5~3mmくらいの砂粒を多く含む。焼成良好。うすい橙
-12		〃	底径(10.0)	・透孔を1ヶ有する	・脚柱部外面箠磨き、内面横方向の箠削り。裾部外面ていねいなナデ、内面ナデ、絞り痕が残る	〃
-13		〃	底径(10.4)		・脚柱部外面箠磨き、内面横方向の箠削り。裾部外面ていねいなナデ、内面上部横ナデ、下部ナデ	・脚部。0.5~2mmくらいの砂粒を多く含む。焼成良好。あかるい黄澄
-14		〃	底径(8.6)		・环底部内面ていねいなナデ。脚柱部外面箠磨き内面箠削り。裾部内面絞り痕が残る	・脚部。0.5mm以下の微砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
-15		〃	底径(11.0)		・脚部に半球状の粘土塊を埋め込み、环底部中央が形成されたと思われる。环底部外面ナデ、内面ていねいなナデ。脚柱部外面箠磨き内面横方向の箠削り。裾部外面ていねいなナデ、内面は磨滅しているが絞り痕が残る	・环上部欠損。0.5~2mmくらいの砂粒を多く含む。焼成良好。あかるい黄
-16		〃	底径(10.0)		・脚部に半球状の粘土塊を埋め込み环底部中央が形成されたと思われる。脚柱部外面刷毛目後箠磨き、内面横方向の箠削り。裾部外面ていねいなナデ、内面は磨滅しているが絞り痕が残る	・脚部。0.5~2mmくらいの砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄

布田遺跡

捕図番号	出土地点	器種	法量(cm)	文様の特長	手法の特長	備考
—17	SD12 上層	土師器高 環形土器	底径(9.4)		・环底部外面ナデ、内面で いねいなナデ。脚柱部外面 箠磨き内面上部横方向の箠 削り、下部箠削り後ナデ。 裾部外面でいねいなナデ、 内面ナデ、絞り痕が残る	・环上部欠損。0.5~2 mmくらいの砂粒を多く有 する。焼成やや良好。う すい橙
—18		〃	底径(9.0)		・脚柱部外面箠磨き、内面 横方向の箠削り。裾部外面 でいねいなナデ、内面は磨 減が著しく調整不明	・脚部。0.5~4 mmくら いの砂粒を多く含む。焼 成良好。うすい黄橙
—19		〃			・脚部に半球状の粘土塊を 埋め込み、环底部中央が形 成されたと思われる。脚柱 部外面箠磨き、内面横方向 箠削り	・脚部。0.5~1.5 mmくら いの小微砂粒を多く含む ・焼成良好。うすい黄橙
—20	須恵器 甕	口径(43.6)	・口縁端部近くに突線が1 条めぐりその下部に櫛描波 状文が2列施されている		・内外面とも回転ナデ	・0.1~2 mmくらいの砂 粒を多く含む。焼成良 好、堅緻。内外面は灰色 断面は灰黒赤紫。断面に 漆が付着している
—21		〃			・胴部外面平行叩き、内面 同心凹叩き後、それをナデ によりあらく消している。 底部外面平行叩き後カキ目 調整、内面同心凹叩き	・底部。0.2~1 mmくら いの小微砂粒を多く含む ・焼成良好、堅緻。外 面灰色内面灰青、断面灰 黒赤紫
32-1	SD12 下層	弥生壺形 土器	口径(24.0)		・口縁部外面横方向ナデ。 あと部分は磨減が著しく 調整不明	・0.5~1.5 mmくらいの小 微砂粒を多く含む。焼成 良好。うすい黄橙
—2		〃	口径(21.8)	・口縁端部に刷毛による刻 目をめぐらせる	・内外面ともナデ	〃
—3		〃	口径(30.4)	・磨減が著しいが、口縁端 部に斜行文がめぐる	・口縁部外面横方向ナデ。 あと部分は磨減が著しく 調整不明	〃
—4	SD07	〃	口径(21.0)	・頸部に1条以上の断面三 角形の貼り付け突帯がめぐ る	・磨減が著しく調整不明	〃
—5		〃	口径(16.6)	・頸部に断面三角形の貼り 付け突帯が4条以上めぐっ ている	〃	〃
—6	SD12 下層	〃		・頸部に断面三角形の貼り 付け突帯が3条めぐる	・外面横ナデ、内面磨減が 著しく調整不明	〃
—7		〃		・頸部に断面三角形の貼り 付け突帯が2条以上めぐる	・頸部外面横方向ナデ。胴 部外面刷毛目後ナデ。内面 は磨減が著しく調整不明	〃
—8	SD07	〃	口径(21.6)	・口縁部内面に5本単位の 櫛描き刺突列点文をめぐら せる	・口縁部外面ナデ。あと 部分は磨減が著しく調整不 明	・0.5~3 mmくらいの砂 粒を多く含む。焼成良好 。うすい黄橙
—9	SD12 下層	〃	口径(22.2)	・口縁端部と口縁部内面に 4本単位の櫛描き波状文を めぐらせる	・口縁端部、口縁部内面上 部横方向のナデ。あと部分 は磨減が著しく調整不明	・0.5~1 mmくらいの小 微砂粒を多く含む。焼成 良好。うすい黄橙
—10		〃		・頸部に突帯を貼り付け押 圧を施す	・磨減が著しく調整不明	〃
—11		〃	口径(22.4)		〃	・0.5~1.5 mmくらいの小 微砂粒を含む。焼成良好 。灰青
32-12		〃	口径(29.0)	・磨減が著しいためよくわ からないが口縁端部に3条 の四線文がある。口縁部内 面に4条の平行沈線文がめ ぐる	〃	・0.5~1 mmくらいの小 微砂粒を多く含む。焼成 良好。うすい黄橙
—13	弥生甕形 土器	口径(14.6)		・口縁端部に櫛状施文具で 刻目をめぐらせる	・口縁部外面、横方向のナ デ。胴部外面刷毛目。あと の部分は磨減が著しく調整 不明	・0.5~1 mmくらいの小 微砂粒を多く含む。焼成 良好。外面灰色、内面う すい黄橙。内面に粗痕が 残る
—14		〃	口径(16.4)	・胴部上半に3条以上の櫛 状施文具による平行沈線文 をめぐらせる	・口縁部外面ナデ。胴部外 面刷毛目。内面は磨減が著 しく調整不明	・1~2 mmくらいの砂粒 を多く含む。焼成良好。 にぶい黄橙

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)	文様の特長	手法の特長	備考
—15	SD12 下層	弥生甕形土器	口径(20.2)		○口縁部外面横方向のナデ ○あと部分は磨滅が著しく調整不明	○0.5~1mmくらいの小微砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
—16		〃	口径(18.4)		○口縁部外面横方向の刷毛目内面ナデ。脣部外面ナデ内面上部ナデ下部刷毛目	〃
—17		〃	口径(24.2)		○脣部内面ナデ。あと部分は磨滅が著しく調整不明	○1~2mmくらいの砂粒をやや含む。焼成良好。暗い灰
—18		〃	口径(22.6)		○外面横方向のナデ、内面磨滅が著しく調整不明	○0.5~2mmくらいの小砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄。黒斑あり
—19	SD07	〃			○磨滅が著しく調整不明	○0.5~1mmくらいの小微砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
—20	SD12 下層	〃	口径(25.2)		○口縁端部磨滅が著しく調整不明。口縁部外面横方向のナデ、内面ナデ	〃
—21		〃	口径(16.2)		○口縁部内面横方向のナデ ○あと部分は磨滅が著しく調整不明	〃
—22		〃	口径(18.0)		○口縁端部~口縁部外面横方向のナデ。口縁部内面ナデ?	〃
—23	弥生甕形土器	口径(14.8)	○磨滅が著しいためよくわからぬが口縁端部に凹線が2条めぐる	○磨滅が著しく調整不明	○0.5~2mmくらいの小砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄	
—24	弥生甕形土器	口径(17.0)	○頸部に突帯を貼り付け指頭圧痕を施している	○口縁端部磨滅が著しく調整不明。口縁部外面横方向のナデ内面ナデ?。脣部外側ともナデ	〃	
—25		〃	口径(20.0)	○口縁端部に刷毛による刻目をめぐらせる。頸部に突帯を貼り付け、籠状施文具で刺突を施している	○外側とも横方向のナデ	○0.5~1mmくらいの小微砂粒を含む。焼成良好。うすい黄澄
—26		〃	〃(16.6)			
—27		〃	口径(20.0)	○口縁端部に刻目をめぐらせる	○口縁部外面横方向ナデ。あと部分は磨滅が著しく調整不明	○0.5~1mmくらいの小微砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
33—1		〃	口径(20.8)	○磨滅が著しいためよくわからぬが、口縁端部に2条の凹線文がめぐる。頸部に突帯を貼り付け指頭圧痕をめぐらせる	○口縁部内面上部横方向ナデ。あと部分は磨滅が著しく調整不明	○0.5~1mmくらいの小微砂粒を多く含む。焼成良好か?。うすい黄澄
—2		〃	口径(24.8)	○頸部に突帯をめぐらせ指頭圧痕を施す	○磨滅が著しく調整不明	○0.5~2mmくらいの小砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
—3		〃	口径(20.2)	○口縁端部に凹線文が3~4条めぐる	○口縁端部ナデ。口縁部、外側横方向ナデ、内面ナデ	○0.5~1mmくらいの小微砂粒を含む。焼成良好。うすい黄澄
—4		〃	〃(21.4)			
—5		〃	口径(29.0)	○磨滅が著しいためよくわからぬが、口縁端部に凹線文が2条入る	○磨滅が著しく調整不明	○0.5~2mmくらいの小微砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
—6	弥生高环形土器	口径(17.0)	○口縁端部内傾面に1条。口縁部に3条の凹線文がめぐる	○口縁部外面ナデ。环下部刷毛目。内面ナデ	○环部。0.5~1mmくらいの小微砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄。黒斑あり	
—7		〃		○脚柱部に籠状施文具による平行沈線文が14条めぐられ、その間の凸部に3回にわたり籠状施文具による刺突文を施す。下部では5ヶ所穿孔している	○外面でいねいなナデ、内面に絞り痕が残る	○朱が塗布されている。脚部。0.5~1mmくらいの小微砂粒を多く含む。焼成良好、堅い。灰味澄。脚部
33—8	弥生鉢形土器	底径(5.2)			○口縁部外面ナデ。脣部外側刷毛目。口縁部~脣部の内面ナデ、指頭圧痕が残る。底部外側刷毛目後ナデ、内面ナデ	○0.5~1.5mmくらいの小微砂粒を多く含む。焼成良好。外側灰味澄、内面暗い灰

布田遺跡

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)	文様の特長	手法の特長	備考
—9	S D12 下層	弥生土器 底部	底径(5.8)		・磨滅が著しく調整不明	・0.5~2mmくらいの小砂粒を多く含む。焼成良好。外面にぶい黄澄、内面うすい黄澄
—10		弥生甕形土器		・平行沈線文が3条めぐり その間に半截竹管状の施文具によって施された円形刺 突文が1列めぐる	・外面ナデ、内面磨滅が著しくて調整不明	・破片。0.5~1.5mmくらいの小微砂粒を多く含む ・焼成良好。うすい黄澄
—11		〃		・突帶を貼り付け押圧を施し、その下に3本単位の櫛描き斜格子文をめぐらせる	・外面横方向ナデ、内面磨滅が著しく調整不明	・破片。0.5~1.5mmくらいの小微砂粒を多く含む ・焼成良好?暗い灰
40—1	S I 04	〃	口径(17.6)	・頸部に籠状施文具による平行沈線文が9条めぐる	・口縁部外面刷毛目内面ナデ。頸部外面ナデ、内面刷毛目。胴部外面横方向の籠磨き、内面上部刷毛目後ナデ、下部籠磨き?	・0.5~2mmくらいの小砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
—2		〃	口径(28.0)	・口縁端部に籠状施文具による刻目がめぐる。胴部に籠描き平行沈線文が6条めぐる	・口縁部外面刷毛目後ナデ ・口縁部内面ナデ。胴部内外面ともナデ	・0.5~2mmくらいの小砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
—3		〃	口径(16.2)	・口縁部に籠状施文具による刻目がめぐる。胴部に籠状施文具による平行沈線が6条めぐる	・口縁部内外面ともナデ。胴部外面刷毛目、内面刷毛目後ナデ、指頭圧痕が残る	〃
—4		〃			・口縁部内外面ともナデ。胴部内外上面刷毛目後ナデ、内外下面部ナデ	〃
—5	弥生土器 底部		底径(10.2)		・胴部外面刷毛目後ナデ、内面ナデ。底部内外面ともナデ	・大小砂粒を多く含む。焼成やや良好。灰~暗灰色
—6		〃	底径(8.6)		・胴部外面ナデ後刷毛目、内面刷毛目後ナデ?。底部外面刷毛目後ナデ、内面刷毛目後ナデ	・小砂粒と3mmくらいの砂粒を多く含む。焼成不良、もろい。黄灰色
42—1	S K01	土師器 甕形土器	口径(12.8)		・外面磨滅が著しく調整不明。口縁部内面横ナデ。頸部内面刷毛目後ナデ	・0.5~1mmくらいの小微砂粒をやや含む。焼成良好。うすい黄澄
—2	弥生土器 底部		口径(7.0)		・底部外面ナデ。あとの部分は磨滅が著しく調整不明	・0.5~1.5mmくらいの小微砂粒を多く含む。焼成良好。灰色
43—1	S K02	弥生甕形土器		・口縁端部に凹線文を1条めぐらせる	・内外面とも横方向のナデ	・0.5~1mmくらいの小微砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
—2	弥生甕形土器		口径(14.6)	・磨滅が著しくよくわから ないが口縁端部に凹線文が1条めぐる	・口縁部外面横方向ナデ。 あとの部分は磨滅が著しく調整不明	・0.5~2mmくらいの小砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
—3		〃	口径(16.2)		・磨滅が著しく調整不明	・0.5~3mmくらいの砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
—4		〃	口径(22.4)		・口縁部外面横方向のナデ、内面上部横方向のナデ。 あとの部分は磨滅が著しく調整不明	・0.5~2mmくらいの小砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
—5	弥生高坏形土器		底径(15.6)		・脚部外面ナデ、内面ナデ 絞り痕が残る。裾端部ナデ	・脚部。0.5~3mmくらいの小砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
47—1	S K09	弥生甕形土器	口径(31.0) 底径(9.6)		・胴部下半外面とも縦方向の籠磨き。底部外面ナデ ・あとの部分は磨滅が著しくて調整不明	・小砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
—2	弥生甕形土器		口径(18.6)	・口頸部に5条と3条ずつ突帶がめぐり、その上に縦方向に2条ずつ粘土紐が貼り付けている	・磨滅が著しく調整不明	・0.5~2mmくらいの小砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
—3	弥生甕形土器		口径(19.0)		・外面ナデ。胴部内面刷毛目。あとの部分は磨滅が著しく調整不明	・0.5~1mmくらいの小微砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄。黒斑あり

捕図番号	出土地點	器種	法量(cm)	文様の特長	手法の特長	備考
47-4	S K09	弥生甕形土器	口径(26.0)		○口縁部外面ナデ。脣部外面刷毛目。あとの部分は磨滅が著しく調整不明	○0.5~1mmくらいの小微砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
50-1	S K12	"	口径(26.0)		○磨滅が著しく調整不明	"
52-1	S K13	"	口径(16.8)		"	○0.5~2mmくらいの小微砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
-2		"	口径(19.2)		○内外面とも横方向ナデ	"
-3	弥生土器 底部	底径 (7.0)			○外面ナデ。内面磨滅が著しく調整不明	○0.5~2mmくらいの小微砂粒を多く含む。焼成良好。灰味澄
55-1	拡張部 上層	S K01	底径 (7.0)		○脣部外面ナデ。底部外面ナデ。内面は磨滅が著しく調整不明	○0.5~1.5mmくらいの小微砂粒を多く含む。焼成もろい。うすい黄澄
-2	須恵器 甕			○口縁部に突線がめぐって いる、その下に櫛描き波状 文が施されている	○内外面とも回転ナデ	○口縁部。0.5~1.5mmくらいの小微砂粒を含む。焼成良好、堅緻。内外面は灰味青断面は灰味澄
-3	土師器 壺形土器		口径 (9.4)		○内外面とも横ナデ	○0.5~1mmくらいの小微砂粒を多く含む。焼成 ○うすい黄澄
-4	土師器 甕形土器		口径(11.8)		○口縁部内外面とも横ナデ ○脣部内面横方向の籠削り	○0.5~2mmくらいの小微砂粒を多く含む。焼成や や良好。うすい黄澄
-5		"			○口縁下部、外面刷毛目後 横ナデ、内面ナデ。脣部刷 毛目後ナデ、内面籠削り	"
-6		"			○口縁下部、外面横ナデ内 面ナデ。脣部外面刷毛目後 横ナデ、内面籠削り	○口縁部欠損。0.5~1.5 mmくらいの小微砂粒を多 く含む。焼成良好。うす い黄澄。表面に部分的に 朱が残る
-7	土師器 壺形土器		口径(14.0)		○口縁部内外面とも横ナデ ○壺底部外面籠削り、内面 ていねいなナデ	○高坏の可能性もある。 0.5~1mmくらいの砂粒 を多く含む。焼成良好。 うすい黄澄
-8	土師器 高壺形土 器		口径(15.6)		○壺部外面横ナデ、内面上 部横ナデ、下部ナデ	○壺部。0.5~1.5mmくらい の小微砂粒を多く含む。 焼成良好。うすい黄澄 ○黒斑あり
-9		"	口径(19.0)		○外面横ナデ、内面刷毛目 後ナデ	○壺部。0.5~2mmくらい の小微砂粒を多く含む。 焼成やや良好。うすい黄澄
-10		"	口径(19.0)		○壺上部内外面とも横ナデ ○壺底部内外面ともナデ	○壺部。0.5~1mmくらい の小微砂粒を多く含む。 焼成良好。うすい黄澄
-11		"	口径(17.0) " (17.6)		○壺上部外面横ナデ、指頭 圧痕が残る、内面刷毛目後 横ナデ。壺底部外面ナデ、 指頭圧痕が残る内面ていね いなナデ	○壺部。0.5~2mmくらい の小微砂粒を多く含む。 焼成良好。うすい黄澄
-13		"			○脚部に壺部を附加する形 で成形されたと思われる。 内面刷毛目後ナデ、外面磨 滅が著しく調整不明	○壺部。0.5~1mmくらい の小微砂粒を多く含む。 焼成やや良好。うすい黄澄
-14		"			○脚部に半球状の粘土塊を 埋め込み、壺底部中央が形 成されている。内外面とも ナデ	○壺部。0.5~1.5mmくらい の小微砂粒を多く含む。 焼成良好。あかるい黄澄
-15		"			○脚柱部外面籠磨き、内面 上部横方向の籠削り、下部 籠削りの後横ナデ。据部外 面磨滅が著しく調整不明、 内面絞り痕を有する？	○脚部。0.5~1mmくらい の小微砂粒を多く含む。 焼成良好。うすい黄澄

布田遺跡

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)	文様の特長	手法の特長	備考
—16	拡張部 SK01 上層	土師器 高环形土器			・脚柱部外面刷毛目後縦磨き、内面上部横方向の箇削り、下部削り後横ナデ	・脚部。0.5~1mmくらいの小微砂粒を多く含む。 ・焼成良好。うすい黄澄
—17		〃			・脚柱部外面箇磨き、内面上部横方向の箇削り、下部絞削り後横ナデ	〃
55—18		〃			・裾部外面ていねいなナデ ・あと部分は磨滅が著しく調整不明	・脚柱部。0.5~1.5mmくらいの小微砂粒を多く含む。 ・焼成やや良好。うすい黄澄
—19		〃			・脚柱部外面箇磨き、内面横方向の箇削り。裾部外面ていねいなナデ、内面ナデ絞り痕が残る	・脚部。0.5~3mmくらいの小砂粒を含む。 ・焼成良好。うすい黄澄
—20	拡張部 須恵器 下層	土師器 甕形土器	口径(9.4)	・頸部と口縁部の境界に突出線がめぐる	・内外面とも回転ナデ	・0.5mmくらいの小微砂粒を含む。 ・焼成良好、堅緻。 ・外面青灰色、内面暗青灰色
—21		土師器 甕形土器	口径(11.6)		・口縁外面横ナデ、内面ナデ。胴部内面横方向の箇削り	・0.5~1mmくらいの小微砂粒を多く含む。 ・焼成良好。うすい黄澄
—22		〃	口径(14.0)		・口縁部内外面ともナデ。胴部内面横方向の箇削り	・0.5~2mmくらいの小微砂粒を多く含む。 ・焼成良好。うすい黄澄
—23		〃	口径(13.4)		・外面横ナデ、内面刷毛目後横ナデ	・0.5~4mmくらいの小砂粒を多く含む。 ・焼成良好。うすい黄澄
—24		〃	口径(20.6)		・内外面とも横ナデ	・0.5~2mmくらいの小微砂粒を多く含む。 ・焼成良好。うすい黄澄
—25		〃			・口縁部外面とも横ナデ、外面には指頭圧痕が残る。胴部外面刷毛目後横ナデ内面横方向の箇削り	〃
—26		〃			・口縁部外面刷毛目後横ナデ、内面刷毛目。頸部内面ナデ。胴部外面刷毛目後横ナデ、内面箇削り	・口縁部欠損。0.5~2mmくらいの小微砂粒を多く含む。 ・焼成良好。灰味澄
—27		〃			・胴部外面刷毛目後ナデ、内面上部横方向の箇削り、下部箇削り後ナデ	・0.5~3mmくらいの小砂粒を多く含む。 ・焼成良好。うすい黄澄。器肉は薄い。外面に朱が残る。 ・頸部外面に線刻あり
56—1		土師器 環形土器	口径(10.6)		・内外面とも横ナデ	・0.5~1mmくらいの小微砂粒を多く含む。 ・焼成良好。あかるい黄澄。外面に朱が残る
—2		〃	口径(16.0)		・外面横ナデ指頭圧痕が残る。内面上部刷毛目後横ナデ、下部磨滅が著しく調整不明	・坏部。0.5~1mmくらいの小微砂粒を多く含む。 ・焼成良好。うすい黄澄
—3		土師器 高环形土器	口径(17.6)		・坏上部、内外面とも横ナデ、外面には指頭圧痕が残る。坏底部、磨滅が著しく調整不明	・坏部。0.5~1mmくらいの小微砂粒を多く含む。 ・焼成やや良好。あかるい黄澄
—4		〃	口径(17.2)		・坏上部、外面横ナデ、内面刷毛目後横ナデ、内外面とも指頭圧痕が残る。坏底部外面ナデ	・坏部。0.3~1mmくらいの小微砂粒を多く含む。 ・焼成良好。うすい黄澄
—5		〃	口径(17.0)		・坏上部内外面とも横ナデ、内部には指頭圧痕が残る。坏底部外面ナデ、内面ていねいなナデ	・坏部。0.5~1mmくらいの小微砂粒を多く含む。 ・焼成良好。うすい黄澄
—6 —7		〃	口径(16.6) 〃(15.6)		・坏部外面横ナデ、指頭圧痕が残る、内面は刷毛目後横ナデ	・坏部。0.3~4mmくらいの砂粒を多く含む。 ・焼成良好。うすい黄澄

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)	文様の特長	手法の特長	備考
—8	拡張部 SK01 下層	土師器 高坏形土器	口径(15.0)		・坏部外面横ナデ、指頭圧痕が残る、内面磨滅が著しいが刷毛目後横ナデ?	・坏部。0.5~1mmくらいの小微砂粒を多く含む。 ・焼成やや良好。あかるい黄澄
—9		〃	口径(16.2)		・坏上部外面横ナデ、指頭圧痕が残る、内面刷毛目後横ナデ。坏底部外面ナデ、内面ていねいなナデ	・坏部。0.5~1mmくらいの小微砂粒を多く含む。 ・焼成良好。うすい黄澄
—10		〃	口径(16.0)		・坏上部外面横ナデ、指頭圧痕が残る、内面刷毛目後横ナデ。坏底部は磨滅が著しく調整不明	〃
56—11 —12			口径(16.8) 〃(16.0)		・外面横ナデ指頭圧痕が残る、内面刷毛目後横ナデ、指頭圧痕が残る	・坏部。0.5~1mmくらいの小微砂粒を多く含む。 ・焼成良好。うすい黄澄
—13		〃	口径(15.6)		・坏上部外面横ナデ、指頭圧痕が残る、内面刷毛目後横ナデ。坏底部外面ナデ、内面ていねいなナデ	・坏部。0.4~2mmくらいの砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄。坏底部内面は使用のためかつやをもつ
—14		〃	口径(16.0)	・坏部内面に線刻3条を有する	・坏上部外面は横ナデ、指頭圧痕を有する内面は横ナデ。坏底部器面の磨滅が著しいため不明	・坏部。0.5~1mmくらいの小微砂粒を多く含む。 ・焼成やや良好。うすい黄澄
—15		〃	口径(17.0)		・坏上部外面横ナデ、指頭圧痕が残る、内面刷毛目後横ナデ。坏底部外面ナデ、内面磨滅が著しく調整不明	・坏部。0.5~3mmくらいの砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
—16		〃	口径(16.0)		・坏部外面は横ナデ、指頭圧痕が残る、内面刷毛目後横ナデ	・坏部。0.5~1mmくらいの小微砂粒を多く含む。 ・焼成良好。うすい黄澄
—17		〃	口径(16.0)		・坏上部外面横ナデ、指頭圧痕が残る、内面刷毛目後横ナデ。坏下部外面ナデ、内面ていねいなナデ	・坏部。0.5~3mmくらいの砂粒を多く含む。焼成やや良好。うすい黄澄
—18		〃	底径(12.3)		・脚部に半球状の粘土塊を埋め込み、坏底部中央が形成されたと思われる。坏上部外面横ナデ、内面刷毛目後横ナデ。坏底部外面ナデ、指頭圧痕が残る、内面刷毛目後横ナデ。脚柱部外面刷毛目後横ナデ。内面上部横方向削り、下部削り後横ナデ。裾部外面はていねいなナデ、内面絞り痕が残る	・0.5mmくらいの小微砂粒を含む。焼成良好。うすい黄澄。器壁が厚い
—19		〃			・脚部に半球状の粘土塊を埋め込み、坏底部中央が形成されたと思われる。坏上部外面横ナデ。坏底部外面ナデ。内面は磨滅が著しく調整不明	・坏部。0.5~1mmくらいの小微砂粒を多く含む。 ・焼成良好。うすい黄澄
—20		〃		・坏底部内面に線刻を有する	・外面ナデ、内面ていねいなナデ	・0.4~1mmくらいの小微砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄。坏底部内面は使用のためか磨滅している
—21		〃	底径(10.8)	・透孔を1ヶ有する	・脚柱部外面刷毛目後横ナデ。内面上部横方向の削り、下部削り後横ナデ。裾部外面はていねいなナデ、内面絞り痕が残る	・脚部。0.5mmくらいの小微砂粒を含む。焼成良好。うすい黄澄
—22 —23 —24		〃	底径(10.6) 〃(6.8)	〃	・脚柱部外面横ナデ、内面上部横方向の削り、下部削り後横ナデ。裾部外面はていねいなナデ、内面絞り痕が残る	・脚部。0.5~1mmくらいの小微砂粒を多く含む。 ・焼成良好。うすい黄澄

布田遺跡

插図番号	出土地点	器種	法量(cm)	文様の特長	手法の特長	備考
—25	張部拡下層 SK01	土師器 环形土器	底径(10.0)		。裾部外面ていねいなナデ、内面は絞り痕が残りかつ布目の痕が残る	。裾部。0.5~1mmくらいの小微砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄
—26		〃	底径(9.6)		。脚柱部外面刷毛目後篦磨き、内面上部横方向の篦削り、下部篦削り後横ナデ。裾部外面はていねいなナデ、内面は横ナデで絞り痕が残る	。脚部。0.5mmくらいの小微砂粒を含む。焼成良好。うすい黄澄
—59	拡張部 SK02	弥生甕形土器	口径(18.2)	。胴部上半に5本単位の櫛描き平行沈線文を10条めぐらせてその下に同一の櫛を用いて波状文を施す	。口縁部は内外面とも磨滅が著しく調整不明。胴部上面上部ナデ、下部刷毛目内面ナデ	。0.5~3mmくらいの砂粒を多く含む。焼成良好。にぶい黄澄
62—1	灰色砂層	繩文深鉢形土器			。外面ナデ。内面上部二枚貝条痕後ナデ、下部二枚貝条痕	。破片。1mm以下の小微砂粒を多く含む。焼成やや良好、堅い。外面灰色内面一部にスヌ状の炭化物付着
—2		〃			。内外面二枚貝条痕	。小微砂粒を多く含むが1~2mmの砂粒もわずかに含む。焼成良好、堅い。黒色
—3		弥生壺形土器		。肩部外面に段を有するがその一部分を篦状施文具で補っている	。外面斜め方向の篦磨き、内面刷毛目後横方向の篦磨き	。1~2mmくらいの砂粒を多く含む。焼成良好、堅緻。外面灰味澄、内面うすい黄澄。黒斑あり
—5		弥生土器		。篦状施文具により平行沈線文を6条以上めぐらせ、その下に木の葉文を施す	。磨滅が著しく調整不明	。破片。0.5~1mmくらいの小微砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄澄

IV A 区

65—1	S D01	弥生壺形土器	口径(14.9)		。磨滅が著しく調整不明	。小微砂粒を多く含む。焼成やや良好、堅いやや赤味の加わった灰色
—2		〃	口径(12.0)		。口縁部外面横方向の刷毛目後ナデ。頸部外面縦方向の刷毛目後ナデ。内面刷毛目後ナデ	。小微砂粒を多く含む。焼成良好、堅緻。黒っぽい褐色
—3		〃	口径(21.4)		。口縁端部ナデ?。口縁部外面ナデ、内面ナデ?。頸部外面刷毛目後ナデ	。0.5mm以下の小微砂粒を多く含む。焼成やや良好。やや赤味を帯びた灰色
—4		〃		。頸部に断面三角形の貼り付け突帶を3条めぐらす	。内外面ともに磨滅が著しいが、外面ナデ?内面刷毛目後ナデ?	。1~2mmの砂粒少々のほか1mm以下の小微砂粒を多く含む。焼成良好。やや赤味を帯びた灰色
—5		〃	口径(20.4)	。口縁端部外面に刷毛状の施文具で鋸歯文を施し内面に同様の鋸歯文と篦状の施文具で刺突列点文を施す。頸部に断面三角形貼り付け突帶を2条以上めぐらす	。口縁部外面ナデ、内面横方向の刷毛目後ナデ。頸部外面縦方向の刷毛目後ナデ	。小微砂粒を多く含む。焼成良好であるが堅くしまつていない。暗灰色。口縁端部から内面にかけて黒斑あり
—6		弥生甕形土器	口径(19.4)		。口縁端部ナデ。口縁部内外面とも刷毛目後ナデ。胴部外面縦方向刷毛目後部分的に粗い篦磨き、内面上半刷毛目後部分的にナデ、さらに一部篦磨き下半ナデ	。大小の砂粒をわずかに含むが小微砂粒も多く含む。焼成良好、堅いやや緻密さを欠く。灰褐色外面上には黒褐色を呈するところあり
—7		〃	口径(28.0)	。口縁部下に断面三角形の突帶を1条貼り付け、その下に8~11条の櫛描き平行沈線文を3回施し、更に下には三角形の刺突文をめぐらせている	。口縁部ナデ。胴部外面ナデあるいは篦磨き、内面ナデ?	。大小の砂粒を多く含む。焼成やや不良、かなりもろい。やや赤味の強いオレンジ色
—8		〃	口径(16.6)		。内外面ともナデ	。2~3mmの砂粒を含むが小微砂粒も多量に含む。焼成やや良好、堅い。黒褐色

布田遺跡

插図番号	出土地点	器種	法量(cm)	文様の特長	手法の特長	備考
—9	S D01	弥生甕形土器	口径(25.3)	○口縁部下に籠状の施文具による刻目をもつ貼り付け突帯を1条めぐらす	○口縁部の内外面および胴部外面ナデ。胴部内面ていねいなナデ	○微砂粒を多く含む。焼成良好、堅緻。灰褐色
—10		〃	口径(17.2)	○口縁端部に籠状の施文具による刻目を施す。胴部5本単位の籠状の施文具による刺突列点文を2列にわたって有する	○口縁部内外面ともナデ。胴部外面上半刷毛目後ナデ、下半刷毛目さらに下部は籠磨き、内面刷毛目	○1mm以下の中微砂粒を多く含む。焼成やや不良、堅くしまっている。内面暗褐色外側暗灰褐色～黒褐色
—11		〃	底径(7.0)	○胴部に3本単位の横描き刺突列点文を2回にわたってめぐらせる	○胴部外面上半刷毛目、下半刷毛目後籠磨き、内面上半刷毛目、下半刷毛目後ナデ。底部外面ていねいなナデ、内面ナデ	○1mm以下の中微砂粒を多く含む。焼成良好、堅い。暗い灰。外面にスズ状炭化物が付着する
—12		〃	口径(15.8)		全体に磨滅しているが口縁部内外面ともナデ。胴部内外面とも刷毛目	○微砂粒を多く含む。焼成良好、ややもろい。灰褐色、内面はやや赤味を帯びる
—13		〃	口径(23.0)		○口縁部内外面ともナデ。胴部外面ナデ、内面横方向ナデ	○1mm以下の中微砂粒を多く含む。焼成やや不良、もろい。黒褐色
—14		〃	口径(20.8)		○磨滅が著しいが外面ナデ、内面ナデ？	○微砂粒を多く含む。焼成不良もろい。オレンジ色
—15		〃	口径(16.8)		○口縁部内外面ともナデ。胴部外面刷毛目、内面ナデ	○1mm以下の中微砂粒を多く含む。焼成やや良好、堅い。灰褐色
—16		〃	口径(24.5)		○口縁部内外面ともナデ。胴部外面刷毛目後ナデ、内面刷毛目	○1～2mmの砂粒少々と微砂粒を多く含む。焼成やや良好もろい。黒褐色
—17		〃	口径(23.9)		○内外面とも磨滅が著しいが、口縁部内外面ともナデ。胴部外面刷毛目後ナデ、内面ていねいなナデ	○1mm以下の中微砂粒を多く含む。焼成やや不良、もろい。灰褐色
—18		〃	口径(25.2)		○口縁部外面刷毛目後ナデ、内面ナデ。胴部内外面ともナデ	○微砂粒を多く含む。焼成良好、堅緻。暗灰色
66—1		〃	口径(16.7)		○内外面とも磨滅が著しく文様、調整不明	○微砂粒を多く含む。焼成不良、もろい。灰～暗灰色
—2		〃	口径(18.6)		○口縁部内外面とも刷毛目後ナデ。口縁端部平坦面ナデ。胴部外面縱方向刷毛目後ナデ、内面刷毛目	○微砂粒を多く含む。焼成良好、堅緻。オレンジ色
—3	弥生高坏形土器	口径(27.4)			○磨滅が著しいが外面上部ナデ。下部刷毛目後ナデ、口縁端部から内面にかけてはていねいなナデ	○坏部。微砂粒を多く含む。焼成やや不良、もろい。灰褐色
73—1	S D02	須恵器	〃		○内外面とも回転ナデ。底部外面は籠削りと思われる	○微砂粒を多く含む。焼成やや不良、やや軟質。やや赤味を帯びた青灰色
—2	土師器 甕形土器	口径(19.0)			○内外面ともナデ	○1mm以下の中微砂粒を多く含む。焼成良好、堅緻。黄灰色
76—1	S D03	弥生壺形土器		○口縁部と頸部の境に籠状施文具で沈線状の段をつくっている	○外面刷毛目後ていねいなナデ。内面籠磨き	○3～4mmの砂粒を少々と1mmくらいの小砂粒を多く含む。焼成良好、堅緻。灰褐色～暗褐色
—2		〃	口径(15.9)	○頸部に横描き沈線文が1条めぐる	○口縁端部ナデ。口頸部外面刷毛目後横方向籠磨き、口縁部内面籠磨き。頸部内面粗い籠磨き	○2～3mmの砂粒および微砂粒を多く含む。焼成良好、堅緻。外面やや明るい灰色、内面灰褐色
—3		〃	口径(12.0)		○磨滅が著しいが口縁部外面ナデ、内面刷毛目後強いナデ。頸部内外面ともナデ	○砂粒を多く含む。焼成不良、もろい。淡い灰褐色で表面は暗灰褐色
—4		〃	口径(18.5)		○口縁部外面刷毛目後ナデ、内面上部籠磨き？下部ていねいなナデ	○2mm以下の砂粒を含む。焼成良好、堅緻。内面うすい灰褐色、外面暗灰色

布田遺跡

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)	文様の特長	手法の特長	備考
—5	S D03	弥生壺形土器	口径(20.6)	○口縁部内面に刺突文が施してある、突帯を1条貼り付けている	○口縁端部ナデ。口縁部外面刷毛目後ナデ、内面横方向刷毛目後ナデ	○大小砂粒を多く含む。焼成やや良好。暗い灰褐色
—6		〃	口径(18.3)	○口縁端部は部分的に沈線状に凹む。頸部に先端の鋭い箇状施文具によって施された平行沈線文が5条めぐる	○磨滅が著しいが外面刷毛目後ていねいなナデ? 内面箇磨き	○2~3mmの砂粒を多く含む。焼成やや不良、もろい。外面明るい灰色、内面淡赤褐色
—7		〃	口径(19.5)	○口縁部に沈線文が1条入る	○外面刷毛目後ていねいなナデ。内面ていねいなナデ	○2~4mmの砂粒を多く含む、微砂粒も多い。明るい灰色
—8		〃		○竹管状の丸い施文具で4条の平行沈線文をめぐらせ、その間の凸部に刷毛で刺突を施している	○頸部外面刷毛目後ナデ。胸部外面刷毛目後箇磨き。内面ていねいなナデ、箇状のキズ痕が残る	○2mmくらいの砂粒を多く含む。焼成良好、堅緻。灰褐色
—9		〃	口径(19.9)	○口縁部に箇描き沈線文を1条めぐらせ、それに交叉させて刻目を施す。頸部に箇状施文具による平行沈線文を6条めぐらせている	○口縁部外面横方向に強いナデ凸凹が激しい。頸部外面ナデ、内面刷毛目後横方向の強いナデ	○1mm以下の小微砂粒を多く含む。焼成やや不良、もろい。明灰色。黒斑あり
—10		〃		○頸部に箇状施文具による2条以上の平行沈線文が施されている	○頸部外面ナデ? 内面横方向のナデ。胸部外面箇磨き 内面ナデ	○糞痕あり。1mm以下の小微砂粒を多く含み、大きな砂粒も少々含む。焼成やや不良、もろい。黄桃色~灰褐色。黒斑あり
76—11		〃		○頸部に箇状工具による4条の平行沈線文をめぐらしている	○外面刷毛目後ていねいなナデ、内面ナデで押圧による凸凹が著しい	○2~3mmの砂粒を多く含む。焼成良好、堅緻。暗褐色。黒斑あり
—12	弥生壺形土器			○胴部に先端の鋭い箇状施文具で2または3条の平行沈線文を施している	○外面刷毛目後ナデ? 内面上部刷毛目下部刷毛目後箇磨き	○口頸部欠損。2mm以下の小砂粒を多く含む。焼成やや良好。内面暗灰褐色、外面灰褐色
—13	弥生壺形土器			○箇状施文具で平行沈線文を3条以上めぐらし、その間の凸部に羽状文を施す	○外面刷毛目後ナデ、内面刷毛目後ていねいなナデ	○2mm以下の小砂粒を多く含む。焼成良好、堅緻。暗灰褐色
—14		〃			○外面刷毛目後ていねいなナデあるいは箇磨き、内面ナデで部分的に刷毛目	○2mm以下の小砂粒を含む。焼成やや不良、もろい。灰白色
—15	弥生ミニチュア壺形土器	口径(5.4)		○頸部に箇描き平行沈線文が1~2条めぐり、その下に箇で羽状文を施している	○外面ナデ。口縁部内面ナデ。頸部内面縦方向ナデ、凹凸が著しい	○砂粒をわずかに含む。焼成良好、堅緻。やや褐色を帯びた灰色
—16	弥生壺形土器			○櫛描き重弧文を施し、その下部にタマキ貝を押圧して溝をつくり、その上を箇でなぞって平行沈線文を施している	○内外面とも箇磨き	○2mmくらいの砂粒を少々、1mm以下の小微砂粒を多く含む。焼成良好。堅緻。やや黒を帯びた灰褐色
—17		〃	口径(23.3)	○口縁端部に貝殻状の施文具で2列にわたって刺突文を施す。胴部に口縁と同一の工具による刺突文を有する、貼り付け突帯を3条ずつ数回にわたってめぐらせる。口縁下部に箇状工具で1条の沈線をめぐらせる	○口縁端部ていねいなナデ。口縁部外表面とも横方向の箇磨き。頸部外表面とも箇磨き。胴部外面刷毛目後横方向のていねいな箇磨き、内面刷毛目後かるくナデ	○1mmくらいの小砂粒を多く含み、大きな砂粒も少々含む。焼成良好、堅緻。黒~暗褐色
77—1	弥生壺形土器	口径(23.2)		○口縁端部に刷毛で刻目を施す。胴部上方櫛描き平行沈線文を5条めぐらす	○口縁部外面横方向のナデ、内面刷毛目後横方向のナデ。胴部外面上半刷毛目、下半刷毛目後ナデ。内面刷毛目後部分的にナデ。底部内外面ともナデ	○1mm以下の小微砂粒を多く含む。焼成やや良好、もろい。暗褐色
—2		〃	口径(15.9)	○口縁端部に箇状施文具による鋭い刻目を施す。胴部上方に箇状施文具による平行沈線文が3条めぐる	○口縁部外面刷毛目後ナデ? 内面横方向ナデ。胴部外面上半刷毛目? のちナデ下半刷毛目内面刷毛目後ナデ	○1mm以下の小微砂粒を多く含む。焼成良好、堅緻。外面黒を帯びた茶褐色、内面灰褐色
—3		〃	口径(13.4)	○口縁端部に箇状施文具で刻目を施す。胴部上方に3条以上平行の沈線文がめぐっている	○口縁部外表面ともナデ。胴部外面刷毛目内面刷毛目後ナデ	○大小砂粒を多く含む。焼成良好、堅い。暗茶褐色

捕図番号	出土地点	器種	法量(cm)	文様の特長	手法の特長	備考
—4	SD03	弥生甕形土器	口径(11.6)	。胴部上方に籠状施文具で平行沈線文を6条めぐらす	。内外面ともナデ	。砂粒を含む。焼成良好、堅い。黒っぽい灰褐色
—5		〃	口径(17.8)	。口縁端部に籠状施文具で刻目を施してある。胴部上方に籠状施文具で3条の平行沈線文をめぐらせてている	。口縁外面横方向ナデ。胴部外面刷毛目。内面ていねいなナデ	。2mmくらいの砂粒を少々と1mm以下の小微砂粒を多く含む。焼成やや良好、堅緻。外面暗褐色、内面灰褐色
—6		〃	口径(14.5)		。口縁部内外面ともナデ。胴部外面刷毛目後ナデ、内面刷毛目後ナデ?	。3mm以下の砂粒を少々含む。焼成やや良好、堅緻。外面黒褐色内面やや褐色を帯びた灰色
—7		〃	口径(19.4)	。口縁端部に刷毛状施文具で刻目を施す。胴部上方に2条以上の平行沈線文がめぐっている	。内外ともナデ	。砂粒をわずかに含む。焼成やや良好、堅い。薄い灰褐色
—8		〃	口径(18.8)	。胴部に横描き?平行沈線文がめぐる	。磨滅が著しく調整不明	。2~3mmの砂粒を多く含む。焼成不良、もろい。赤褐色
—9		〃	口径(21.8)	。口縁端部に籠状の施文具による刻目を施す。胴部上方に籠状施文具で4条の平行沈線文をめぐらせる	。口縁部外面ナデ、内面横方向の刷毛目後ナデ。胴部外面縦方向刷毛目、内面上半刷毛目内面刷毛目後ナデ	。2~3mmの砂粒および1mm以下の小微砂粒を多く含む。焼成良好、堅緻。外面暗~黒褐色、内面灰褐色
—10		〃	口径(18.8)		。口縁部内外面とも刷毛目後ナデ。胴部内外面とも刷毛目	。3~4mmの砂粒を多く含み1mm以下の小微砂粒も多い。焼成やや不良、緻密さを欠く。外面暗灰褐色、内面灰褐色
—11		〃	口径(17.6)		。口縁端部ナデ。外面刷毛目後ていねいなナデ、内面ていねいなナデ?	。大小砂粒を多く含む。焼成良好、堅緻。外面茶褐色、内面灰白褐色
77-12		〃	口径(39.5)	。胴部上方に平行沈線文が2条めぐる	。外面刷毛目後横方向の籠磨き後ナデ?。口縁端部ナデ。口縁部内面刷毛目後横方向の籠磨き。胴部内面刷毛目後斜め方向の籠磨き後ナデ	。2~3mmの砂粒1mm以下の小微砂粒を含む。焼成良好、堅緻。明るい灰褐色、内面黒色。粗痕、木の実痕あり
—13		〃	口径(21.0)	。胴部に平行沈線文が5条以上めぐる	。口縁部内外面ともナデ。胴部外面ナデ、内面縦方向刷毛目後ナデ	。2mm以下の小砂粒を多く含む。焼成やや良好、堅緻。外面灰褐色、内面黒褐色
—14		〃	口径(22.1)	。胴部上方に先端の鋭い籠状施文具による平行沈線文が4条めぐり、その間の凸部に小枝または小竹状のもので円形刺突文を施す	。口縁部外面横方向ナデ、内面刷毛目後ナデ。胴部外面上部刷毛目後横方向ナデ、下部刷毛目内面上部、刷毛目後ナデ、下部刷毛目	。3mm以下の砂粒を多く含む。焼成良好、堅緻。外面暗褐色、内面赤味を帯びた灰色
—15		〃	口径(17.9)	。口縁端部に籠状施文具を用いて刻目を施す。胴部上方に籠状施文具により3条の平行沈線文をめぐらしその下に、円形刺突文を2列施し、更にその下に2条の籠状工具による平行沈線文が2条めぐる	。口縁部外面横方向ナデ、内面刷毛目。胴部外面刷毛目、内面刷毛目部分的にナデ	。微砂粒を多く含む。焼成良好、堅緻。内面灰褐色、外面黒褐色
—16		〃		。4条の平行沈線文をめぐらせ、その間の凸部に半截竹管状の施文具を半回転させながら円形刺突文を施す	。外面上部横方向の刷毛目後ナデ、下部刷毛目内面刷毛目部分的にナデ	。3mmくらいの砂粒及び1mm以下の小微砂粒を多く含む。焼成良好、堅緻。外面暗灰色内面明灰褐色
—17		〃	口径(18.8)	。口縁端部の頂部に籠状施文具で刻目を施す。胴部上方に籠状施文具で平行沈線文を4条めぐらせ、その間の凸部に同一施文具を用いて羽状文を施す	。口縁部内外面ともナデ。胴部外面刷毛目後ナデ?内面刷毛目後ていねいなナデ	。2~3mmの砂粒を含む。小微砂粒も多く含む。焼成良好、やや堅緻。暗褐色

布田遺跡

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)	文様の特長	手法の特長	備考
78-1	S D03	弥生壺形土器	口径(29.2)	○口縁下方に平行沈線文を3条めぐらせる	○磨滅が著しいが口縁部外面横方向の刷毛目後ナデ? 内面の刷毛目後ナデ。口縁端部ナデ。胴部外面縦方向の刷毛目、内面横方向の刷毛目	○2mmくらいの砂粒を多く含む、微砂粒も多い。焼成不良、もろい。茶褐色～暗褐色
-2	"		口径(26.4) 底径(7.8)		○口縁部外面ナデ、内面横方向ナデ。胴部外面刷毛目部分的にナデ、内面横方向ナデ、部分的に刷毛目。底部内外面ともナデ	○1mmくらいの小砂粒を多く含み2～3mmの砂粒微砂粒も含む。焼成良好・堅緻、底部付近は2次焼成をうける。外面は黒褐色～灰褐色 内面暗い灰、底部付近は淡い赤褐色
-3		弥生土器 底部	底径(15.2)		○胴部外面刷毛目部分的に横方向にナデ 内面ナデ。底部内外面ともナデ	○2mm以下の砂粒を多く含む。焼成やや不良。灰褐色
80-1	S D04	弥生壺形土器	口径(31.8)	○口縁端部に2列にわたって圧痕を施しその間に沈線文を1条めぐらせる。口縁部下外面に刷毛を押しつけ沈線状のものをつくる。頸部外面に耳状のものを「ノ」の字形に貼りつけてあつた痕あり。頸部内面に1条外面向方に5条の突帶を貼り付け、貝殻の腹縁状のものを押圧する	○口縁部外面刷毛目後横方向の箇磨き。頸部外面縦方向の刷毛目後、更に上部に幅広の刷毛目を施す、部分的に箇磨きが入る。内面横方向の箇磨き	○0.5～2mmくらいの砂粒を多く含む。焼成良好、堅緻。うすい黄橙
-2	"		口径(22.1)		○内外面ともナデ	○1mm以下の小微砂粒を多く含む。焼成良好、堅い。灰褐色
-3		弥生甕形土器	口径(18.3)	○胴部上方に箇状施文具で斜行沈線文を施しその下に半截竹管を用いて、2条の平行沈線文をめぐらし、その間の凸部に円形刺突文を施す	"	○3～4mmの砂粒を多く含む。焼成やや良好、もろい。灰褐色
-4		弥生壺形土器			○外面刷毛目後ていねいなナデ、内面刷毛目後ナデ、凹凸が著しい	○大小砂粒を多く含む。焼成やや不良、もろい。灰白色
82-1	S D06	弥生壺形土器	口径(18.6)	○口縁端部及び口縁内面に3本単位の櫛状施文具による斜格子を施す。口縁端部に2ヶあるいはそれ以上の円形浮文を有する	○内外面ともナデ	○0.5～1mmくらいの小微砂粒を含む。焼成良好。うすい黄橙
-2	"		口径(13.0)	○口縁部下に箇状施文具による刺突文を有する貼り付け突帶を3条めぐらし、その下に円形刺突文もめぐらせる。口縁部下に透孔を1ヶあるいはそれ以上有する	"	"
-3	"		口径(20.8)	○口縁端部に刷毛による斜格子を施す。頸部に5本単位の櫛描き平行沈線文が17本以上めぐる	○内外面ともナデ、内面に指頭圧痕が残る	○2mm以下の砂粒を多く含む。焼成やや良好。灰褐色
-4		弥生高坏形土器	底径(16.7)		○坏底部内面箇磨き 外面横方向箇磨き。脚部外面縦方向の箇磨き内面上部ナデ、絞り痕が残る下部ていねいなナデ。裾端部ていねいなナデ	○1mm以下の小微砂粒を多く含む。焼成良好、堅い。白っぽい灰褐色。脚裾部に一部黒斑あり
-5		弥生甕形土器	口径(29.0)		○口縁部内外面とも磨滅が著しく調整不明。胴部内外面とも刷毛目	○0.5～1mmくらいの小微砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄橙
-6	"		口径(20.0)	○口縁端部に沈線文が1条めぐる	○口縁部外面横方向のナデ、内面横方向箇磨き。胴部外面刷毛目後横方向のナデ、内面刷毛目後箇磨き	○微砂粒を多く含む。焼成やや良好、少し堅い。外面暗灰褐色、内面白っぽい灰褐色